

連携・協働を推進しつつ、地域づくりに
参画する人材が育つために

はじめに

国立女性教育会館では、男女共同参画社会の形成を推進する上で女性関連施設の果たす役割は重要であると考え、平成18年度から「女性関連施設に関する調査研究」に取り組んでまいりました。平成18年度には、地方自治法の改正を受けた指定管理者制度の導入を踏まえ、その実態を把握すべく調査研究を行いました。平成19年度には、今後重要となるだろう女性関連施設の事業評価について、その実施状況を明らかにしようと試みました。

調査最終年である平成20年度は、これまでの2年間の調査研究から明かになった課題に基づいて、「基幹的女性教育指導者等の資質・能力の向上」（国立女性教育会館中期目標）に資する学習プログラムを開発することを研究の目的としました。女性関連施設は、地域において男女共同参画を推進する重要な拠点であり、変動期にある今、施設の目指す方向・ビジョンをより一層鮮明にすることが求められています。そのためには、施設職員自身がエンパワーメントし、多様な機関と連携・協働しながら事業を進めていくことが必要となります。また、地域の課題解決に向けて、地域づくりに参画する人材が育つよう働きかけることが、拠点施設の役割として重要となるでしょう。そのような考えの下、「連携・協働を推進しつつ地域づくりに参画する人材が育つ」ための学習プログラムを開発しましたが、本プログラムが女性関連施設を始め、地域で男女共同参画を推進する方々に活用いただけるなら幸甚です。

本調査研究は、会館職員と外部専門家から構成される研究プロジェクトを立ち上げ、進めてまいりました。研究協力者の葛原生子委員、国広陽子委員、仁科あゆ美委員、西山恵美子委員、大西祥世委員（平成18年度）、研究協力団体である特定非営利活動法人全国女性会館協議会に深く感謝申し上げます。

お忙しい中、平成18年度、19年度の質問紙調査、ヒアリング調査に御協力いただきました女性関連施設の皆様、また、平成20年度のプログラム開発のために実施した実験プログラムの連携先として御協力いただきました静岡県男女共同参画センター指定管理者・特定非営利活動法人静岡県男女共同参画センター交流会議、千葉県男女共同参画課、ちば県民共生センターの皆様、研究協力者として実験プログラムに御参加いただきました両県の皆様に心から感謝申し上げます。

平成21年 3 月

独立行政法人国立女性教育会館
理事長 神 田 道 子

目 次

はじめに

I 変動期にある女性関連施設の現状と課題

第1章 女性関連施設の設置形態の変遷	1
1. 女性関連施設の定義・範囲	
2. 女性関連施設の変遷	
第2章 女性関連施設の現状	4
1. 施設の概要	
2. 指定管理者制度導入施設の現状と課題（平成18年度調査より）	
3. 事業評価の現状と課題（平成19年度調査より）	
第3章 女性関連施設の課題	18
1. 「連携・協働」という課題	
(1) 女性関連施設における連携の課題	
(2) 政策における連携の重要性	
2. 人材育成における課題	

II 「連携・協働を推進しつつ、地域づくりに参画する人材が育つ」ための学習プログラムの開発

はじめに	21
1. 学習プログラム開発の目的と経緯	
2. 研究を進める体制	
第1章 学習プログラムの企画について	23
1. 企画にあたっての共通認識	
2. 学習プログラムの特徴	
(1) 「実践・活動に結びつく学習」（アクション・ラーニング）	
(2) 社会的人材という社会的側面とキャリア形成という個人的側面を結びつける	
(3) 実態把握のための男女共同参画統計の活用	
(4) 学習プログラム・デザイン、日程の作成	
① 基本的構成要素	
② 全体構成	
③ 対象、研修目的、特徴	
④ 研修目標、研修項目、研修方法	
第2章 実験プログラムの実施	31
1. 連携・協働先、研究協力者（参加者）	
2. 運営上の特徴	

3. 実験プログラムの日程

4. 実験プログラムの実施過程

- (1) 本プログラムの意味・意義を理解する
- (2) 男女共同参画推進意識の涵養（目標 1）
- (3) 実態把握に基づいた課題分析（目標 2～5）
 - (3)－1 情報を活用した実態把握：データで読む男女共同参画（目標 2）
 - (3)－2 各地域での女性の「人材育成」について現状からみえる課題を明確にする（目標 3）
 - (3)－3 地域づくりに参画する女性のキャリア形成支援とは（目標 4）
 - (3)－4 地域づくりに参画する女性のロールモデルの分析（目標 5）
- (4) 課題解決に向けた実践（目標 6、7）（静岡県）
 - (4)－1 課題解決につながる課題を立てる（目標 6）
 - (4)－2 地域づくりに参画する女性人材が育つための事業計画案作成グループ・ワーク（目標 7）
- (5) 課題解決に向けた実践（目標 6、7）（千葉県）
 - (5)－1 課題解決につながる課題を立てる（目標 6）
 - (5)－2 地域づくりに参画する女性人材が育つための事業計画案作成グループ・ワーク（目標 7）

第 3 章 実験プログラムの成果および課題 90

1. 企画について

- (1) プログラム全体の構成
- (2) 研修目標間の関連性の観点から
- (3) 研修目的の観点から

2. 「実践・活動に結びつく学習」のための方法

- (1) 「実践・活動に結びつく学習」を構成する人について
- (2) プログラムの流れについて

3. 運営管理（ロジスティックス）について

4. 改善した学習プログラム・デザインと学習プログラム構成案

5. 実践への展開事例

6. 今後の展開に向けて

- (1) 連携・協働
- (2) 「社会活動キャリア」という点からの社会的人材の育成
- (3) 「実践・活動に結びつく学習」
- (4) 女性関連施設の拠点としての重要性

資料編

I 部

独立行政法人国立女性教育会館では、男女共同参画を推進する上で大きな役割を果たしている女性関連施設の現状と課題を把握するために、平成18年度より3年計画で「女性関連施設に関する調査研究」を行った。本報告書は3年間のまとめである。

第Ⅰ部では、先行研究及び会館が作成・提供している「女性関連施設データベース」から女性関連施設の変遷と現況についてまとめ、平成18年度に実施した「指定管理者制度導入施設の現況と課題に関する実態調査」、平成19年度に実施した「女性関連施設における事業評価に関する調査」の結果概要、そこから得られた女性関連施設の課題を述べる。

平成20年度には、これまでの2年間の調査研究から得られた成果を、男女共同参画を推進する方々に広く活用してもらえよう、学習・研修のプログラムの開発を行うことにした。その経緯、成果、課題について第Ⅱ部にまとめた。

I 変動期にある女性関連施設の現状と課題

第1章 女性関連施設の設置形態の変遷

1. 女性関連施設の定義・範囲

国立女性教育会館では、平成12年度に公開し、以後毎年更新を行っている「女性関連施設データベース」(<http://winet.nwec.jp/sisetu/>)を作成・提供しているが、このデータベースにおいては、女性関連施設を以下の範囲とし、設立目的から3つに分類している。

1) 女性／男女共同参画センター * 婦人会館も含む

下記いずれかに該当する施設とする。

① 女性を主な対象として、女性の地位向上・男女共同参画社会の推進等を目的として各種の研修・交流・情報提供・相談等の事業を行っている施設。

② 女性団体・グループ等の活動の拠点として、女性の資質・能力の開発や知識・技能の向上を図ることを主たる目的として設置された施設。

2) 働く婦人の家 * 勤労女性センターも含む

勤労女性および勤労者家庭の主婦の福祉の増進、生活と教養の向上を主たる目的として設置された施設。

3) 農村婦人の家

農村婦人・地域の生活改善、共同学習、農産加工を主たる目的として設置された施設。

2009年3月現在、データベースには1) 女性／男女共同参画センターが368施設、2) 働く婦人の家が179施設、3) 農村婦人の家が75施設登録されている。1)、2) についてはほぼ全国の施設を網羅しているが、3) については無人の施設も多く、市川房枝記念会調査*では206施設が掲載されているが、75施設の登録に留まっている。この調査研究においては、1) 女性／男女共同参画センターを対象に、3年間の研究を進めてきた。

* (財) 市川房枝記念会 2008『全国組織女性団体名簿(2008年版)』

2. 女性関連施設の変遷

上記のような定義となったのは、明治以降の女性関連施設の変遷と関連している。志熊は、婦人会館、女性会館の変遷を、下記のようにまとめている（図表1-1参照）[志熊ほか1999]。第二次世界大戦前を2つに分け、第1期草創期、第2期官製婦人会館の設立期、戦後に入り、第3期戦後婦人会館の創設期、第4期公設公営の婦人会館の創設期、第5期大型女性会館の創設期である。ここでの婦人会館、女性会館というのは、前記1) 女性／男女共同参画センターにあたるものと考えられる。②が主に第1～3期の民設民営の施設、①が主に第4期以降に作られた公設公営あるいは公設民営の施設である。

図表1-1 婦人会館、女性会館の変遷

「女性施設の100年史PART 5」（(財) 横浜女性協会『女性施設ジャーナル』Vo.5、p.167、1999年）を加筆・修正

時代区分			主な婦人・女性会館	設立年
明治～戦前	第1期	草創期の婦人会館（民設民営）	日本キリスト教婦人矯風会「慈愛館」 東京YWCA婦人会館	1894年 1905年
	第2期	官製婦人団体の会館	日本女子会館（大日本聯合婦人会）	1937年
戦後～1975*	第3期	戦後の婦人会館の創設（民設民営）	各地に地域婦人会による婦人会館 婦選会館 主婦会館 全国婦人会館 等	1946年 1956年 1971年
1975～1985*	第4期	公設公営の婦人会館の創設	国立婦人教育会館 かながわ女性センター 等	1977年 1982年
1986～	第5期	公設民営の女性会館の創設	横浜女性フォーラム 大阪府立女性総合センター、ドーンセンター 北九州市立女性センター、ムーブ 東京ウィメンズプラザ 等	1988年 1994年 1995年 1995年

*「女性施設の100年史」では明確な年の区切りはされていないが、ここでは1975年の国際女性（婦人）年、1985年の国連女性（婦人）の十年最終年を区切りとした。

第1～3期の婦人会館は、婦人団体活動の拠点としての施設であり、まず活動が先にあり、活動の中から拠点への要求が生まれ設立された。

第4期以降は、1975（昭和50）年の国際女性（婦人）年を契機に、行政が施設建設を積極的に進めたことにより、公設公営、公設民営の施設が各地に作られていった。この中には、教育委員会の主管による婦人教育活動の拠点である婦人（女性）教育施設と、首長部局の主管する女性政策の推進拠点である女性センターの二つの系列がある（設立当初は教育委員会の所管だったが、その後首長部局に所管が変わる施設もある）。さらに関連施設として、労働省が勤労女性（婦人）および勤労者家庭の主婦の福祉の増進として設置を進めた「働く婦人の家」、農林水産省が農村婦人・地域の生活改善、共同学習、農産加工を主たる目的として整備した「農村婦人の家」がある。

図表1-1は、1999年に発表されたため第5期までであるが、その後第6期は「男女共同参画センターの創設」期といえるであろう。1999（平成11）年の「男女共同参画社会基本法」を機に、

新規に設立された施設は「男女共同参画」を名称に持つものが多くなり、また女性センターの中にも名称を変更していったところもある。

さらにその後、2003（平成15）年からの指定管理者制度導入により、管理運営を担う主体が多様化し、現在は第7期「多様な管理運営主体の創設」期に入ったといえる。

さて、これらについて設置数の推移を総合的に捉えられるような統計は、残念ながらない。婦人（女性）教育施設に関する統計は、1971年から文部科学省の『社会教育調査』にあるが（一覧は国立女性教育会館「女性と男性に関する統計データベース」（<http://winet.nwec.jp/toukei/>）に所収）、1992（平成4）年まで作成されていた文部省生涯学習局の『婦人教育および家庭教育に関する施策の現状』にある数値とは異なっている。

国立女性教育会館では、女性関連施設に関する調査として、平成3年度、5年度に「婦人教育施設等の現況調査」を行った（報告書は『女性関連施設の現況：「婦人教育施設等の現況調査」報告』）。これには婦人会館、婦人教育会館、働く婦人の家、農村婦人の家のみならず生涯学習施設も含まれるが、平成5年度報告には種別毎の集計がない。その後、平成10年度に行われた全国婦人会館協議会（当時）による総合調査「女性関連施設に関する総合調査＜学習・研修＞事業に関する調査」に、国立女性教育会館が把握している施設の情報を提供し、その結果をもとに「女性関連施設データベース」を開発した。「女性関連施設データベース」は、平成12年度以降毎年調査し更新しているが、施設概要データは、毎年変更点を書き換えて最新の状況を提供する仕様となっているため、設置数の変遷の把握については、今後の課題となっている。前述の市川房枝記念会『全国組織女性団体名簿』（旧『全国組織婦人団体名簿』）には、昭和62年版より付録として全国の女性関係施設があり、一般女性会館・男女共同参画センター、働く婦人の家、農村婦人の家の数値の推移を追うことができる（一覧は「女性と男性に関する統計データベース」に所収）。但し設立予定を含むこと、定義が異なる施設が含まれているため、女性関連施設データベースの数とは若干異なるものとなっている。また、内閣府男女共同参画局では、毎年「地方公共団体における男女共同参画社会の形成又は女性に関する施策の推進状況」で「男女共同参画のための総合的な施設」を調査しているが、これには女性教育会館、民設民営の施設が含まれていない。

以上のような状況であるが、次章で国立女性教育会館の「女性関連施設データベース」で把握できる施設の現況を報告する。

<参考文献>

志熊敦子編 1990『女性の生涯学習』、(財)全日本社会教育連合会

志熊敦子 1994「生涯学習社会における婦人教育施設の役割—婦人会館の沿革からみる現状と課題」『婦人教育情報』No.30、pp.2-8、国立婦人教育会館

志熊敦子ほか 1995～1999「女性施設の100年史」『女性施設ジャーナル』Vol.1～5、(財)横浜市女性協会

第2章 女性関連施設の現状

1. 施設の概要

この章では国立女性教育会館「女性関連施設データベース」の2009年3月現在の登録データより、女性／男女共同参画センターの現状を簡単にまとめる。

(1) 運営形態

公設公営、公設民営、民設民営という運営形態（施設の設置者、管理運営者の別）別にみると、公設公営が6割以上を占めている。

図表1-2 運営形態別施設数（N=368）

公設公営	230	62.5%
公設民営	98	26.6%
民設民営	32	8.7%
無回答	8	2.2%

開館年を運営形態別にみると、1999年の男女共同参画社会基本法制定後に急増している。

図表1-3 運営形態別開館年（N=368）

	総数	公設公営	公設民営	民設民営	無回答	累積
1954年以前	6	0	0	6	0	6
1955-1959	4	0	0	4	0	10
1960-1964	6	0	1	5	0	16
1965-1969	7	0	2	5	0	23
1970-1974	15	7	4	3	1	38
1975-1979	10	6	3	0	1	48
1980-1984	23	15	7	1	0	71
1985-1989	28	15	11	2	0	99
1990-1994	42	27	15	0	0	141
1995-1999	74	52	22	0	0	215
2000-2004	105	75	28	1	1	320
2005以降	32	26	6	0	0	352
無回答	16	-	-	-	-	-

(2) 単独施設・複合施設

単独施設か複合施設かをみると、複合施設が7割近くを占める。

図表1-4 単独施設・複合施設（N=368）

単独	99	26.9%
複合	249	67.7%
無回答	20	5.4%

(3) 指定管理者制度の導入

指定管理者制度は、2009年3月現在で約4分の1（24.7％）の施設が導入している。平成18年度調査時には357施設中74施設が導入（20.7％）であったので、導入している施設が増えている。またこの中には複合施設で、建物の管理運営は指定管理者によるが事業は直営（公設公営）、静岡県や名古屋市のように直営事業と指定管理者による事業が両方なされている、大阪府のように施設の管理運営は財団とNPO法人との共同体で事業は財団など、多様な導入形態がみられる。詳しくは次節で述べる。

図表1-5 指定管理者制度の導入（N=368）

導入している	91	24.7%
導入していない	234	63.6%
無回答	43	11.7%

2. 指定管理者制度導入施設の現状と課題（平成18年度調査より）

(1) 調査の概要

女性関連施設に関する調査研究の第1年次のテーマとして、指定管理者制度の導入の現況を把握するために質問紙調査およびヒアリング調査を行った。調査結果は『指定管理者制度導入施設についての調査結果分析（女性関連施設に関する調査研究；平成18年度）』（国立女性教育会館，2007）としてまとめているが、その中から結果を抜粋する。

2006（平成18）年4月現在で指定管理者制度を導入していた施設は、女性／男女共同参画センター357施設中74施設（21％）であった。それらを調査対象としたが、そのうち大阪市男女共同参画センターの5施設は大阪市女性協会が一本化して回答することとなったため、70施設に質問紙を送付、69施設から回答を得た（回収率98.6％）。回答を得た施設のうち、複合施設で建物の管理運営にのみ指定管理者を導入し、事業は自治体が行っている施設が6館あったが、指定管理者制度導入の影響を事業面でも調査したいと考えたため、建物のみ指定管理者制度を導入したケースは対象外とし、63施設を集計対象とした。またそのうち11施設については、導入の経緯・現状・課題について詳細なヒアリング調査も行い、また7施設には事例の執筆を依頼した。

調査項目は、施設概要、指定管理者となっている団体、事業、施設の管理・運営、他機関等との連携・協力体制、職員、施設長、事業報告・評価、女性リーダーの育成等である。

(2) 調査結果

(2)－1 指定管理者となっている団体

指定管理者となっている団体の種類は、以下のとおりであった。

図表1-6 団体の種類

		実 数	%
a-1	財団法人・社団法人等（男女共同参画を目的）	24	38.1
a-2	その他の財団法人・社団法人等	13	20.6
b-1	NPO法人・任意団体（男女共同参画を目的）	13	20.6
b-2	その他のNPO法人・任意団体	5	7.9
c	企 業	4	6.3
d	共 同 体	4	6.3
	全 体	63	100.0

指定管理者となる前から管理委託を受けてきた団体かどうかについては、以下のとおりで、NPO法人は新規になった割合が高い。

図表1-7 以前からの管理委託／新規別団体

	以前から管理委託		新 規	
	実 数	%	実 数	%
財団法人・社団法人等（N=37）	32	86.5	5	13.5
NPO法人（N=18）	3	16.7	15	83.3
企業（N=4）	0	0	4	100
共同体（N=4）	0	0	4	100
合 計（N=63）	35	55.6	28	44.4

(2)－2 事業について

「事業参加者を増やす工夫している点」について自由記述を分類したところ、「事業内容」「広報」「実施体制」の3つに分けられた。「広報」に重点をおく施設の割合が最も高く、「メディアの活用」（46%）と「効果的な広報の工夫」（42.9%）が行われている。

図表1-8 事業参加者を増やす工夫（複数回答）（N=63）

大分類	小 分 類	実数	%
事業 内容 (58.7%)	企画内容の工夫	11	17.5
	対象の意識化	8	12.7
	講師の選定	5	7.9
	形式の工夫	4	6.3
	現状把握・分析、実施手法	9	14.3
広報 (88.9%)	メディアの活用	29	46.0
	効果的な広報の工夫	27	42.9
実施 体制 (36.4%)	連携強化	10	15.9
	市民参加の組織	4	6.3
	市民サービスの充実	7	11.0
	そ の 他	2	3.2
無 回 答		12	19.0

(2)－3 施設の管理・運営

施設の管理・運営面における特色について、自由記述を分類したのが図表1－である。

20%を超えるのは、「サービス面の工夫」（27%）、「効率、低コスト」（20.6%）である。サービス面の工夫とは、例えば無料託児、夜間や休日の開館、申し込みのオンライン化など、利用者の観点に立ったサービス向上が目指されている。

図表1-9 施設の管理・運営面における特色（複数回答）（N=63）

大分類	小 分 類	実 数	%
運営方針 (65.1%)	効率・低コスト	13	20.6
	市民に開かれた運営	11	17.5
	目的性をもった運営	10	15.9
	独自事業	5	7.9
	評価を取り入れた運営	2	3.2
施設管理・ 運営 (77.8%)	サービス面の工夫	17	27.0
	複合施設	11	17.5
	施設管理・安全管理	10	15.9
	設備・施設・立地の特徴	6	9.5
	開館時間延長	5	7.9
組 織 (44.4%)	市民参画	10	15.9
	連 携	8	12.7
	職員・雇用	6	9.5
	運営組織	4	6.3
そ の 他		3	4.8
無 回 答		5	7.9

(2)－ 4 他機関との連携・協力体制

他機関等と連携・協力して行っているのは、事業の運営、企画が5割を超えている。

図表1-10 他機関等と連携・協力して行っていること（複数回答）（N=63）

	実 数	%
事業の運営	35	55.6
事業の企画	33	52.4
施設の管理	9	14.3
施設の運営	8	12.7
その他	7	11.1
な し	12	19.0
無回答	3	4.8

連携先は以下のとおりで、女性団体・グループが8割を超えている。

図表1-11 連携先（複数回答）（N=63）

	実 数	%
所管以外の自治体部署	28	58.3
女性団体・グループ	39	81.3
参画社会を活動分野としているNPO	23	47.9
その他の地域団体・グループ・NPO・NGO	30	62.5
学校・大学	25	52.1
社会教育施設	9	18.8
企業・経済団体	17	35.4
町内会・自治会	10	20.8
そ の 他	13	27.1
無 回 答	2	4.2

連携における特色、工夫を自由記述で聞き、以下のように分類した。

図表1-12 連携における特色、工夫（自由記述）（N=63）

大分類	小分類	実数	%
連携・協力の促進 (31.7%)	市民との連携促進	9	14.3
	女性団体等との連携促進	6	9.5
	地域の事業への協力	5	7.9
連携・協力の方法 (60.3%)	役割の分担（含む予算）	13	20.6
	企画・運営上の工夫	11	17.5
	情報交換	6	9.5
	ネットワークの構築・拡充	5	7.9
その他		3	4.8
無回答		22	34.9

連携のための工夫は、以下のような点にまとめられる。

- ① 女性関連施設と連携先との役割分担を明確にすること。双方の持つ資源（含む予算）や権限を認識して、役割分担を行うことが重要。
- ② 担当者が変わってもネットワークが機能するための仕組みづくり。
- ③ 事業に取り組む中で、連携の輪をさらに広げていくこと（連携の継続）。

女性／男女共同参画センターは地域の男女共同参画拠点として、他の機関や団体・グループなど、多様な連携を形成しつつ運営されていることが明らかになった。さまざまな分野に男女共同参画を広め、浸透させていくためには、今後とも他機関・団体との連携・協働は女性関連施設にとって必要不可欠であることが調査によって明らかになった。

(2)－5 職員

職員の職業能力開発・向上のために行っていることとして最も多いのが、「外部への研修の参加」であり、全体の77.8%が実施している。

図表1-13 職員の職業能力開発・向上のために行っていること（複数回答）（N=63）

	実 数	%
国立女性教育会館の研修への参加	34	54.0
その他外部研修への参加	49	77.8
館内研修の実施	38	60.3
その他	7	11.1
無回答	5	7.9

職員の能力開発・向上に今後必要と思われることについては、「専門知識・技術の習得」（27%）、「研修の充実」（23.8%）の割合が高い

図表1-14 職員の職業能力開発・向上に今後必要と思われること（全体）（N=63）

	実 数	%
研修の充実	15	23.8
専門知識・技術の習得	17	27.0
情報交換	7	11.1
職場内の共有	2	3.2
計画性	4	6.3
実践・フィードバック	5	7.9
人事・待遇	3	4.8
管理職	1	1.6
職 員	8	12.7
その他	4	6.3
無回答	16	25.4

(2)－6 施設長

自由記述を分類したところ、男女共同参画推進拠点の長にとって必要と考えられる能力は、①ビジョン、②男女共同参画に関するミッション意識と知識、③実態把握力、④実践力、⑤人間関係力、⑥組織運営力の6つに大別された。

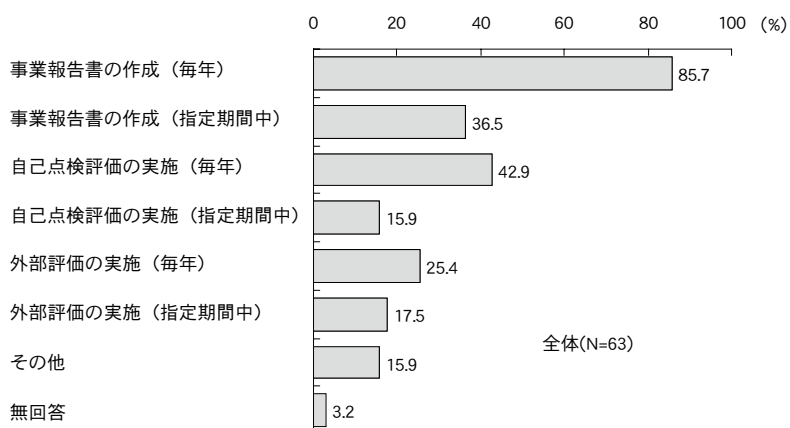
図表1-15 男女共同参画推進拠点の長にとって必要と考える能力（自由記述）（N=63）

大分類	小 分 類	実 数	%
ビジョン (23.8%)	広い視野	9	14.3
	先見性	6	9.5
男女共同参画 (39.7%)	ミッション意識	14	22.2
	知識	11	17.5
実態把握力 (17.5%)	情報収集・分析力	11	17.5
実践力 (58.7%)	計画・立案能力（企画力）	12	19.0
	状況分析・判断力・問題解決力	10	15.9
	行動力・推進力	8	12.7
	情報発信力	7	11.1
人間関係力 (41.3%)	調整力	13	20.6
	ネットワーク力	8	12.7
	コミュニケーション力	5	7.9
組織運営力 (55.6%)	指導力	17	27.0
	管理能力	11	17.5
	経営能力	7	11.1
無 回 答		13	20.6

回答割合の高かったのは、「実践力」(58.7%)、次いで「組織運営力」(55.6%)、である。また、「人間関係力」(41.3%)、「男女共同参画（ミッション意識と知識）」(39.7%)、と答える割合が4割程度ある。

(2)－ 7 事業報告・評価

図表1-16 事業報告、評価について行っていること（複数回答）(N=63)



事業報告、評価について行っていることを、選択肢を設けて複数回答で聞いたところ、「事業報告書の作成（毎年）」が54施設（85.7%）、「事業報告書の作成（指定期間中）」23施設（36.5%）、「自己点検評価の実施（毎年）」27施設（42.9%）、「自己点検評価の実施（指定期間中）」10施設（15.9%）、「外部評価の実施（毎年）」16施設（25.4%）、「外部評価の実施（指定期間中）」11施設（17.5%）、「その他」10施設（15.9%）、「無回答」2施設（3.2%）であった。まだ半数以下の施設しか自己点検評価を行っていない（あるいは行う予定）ということがわかる。

(2)－ 8 女性リーダーの育成

女性リーダーの育成を行っているのは34施設（54%）、行っていないのは28施設（44.4%）であった。「女性リーダー育成における課題」について自由記述を分類したのが以下である。比較的回答が多かったのは、メンバーの「固定化」で、高齢化の傾向や、同じメンバーに偏りがちで、若い世代が育たないという課題がみられる。

また、リーダー育成後の活動がグループ内に止まっていること、地域のリーダーとして活動を広げていくこと等「活動範囲の拡大」をしていくことに課題がみられる。「育成研修の充実」もそれに続く課題であるが、都道府県の場合には、地域が広いため主催講座で「リーダーを育成してもフォローアップがむずかしい」という課題も挙げられている。

図表1-17 女性リーダー育成の課題（自由記述）（N=34）

分類	実 数	%
固定化	10	29.4
活動範囲の拡大	8	23.5
育成研修の充実	7	20.6
体制整備	5	14.7
無回答	7	20.6

3. 事業評価の現状と課題（平成19年度調査より）

特定非営利活動法人全国女性会館協議会は、女性関連施設をめぐる社会環境が大きく変化しているなかで、市民ニーズへの対応や費用対効果を明らかにするために、評価を実施することが強く求められるようになってきたことにかんがみ、「女性関連施設における事業評価に関する調査」を国立女性教育会館と共同で実施した。調査結果は『女性関連施設における事業評価に関する調査報告書（女性関連施設に関する調査研究；平成19年度）』（国立女性教育会館, 全国女性会館協議会[編], 2008）としてまとめているが、その結果から概要を紹介する。

調査対象は、国立女性教育会館「女性関連施設データベース」に登載の全国的女性関連施設のうち女性／男女共同参画センター（婦人会館も含む）に分類される356施設（2007年12月現在）で、郵送による質問紙調査を行った（希望者にはEメールでの質問紙送付及び回答を可とした）。

調査期間は2007年12月10日～28日であった。

312施設から回答があり、有効回答は311であった（回収率87.6%）。

311施設の運営形態は、「公設公営」が197施設（63.3%）でもっとも多く、次いで「公設民営」が90施設（28.9%）であった。「民設民営」は15施設（4.8%）とわずかである。また、指定管理者制度を導入している施設は76施設（24.4%）であった。

(1) 事業の実施状況等と数値の把握

最初に、評価の基礎となる数値（データ）の把握が不可欠と考え、各施設における事業の実施状況や施設の利用状況と、それらに関連する数値の把握状況を調査した。

事業の実施状況では、もっとも多くの施設で実施しているのが「学習・研修事業」（87.8%）で、次いで「施設の貸出事業」（84.9%）、「情報、広報事業」（83.6%）、「相談事業」（77.2%）と続き、「協働事業」を実施している施設は、61.4%とやや少なかった。

運営形態別でみると、「学習・研修事業」「施設の貸出事業」はどの運営形態でも80%以上が実施しているが、「民設民営」においては、「情報、広報事業」や「相談事業」を実施している施設が、他の運営形態施設に比べかなり少なくなっている。また、「指定管理者制度あり」と「それ以外」の別による実施事業の差はあまり大きくはなかった。

「施設の貸出事業」を実施している施設（264施設）のうち、他の「学習・研修事業」「情報、広報事業」等をまったく実施せず、施設貸出のみを実施しているところも14施設あった。

実施している事業について、その実施回数や受講者満足度などを数値（データ）として把握しているか、またそれらについて年度当初に目標値として定めているか否かをたずねた。

「学習・研修事業」を実施している273施設においては、そのほとんどで「事業の実施回数」（99.6%）、「受講者数」（96.7%）を把握しており、「受講者満足度」（66.7%）、「1事業あたりのコスト」（57.1%）についても半数以上の施設が把握していると回答している。また、「定員充足率」（49.5%）もほぼ半数の施設で把握しており、さらに、上記5項目以外に把握している数値として「その他」の自由記述欄には、「再就職講座等の結果調査（再就職者数等）」「男性参加者数」「連続講座の修了率」等があげられた。「学習・研修事業」を実施していて、これらの「数値を（1つも）把握していない」施設は273施設中1施設（0.4%）にすぎなかった。

しかし、数値を把握している272施設のうちで年度当初に目標値として定めた数値があるかをたずねると、もっとも多いのが「事業の実施回数」（23.5%）、次いで「受講者数」（14.7%）で、目標値を定めていない施設、すなわち「無回答」（69.9%）が多いことが明らかになった。

これを指定管理者制度の有無別をみると、指定管理者制度を導入していない施設ではその74.5%が「無回答」であるのに対し、導入している施設では「無回答」が55.9%と、4割を超える施設で年度当初の目標値を設定している。

図表1-18 事業の実施状況と数値の把握及び年度当初目標値の設定施設

事業区分	実施施設数(%)	数値把握施設数(%)	目標値設定施設数(%)
学習・研修事業	273 (87.8)	272 (99.6)	82 (30.1)
情報、広報事業	260 (83.6)	217 (83.5)	26 (12.0)
相談事業	240 (77.2)	237 (98.8)	17 (7.2)
協働事業	191 (61.4)	183 (95.8)	30 (16.4)
施設の貸出事業	264 (84.9)	262 (99.2)	35 (13.4)

※注1) 数値把握施設数の%は、実施施設数に対する百分値である。

注2) 目標値設定施設数の%は、数値把握施設数に対する百分値である。

把握した数値を活用する方法としては、「事業報告書の作成」のためがもっとも多く（76.6%）、次いで「次年度の事業計画立案の資料」（71.1%）、「事業の見直し、改善の資料」（68.8%）となっており、市民や所管自治体等への現状の報告とともに、PDCAのマネジメント・サイクルを意識した活用がうかがえる。しかし、把握した数値を「自己評価の資料」としているところは、28.9%であった。また、外部への報告や外部評価の資料としているという回答は、それぞれ「所管の自治体等への報告」（51.3%）、「所管の自治体等による行政評価の資料」（49.0%）、「有識者等による外部評価の資料」（22.7%）となっている。「職員（スタッフ）の人事考課の資料」としているところも17施設（5.5%）あった。

図表1-19 把握した数値の活用（上段：実数 下段：％ 複数回答）

	N=	事業報告書の作成	ホームページに掲載	所管の自治体等への報告	所管の自治体等による行政評価資料	有識者等による外部評価資料	事業の見直し、改善の資料	次年度の事業立案資料	年度の計画資料	自己評価資料	職員(スタッフ)の人事考課の資料	特に活用していない	その他	無回答
全体	308 100.0	236 76.6	42 13.6	158 51.3	151 49.0	70 22.7	212 68.8	219 71.1	89 28.9	17 5.5	6 1.9	7 2.3	13 4.2	
公設公営	196 100.0	145 74.0	16 8.2	72 36.7	92 46.9	39 19.9	132 67.3	137 69.9	41 20.9	9 4.6	4 2.0	6 3.1	6 3.1	
公設民営	89 100.0	73 82.0	25 28.1	74 83.1	51 57.3	28 31.5	65 73.0	67 75.3	39 43.8	8 9.0	2 2.2	0 0.0	5 5.6	
民設民営	14 100.0	11 78.6	0 0.0	5 35.7	1 7.1	2 14.3	9 64.3	9 64.3	6 42.9	0 0.0	0 0.0	1 7.1	2 14.3	
その他	9 100.0	7 77.8	1 11.1	7 77.8	7 77.8	1 11.1	6 66.7	6 66.7	3 33.3	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	
指定管理制度あり	76 100.0	63 82.9	22 28.9	64 84.2	51 67.1	28 36.8	57 75.0	59 77.6	39 51.3	7 9.2	2 2.6	0 0.0	3 3.9	
それ以外	232 100.0	173 74.6	20 8.6	94 40.5	100 43.1	42 18.1	155 66.8	160 69.0	50 21.6	10 4.3	4 1.7	7 3.0	10 4.3	

(2) 自己評価の実施状況

311施設のうち、約3分の1（36.0％）が自己評価（ここでは女性関連施設における事業の実施状況や施設の利用状況に関して、「施設みずからが行う事業評価」と定義）を実施しており、残り約3分の2（63.3％）が実施していなかった。

自己評価を実施している112施設に、その開始年をたずねると、2000年以降が7割（73.2％）を占める。2000年以降をさらに詳しく見ると、2005年以降が約7割（68.3％）に達する。これは、2003年9月に地方自治法が改正され、2005年ころから公の施設の管理運営に指定管理者制度が導入されはじめたことと無縁ではないと思われる。

自己評価を開始したきっかけとしては、「自らが必要性を感じた」（45.5％）、「所管の自治体からの導入要請」（31.3％）と並んで、「指定管理者となった」（26.8％）があがっている。これを「指定管理者制度あり」と「それ以外」の別でみると、「指定管理者制度あり」の施設では、「指定管理者となった」が57.1％で過半数を占め、「それ以外」の施設でのきっかけとは異なる結果がでた。

「その他」の自由記述欄には、23施設から書き込みがあった。「自治体全体で（事務事業評価、あるいは行政）評価を実施しているため」に類した記述が10施設以上からあり、ほかに「外部評価を受けるため」「指定管理者の2期目選定時の応募資料として」という記述もあった。

「自己評価の内容」として、もっとも多かったのは「（事業や施設管理のあり方が）市民ニーズにあっているか」（75.9％）で、次いで「事業が男女共同参画の推進という目的に合致しているか」（68.8％）、「予算計画が適切に実施できたか」（63.4％）、「施設の利用状況が目標どおりであったか」（54.5％）、「職員が計画どおりの成果をあげられたか」（45.5％）と続く。

図表1-20 自己評価の内容（上段：実数 下段：％ 複数回答）

	N=	事業が目的に 合致している か	予算計画が適 切に実施でき たか	市民ニーズに あっているか	施設の利用状 況が目標どお りか	職員が計画ど おりの成果を あげたか	その他
全体	112 100.0	77 68.8	71 63.4	85 75.9	61 54.5	51 45.5	13 11.6
公設公営	54 100.0	35 64.8	26 48.1	38 70.4	23 42.6	23 42.6	4 7.4
公設民営	51 100.0	39 76.5	40 78.4	42 80.4	33 64.7	24 47.1	9 17.6
民設民営	5 100.0	3 60.0	5 100.0	3 60.0	3 60.0	4 80.0	0 0.0
その他	2 100.0	0 0.0	0 0.0	2 100.0	2 100.0	0 0.0	0 0.0
指定管理制 度あり	49 100.0	37 75.5	38 77.6	42 85.7	34 69.4	23 46.9	9 18.4
それ以外	63 100.0	40 63.5	33 52.4	43 68.3	27 42.9	28 44.4	4 6.3

自己評価を実施する理由としては、「事業や施設運営のあり方を見直し、改善するため」がもっとも多く（87.5%）、次に「事業計画を立てるため」（65.2%）となっており、自己評価をPDCAのマネジメント・サイクルのなかに位置づけようとする施設が少なくないことがわかる。

「市民への説明責任を果たすため」（55.4%）、「施設の存在意義を明確にするため」（55.4%）は、公益的な役割を担った施設であることを認識しての理由と思われる。さらに「予算を有効に使うため」（56.3%）、「職員がコスト意識を高めるため」（38.4%）と厳しい予算に着目しての理由もある。

自己評価を実施する最大の理由もたずねている。「事業や施設運営のあり方を見直し、改善するため」（39.3%）がもっとも多いが、「自治体などによって評価が義務づけられているため」（15.2%）の回答も多く、外からの要請があって評価を実施している現実もうかがわれる。

自己評価を実施する際に留意する点について「評価の結果を職員間で共有できるようにしている」(72.3%)、「施設の使命や目標を明確にして、職員間で共有するようにしている」(50.9%)は、自己評価によって自らの施設の設置意義や運営状況を組織全体で確認し、共有化することが重要と考えている施設が少なくないことを示している。「評価についての職員研修を実施している」ところは、自己評価を実施していると回答した112施設中、10施設(8.9%)にすぎなかった。

図表1-21 自己評価を実施する際に留意する点（上段：実数 下段：％ 複数回答）

	N=	手間や時間がかからないよう工夫	マネジメントのなかで位置づけている	評価結果が事業改善につながる仕組み	評価結果を職員間で共有できるように	目標に対しての成果としている	事業ごと施設全体の評価	評価についての職員研修を実施	施設の使命等を明確にし、共有する	その他	無回答
全体	112 100.0	33 29.5	49 43.8	88 78.6	81 72.3	49 43.8	48 42.9	10 8.9	57 50.9	2 1.8	1 0.9
公設公営	54 100.0	13 24.1	21 38.9	42 77.8	35 64.8	24 44.4	18 33.3	1 1.9	21 38.9	1 1.9	1 1.9
公設民営	51 100.0	19 37.3	27 52.9	41 80.4	41 80.4	25 49.0	27 52.9	8 15.7	30 58.8	0 0.0	0 0.0
民設民営	5 100.0	1 20.0	0 0.0	3 60.0	3 60.0	0 0.0	3 60.0	0 0.0	4 80.0	0 0.0	0 0.0
その他	2 100.0	0 0.0	1 50.0	2 100.0	2 100.0	0 0.0	0 0.0	1 50.0	2 100.0	1 50.0	0 0.0
指定管理制度あり	49 100.0	19 38.8	28 57.1	41 83.7	41 83.7	24 49.0	26 53.1	8 16.3	30 61.2	1 2.0	0 0.0
それ以外	63 100.0	14 22.2	21 33.3	47 74.6	40 63.5	25 39.7	22 34.9	2 3.2	27 42.9	1 1.6	1 1.6

一方、実施していない理由でもっとも多かったのは、「自治体等からの行政評価や外部有識者等からの評価を受けており、施設独自の自己評価は必要ないと思うから」(41.6%)であった。外部評価を受けるためには、その基礎資料として自己評価の活用が有効と思われるが、外部評価を受けていれば自己評価は必ずしも必要ではないという施設が少なくなかった。

自己評価に際して知りたいこと、必要と思われることについては、現在、「自己評価を実施している施設」では、「有効な評価指標」(80.4%)、「数値化しにくい内容の評価方法」(75.9%)、「有効な実施方法」(67.0%)、「評価結果の活かし方」(64.3%)が知りたいことの上位にあがった。また、「自己評価を実施していない施設」では、「数値化しにくい内容の評価方法」(69.5%)がトップで、次いで「有効な実施方法」「有効な評価指標」(ともに66.0%)、「評価結果の活かし方」(59.4%)と続き、「評価に関するテキストやマニュアル」へのニーズも高い(41.1%)。

(3) 外部評価

自己評価以外の外部評価を「受けていない」施設は約3割(28.0%)にすぎず、「所管の自治体から行政評価の一環としての評価を受けている」施設が約半数(46.3%)にのぼり、「外部有識者からの評価を受けている」施設も2割(21.5%)あった。しかし、「市民やNPO等からの評価を受けている」施設は5.8%と少なかった。

「自己評価を実施している」施設は、「行政評価」「外部有識者評価」「指定管理者としての評

価」「市民やNPOからの評価」のすべてにおいて、「自己評価を実施していない」施設に比べ、外部評価実施率が高い結果となった。「自己評価を実施していない」施設では、「外部評価を受けていない」ところが35.0%であるのに対し、「自己評価を実施している」施設では「外部評価を受けていない」ところは15.2%とわずかである。

図表1-22 外部評価で評価されたいこと（上段：実数 下段：％ 複数回答）

	N=	男女共同参画 施策推進への 効果・貢献	施設の 活用度	市 民 ニーズとの合 致	事業等 の企画 力	職員の 専門性	行政と の連携	適切な コスト 運用	組織力	管理運 営の継 続性	地域等 からの 信頼性	その他	無回答
全体	311 100.0	256 82.3	134 43.1	183 58.8	122 39.2	28 9.0	22 7.1	42 13.5	6 1.9	36 11.6	47 15.1	4 1.3	19 6.1
公設公営	197 100.0	171 86.8	86 43.7	128 65.0	70 35.5	16 8.1	6 3.0	20 10.2	0 0.0	14 7.1	19 9.6	2 1.0	13 6.6
公設民営	90 100.0	71 78.9	36 40.0	45 50.0	44 48.9	12 13.3	12 13.3	16 17.8	4 4.4	14 15.6	26 28.9	1 1.1	4 4.4
民設民営	15 100.0	6 40.0	6 40.0	6 40.0	3 20.0	0 0.0	3 20.0	4 26.7	2 13.3	8 53.3	2 13.3	1 6.7	2 13.3
その他	9 100.0	8 88.9	6 66.7	4 44.4	5 55.6	0 0.0	1 11.1	2 22.2	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0
指定管理 制度あり	76 100.0	64 84.2	32 42.1	38 50.0	43 56.6	10 13.2	9 11.8	14 18.4	2 2.6	7 9.2	22 28.9	1 1.3	2 2.6
それ以外	235 100.0	192 81.7	102 43.4	145 61.7	79 33.6	18 7.7	13 5.5	28 11.9	4 1.7	29 12.3	25 10.6	3 1.3	17 7.2

図表1-23 自己評価実施の有無別・外部評価で評価されたいこと

（上段：実数 下段：％ 複数回答）

	N=	男女共同参画 施策推進への 効果・貢献	施設の 活用度	市 民 ニーズとの合 致	事業等 の企画 力	職員の 専門性	行政と の連携	適切な コスト 運用	組織力	管理運 営の継 続性	地域等 からの 信頼性	その他	無回答
全体	309 100.0	255 82.5	133 43.0	182 58.9	122 39.5	28 9.1	22 7.1	42 13.6	6 1.9	36 11.7	47 15.2	4 1.3	18 5.8
実施して いる	112 100.0	93 83.0	42 37.5	62 55.4	64 57.1	14 12.5	9 8.0	15 13.4	3 2.7	7 6.3	23 20.5	2 1.8	5 4.5
実施して いない	197 100.0	162 82.2	91 46.2	120 60.9	58 29.4	14 7.1	13 6.6	27 13.7	3 1.5	29 14.7	24 12.2	2 1.0	13 6.6

(4) 課題

女性関連施設における評価への取り組みはまだ始まったところで多くの課題が見えてくる。例えば、評価の主体についても施設自身による自己評価への主体的な取り組みが必ずしも十分とはいえない。また、業務統計等を把握しているが、それを評価の基礎資料として有効に活用しているとはいえない。

今後、女性関連施設として事業の実施と施設の運営上の成果を客観的に把握する評価基準の確立と評価手法の検討が必要である。有効な評価指標、数値化が困難な内容に関する評価方法、評価結果の活用等についての研究が喫緊の課題となっている。

さらに、行政及び市民との評価方法及び指標の共有や役割分担の検討、職員の理解と取り組みについての研修が必要である。

第3章 女性関連施設の課題

前章で述べた通り、平成18年度は、2003（平成15）年に開始された指定管理者制度の導入状況と今後の影響について調査研究を行い、平成19年度はこれまでの女性関連施設の役割およびこれからの役割を明確化するためには、評価の考え方や方法が必要となるだろうと考え、事業評価に関して調査研究を行った。

行政改革の影響等により、女性関連施設を始めとする公的施設は、運営主体の多様化、経費節減と運営効率化が課題とされるようになった。そういった中で、事業を充実させ、施設の存在意義を明らかにするという課題を抱えている。女性関連施設の課題を上記2年間の調査結果から集約すると、以下の通りである。

- ① 行政の男女共同参画拠点施設に対する考え方の変化（指定管理者制度導入に対する姿勢等）
- ② 他機関、行政、市民等との多様な連携・協働の推進
- ③ 職員の専門性の向上
- ④ 地域における人材育成（女性リーダーの育成、フォローアップ等）
- ⑤ 事業や施設運営の改善につながるものとしての評価の必要性および実施方法に関する課題

平成18年度の調査時に指定管理者制度を導入していたのは全施設の20.7%であった。運営主体は従来委託を受けていた財団法人等が6割近く、新規参入が約4割で、これまでは男女共同参画とはあまり関わりのなかった企業・団体の参入も若干あり、運営主体の多様化は今後とも進んでいくだろうことが予想された。また、期間を2～5年と限って指定されるため、管理・運営者の継続性が確保されないということも予想された。

2009年3月現在でその導入率をみると24.7%となっており（国立女性教育会館「女性関連施設データベース」より）、この2年間で4%増加している。また、第1期の指定期間が終了し、第2期に入った施設も出てきている。指定管理者制度の導入が女性関連施設に与える影響は、これから明らかになっていくであろう。懸念されるのは、男女共同参画の推進拠点としての役割や機能が、効率化の推進を優先させることによって不明瞭になっていくことではないだろうか。

1999年の男女共同参画社会基本法制定以降、女性関連施設は男女共同参画という新たな理念の周知に力を入れてきた。今後は、人と人をつなぐ拠点、人と情報をつなぐ拠点としての役割が求められるのではないか。そして、拠点として事業運営をより充実させていくためには、「連携・協働の推進」および施設職員のエンパワーメントも含めた「人材育成」が特に重要ではないか考える。

1. 「連携・協働」という課題

(1) 女性関連施設における連携の課題

指定管理者制度を導入している施設に限ってではあるが、平成18年度の調査から、女性関連施設の連携・協働の状況について把握すると（第Ⅰ部2章）、女性関連施設の事業の企画・運営は、女性団体・グループ、地域団体、行政、学校等と事業の企画や運営を連携・協働しながら行っている。また、これまで女性関連施設を拠点に学習、活動してきた女性たちが設立したNPO法人が指定管理者となっている施設では、利用者としての視点を活かして事業や施設管理を行っている。

日本の女性関連施設の約9割が公設であり、これまでは行政と施設とはほぼ一体で男女共同参画を推進してきた。しかし、施設の管理運営者が公募され、審査され、期限を区切って管理を委託されるという制度上の変化によって、新たな行政との関係性が必要となってきた。男女共同参画を推進するためには、行政と施設との連携は必要不可欠なものであり、これまで以上に両者が連携・協働するような体制づくりを意識的に行うことが必要となるだろう。

また、女性団体・グループと施設、行政と施設という二者間の連携・協働はこれまでも多くなされてきたが、女性団体・グループ、行政、施設の三者の連携・協働で事業を企画・運営する機会というのは意外に多くはなかったのではないかと。この三者が一緒に行うことにより、これまでは二者間の線的なつながりだったものが面となることで、地域の男女共同参画の推進力を強めることにつながるのではないだろうか。地域に根差し、男女共同参画に関する情報・資源・人材の拠点である女性関連施設は、三者連携の核になりうる存在である。

さらに、男女共同参画を様々な分野に広げ、女性の参画を進めるためには、女性関連施設以外の機関や従来女性の参画が少ない団体との連携・協働も必要である。企業、福祉施設、自治会等、これまで一緒に行うことのなかった機関・団体との連携・協働が、新しい発想を生み、男女共同参画に広がりを与えることだろう。

(2) 政策における連携の重要性

内閣府男女共同参画会議基本問題専門調査会では、2008年6月に「地域における男女共同参画推進の今後のあり方について」中間報告を取りまとめたが、その中では、これまでの知識習得や意識啓発を中心とする男女共同参画の取組みだけでは十分ではなく、今後は地域の実情に応じた課題解決型の実践的活動を中心とする男女共同参画の推進という「第2ステージ」への移行が必要であることが述べられている。

また、男女共同参画に関する課題が多岐に複雑化する中で、第2ステージにおける推進体制の課題として、より高度な専門性と幅広い能力を持った人材の育成が必要であること、地方公共団体の男女共同参画担当部局や女性関連施設が、関係機関や男女共同参画に関わる団体のみならず、課題に応じて、地域団体、企業、教育会館、医療機関、NPO等と幅広く連携・協働して取組を進めていくことが不可欠であることが指摘されている。

「女性関連施設に関する調査研究」によって明らかになった課題は、このような政策的な流れとも重なるものである。

2. 人材育成における課題

職員の育成について、指定管理者制度導入館だけではあるが平成18年度調査の結果からみると、外部機関への研修は約8割弱の施設が参加しており、研修実施の割合は高かった。また、職員の能力向上のためには「研修の充実」「専門知識・技術の習得」が必要という意見が約3割あり、女性関連施設職員には専門性が求められていることがわかる。他方、多くの施設では人件費の削減、指定管理者としての継続性の問題など、専門性をもつ職員の確保、あるいは専門性をもつ職員に見合う待遇の整備が困難な状況がみられる。職員の専門性を磨くために研修を受けるだけでなく、仕事がすなわち研修となるよう、PDCA（Plan-Do-Check-Action）サイクルにそった事業の進め方が重要となるのではないだろうか。また、政策課題として挙げられている、地域での課題解決に向けた実践を通じた男女共同参画の推進を支援するための力をつける研修を、施設職員が企画・運営することが必要となると思われる。

地域の女性リーダー等の人材の育成の課題として平成18年度調査から明かになったのは、「メンバーの固定化」である。女性関連施設を拠点に活動してきたリーダー層が固定化しているという状況がある。特に都道府県の女性関連施設では、これまでもリーダー育成研修等を通じて、地域リーダーを育て活躍の場を提供してきているが、既存の団体・グループに新しいメンバーが増えない等の課題を抱えている。そのため、団体・グループの「活動の支援」「養成講座の工夫・充実」が必要とされている。

また、女性関連施設の指定管理者の中には、NPO法人として施設の運営を担っている女性グループが出てきており、これまでセンターを利用していた人たちが、運営者となることで、施設の意思決定に関わる立場となっている。女性たちが、組織内での意思決定や政策決定に参画し、男女共同参画の「社会的基盤」を築いていくことを支援するために、施設の「人の拠点」としての役割が今後一層重要となるであろう。

第Ⅱ部では、2年間の調査研究の結果明らかになった課題の解決に向けて、女性関連施設、男女共同参画行政、女性団体・グループの、地域で男女共同参画を推進するリーダー層に向けた学習プログラムの開発について述べる。

Ⅱ 部

Ⅱ 「連携・協働を推進しつつ、地域づくりに参画する人材が育つ」ための学習プログラムの開発

はじめに

1. 学習プログラム開発の目的と経緯

本年は、平成18年度から3年計画で実施している「女性関連施設に関する調査研究」の最終年度に当たる。これまでに行ってきた調査研究の成果を、女性関連施設職員、男女共同参画行政職員等、地域で男女共同参画を推進していく支援者に広く活用してもらえるような形で提供したいと考え、学習プログラムを開発することを本年度の調査研究の目的とした。

開発する学習プログラムの内容については、これまでの2年間で明らかになった女性関連施設の課題（第Ⅰ部3章）の中で、特に「連携・協働」と「人材育成」という課題に焦点を当てることにした。行政改革等の影響により、変動期にある女性関連施設は、施設の目指す方向・ビジョンを一層鮮明にし、地域における男女共同参画の推進拠点として事業運営を見直すことが必要とされている。そのためには施設職員自身がエンパワーメントし、多様な機関と連携・協働しながら事業を進めていくこと、地域における人材が育つよう支援していくことが必要であると考えたためである。また、内閣府男女共同参画局は、地域の実情に応じた課題解決型の実践的活動を中心とする男女共同参画の推進という「第2ステージ」への移行に向けて政策を進めており、「連携・協働」、地域における「人材育成」というテーマは、このような政策的動向にも対応している。

地域づくり・地域おこしは、様々な地域ですでに長年にわたって取り組まれているが、必ずしも男女共同参画の視点をもって行われてはいないように思われる。また、多くの女性が地域づくりに参加してはいるが、意思決定への参画は十分に進んだとはいえない。そこで、女性関連施設職員等、地域における男女共同参画を支援する立場の人が、多様な機関や団体と連携・協働をしながら、「地域社会づくりに参画する人材」を育成していくための事業を行えるような力をつけることを目的に、プログラムを開発することにした。

「地域づくりに参画する人材」という言葉はやや漠然としており、農家経営への女性の参画、自治会の役員や民生委員などの役職に就くこと、NPO法人を組織して活動すること等、実に様々な側面を含んでいる。この言葉をより明確化するために、本調査研究では女性のキャリア形成の考え方に着目した。文部科学省は『女性のキャリアと生涯学習の関わりから（多様なキャリアが社会を変える；第2次報告）』（女性の多様なキャリアを支援するための懇談会、2003）の中で、「女性の多様なキャリア」を支援する必要性を提示している。それを受け、国立女性教育会館では、平成15年度から女性のキャリア形成に関する調査研究に着手し、職業キャリアに留まらず、学習活動、ボランティア、子育てネットワーク、NPOなど様々な社会的な活動も含めて「多様なキャリア」とみて研究を行ってきた。

本調査研究では、女性の形成する多様なキャリアをさらに「社会活動キャリア」とみる視点を導入することにした。キャリアとは個々人が形成するものであるが、それを社会の中に位置づけ、個人の経験や活動は社会の基盤づくりと結びついているということを明らかにする視点

である。女性が日々行っている活動を「社会活動キャリア」の観点から見直すことにより、女性の活動が地域活性化に果たす役割、貢献がより一層明らかになると考えた。

以上のような考え方に基づいて、「多様な機関との連携・協働を推進しつつ、女性の社会活動キャリア形成を促進し、地域づくりに参画する人材が育ち、力をつける」ことを目的に、学習プログラムの開発を行った。

2. 研究を進める体制

研究を進める体制として、国立女性教育会館職員を中心として調査研究プロジェクト・チームを組織した。研究国際室が主担当となり、事業課、情報課と連携して実施するために各課の職員が加わった。

この館内メンバーに加えて、外部専門家として大学研究者を、また女性関連施設での事業経験の豊富な職員を研究協力委員として委嘱した。

これらのメンバーにより、研究協力者会議（3回）やワーキンググループ打ち合わせ会（3回）を行い、実験プログラムの企画を練り、実施した。メンバー構成は、以下の通りである。

〈国立女性教育会館〉

神田 道子（理事長）
中野 洋恵（研究国際室長、主任研究員）
小林千枝子（調査役）
高橋 由紀（研究国際室研究員）
森 未知（情報課専門職員）
西山恵美子（客員研究員）

〈研究協力委員〉

国広 陽子（武蔵大学社会学部教授）
葛原 生子（広島市女性教育センター事業推進マネージャー）
仁科あゆ美（大阪府立女性総合センター・財団法人大阪府男女共同参画推進財団事業チーフ）

第1章 学習プログラムの企画について

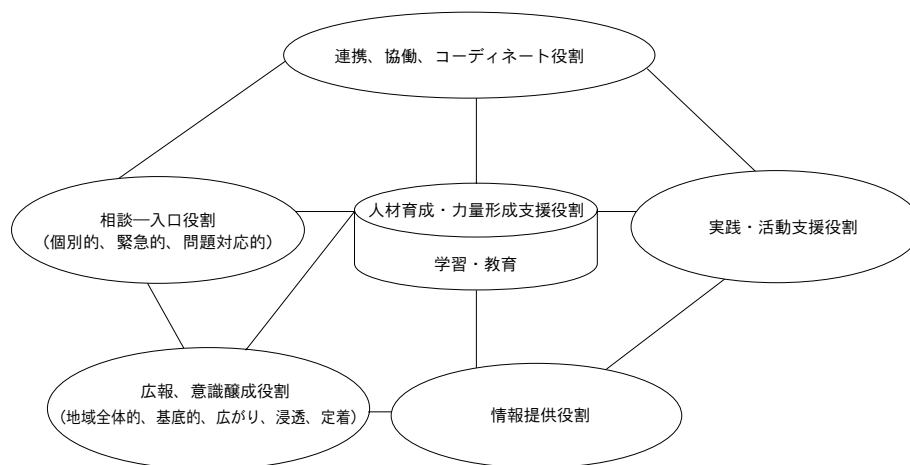
「連携・協働を推進しつつ、地域づくりに参画する人材が育つこと」をプログラム開発の目的として設定するまでの経緯については前述した通りであるが、それを具体化するために、実験プログラムを実施し、その経過を踏まえてプログラムの開発を行うことにした。実験プログラムの企画にあたっては、まず次のような点について研究メンバー間で話し合い取り組んだ。

1. 企画にあたっての共通認識

① テーマの設定について

平成18、19年度「女性関連施設に関する調査研究」から得られた課題に基づいて、テーマを検討した。女性関連施設は、男女共同参画推進のための拠点施設であり、拠点としての役割を果たすことが期待されるが、その中核にあるのが、地域の男女共同参画を推進する人材育成であり、また、実際に男女共同参画を推進する事業を行うためには、多様な連携・協働が必要であるという現状把握・認識に立ち、本テーマの設定を行った（課題設定）。図表1-1は女性関連施設の役割を整理したものである。

図表1-1 公的女性関連施設・機関の役割



② 本プログラムの基本的性格

本プログラムは、「実践・活動に結びつく学習（アクション・ラーニング）」（後述）であることを目指し、そのためのプログラム内容、方法について検討する。

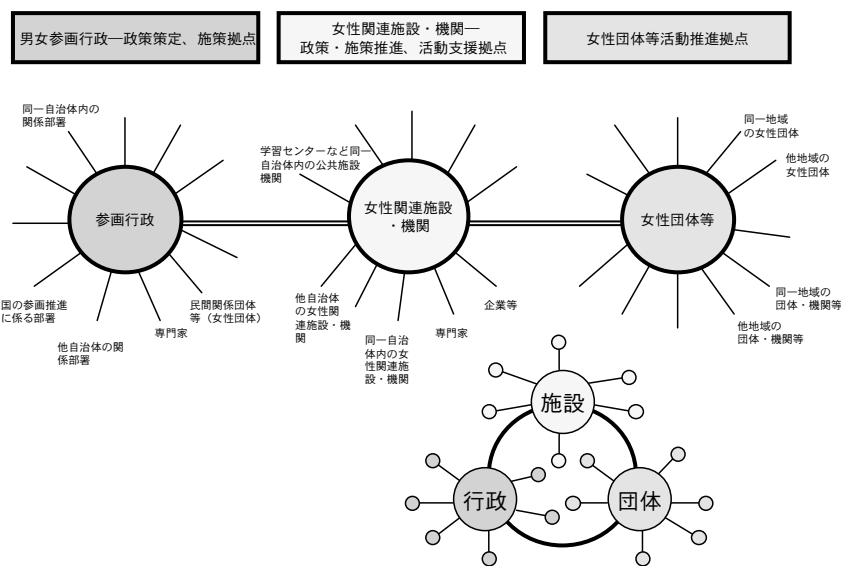
③ 連携・協働の実践（図表1-2参照）

地域で男女共同参画を推進する核になるのが、女性関連施設・機関、男女共同参画行政、女性団体・グループである。図表1-2のように、これらのそれぞれが関係機関とのつながりを持ちつつ、連携・協働することによって、地域拠点としての役割を担うことが可能になると考えた。こうした拠点役割は、ハブ（hub：車輪の中軸）としてとらえることができよう。それぞれがハブとしての機能を果たすと同時に、三者が連携・協働することによって男女共同参画を推進する地域でのハブとなるという考え方である。

こうしたハブは、ここでは施設、行政、団体と表記しているが、実際に動かしていくのは「人」であり、人と人との関係である。連携・協働も人と人との関係によって成り立つ。そのために、本実験プログラムでは、女性関連施設・機関職員、男女共同参画行政職員、女性団体・グループのリーダーの三者に参加してもらうことが必要であると考えた。

三者が同じ時間を共有し、対等な関係の中で連携・協働しながら学ぶ過程で、互いのネットワークが作られ、次の段階の実践・活動に展開していく可能性が広がる。

図表1-2 連携・協働による男女共同参画推進拠点



④ 会館の調査研究、情報の活用

会館がこれまで行ってきた調査研究、蓄積した情報を活用し、プログラムの中に位置づける（女性のキャリア形成研究、男女共同参画統計に関する調査研究、統計データベース等）。

会館で行ってきた「プログラム開発研究会」の成果を取り入れる。本プログラムの開発研究に直接取り組んだのは本年度に入ってからであるが、それに先立ち、平成17年度から「プログラム開発研究会」を立ち上げ、主催研修の検討、女性関連施設等で実施している先行事例の検討、成人学習研究の専門家による講義、外部の専門家が参加して行った「プログラム基盤研究」（三輪建二お茶の水女子大学教授、田中雅文日本女子大学教授、西山恵美子客員研究員、池田和嘉子客員研究員、館内メンバー）などを行ってきており、それらが本実験プログラムの企画の基盤部分となっている。また、そうしたプロセスの中で、実験プログラムに取り組む館内での体制が作られてきた。

2. 学習プログラムの特徴

(1) 「実践・活動に結びつく学習」（アクション・ラーニング）

「学習」するだけで終わるのではなく、男女共同参画の視点に立って地域づくりを推進する人、実践・活動に取り組む人（社会的人材）が育つための学習として、本プログラムは以下のような特徴をもつ。

- ① 実践・活動に結びつくための要件として、関係、連携・協働は不可欠であり、この学習はそれに対応したものとする。
- ② 男女共同参画を推進するためのモチベーションを高める（マインド・アップ）。
- ③ 単に問題を把握するだけでなく、具体的に地域課題を把握し、問題解決に向けて課題を分析する。
- ④ 前述したように、参加者は、地域を共通にし、環境、福祉などの課題を共通にしていることを条件にした。これは、具体的に地域で実践・活動していく際に、核をつくる関係が必要だと考えたからである。参加者の組み合わせを、女性関連施設職員、男女共同参画行政職員、女性団体・グループのリーダーの三者とし、実践・活動へと結びつくように企画する。実際に、この学習に参加することで関係が形成されている。
- ⑤ 学習の中で関係をつくるだけでなく、地域において具体化できる事業計画案作成を最終目標においた。計画案作成のためには、地域の実態把握・問題把握が必要であり、実践・活動を前提にした課題把握を行う。
- ⑥ この学習の方法をワークショップ型とし、グループによる作業を重視する。また、講義は、作業のために必要な知識の提示と位置づける。
- ⑦ 学習全体が一つのワークショップ（作業場）として構成されるように、ひとつずつのグループ・ワークを充実させると同時に、参加者相互の関係が協働へとつながるよう試みる。後述するが、そのためにグループ・ワーク全体を運営し、支援する「ファシリテーター」と、各グループでの作業・学習が充実することを支援する「学習支援者」を分けておく。

(2) 社会的人材という社会的側面とキャリア形成という個人的側面を結びつける

女性の意識として、個人志向の傾向が強くみられ、社会的人材育成との間には距離のあることが多い。キャリアは、個人的職業キャリアと捉えがちである。そこで、男女共同参画を社会的に推進するキャリアを「社会活動キャリア」とみる新たな概念を設定し、個人的なキャリアを社会に結びつけようと意図した。

個人と社会をつなぐ方法として、会館がこれまで行ってきた女性のキャリアに関する調査研究、キャリア形成事例研究に基づき、「社会活動キャリア」を分析するためのワークシートを開発し、グループで作業を行うことによって、学習者が「社会活動キャリア」形成のプロセスを具体的に把握できるよう試みた。

(3) 実態把握のための男女共同参画統計の活用

実態を把握するためには、情報が必要である。会館では男女共同参画推進のための様々な情報を収集・蓄積してきているが、特に男女共同参画の実態を把握するために有用な「男女共同参画統計」を活用し、実態の把握を行うこととした。

(4) 学習プログラム・デザイン、日程の作成

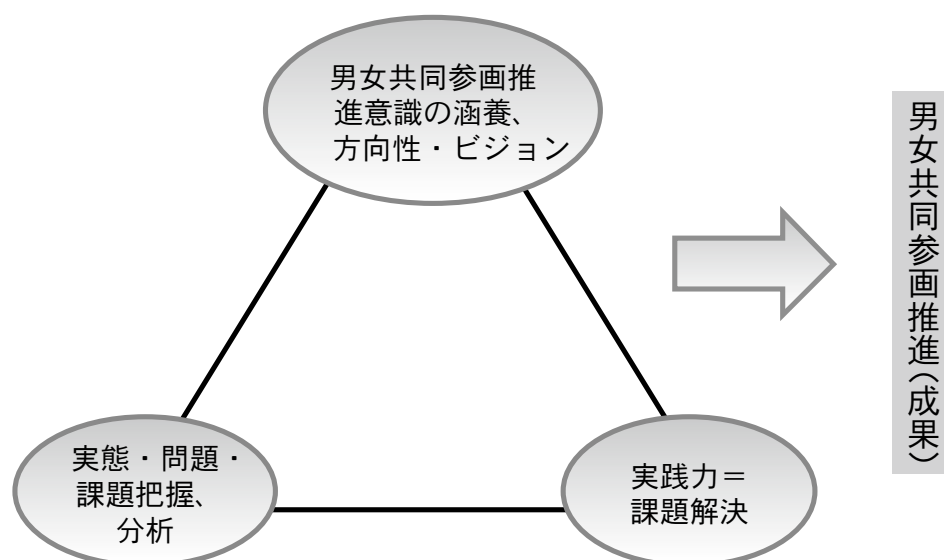
学習の企画・運営者、学習者がその構成やプロセスを把握できるようにするために、学習の

時間的構成、過程を示すスケジュールだけでなく、学習プログラム・デザインを作成し、共通の土台とした。また、そのデザインに沿って日程を作成した。日程は、第2章で示す。

① 基本的構成要素

これまで会館が行ってきたプログラム開発に関する研究から、男女共同参画推進に結びつく学習プログラムには「男女共同参画推進意識の涵養」「方向・ビジョンをもつ」「実態の把握」「問題の把握」「課題の把握」「実践・活動を進めていく力（実践力）」「課題を解決する力（実践力）」等の要素が必要になることが明らかになった。これらは並列的なものではなく、状況に応じて相互に関連し合っている。今回は、プログラム・デザインとして集約することを目標としているので、これらを大きく3つにまとめ、「男女共同参画推進意識の涵養、方向性・ビジョン」「実態・問題・課題把握、分析」「実践力＝課題解決」を学習プログラムを構成する三要素とした（図表1-3参照）。

図表1-3 男女共同参画学習プログラム・デザイン構成要素



次いで、この三要素を、研修目標、研修項目、研修方法として具体化した。それぞれについては、参加者（本調査研究では研究協力者と位置づけた）や地域の状況・実態をふまえて展開することを前提にした。この点については、以下第2章「実験プログラムの実施過程」でみていただきたい。以下、プログラム・デザイン図に沿って説明する（図表1-3参照）。

② 全体構成（学習プログラム・デザイン（図表1-4）参照）

目標1から7までの過程を経て最終的に作成される事業計画案は、Plan - Do - Check - Action（PDCA）サイクルの、Planに相当するものである。あらかじめその後の活動への展開を含み込むよう考え、「実践・活動に結びつく学習」となるように企画した。

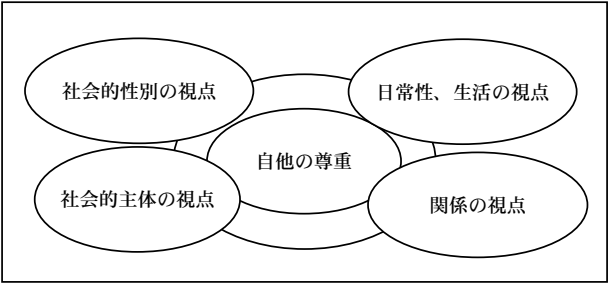
また、プログラムを実施するに当たっては、最初に「本プログラムの意味・意義を理解する」として、目的、方法、内容についての説明を行い、参加者が全体像や到達点をイメージできるような構成とした。

図表1-4 学習プログラム・デザイン（実施制）

【本プログラムの特徴】

- ①個人のキャリアと地域づくりを関連させて捉える（「社会活動キャリア」）。
- ②会館の調査研究成果を、プログラムデザインの作成、プログラム内容など様々な部分に活用する。
- ③実験プログラムの実施過程そのものが、参加者の連携・協働の実践である（事業計画案の作成）。
- ④実験プログラムで行ったことを参加者が地域に持ち帰って実践し、振り返り、さらなる事業や活動に生かすという、活動した

対 象	女性関連施設職員、男女共同参画行政職員、地域の女性リーダー			
研修目的	多様な機関との連携・協働を推進しつつ、女性の社会活動キャリアの形成を促進し、地域づくりに参画する			
研修目標	男女共同参画推進意識の涵養			
ねらい	1 男女共同参画についての視点をもち（男女共同参画についての考え方を確認し、参加者同士で共通認識を持つ）	2 地域における男女共同参画の状況と課題を把握する（男女共同参画の国際的、国内的、地域的な実態をデータに基づいて把握し、課題を明らかにする）	3 女性関連施設、女性団体の現状を把握し、課題を把握する（男女共同参画推進拠点としての施設の役割を再確認する。連携・協働の推進、女性の社会活動キャリア支援という課題に引き付けて考える）	4 女性の社会活動キャリア支援の現状を把握し、課題を把握する（男女共同参画推進拠点としての施設の役割を再確認する。連携・協働の推進、女性の社会活動キャリア支援という課題に引き付けて考える）
研修項目	男女共同参画推進の視点 * 自他の尊重の視点 * 関係の視点 * 社会的性別の視点 * 社会的主体の視点 * 日常性、生活の視点	・ 情報を活用した実態把握：データで読む男女共同参画 （男女共同参画を推進するための情報について。国立女性教育会館女性情報ポータル、データベースの活用。男女共同参画統計の基礎を学ぶ。統計の読み方を学ぶ。）	・ 各地域での女性の「人材育成」について、現状からみえる課題を明確にする（参加者同士で課題を持ち寄って討議する）	・ 地域づくりにおける女性の社会活動キャリア支援の現状を把握し、課題を把握する（男女共同参画推進拠点としての施設の役割を再確認する。連携・協働の推進、女性の社会活動キャリア支援という課題に引き付けて考える）
研修方法	講義と討議	ワークショップ 会館調査研究成果・女性情報の活用	講義と討議 会館調査研究成果情報の活用	講義と討議 会館調査研究成果情報の活用
身につけたい力量	男女共同参画推進意識	実態把握力・課題分析力	実態把握力・課題分析力	実態把握力・課題分析力



女性社会活動キャリア形成支援の推進

1 現状の把握、課題分析
 女性のキャリア形成における現状と課題を把握する（キャリア形成の概念、女性のキャリア形成について理解し、社会活動キャリア支援することの意義を理解する）

2 課題分析
 5 女性の社会活動キャリア形成事例の分析を通じて、支援方策と課題を明確化する

3 課題解決に向けた実践
 6 課題解決に向けた課題を立てる（1～5までを踏まえて、参加者で討議する）

4 課題解決に向けた実践
 7 連携・協働を活かし、地域づくりに参画する女性人材が育つための事業計画案を作成する（女性関連施設職員、行政担当者、女性リーダーでグループとなり、事業計画案の作成を通じて協働を実践する。共通視点：①役割の変更・創造、②機関等での意思決定・方針決定への参画、③国・自治体等の政策決定への参画）

地域づくりに参画する女性キャリア形成支援とは
 キャリア形成支援とは、女性のキャリア形成の概念、女性の個性を活かしたキャリア、地域づくりに参画する女性の社会活動キャリアについて学ぶ。ロールモデルを使い、成功要因、困難を乗り越え方、連携・協働の方法について分析）

地域づくりに参画する女性のロールモデルの分析
 （事例分析の視点：どのような支援が有効だったか、どのような力量が必要だったか・どのような力量を得たか）

ロールモデル分析の手法
 （分析シートを使い、社会活動キャリアをもち、地域づくりに参画するロールモデル事例を、グループワークによって分析する）

地域づくりに参画する女性人材が育つための事業につなげる課題を立てる（地域づくりと連携・協働について考える。緊急性、必要性、実現可能性の3つの観点から、地域づくりにおける女性人材が育つための課題を絞りテーマに結びつける）

地域づくりに参画する女性人材が育つための事業計画案作成
 （作成の視点：ねらい、対象、連携・協働、内容、予測される地域社会および個人への影響）

作成した案の発表・作成した案の検討
 （作成したものの振り返りが重要）

会館研修への参加 会館調査研究成果・情報の活用

事例分析 会館調査研究成果・情報の活用

討議

ワークショップ

実践力
 ①Attitude（チャレンジする態度・かまへ、自・他の尊重）
 ②Competence（連携力、協働力、関係力、企画力、情報力）
 ③Skill

キーコンピテンシー（基礎力）：知識や情報を活用する能力、関係力、連携力、自立・自律力、省察力、洞察力

<アクティビティ・ラーニング>
 企画 Plan
 ↓
 実行 Do
 ↓
 評価 Check
 ↓
 改善 Action

発表の場 会館交流学習会議（来年2月）

実験プログラム参加者が地域に持ち帰って実践（21年度）

個人への影響
社会への影響

③ 対象、研修目的、特徴

学習プログラム・デザイン（図表1-4）参照。

④ 研修目標、研修項目、研修方法

研修目的は抽象度の高いものなので、これを研修を通じて到達すべき7つの目標として細分化した。以下、目標ごとに、そのねらい、研修項目、研修方法について述べる。

目標1 男女共同参画意識の涵養－男女共同参画についての視点をもつ

参加者はすでに男女共同参画に関する知識や意識をもっているが、参加者同士で男女共同参画についての考え方の共通認識をもつことが必要であるということから、この目標をおいた。構成要素の中の「男女共同参画推進意識の涵養」に対応している。研修方法は、講義と質疑応答を組み合わせた。男女共同参画を推進する視点として重要と考えるのは、「自他の尊重」「社会的性別の視点」「日常性、生活の視点」「社会的主体の視点」「関係の視点」「プロセスの視点」である。これらの詳細な説明は、第2章3-(2)で述べる。

目標2 実態把握、課題分析－地域における男女共同参画の状況と課題を把握する

地域における男女共同参画の状況を、データに基づいて把握し、課題を把握することをねらいとする。構成要素の中の「実態把握、課題分析」に対応している。

実態を把握するためには情報が必要であることから、まず会館が国際的な女性政策（男女共同参画政策）の動向の中で、収集・蓄積してきた情報について講義を行い、さらにその中でも男女共同参画の実態を把握するために有効な、統計を男女共同参画の視点から分析する「男女共同参画統計」に焦点を当てた講義を行った。その後に地域の統計データを読むことにより、地域の実態と男女共同参画の課題を把握するグループ・ワークを行う。

目標3 実態把握、課題分析－女性関連施設、男女共同参画行政、女性団体の現状を把握し、課題を把握する

人材育成に焦点を当て、女性関連施設、男女共同参画行政、および女性団体の現状を把握するとともに、課題を明確化することがねらいである。構成要素の中の「実態把握、課題分析」に対応している。各地域で、人材育成に関してどのような問題があるのかを参加者同士で洗い出し、問題を分類することによって解決すべき問題を「課題」として把握するために、付箋と模造紙を使ったグループ・ワークという方法で行う。

目標4 実態把握－女性のキャリア形成支援における現状を把握する

女性のキャリア形成についての概念、社会活動キャリアの考え方について理解することがねらいである。構成要素の中の「実態把握」に対応している。講義と討議という方法で行ったが、次の目標5へつなぐ橋渡しとしての意味をもつ。

目標 5 課題分析－女性の社会活動キャリア形成事例の分析を通じて、支援方策と課題を明確化する

女性の社会活動キャリアという考え方への理解を深めるとともに、支援方策について考えることをねらいとする。その際に、会館が収集した事例を、これも会館で作成した事例分析シートを使い、グループ・ワークを行った。構成要素の中の「課題分析」に対応している。

目標 6 課題解決に向けた実践－課題解決に向けた課題を立てる

目標 7 課題解決に向けた実践－連携・協働を活かし、地域づくりに参画する女性人材が育つための事業計画案を作成する

目標の6と7は連動しており、3つの構成要素の中の「課題解決に向けた実践」に対応している。施設職員、男女共同参画行政職員、地域の女性団体・グループリーダーの三者で、事業計画案を作成し、それを地域に持ち帰って今後の実践につなげていくということを目標にしている。そのために、まず学んだことを振り返り、解決したいと考える人材育成上の課題を明らかにすることを「課題を立てる」として、目標3で問題から課題として識別したものをさらに「解決のための」と限定して明確化したものである。その際には、「緊急性」「必要性」「実現可能性」という観点を入れて、絞り込んだ。

事業計画案は、地域づくりに参画する際の要件として「①役割（社会的性別）の変更・創造」「②機関等での意思決定・方針決定への参画」「③国・自治体等の政策決定への参画」を考慮しながら作成することとした。役割の変更・創造とは、女性がこれまで少ない分野に進出すること、男性が家事・育児に参画することなどを意味する。

各グループで作成する事業計画案は模造紙に書き、その中には、テーマ、ねらい、対象、内容、連携・協働、予想される個人および地域社会への影響について盛り込んだ（図表2-8～2-20）。

以上、本プログラムの企画にあたって重視したこと、新たな取組みについて述べた。次に、実験プログラムの実施経過について述べる。

第2章 実験プログラムの実施

1. 連携・協働先、研究協力者（参加者）

実験プログラムは、都道府県の女性関連施設、男女共同参画担当部署を連携先として、関東近県で、女性関連施設の運営形態の異なる静岡県と千葉県の2か所で実施した。静岡県は指定管理者制度により特定非営利活動法人静岡県男女共同参画センター交流会議が施設の管理運営を担っており、千葉県は公設公営である。静岡県は県男女共同参画センターの指定管理者である特定非営利活動法人静岡県男女共同参画センター交流会議、千葉県は、総合企画部男女共同参画課およびちば県民共生センターが連携先となった（図表2-1）。

図表2-1 実験プログラム連携先

静岡県	千葉県
静岡県男女共同参画センター指定管理者 特定非営利活動法人静岡県男女共同参画センター交流会議 佐藤和子代表 戸塚宏一事務局長 七宮利妃子事業課職員	千葉県総合企画部男女共同参画課 玉浦洋子課長、奥山恵子副主幹 ちば県民共生センター 加藤峰子所長、鈴木賢司副主幹、岡崎友子副主幹 ちば県民共生センター・東葛飾センター 佐久間洋一副主査

静岡県では、県下の女性関連施設のネットワークを強める機会として実験プログラムを開催した（県および7市（静岡市、浜松市、富士市、富士宮市、藤枝市、磐田市、掛川市）が参加）。千葉県では、地域ごとの課題に対応して行いたいということで、県と5つの市（佐倉市（農業）、習志野市（男女共同参画）、県・木更津市（教育・PTA・行政）、香取市（観光）、八千代市（子育て））が参加した。

実験プログラムの参加者は、連携先からの呼びかけで集まった女性関連施設職員、男女共同参画行政職員、地域の女性団体・グループのリーダーである。実験プログラムに参加して、その意見を反映させながらプログラムを開発するということで、「研究協力者」として参加するよう依頼した。以下、本実験プログラムの参加者を「研究協力者」と表記する。詳しくは、以下の通りである（図表2-2）。



図表2-2 実験プログラム研究協力者（参加者）一覧

静岡県（1回目23名、2回目22名）	千葉県（1回目16名、2回目15名）
静岡市 <ul style="list-style-type: none"> ・施設：静岡市女性会館館長 ・男女共同参画行政課職員 ・地域女性リーダー：1名 	農業、佐倉市 <ul style="list-style-type: none"> ・施設：佐倉市男女平等参画推進センター長 ・行政：農政課職員、自治人権推進課職員 ・地域女性リーダー：農業者（2名/各1回ずつ）
浜松市 <ul style="list-style-type: none"> ・施設：浜松市男女共同参画センター職員 ・男女共同参画行政課職員 ・地域女性リーダー：1名 	男女共同参画、習志野市 <ul style="list-style-type: none"> ・施設：習志野市男女共同参画センター職員 ・行政：なし ・地域女性リーダー：2名
富士市 <ul style="list-style-type: none"> ・施設：富士市男女共同参画センター職員 ・男女共同参画行政課職員 ・地域女性リーダー：1名 	観光、香取市 <ul style="list-style-type: none"> ・施設：なし ・行政：市民活動推進課職員2名 ・地域女性リーダー：1名
富士宮市 <ul style="list-style-type: none"> ・施設：富士宮市男女共同参画センター職員 ・行政：なし ・地域女性リーダー：1名 	子育て、八千代市 <ul style="list-style-type: none"> ・施設：八千代市男女共同参画センター職員 ・男女共同参画行政課職員 ・地域女性リーダー：1名
藤枝市 <ul style="list-style-type: none"> ・施設：藤枝市男女共同参画推進センター職員 ・男女共同参画行政課職員 ・地域女性リーダー：1名 	教育・PTA・行政、千葉県および木更津市 <ul style="list-style-type: none"> ・施設：ちば県民共生センター職員 ・行政：企画課職員 ・地域女性リーダー：1名
磐田市 <ul style="list-style-type: none"> ・施設：磐田市男女共同参画センター職員 ・行政：共生社会推進課職員 ・地域女性リーダー：1名 	
掛川市 <ul style="list-style-type: none"> ・施設：なし ・行政：地域振興課男女共同参画担当職員2名 ・地域女性リーダー：1名 	
静岡県 <ul style="list-style-type: none"> ・施設：静岡県男女共同参画センター職員 ・行政：静岡県男女共同参画室職員 ・団体：NPO法人静岡県男女共同参画センター 交流会議メンバー 	

2. 運営上の特徴

実験プログラムは、グループ・ワークを多く取り入れ、ワークショップ型の方法で実施した。前述したように、グループ・ワークの場合に、全体の進行、調整役を担当するファシリテーターと、グループごとに、経過を把握し、グループ・ワークが円滑に進むよう、必要に応じて支援することを担当とする学習支援者をおいた。その効果や課題については第3章2で述べる。

3. 実験プログラムの日程

各県での日程は、図表2-3、図表2-4の通りである。静岡県では、平成20年11月20日（木）、12月2月1日（月）の2回、静岡県男女共同参画センター（あざれあ）会議室を会場に実施した。千葉県では、平成20年11月26日（水）と12月8日（月）の2回、ちば県民共生センター会議室、千葉県教育会館会議室を会場に実施した。

図表2-3 連携・協働による実験プログラム in 静岡「地域づくりに参画する女性人材が育つために」日程表

〈静岡県〉

第1回目 11月20日（木）

○この回のねらい

- ・プログラムの目的、流れについて理解する。参加者同士の顔合わせ。
- ・地域における男女共同参画の状況と課題を把握する。
- ・女性の社会活動キャリアについて学ぶ。

通番	時 間	所用時間(分)	研修目標 (番号はプログラムデザインに対応)	タイトル・内容	研修方法	テキスト 参考資料	担 当 F=ファシリテーター G=学習支援者	備 考
①	9:30-9:43	13	開会	主催者ほか挨拶 参加者・関係者自己紹介				
②	9:43-10:00	17	プログラムの意味・意義を理解する	本プログラムの意味・意義を理解する ・実験プログラムの目的、進め方についての説明	説明、質疑応答		中野研究国 際室長	導入部として重要
③	10:00-11:00 〔休憩10分〕	60	男女共同参画推進意識の涵養 1 男女共同参画についての視点をもつ	男女共同参画推進の視点、女性関連施設・女性団体の役割、女性の社会活動キャリアとは ・男女共同参画についての考え方を確認し、参加者同士で共通認識を持つ ・地域づくりを進めるための拠点について考える ・地域における女性の社会活動キャリアについて学ぶ (講義40分、質疑20分)	講義と質疑応答	レジュメ	講師：神田 理事長	
④	11:10-11:50 〔昼食50分〕	40	実態把握、課題分析 2 地域における男女共同参画の状況と課題を把握する	情報を活用した実態把握：データで読む男女共同参画 ・男女共同参画を推進するための情報について ・国立女性教育会館女性情報ポータル、データベースの活用 ・男女共同参画統計の基礎を学ぶ ・統計の読み方を学ぶ	講義と質疑応答	『男女共同参画統計データブック2006』	講師：高橋 研究員、森 情報課専門 職員	事前学習：国内の男女共同参画データ、地域のデータを見ておく。
⑤	12:40-13:30	50	実態把握、課題分析 2 地域における男女共同参画の状況と課題を把握する	情報を活用した実態把握：データで読む男女共同参画 ・グループワークで統計を読み、地域の課題を明らかにする	ワークショップ	『しずおか女(ひと)と男(ひと)のデータブック』、『静岡県男女共同参画白書』	F:高橋、森	3グループ(施設職員、行政職員、団体リーダー)→他地域のメンバーとの連携の機会とする
⑥	13:30-14:00 (移動10分)	30		情報を活用した実態把握：情報資源の活用 ・あざれあ図書室の機能、情報資源について知る	図書室見学		図書室職員	
⑦	14:10-15:40 〔休憩10分〕	90	実態把握、課題分析 3 女性関連施設、女性団体の現状を把握し、課題を認識する	各地域での女性の「人材育成」について、現状からみえる課題を明確にする 13:40-14:40 (60分) グループワーク 4:40-15:20 (30分) 発表と課題のまとめ (発表は7分×3=21分)	ワークショップ		F:小林調査役 G:仁科委員、高橋、森	・事前準備必要 ・3グループ(施設職員、行政職員、団体リーダー)
⑧	15:50-16:50	60	実態把握、課題分析 4 女性のキャリア形成支援における現状と課題を把握する	地域づくりに参画する女性のキャリア形成支援とは ・キャリアの概念、女性の個人的キャリア、地域づくりにおける女性の社会活動キャリアについて学ぶ ・ロールモデル集を使い、成功要因、困難の乗り越え方、連携・協働の活かし方について分析	講義と質疑応答、ワークショップ	国立女性教育会館『女性のキャリア形成支援に関する調査研究報告書』、『女性のNPO活動の現状と課題』	講師・F:中野	事前学習必要—女性のキャリア支援に関する政策
⑨	16:50-17:00	10	参加者・ご意見お伺いシート記入					
⑩			事後打ち合わせ	・主催側のみ参加				

第2回目 12月1日(月)

○この回のねらい

- ・女性のキャリア形成支援事例分析を通じて、課題と支援方を明確化する。
- ・「課題解決に向けた実践」として、次年度以降に向け、連携・協働による地域づくりに参画する女性人材が育つための事業計画案を作成する。

	時 間	所用 時間 (分)	研修目標 (番号はプログラム デザインに対応)	タイトル・内容	研修方法	テキスト参 考資料	担 当 F=ファシリ テーター G=学習支援者	備 考
⑪	10:00-10:10	10		前回の振り返り、本日の予定、新規参加者の自己紹介			説明：高橋	
⑫	10:10-11:30 〔休憩10分〕	80	課題分析 5 女性の社会 活動キャリア 形成事例の分 析を通じて、 支援方策と課 題を明確化す る	地域づくりに参画する女性のロール モデルの分析 ・社会活動キャリアをもち、地域づ くり参画するロールモデル事例 を、グループワークによって分析 する 10:00-10:50 (50分) グループワーク 10:50-11:10 (20分) 発表 11:10-11:20 (10分) コメント、まとめ	ワ ー ク ショッ プ	ヌエック・ ブックレッ ト『キャリ ア形成に生 涯学習を生 かした女 性たち』、 『キャリア 形成にNPO 活動を生か した女性た ち』	F: 西山客 員研究員 コメンテ ーター：国 広委員 G: 仁科、中 野、小林、高 橋、森	・5グループ(富 士・富士宮で 1グループ。 静岡・浜松・ 県職員を2つ に分ける。磐 田・掛川・藤 枝を2つに分 ける。) 事前学習必要 事例分析シート を使う。
⑬	11:40-12:35 〔昼食45分〕	55	課題解決に向 けた実践 6 課題解決に 向けた課題を 立てる	地域づくりに参画する女性人材が育つ ための事業につながる課題を立てる ・地域づくりと連携・協働について 考える 11:40-12:00 (20分) 連携・協働に関す るミニレクチャー 12:00-12:35 (35分) グループ討議	ミニレク チャー+ グループ 討議		F: 仁科 G: 国 広、 西 山、中 野、小林、 高橋、森	・地域ごと8グループ
⑭	13:20-16:45 〔休憩は適 宜〕	205	課題解決に向 けた実践 7 連携・協働 を活かし、地 域づくりに参 画する女性人 材が育つため の事業計画案 を作成する	地域づくりに参画する女性人材が育つ ための事業計画案作成ワーク ショップ 13:20-13:25 (5分) ポイントの確認 13:25-13:35 (10分) 6課題の発表・ 共有 1×8分 13:35-14:45 (70分) 作成 14:45-15:25 (40分) 発表 8×5分 15:25-15:35 (10分) ミニコメント 15:35-16:05 (30分) 再検討 16:05-16:30 (30分) 修正点の発表 8×3分 16:30-16:45 (15分) コメント	ワ ー ク ショッ プ		F: 仁科 コメンテ ーター： 国広、中野 G: 西山、中 野、小林、高 橋、森	・地域ごと8グループ 事前準備 必要：作 成のため の材料集 め
⑮	16:45-17:00	15	閉会	閉会 ・主催者挨拶 ・ご意見お伺いシート記入				
⑯			実験プログラ ム反省会	主催側のみ参加				

図表2-4 連携・協働による実験プログラム in 千葉「地域づくりに参画する女性人材が育つために」 日程表

〈千葉県〉

第1回目 11月26日（水）

○この回のねらい

- ・プログラムの目的、流れについて理解する。参加者同士の顔合わせ。
- ・地域における男女共同参画の状況と課題を把握する。
- ・女性の社会活動キャリアについて学ぶ。

	時 間	所用 時間 (分)	研修目標 (番号はプログラム デザインに対応)	タイトル・内容	研修方法	テキスト参 考資料	担 当 F=ファシリ テーター G=学習支援者	備 考
①	9:30-9:43	13	開会	主催者挨拶、自己紹介ほか				
②	9:43-10:00	17	プログラムの意味・ 意義を理解する	本プログラムの意味・意義を理解する ・実験プログラムの目的、進め方について説明	説明、質疑応答		中野研究国 際室長	導入部として重要
③	10:00-11:00 [休憩10分]	60	男女共同参画推進意識の涵養 1 男女共同参画についての視点をもつ	男女共同参画推進の視点、女性関連施設・女性団体の役割、女性の社会活動キャリアとは ・男女共同参画についての考え方を確認し、参加者同士で共通認識を持つ ・地域づくりを進めるための拠点について考える ・地域における女性の社会活動キャリアについて学ぶ (講義40分、質疑20分)	講義と質疑応答	レジュメ	講師：神田 理事長	
④	11:10-12:30 [昼食60分]	80	実態把握、課題分析 4 女性のキャリア形成支援における現状と課題を把握する	地域づくりに参画する女性のキャリア形成支援とは ・キャリアの概念、女性の個人的キャリア、地域づくりにおける女性の社会活動キャリアについて学ぶ ・ロールモデル集を使い、成功要因、困難の乗り越え方、連携・協働の活かし方について分析	講義と質疑応答、ワークショップ	国立女性教育会館『女性のキャリア形成支援に関する調査研究報告書』、『女性のNPO活動の現状と課題』等	講義：国広 委員、F：中 野研究国際 室長	地域ごとに5グループ。分析する事例を選ぶ。 事前学習：女性のキャリア支援に関する政策。
⑤	13:30-15:00 [休憩10分]	90	実態把握、課題分析 2 地域における男女共同参画の状況と課題を把握する	情報を活用した実態把握：データで読む男女共同参画 ・男女共同参画を推進するための情報について ・国立女性教育会館女性情報ポータル、データベースの活用 ・男女共同参画統計の基礎を学ぶ ・統計の読み方を学ぶ ・グループワークで統計を読み、地域の課題を明らかにする	講義と質疑応答、ワークショップ	『男女共同参画統計データブック2006』、千葉県『男女共同参画白書』	講師：高橋 研究員、森 情報課専門 職員	事前学習：国内の男女共同参画データ、地域のデータ。 3グループ(行政職員・女性関連施設職員で・地域女性リーダー)
⑥	15:10-16:50	100	実態把握、課題分析 3 女性関連施設、女性団体の現状を把握し、課題を認識する	各地域での女性の「人材育成」について、現状からみえる課題を明確にする グループワーク 発表と課題のまとめ	ワークショップ		F：小林調査役 G：葛原委員、 西山客員研究 員、高橋	・事前準備必要 グループ3つ。前のコマと同じ
⑦	16:50-17:00	10	参加者・実験プログラムへのご意見シート記入	第1回各プログラムへの意見を書いていただく				
⑧			事後打ち合わせ	・主催側のみ参加				

第2回目 12月8日(月)

○この回のねらい

- ・女性のキャリア形成支援事例分析を通じて、課題と支援方策を明確化する。
- ・「課題解決に向けた実践」として、次年度以降に向け、連携・協働による地域づくりに参画する女性人材が育つための事業計画案を作成する。

	時 間	所用 時間 (分)	研修目標 (番号はプログラム デザインに対応)	タイトル・内容	研修方法	テキスト参 考資料	担 当 F=ファシリ テーター G=学習支援 者	備 考
⑨	10:00-10:10	10		前回・今回の内容の確認、新規参加者の自己紹介			説明：中野	
⑩	10:10-11:50 [昼食45分]	100	課題分析 5 女性の社会 活動キャリア 形成事例の分 析を通じて、 支援方策と課 題を明確化す る	地域づくりに参画する女性のロール モデルの分析 ・社会活動キャリアをもち、地域づく りに参画するロールモデル事例を、 グループワークによって分析する 10:10-11:10 (60分) グループワーク 11:10-11:30 (20分) 発表 5G×4分 11:30-11:50 (20分) コメント、まとめ	ワ ー ク ショッ プ	ヌ エ ッ ク ブッ クレット 『キャリア形成 に生涯学習を 生かした女性 たち』、『キャ リア形成にNPO 活動を生かし た女性たち』	F:コメンテ ーター:西山客 員研究員 G:葛原、小 林、高橋、森	事前学習: ロールモ デル分析 シートの 記入。 地域ごと に5グル ープ
⑪	12:35-13:45	70	課題解決に向 けた実践 6 課題解決の 方向について 考える	地域づくりに参画する女性人材が育つ ための事業につながる課題を立てる ・地域づくりと連携・協働について 考える 12:35-12:50 (15分) 連携・協働に関 するミニレク チャー 12:50-13:35 (45分) グループ討議 13:35-13:45 (10分) 課題の発表・ 共有 5G× 2分	ミニレク チャー+ グルー プ討 議		F:葛原 G:西山、中 野、小林、 高橋、森	地域ごと に5グル ープ
⑫	13:45-16:40 [休憩は適宜]	175	課題解決に向 けた実践 7 連携・協働 を活かし、地域 づくりに参画 する人材育成 支援の事業計 画を作成する	地域づくりに参画する女性人材が育つ ための事業計画案作成ワークショップ 13:45-15:20 (95分) 作成 15:20-15:55 (35分) 発表 5G×7分 15:55-16:15 (20分) 作成した案の再検討 16:15-16:30 (15分) 修正点の発表 5G×3分 16:30-16:40 (10分) コメント	ワ ー ク ショッ プ		F:葛原 コメンテ ーター:国広、 中野 G:西山、中 野、小林、高 橋、森	地域ごとに 5グル ープ 事前準備 必要:作成 のための材 料集め
⑬	16:40-17:00	20	閉会	閉会 ・主催者挨拶 ・ご意見お伺いシート記入				
⑭			実験プログラム 反省会	主催側のみ参加				

4. 実験プログラムの実施過程

学習プログラム・デザインに示した構成要素ごとに、実施過程を①研修目標、②ねらい、③進め方、④実施内容、⑤成果と課題の5つの点から振り返る。

成果と課題を検討する際には、実施した側の所見に加え、静岡県、千葉県の研究協力者の意見を参考にする。両県ともに、1回目、2回目が終了するごとに、各構成要素についての意見を、以下のような観点から「ご意見シート」に記入してもらった（巻末資料①参照）。このシートには、静岡県は1回目、2回目ともに21人（参加者23名中）、千葉県は1回目12人、2回目8人（参加者17名中）が回答している。

(1) 本プログラムの意味・意義を理解する

1. 研修目標

プログラム目標外に位置づけられるが、実施に先だっておかれるべき重要なプログラムの構成要素である。

2. ねらい

プログラムの実施にあたり、目的、到達すべき点、方法等について確認し、プログラムの意味と意義を把握する。

3. 進め方

プログラム・デザイン図と日程表に基づいて、20分間で全体像や日程を説明し、本プログラムの持つ意味と意義について理解する。

4. 実施内容

1. 「ご意見シート」への記入依頼：構成要素ごとに、それぞれ研修の目的に沿った内容だったか、時間、学習方法、講師、ファシリテーター等はどうだったか、戸惑ったり、困ったりしたことはなかったか等、気づいた点を終わるごとに書く。
2. プログラム目的の説明：「多様な機関との連携・協働を推進しつつ、女性の社会活動キャリアの形成を促進し、地域づくりに参画する人材が育つ力をつける」こと。
3. 本プログラムの特徴
 - ① 個人のキャリアと地域づくりを関連させてとらえる「社会活動キャリア」という新しい概念を導入
 - ② 会館の調査研究成果をプログラム・デザインの作成プログラム内容など、様々な運営に活用
 - ③ 参加者の連携・協働の実践－女性関連施設職員、男女共同参画行政職員、団体リーダーが、グループ・ワークを行いつつ共通点を見出し、連携を作っていく。
 - ④ 実験プログラムで行ったことを参加者が地域に持ち帰り、仕事や活動に生かすという活動ながら学ぶ手法を取り入れる。PDCAサイクルの一環として、全体のプログラム

を考えている。

4. 研修目標の説明

- ① 男女共同参画意識の涵養、男女共同参画についての視点を持つ—地域の人材育成をしていく時に、ベースにある男女共同参画意識を涵養すること、そのための視点。
- ② 地域における男女共同参画の実態把握
- ③ 実態の中から課題を見つける
- ④⑤ 課題を分析する
- ⑥ 課題解決に向けた課題を立てる
- ⑦ 課題の解決に向けた実践（事業計画案の作成）

5. 日程表の説明

5. 成果と課題

「ご意見シート」に書かれた研究協力者からの意見によると、

「最初にプログラムの全体像をあきらかにしてくださったので、心構えをしっかりとて挑むことができました」（静岡）

「実験プログラムのデザインが理解できた。2日間の研修が楽しみになった」（静岡）

「大わく理解できた。デザイン図の図解をもう少し見やすく（わかりやすく）工夫があるといい」（静岡）

「とても難しいと思うが、理解できるように学びたいと思った」（千葉）

というように、最初に全体像を理解することに必要性は、研究協力者によって理解されたように思われる。

課題としては、

「文字が多く、ちょっと理解するのが難しかったです」（静岡）

「もう少し十分な時間があればもっと良いと思いました」（静岡）

「今回プログラムの大切なところなので、ゆっくりと理解したかったです」（千葉）

というように、デザイン図を簡略化すること、説明時間をもう少し長くすることが必要であった。



(2) 男女共同参画推進意識の涵養（目標１）

１．研修目標

男女共同参画の視点をもつ。

２．ねらい

男女共同参画の考え方を確認し、参加者同士で共通認識をもつ。

３．進め方

(1) 概要

講義を聞き、男女共同参画の視点について知識を得、これまでの考え方を振り返る。

(2) 時間配分

内容	時間	手法等
講義：男女共同参画推進の視点 質疑応答	40分 20分	講義 質疑応答

４．実施内容

以下の講義の後、質疑応答を行った。

講義内容

○男女共同参画意識の醸成に関して

男女共同参画社会の実現が社会目標になってきたのは1990年代に入ってからです。1999年に男女共同参画社会基本法が制定され、それにもとづいて、男女共同参画を推進する基本計画、推進する行政組織が備えられ、21世紀の重要課題として位置づけられ取り組みが進められました。婦人問題、女性問題の解決、婦人・女性の地位の向上、などとして行われてきた一連の流れが、ここに一つの大きな流れに集約されました。法の制定から10年しかたっておらず、参画が進んでいないのにもかかわらず、男女共同参画はもう十分ではないかといった声もあるように聞いております。その背景には男女共同参画という言葉は分かっている、それが一人一人の課題としてとらえられていないことがあるのではないかと思います。あるいは言葉がしめす内容が分からないということもあるかもしれません。

男女共同参画社会の形成については、「基本法」の第2条の定義で「男女が、社会の対等な構成員として、自らの意志によって社会のあらゆる分野における活動に参画する機会が確保され、もって男女が均等に政治的、経済的、社会的及び文化的利益を享受することができ、かつ、共に責任を担うべき社会を形成することをいう」とされています。これまで女性が志向してきたことを踏まえると男女共同参画社会は、男女がともに自立（生活的自立、経済的自立）、自律（精神的自立、自己決定）し（する力をもち）安定した生活ができる社会基盤（共通基盤）をもった社会であり、男女共同参画は、そうした社会づくりに参画することととらえられると

考えます。こうした社会を創っていくために、それができるような仕組み・枠をつくっていく必要があるわけで、そのために社会参画が必要とされます。ここには男女共同参画社会を実現していくために社会参画が必要ということで、目的とプロセスの両方を含んでいます。

○「男女共同参画の画期性」

社会参加から社会参画へ…社会成員から社会を創る人へ

男女が、共同して社会づくりに参画するというのは、これまでも中에서도画期的であり、新しい段階であるにとらえることができます。「社会参加」は長い間、目標であり課題になってきました。これは既存の社会に参加するということで、社会のしくみや枠、基盤をつくるところまで参加することが目標にされたわけではありません。これに対して社会参画は、方向・方針・計画をつくるところまで参加することに重点をおいており、それを強調するために参加と区別して参画という言葉を使っているのです。社会を創るところにやっときたといえます。

しかも、それが基本法として日本社会のあり方の基本にすえられ、それにもとづいて政府は基本計画を策定し、推進をはかっています。地方自治体でも推進が計られています。長い歴史の中で、女性が社会を根本から創っていくのに参画することを社会の基本に据えたのは、この時期、今の時代です。これまでは既存の社会の枠組みの中で女性の問題を解決していくという方法でした。そこから発展して今があるわけです。男性も女性も自立し能力を発揮し、ゆたかに生活できるようにするために必要な社会的基盤をつくっていくことに重点がおかれたのです。現在、取組まれているワークライフバランスをとりあげてみましょう。これは男性も女性もライフとワークを、バランスをとってともに行えるような仕組みをつくり、社会のあり方にまで広げ、定着されることを方向としています。職業と家庭の両立は女性にとって大きな問題であり、課題解決のための施策としてとりあげられ、また、女性も個人的にも工夫をこらしてきました。それが現在は、女性だけでなく男性の課題とされ、多くの人が可能なようにそのためのしくみ＝共通基盤づくりが進んでいるということです。さらにライフは家庭だけでなく地域の生活も入ってきたというように生活のとらえ方も広がってきました。これは一人の個人のことではなく、社会の共通基盤になり、多くの人にとってそれが可能になるということです。これは画期的である第1の点です。

○自他の尊重・関係

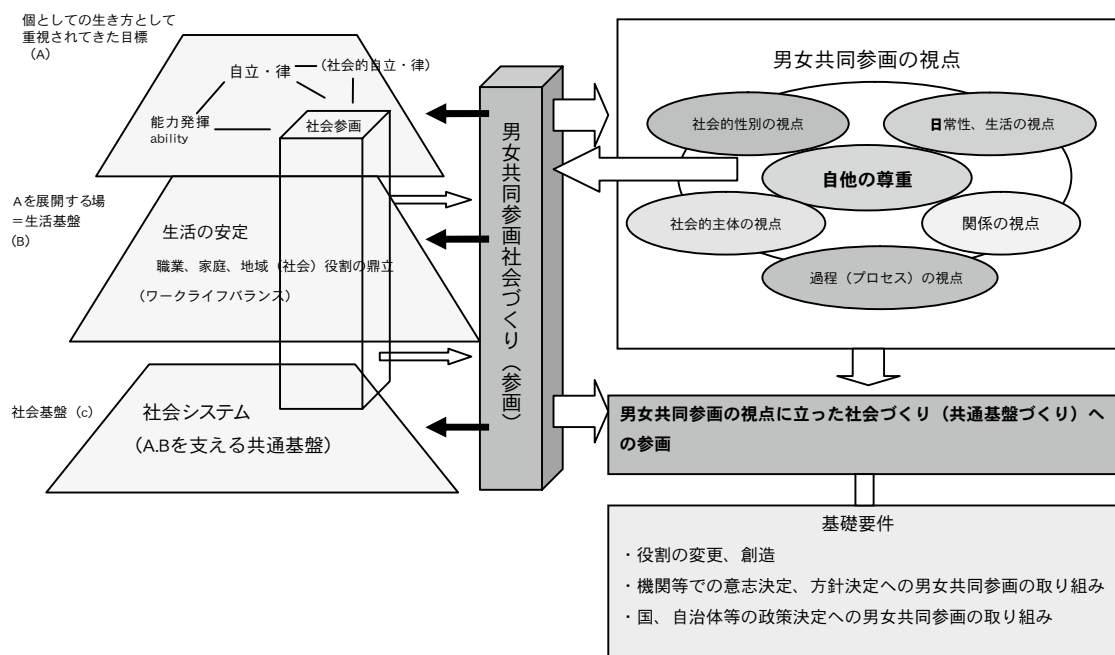
第2には、男女が共同で参画するということで男女の関係を重視した考え方であるという点です、「共同」というのは、2人以上が同等の資格で結びつくという意味ですから、男女が同じ資格をもって社会づくりを行っていくというのがこの考え方です。このことは関係という点で今の社会状況の中で画期的な意味をもっています。男女がそれぞれを個として尊重する関係をもって社会参画するという自他の尊重を基本にしているということです。男女に限らず自他の尊重は個と個の関係にとらえることができます。それは、現在、日本の社会がつきあたっている関係の稀薄化、自分のことだけしか考えないという問題へとアプローチできる内容をもっています。

男女共同参画は以上のような画期的な内容をもっているとみています。そこで、それを推進する視点を明確にして、取り組む必要があります。

○「男女共同参画意識の醸成」

それでは男女共同参画を進めていく際に重視する必要がある視点について考えてみましょう。次の図をご覧ください。(図表2-5)

図表2-5 男女共同参画意識の醸成に関して



男女共同参画社会づくりという真中の柱を境にして左側の部分は、「社会参画」の位置をしめしており、右側の部分は、社会参画を男女共同参画社会づくりととらえた、つまり男女共同参画の視点に立って社会づくりに取り組む際に必要な「視点」の内容、社会づくりを社会的共通基盤づくりとした際にその内容として必要な基礎要件を示しています。

○これまでの生き方の発展として

左側の部分について説明いたします。戦後、女性たちが目指してきたのは、一人の個性をもった人間として、自立・律して、自らの能力を発揮して生きることといえるでしょう。これは戦前の女性解放の先駆者の活動でも共通していることです。戦後は多くの女性にそれが広がり、多様な生き方として現れてきました。趣味に職業に地域活動やボランティア活動に取り組んでいる女性たちの意識をみると、そこで自分の能力を発揮したいという欲求は共通しているのではないのでしょうか。この自立・律と能力発揮の二大目標に社会参画が加わったのが現段階ととらえています。それを画期性にとらえたのです。

個として自立・律、能力発揮していくといっても、それが可能な生活基盤が必要であり、Aは生活の中で行われることです。それが（B）です。さらに（A）の生き方、（B）の生活をお

こなっていくには、それを支える社会システム、ここでは社会的共通基盤とっておきますが、それがが必要です。その共通基盤がないと、安定した生活の上に個として自立・律し、能力発揮していける人は、ごく限られた、しかも有利な条件をもっている人に限られてしまいます。こうした共通基盤をつくるのに参画すること、これが生き方として社会参画が加わった意味であり、能力発揮や自立・律を、既成の社会の中で限定されて行うのではなく、その基盤を社会的につくっていくということなのです。能力発揮でも多くの女性は能力を固定的にとらえ、その固定した能力を生かせる場をひたすら求めてきたという状況や、職業と家庭の両立を女性のみの課題として現状の枠の中で必死に求めてきたという状況から、一歩進んで、それが可能な社会基盤を新たに創っていくという段階へと進めたといえます。女性のみの職業と家庭の両立から男性も女性もワークライフバランスが可能な共通基盤をもつ社会をつくるというのが可能になり、それをつくるのに参画することが欠かせないということです。

○男女共同参画を推進する視点

次に図の右側の部分について説明いたします。社会参画を男女共同参画の視点で行っていくに際して一つまり社会的共通基盤づくりにおいて重視すべき視点として整理したのが、上の部分の男女共同参画の視点です。男女共同参画を推進する計画をたて、行動する際の共通の見方や立脚点とってよいかもしれません。男女共同参画において基本になるのが、自他の尊重であることはすでに述べました。この自他の尊重を単に理念としてだけではなく現実の行動にしようとする、社会的共通基盤が必要です。介護についてみましょう。高齢の夫婦が自他の尊重として老老介護を自分たちだけでできるでしょうか。あるいは子どもなど家族だけでできるでしょうか。自分たちだけでやろうとしたら共倒れになるのではないのでしょうか。介護する側もされる側も個として尊重される、そして自他の尊重関係をもつためには、それを可能にする社会的共通基盤＝社会制度をつくる必要があります。そのための社会参画が不可欠です。現実には自他の尊重どころか自分だけの尊重になってしまったのも、それを支える社会的共通基盤がなかったこと、さらに、自らも参画して創る状況になかったこと、それが自分と社会をきりはなし、社会のことは関係ないという態度につながったのではないのでしょうか。創るところに係らなければ、責任をもつという態度が生まれるはずがありません。参画することは社会を自らがつくるという社会的主体の視点につながります。

つぎに社会的性別の視点です。社会的性別としての男性と女性は、社会的経験が違います。またそれに伴って問題もことになります。男女が共同で参画を進める際には、社会的経験の違い、おかれた状況の違いを踏まえてとりくむ必要があります。それが現在の社会的性別を固定化するのではなく、新たな展開に発展することもあるでしょう。そうなる場合でもこれまでの社会的性別による経験が土台になるということです。

日常性、日常生活の視点は、社会的性別としての女性が、つよくもっている経験にもとづく視点です。女性はこれまで長く日常生活の領域を中心に生きてきました。家庭役割を担当して主にインフォーマルな関係の中で生活することが役割でした。そのことは考え方や表現のしかた、行動のしかた、関心事など多様なところに影響しています。男性優位のこれまでの社会で

は、女性のこうした日常性はややもすると、低く評価されることもありましたが。しかし生活の安定という生活基盤の重要性を考えると、日常生活からの発想、そしてそれを基盤にする視点は不可欠です。実際、地域づくりにおいて、消費生活、環境問題などは欠かせないテーマですし、また福祉も子育ても女性のこれまで係ってきた領域であり、日常生活の延長線上にあり、社会づくりにおいて今後、ますます重要になってくる視点です。

関係の視点は自他の尊重という基本にすでにある視点です。社会参画を進めていく際に一人だけでは限界があります。地域づくりを考えてみても、他との関係さらに協働、連携が不可欠です。自立・律、能力発揮にしても一人だけでできるものではなく、他との関係をもつなかで行うものです。それが自他を尊重する関係として自立を、能力発揮を、社会参画を、進めあい支えあう関係をつくるという視点があり、進めあい支えあう関係が連携や協働として形をつくってくるのではないのでしょうか。

最後に過程（プロセス）の視点をあげておきたいと思います。男女共同参画は、長い道程ですし、結果だけをみるのではなく、その過程（プロセス）を重視する必要があります。地域によって、また時代によって多様なプロセスがあるでしょう。現在を、そして自分たちの活動を、そして自分自身をプロセスの中に位置づけていく視点です。社会参画を進める活動は領域も多様ですし、その段階も多様です。またそれに社会活動をする余裕のない人、職業についていない人など参画する人の生活状況も多様です。多様な状況を、参画を進めていくプロセスの中に位置づけることが必要なのではないのでしょうか。それは多様な状況にある人たちが連携し、協働できる基盤です。また、現在の参画の活動をプロセスしてとらえる視点をもったときに次の世代への継続が視野に入ってきます（なおプロセスの視点は後に加えた。）。

これらの視点が男女共同参画を進めていく際に、共有する必要があると考えています。そうすると、多様な領域で行われる共通基盤づくりも男女共同参画の推進という方向をもった活動として連携できることになりましょう。

○男女共同参画の基礎要件

さらに、これらの視点を重ねて、要件として提示したのが図表2-5の右下の枠の「基礎要件」です。社会参画として必要要件といってもよいでしょう。これまでの自立・律、能力発揮、社会参画を阻む固定的な性役割の変更、新たな役割の創造、組織や機関、団体等で意志決定や方針決定に男女共同参画する取り組み、さらに国、自治体等への政策決定へ男女共同参画する取り組みの三つをあげておきます。

以上、男女共同参画意識の醸成に関してこれまでにまとめたこととお話いたしました。皆様のご経験をふまえて検討いただきたいと思います。

5. 成果と課題

男女共同参画という考え方の画期性（社会的基盤づくりへの参画という考え方）を指摘し、

社会的基盤づくりの基礎要件および男女共同参画の視点として、「自他の尊重」「関係の視点」「社会的主体の視点」「社会的性別の視点」「日常性の視点」「プロセスの視点」を提示したことにより、これまで男女共同参画に取り組んできた研究協力者が、それぞれの経験を振り返り、男女共同参画社会の目指す方向性を明らかにすることができたのが、この講義を行ったことの成果である。ご意見シートに書かれたことの中から、代表的な意見を引用する。

「男女共同参画」というものが、縦（時間）のつながり、横（それぞれの団体）のつながりのなかで、関係性が重視されて語られていて、自分がしている仕事がどのような意義をもつか理解できた。こういった語り、まとめ方は、初めてで、なぜ、男女共同参画が必要なのか、これからの仕事にとっても、他者に説明する上でも力になったと思う」（静岡）

「男女共同参画推進が社会の抱えている問題に対応するために必要ということをどのように伝えていったらよいのか。その糸口が少し見えてきた感じがします。『自他の尊重』『基本要件』など」（静岡）

「これまで分散的な知識や自分の研修、体験の中で疑問に思っていたこと、また、自分の考え方が経験に基づいていたものが、理論的にまた系統立てて考えられる。大変参考になる内容で、すっきりしました」（静岡）

「“関係の重視”は、男女共同参画を進めるだけでなく、地域づくりそのものに係る非常に重要な視点だということを勉強しました」（千葉）

以上のような意見が得られ、ねらいはほぼ達成できたものと思われる。

課題としては、講義と質疑で終わってしまったので、その後に参加者同士で議論をし、考えたことを共有する時間をもう少し取る必要があるであった。



(3) 実態把握に基づいた課題分析（目標 2 ～ 5）

(3)ー 1 情報を活用した実態把握：データで読む男女共同参画（目標 2）

1. 研修目標

地域における男女共同参画の状況と課題を把握する

2. ねらい

男女共同参画の国際的、国内的、地域的な実態をデータに基づいて把握し、課題を明らかにする。

3. 進め方

(1) 概要

地域における男女共同参画の状況と課題を把握するには情報が必要であり、その中でも実態把握のためには統計データを読み解く力が有用である。そのためまず、「男女共同参画を推進するための情報」について、国際的な動きを踏まえて、国内でどのような収集・蓄積・提供がなされているかを知り、次に男女共同参画統計について学び、それをもとに実際に地域のデータを読み解くグループ・ワークを行った。

(2) 時間配分

◆静岡県（11：10-11：50、12：40-14：00 計2時間）

内容	時間	手法等
データで読む男女共同参画		
Ⅰ. 男女共同参画を推進するための情報	20分	講義
Ⅱ. 男女共同参画統計について	20分	講義
Ⅲ. 静岡県のデータを読むグループ・ワーク	45分	ワーク
Ⅳ. 実態把握から課題分析への展開	5分	説明
情報資源の活用 あざれあ図書室の機能、情報資源について知る	30分	説明

◆千葉県（13：30-15：00 計90分）

内容	時間	手法等
データで読む男女共同参画		
Ⅰ. 男女共同参画を推進するための情報	20分	講義
Ⅱ. 男女共同参画統計について	20分	講義
Ⅲ. 千葉県のデータを読むグループ・ワーク	45分	ワーク
Ⅳ. 実態把握から課題分析への展開	5分	説明

4. 実施内容

■データで読む男女共同参画

I. 男女共同参画を推進するための情報

詳細は巻末資料4参照

男女共同参画を推進するための情報について、国際的な男女共同参画政策の中で資料・統計等の重要性が「世界行動計画」等書かれ、それを受けて国立女性教育会館が収集・蓄積・提供してきた資料・情報、国内の政策における情報・統計について話した。

II. 男女共同参画統計について

詳細は巻末資料5参照

「男女共同参画統計」とは、社会統計の一種であり、社会的に存在する性別格差を統計によって示すために男女共同参画の視点で統計を生産・加工する分野であるが、既存の統計を使い、どのように組みかえれば男女差が見え、これまでは認識されにくかった男女の格差、女性および男性の状況を明らかにすることができるのか、さらに既存の統計の不足や問題点が見えるようになることについて説明した。

III. 地域のデータを読むグループ・ワーク

地域の男女共同参画の状況を統計データから把握するために、各県で出されている統計データ集の中から、地域づくりへの女性の参画に関連するいくつかの図表を選び、数字から読み取れることを討議し、付箋に書き出し、読み取れた内容を発表するというグループ・ワークを行った。

(1) グループ分け：女性関連施設職員、男女共同参画行政職員、地域女性団体・グループリーダー

地域の枠を超え、施設、行政、団体のそれぞれの立場から、男女共同参画共同参画の状況を把握するようにこの3つのグループとした。

(2) 使用したデータ

- ① 静岡県：『しずおか女と男のデータブック2008』あざれあ編の「Ⅲ 政策・方針決定過程への参画」から選択したデータ
- ② 千葉県：『平成19年度男女共同参画白書』千葉県総合企画部男女共同参画課編より以下のデータ
 - ・女性関連施設職員：小中高等学校における女性管理職の状況、年齢階級別労働力率、共稼ぎ世帯数、保育所数と定員数
 - ・行政職員：県議会議員、市町村議会議員の女性割合、県職員、市町村職員における女性職員の状況
 - ・女性団体リーダー：PTA会長の女性割合、農林水産業従事者数、農協における女性の参画状況、ボランティア活動の状況

※先に行った静岡県では、3グループとも同じデータを使用した。その場合、立場の違い

によって関心の高いデータが異なること、また同じ数字から読み取ったことの違い等が理解される。しかし、データを通じて地域の状況を把握するためにはやや情報量が少ないと思われたため、次に行った千葉県では、グループごとに違う分野のデータを読んで結果を発表し、様々な分野の男女共同参画状況について共通に知ることができるよう工夫した。

(3) グループ・ワークの手順

- ① 数字から実態を把握する
- ② 把握した実態についての情報を共有する

まず個人で図表を見て気づいた点を、1点1枚の付箋にマジックで書き、それをグループで出し合い、話すうちにさらに出てきたものを付箋に書くというワークを行った。

その後、1グループずつ発見したことを発表し他のグループと共有した。

時間配分は、グループ・ワークが30分、発表が15分であった。

IV. 実態把握から課題分析への展開

統計データから読み取れた実態を課題の分析に結びつけるためのグループ・ワークが必要であったが、時間不足のため資料に基づき簡単に説明を行うに止まった。

■情報資源の活用

女性関連施設は、地域の男女共同参画に関する情報資源の収集・提供拠点である。せっかくの機会なので、静岡県の会場、静岡県男女共同参画センターの図書室の機能、情報資源について知るために、図書室に実際に行き、担当職員からどのような情報資源をどのように集め、提供しているのかについて話していただき、その後図書室内ツアーを行い、絵本のコレクション、新聞記事クリッピング、雑誌、図書、行政資料、ビデオなど1つ1つについて詳しい説明を受けた。

5. 成果と課題

先に行った静岡では、

「データを見ることで、必要な問題が見えるようになることがわかった」

「データ作成をしていた時には全く見えなかった実態の把握が今日のグループ・ワークではっきりした」

「データを組み替えて見えてくることがよくわかった」

などの意見があり、ねらい通りに統計によって実態把握がなされた。

千葉では、付箋に書き出す作業がはかどらないグループもあり、「データを読む力不足を実感した」という意見が何件かあった。この部分にはグループごとの学習支援者を設定していなかったが、その後のグループ・ワークにおいて学習支援者をグループごとに1人おくことによって得られた効果をみると、同様に配置すべきであった。

また、先に行った静岡県では、3グループとも同じデータを使用した。その場合、立場の違

いによって関心の高いデータが異なること、また同じ数字から読み取ったことの違い等が理解される。しかし、データを通じて地域の状況を把握するためにはやや情報量が少ないと思われるため、次に行った千葉では、グループごとに違う分野のデータを読んで結果を発表し、様々な分野の男女共同参画状況について共通に知ることができるよう工夫した。今回はデータから地域の男女共同参画における実態を把握するというのがねらいだったので、千葉のようになると多様なデータを見たほうがよかったのではないかな。



(3)ー 2 各地域での女性の「人材育成」について現状からみえる課題を明確にする
(目標 3)

1. 研修目標

各地域での女性の「人材育成」について、女性関連施設、男女共同参画行政、女性団体・グループの現状を把握し、課題を認識する。

2. ねらい

各地域での女性の「人材育成」について、現状からみえる課題を明確にする。

3. 進め方

(1) 概要

地域づくりに参画する女性人材を育成するためには、まず実態を把握したうえで、そのための課題は何かということ进行分析し、明確にすることが重要である。そこで、女性関連施設、男女共同参画行政、女性団体・グループに分かれ、女性の人材育成のための課題を明確にすることを試みた。

(2) 時間配分

◆静岡県 (14:10-15:40 計90分)

◆千葉県 (15:10-16:50 計100分)

※アンダーラインは、静岡県と異なる点

静岡県		千葉県	
内容	時間	内容	時間
1 趣旨・実施方法の説明、グループ内の役割の決定(司会、発表、記録、タイムキーパー)	5分	1 講義「女性人材についての問題分析と課題分析について」	15分
【問題の把握】		2 グループ・ワークの実施方法の説明、グループ内の役割の決定(司会、発表、記録等)	10分
2 各自、付箋1枚に、「人材育成」についての現状からみえる問題点を1つずつ記入する(いくつでも)。	15分	【問題の把握】	
3 グループで、作成した付箋を模造紙に貼りながら、類似した問題ごとにグルーピングする。	20分	3 各自、付箋1枚に、「人材育成」についての現状からみえる問題点を1つずつ記入する(いくつでも)。	15分
【課題の把握・まとめ】		4 グループで、作成した付箋を模造紙に貼りながら、類似した問題ごとにグルーピングする。	20分
4 グルーピングした問題を課題化し、見出しをつける。	20分	【課題の把握・まとめ】	
5 全体会で、グループごとに明確化した課題を発表し、課題をまとめる(1グループ 5分程度)。	30分	5 グルーピングした問題を課題化し、見出しをつける。	20分
		6 全体会で、グループごとに明確化した課題を発表し、課題をまとめる(1グループ 5分程度)。	20分

4. 実施内容

(1) グループ・ワークのねらい

本プログラムでは、女性の人材育成を進める過程で生じるさまざまな「問題」を課題化するため、グループ・ワークによる学習方法で実施した。

グループ・ワークの方法としては、ブレイン・ストーミングなどによって出された問題を分類・整理し、そこから課題を明確にするため、付箋を用いたワークを行った。

この方法は、まず、個人が抱える問題を、付箋等を使用して整理することにより、研究協力者すべての問題が集約可能となり、自身の知識や経験、意見を他の研究協力者と共有しながら共同で作業を進めることができる、という利点をもつ。

(2) グループ分け

研究協力者をそれぞれ所属別に、女性関連施設職員、男女共同参画行政職員、女性団体・グループリーダーの3グループに分けた。施設、行政、団体等それぞれが果たすべき役割は本来異なるものであり、まずはその役割ごとに課題を明確にすることが重要であると考えたためである。

1グループの人数は、静岡県が7～8人、千葉県が4～8人と一人ひとりが発言できる人数であった。

(3) グループ・ワークの進め方

① 静岡県では、まず、5分程度で「問題」と「課題」を峻別することの重要性を指摘し、グループ・ワークの進め方を説明した。

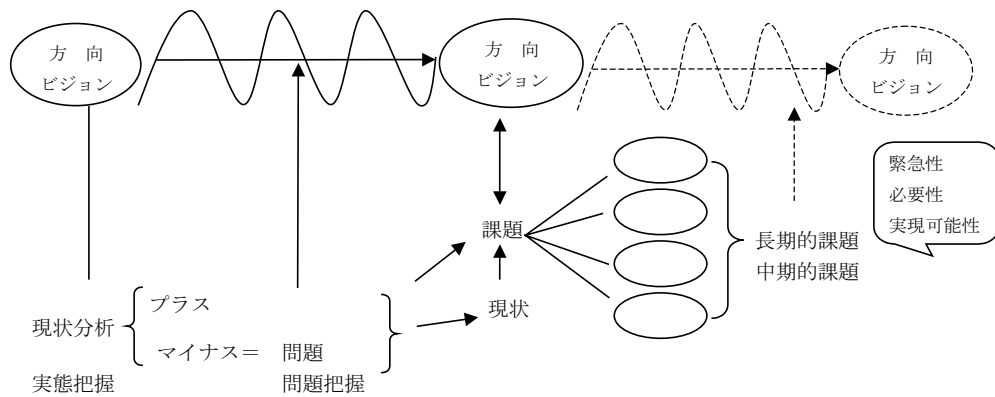
その内容は、問題を課題化する場合、「問題」と「課題」を峻別することは重要であり、「問題」とは、現存する否定的な事実であり、解決されるべき事柄であること。それに対して、「課題」とは「問題」を解決するために取り組むべき事柄であり、達成することがめざされる。「問題」と「課題」の区別があいまいなままでは、焦点が定まらず、有効な問題解決には結びつかない、ということ話を話した。

静岡県の研究協力者の「ご意見シート」には、「問題と課題の違いが理解できた」「問題を課題解決に向けていくことの難しさを痛感した」等という感想とともに、「問題を課題化することは予想以上に難しかった」「問題が多く出るため、課題化するのが難しかった」「課題の定義は理解していたが、いざ、付箋に書こうとすると、戸惑ってしまった」「もう少し、問題と課題について話を聞きたかった」等の意見があった。

そこで、千葉県で実施するときには、「女性人材についての問題分析と課題分析について」をテーマとする15分の講義を行った。

その内容は、静岡県でのグループ・ワーク終了後、研究協力者の意見をもとに、館内の実験プログラムに係るメンバーで、「問題」と「課題」についての考え方を整理したものであり、まだ検討途中のものであるとして公表した（図表2-6）。

図表2-6 現状分析と課題分析



- 1) 現状分析・実態把握として、「事業あるいは活動の方向性、ビジョン」で実態を見たときに、プラス面とマイナス面があるが、「問題」とはそのマイナス面、否定的な事実をさす。
 - 2) 「課題」とは、問題を解決するために取り組むべき事柄である。そして、課題解決に向かっては、マイナスの要因（問題）だけでなく、プラスの要因、その両方から考えることが必要である。
 - 3) 問題を解決するために取り組むべき事柄である「課題」は、長期的課題、中期的な課題、短期的な課題というような構造になっており、さらに、解決すべき課題としては、①緊急性、②必要性、③実現可能性という3つの視点で絞り込む必要があるのではないかな。
 - 4) なお、課題が立つことによって、もう一度現状をみたときに、方向性やビジョンを再度見直すことにより、最初の方方向性やビジョンが変わりうる可能性もあるかもしれない。
- ② 次に、グループ・ワークの手順を説明し（(2)時間配分の表参照）、グループ内でのスムーズな共同作業ができるよう、役割を決めてもらった（司会者、発表者、記録者、タイムキーパー）（10分）。
- なお静岡県では、タイムキーパーは各グループに任せたが、討議に熱中し、タイムキーパーの役割を忘れがちなグループが多かったため、千葉県では、タイムキーパーをファシリテーターが担当した。
- ③ まず問題の把握として、個人作業で各自、付箋1枚に「人材育成」についての現状からみえる問題点を1つずつ記入した（15分）。問題点はいくつ出してもよいこととした。
- 次にグループによる作業として、各自が作成した付箋を模造紙に貼りながら、類似した問題ごとにグルーピングした（20分）。
- ④ 課題の把握として、グルーピングした問題を課題化し、見出しをつけた（20分）。
 - ⑤ まとめとして、全体会で課題化したものを、グループごとに発表（1グループ5分程度）し、課題をまとめた（20分）。
- なお、グループ・ワークの実施にあたって、多様な課題が提示されると予想されるが、ここでは「地域づくりに参画する女性のための事業計画につながる課題を立てる」プログラムにつながるような課題出しとなるよう配慮した。
- ⑥ 実際に、女性の人材育成について問題を課題化したプロセスをみると、図表2-7に見られ

るように、静岡県の男女共同参画行政グループでは、

- 1) 「団体活動に参加しているのは、同じようなメンバーである」「世代交代されていない」「女性の団体に活性化がない」「男女共同参画を推進している女性リーダーの固定化、裾野が広がっていない」「同じ人に役割が集中してしまう」「地域活動をする女性団体、個人の高齢化」との問題が出された。この問題に共通なことは、「メンバーの固定化」であり、これを解決する課題の1つが「若い世代の発掘」である。
- 2) 「自分にメリットがあるもの（得になる）ことに関しては関心が高いが、勉強することへの関心は低い」「人材を育てる男性、女性双方の意識がまだまだ低い」「人材リストに登録され地域活動をしていても、男女共同参画意識をもっていない人が多い」「地域において固定的な性別役割分担意識が根強い」「地域ごとに温度差がある」「市内の中でも男女共同参画に対する浸透が違う（地域性）」との問題は「意識の低さ、地域による意識の差」とであるとまとめ、課題は、「役割分担意識の解消」である。
- 3) 「仕事や家事、子育て、介護など女性は忙しく、研修に参加しにくい」「家事や介護等に追われている」「家事、育児に時間を費やし、社会に出てこない」「若い人は特に忙しい」「女性が活動したくても、夫の理解がないと外に出るのが難しい」との問題は、「家事との両立困難」であり、課題は「夫・家庭の意識改革」「職場の意識改革」である。
- 4) 「若い女性たちへの講座が少ない」「若年層が取り込みにくい（自分に利益のある活動しからない場合がある）」「講座に人が集まらない」「パートナーでの参加が少ない」「若い世代（女性の）講座への参加が少ない」「“人材育成”のための講座に人が集まらない」との問題は、「講座に人が集まらない」「若い世代へのアピールが難しい」ものであり、課題としては「対象を絞った企画」「効果的なPR方法の検討」が挙げられた。
- 5) 学習機会はあるが、実践し学習する場がない」「リーダー研修などの学習機会が少ない」「講座生（卒業生）の受け皿不足」「講座を数回やった後のフォローができない」「行政の一貫した指導不足」との問題は、「学習機会、実践機会の不足」とであるとし、「学習・実践機会の拡充・確保」を課題として挙げている。

などがあがった。



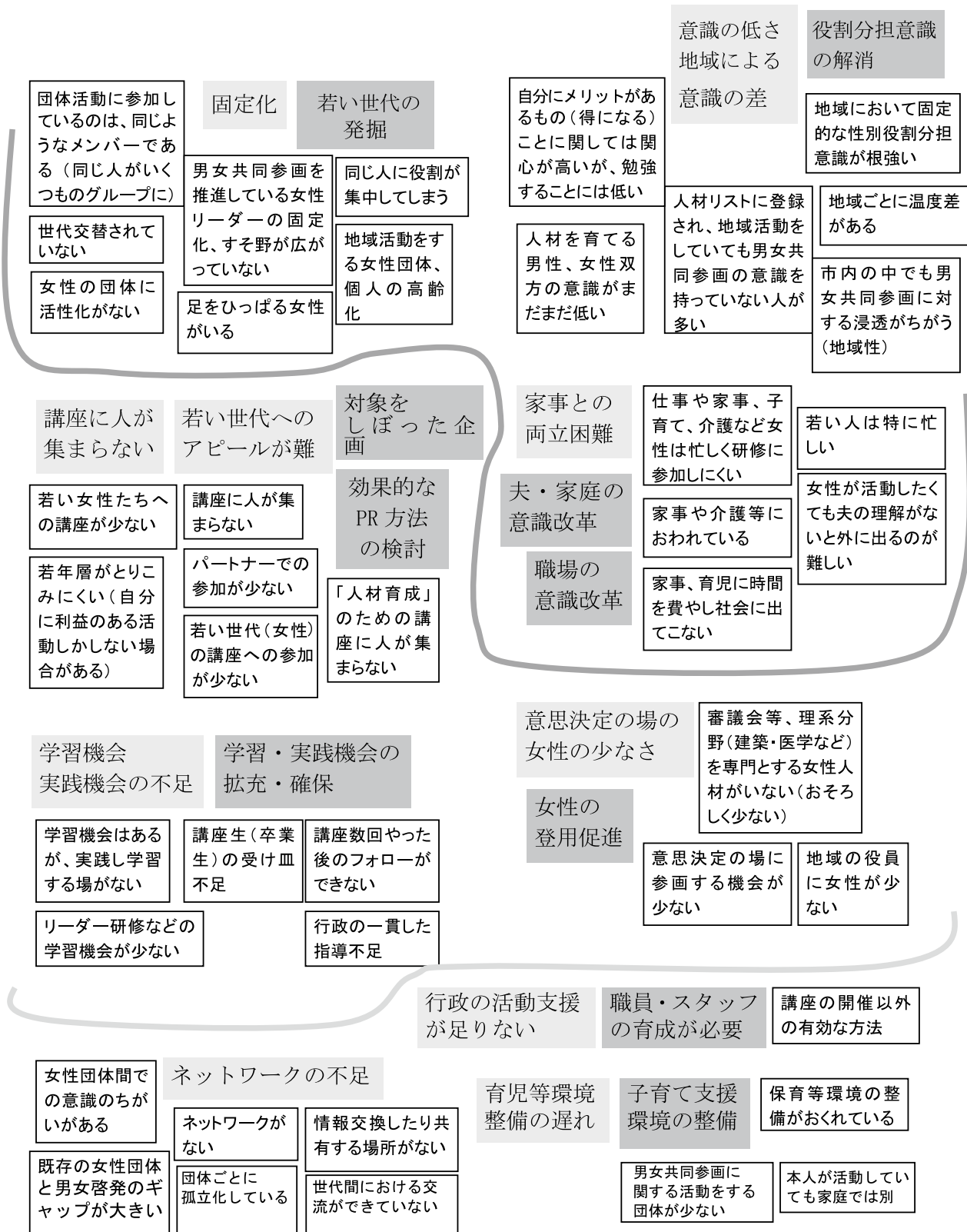
図表2-7 人材育成の課題：男女共同参画行政グループ（静岡県）

模造紙と付箋を使ったグループ・ワークを図表化。

白枠：問題

薄い網かけ：問題の共通点

濃い網かけ：課題



(4) 学習支援者

1) 学習支援者の役割

本プログラムでは、グループ・ワークがスムーズに運営されるよう、学習支援者を各グループにひとりずつ配置した。事前の打ち合わせにおいて、学習支援者の姿勢として、共通理解を持った。

- ① 学習者の主体性を尊重し、誘導的な言動は慎む。
- ② 断定的・高圧的な言い方は避け、開放的になるような雰囲気づくりを心がけ、グループの全員が発言するよう配慮する。
- ③ 現在の討議・状況にいたるまでのグループのプロセスを把握しておく、また理解するよう努める。
- ④ 問題に回答するのではなく、解決は学習者自身に任せる。

さらに、学習支援者は、学習者とのコミュニケーション、効果的なグループ活動の支援、情報の提供、学習者への励まし、学習者との信頼関係の構築、学習者相互の議論の要約、学習者の受容と尊重等のように、学習者の求めに応じて、目的が達成するよう支援する役割を担うことを確認した。

2) 学習支援者の各グループへの係り方

上記について共通理解した上で、グループ・ワークに係ったが、静岡県と千葉県での学習支援者の各グループへの係わり方は異なった。まず、静岡県の場合は、研究協力者がグループ・ワークに慣れていたため、学習支援者は積極的に係る必要性は少なかった。他方、千葉県の場合は、この段階ではグループ・ワークに必要な関係性ができていなかったため、学習支援者が積極的にグループ作業に係ることとした。このことにより、3グループとも活発なグループ・ワークを展開することができた。

学習支援者の各グループへの特徴的な係わり方は、以下の通りであった。

① 問題の整理の仕方についての支援（静岡県「女性団体リーダーグループ」）

ア 活動分野が多様であり、一人ひとりから非常に多くの問題が出されたが、問題をどう整理したらよいのか、難しいようであった。そこで、似通った問題を集めてグルーピングした際に、「模造紙のどの位置にどの問題群を置くかによっても見え方が変わるので、その点をよく考えてほしい」とアドバイスした。

イ 実際に「いちばん重要と思える問題群を真中に置いてみたら」とのアドバイス通りにやってみたところ、「問題の中心が何なのかがわかった」という声がメンバーから聞かれ、次の課題化の作業に向け、活発な討議がなされた。

② グループの関係・雰囲気づくりへの支援（千葉県「行政職員グループ」）

ア 学習支援者としてまず行ったことは、「アイスブレイク」であった。名前・所属・仕事内容など簡単な自己紹介をしてもらい、まず口を開いてもらったことにより、どんな立場の人が参加しているのか、共通理解でき、関係づくりのきっかけとなった。

イ 次に、司会・記録・発表を決めてもらう際、「記録者は付箋を使って、みんなの了解

をとりながら行うので、まとめながらの記録ではないこと、また発表者は、模造紙にまとめたものを発表するので、それぞれ役割を引き受けても負担は重くないこと」を言い添えた。全員で役割を決める話し合いを始めたが、この段階でグループ全体の雰囲気は相当ほぐれた。

ウ 役割が決まった後、話し合いの進行は進行役に任せた。問題点について発言が一巡するまで、各人の意見を傾聴し、参加者の主体性を重視した。問題点についての発言内容を、参加者全員の合意の上、1つの問題点を1枚の付箋に記すよう、再度助言した。

エ 次に、日頃感じている問題を出し合い、出た問題点をそのまま書きとめ、できるだけ落とさないように書くように助言した。その際、抽象的なことばで問題点がまとまりそうになったとき、まとめすぎないようにできるだけ具体的に書くよう助言した。

オ 問題を整理し、課題化をするための支援としては、全員で話し合いを振り返るための時間をもつよう助言した。

5. 成果と課題

(1) 成果

- ① 静岡県、千葉県の「ご意見シート」では、「問題点を明確にするのに有効な方法であるので、今後もぜひ活用したい」「地域で活用しやすい内容だと思う」「グループ・ワークは非常に有効な学習方法だということを実感した」等の意見があり、グループ・ワークという学習方法の有用性が確認された。
- ② 問題を課題化するに当たって、今回の付箋を用いてのグループ・ワークという方法が適切なものであったことが評価された。
- ③ グループ・ワークの運営に当たって、各グループにひとりずつ学習支援者をおいたことについての評価も高く、充実したグループ・ワークを展開することができたと考える。
- ④ 「他の団体との交流ができてよかった」「他の地域の生の声を聞くことができ、たいへん参考になった」という意見にみるように、グループ・ワークによる学習が評価された。また、「皆、同じような問題で悩んでいることがわかった」「抱えている課題は一緒だと思った」「問題の共有化の大切さを学んだ」「共通の悩みがあることがわかった」「各地域で抱えている問題が、これほど共通しているとは思わなかった」等、皆似かよった課題を共有していることが明らかになり、今後の連携・協働のきっかけづくりができた。

(2) 課題

○問題を課題化するプロセス

- ① 「思った以上に問題を課題化することは難しかった」「問題を課題解決の方向に向けていく難しさを日ごろから痛感している」「問題と課題の違いを理解することが難しかった」「課題の定義は理解しているつもりであったが、いざ、付箋に書こうとすると、少し戸惑ってしまった」等、率直な意見が寄せられた。全体会での発表も、問題を整理しただけで課題化までに至っていない場合も多く見受けられた。問題を整理した次の作業

として、問題解決の視点から、整理した問題を分析するための時間をもつことが必要であった。

- ② 女性団体・グループリーダーのグループでは、その活動内容が多様であるために、「各自が出す問題点が多種多様であり、課題化するのが大変であった」との意見が多かった。出された問題をグルーピングする際には、多様な問題の根底にある共通性を分析し、明らかにすることが重要である。

○概念の共有化

静岡県の「ご意見シート」で、「女性人材という定義があいまいで、リーダー的な人材をさすのか、女性全般をさすのか最後までわからなかった」という意見が出された。全体のプログラムの流れの中で、特に冒頭の「本プログラムの意味・意義を理解する」で、「女性人材」についての説明をしなかったために招いた混乱であった。

そこで、千葉県の第1回の「本プログラムの意味・意義を理解する」では、今回のプログラム開発のキーワードとなる「女性人材」「社会活動キャリア」等についての説明をすることとした。

なお、静岡県の場合は、第2回講座の初めに、「女性人材」「社会活動キャリア」についての説明を改めて行った。以上のことから、プログラム全体の流れの中で、キーとなる概念を説明することが重要であることを認識した。

○問題の出し方

グループ作業の中で、出された意見を記録者が付箋に書き出す作業では、短い言葉でまとめてしまったり、きれいにまとめてしまったりすると、本来出された意見のニュアンスや内容が伝わらない、との指摘が学習支援者全員からあった。付箋には、他の人に伝わるように、何が問題なのか、その内容を書くことが必要である。

(3)ー 3 地域づくりに参画する女性のキャリア形成支援とは（目標 4）

1. 研修目標

女性のキャリア形成支援における現状と課題を把握する

2. ねらい

キャリアの概念、女性のキャリア形成について理解した上で、社会活動キャリアを支援することの意味と意義を理解する。

3. 進め方

(1) 概要

講義を聞き、キャリアの概念、女性のキャリア形成について知識を得る。また、「社会活動キャリア」という考え方を理解する。ヌエック・ブックレット『キャリア形成に生涯学習を生かした女性たち』、『キャリア形成にNPO活動を生かした女性たち』の中から示された3つの事例から1つを、グループごとに選ぶ。事例をワークシートに整理する作業は自宅学習とした。グループ分けは、次回の事例分析のグループと同じにすることとした。静岡県では、

富士・富士宮で1グループ

静岡、浜松、県職員を2グループに分ける

磐田、掛川、藤枝を2グループに分ける

として合計5グループに分かれた。千葉県では、地域ごとに分かれ合計5グループで行った。

(2) 時間配分

◆静岡県（15：50-16：50 計1時間）

内容	時間	手法等
講義：地域づくりに参画する女性キャリア形成支援とは	30分	講義、質疑応答
事例選定	30分	グループ・ワーク

◆千葉県（11：10-12：30 計1時間20分）

内容	時間	手法等
講義：地域づくりに参画する女性キャリア形成支援とは	50分	講義、質疑応答
事例選定	30分	グループ・ワーク

4. 実施内容

キャリアの概念、女性のキャリア形成、社会活動キャリアの概念について講義を聞いて学ぶ（別添の講義レジュメ参照）。提示された3つの事例の中からグループごとに1事例を選定し、ワークシートを使って整理する自宅学習のための準備を行う。

(1) 講義内容

① 「キャリア」をどう考えるか

キャリアという言葉には広義の使い方と狭義の使い方があるが、本実験プログラムでは広義にとらえる。

狭義の定義：個人が職業上たどっていく経歴

広義の定義：生涯を通じた役割に関する経験の連続

→職業だけではなく社会的活動を含めて個人の活動の連鎖として考える

D.Hall (1976) キャリアの意味

①階層の中で昇進を主とした「より偉くなっていく姿」

②定型化された地位の経路の存在する専門職

③職務の生涯にわたる連続

④役割に関連した諸経験の生涯にわたる連続としてのキャリア

「キャリアとは、ある人の生涯にわたる期間における、仕事関連の諸経験や諸活動と結びついた態度や行動における個人的に知覚された連続である」

また平成15年10月に出された『女性のキャリアと生涯学習の関わりから（多様なキャリアが社会を変える；第2次報告）』（女性の多様なキャリアを支援するための懇談会）でもキャリアは広義の意味として捉えられている。「[キャリア]は個人と「働くこと」との関係の上に成り立つ概念である。本来、職業生活は生活のあらゆる領域、段階での経験（学習生活、家庭生活、市民生活）との関連で捉えられるものであり、働くことについても、経済的評価を伴う職業以外にも地域活動ボランティアや趣味等様々な活動分野や働き方がある。……「職業」のみをキャリア要素としてとらえていたのをやめ、多様なキャリアを生活のあらゆる領域・段階での経験とその連鎖を通して獲得される「力・ポテンシャル」としてとらえる」（女性の多様なキャリアを支援するための懇談会、2003）

② 「社会活動キャリア」をどう考えるか

広義に捉えられる場合においても「キャリア」は個人の側面から捉えられている。今回の実験プログラムでキーコンセプトになるのは「社会活動キャリア」という考え方である。キャリアを広義にとらえる心理学においては、個々人のキャリアがどのように形成され、形成の促進要因は何か、阻害要因は何か、どのような支援が個人にとって必要であったかなどが分析される。例えば、カウンセリング心理学においては「個人が一生涯にわたる発達の過程を通して、効果的に機能するのを援助することを目的としている。そして、援助活動の実践にあたっては、体系的でリサーチに基づいたアプローチを適用して、自分自身及び他の人々が、問題を理解し、その解決法を開発させることを援助する分野である。また、カウンセリング心理学は、環境の影響による問題、個人及び個人間、集団内及び集団間の対人的な葛藤からおこる問題などさまざまな問題を対象とするが、具体的には職業上、教育上の諸問題、情緒的、社会的問題、健康に関する問題、発達に関する問題などであり、その結果としての苦痛を軽減し、その危機を解決する」といった機能を果たす（アメリカ心理学会、1984）」という理論的枠組みで研究が続

けられており、個人という側面からとらえられている。

一方で、行政ではこれまでも「地域の人材育成」が課題として取り上げられ、例えば、地域の事業の後継者を育てる、地域IT事業を担う地域人材を育てる、観光地作りのための人材を育成する、子育てや家庭教育をサポートする人材を育てる、地域の男女共同参画を進めるための男女共同参画アドバイザーを養成するなど地域課題のニーズに応じて育成プログラムも多くの地域で実施されている。しかしこうした人材育成は地域課題のニーズに合致しているか、養成された地域人材がどのように活用されているか、地域にどのような影響を与えたかという視点から評価、検討されているが、必ずしも個人の発達や個人のキャリア形成にどのような影響を与えたのかということは明確にされていない。

今回の実験プログラムの中で「社会活動キャリア」を取り上げる場合には、個人的な側面と個人の社会活動が地域社会に及ぼす影響という社会的な側面、その両方向から分析することが特徴である。

③ 「社会活動」をどう考えるか

「社会活動」という言葉はこれまでも広く使われてきた言葉であり、生活圏における諸問題と女性たちの取り組みを振り返り再評価することができる。以下のようなさまざまな活動があげられるが、既存の団体での活動と新たなグループでの活動が見られる。地域における課題が明確になるにしたがって解決に向けて「参加」から「参画」へと変わりつつある。

- ・物価高やモノ不足への抗議
- ・平和運動
- ・教育・文化関連問題 PTA活動、図書館、子どもをめぐる文化活動
- ・環境関連問題 水質汚染、ゴミ焼却やリサイクル、緑地保護など
- ・福祉関連問題 保育所設置、高齢者介護、障がい者問題など
- ・食品の安全性をめぐる問題 食品添加物、共同購入活動
- ・ドメスティック・バイオレンスへの取り組み
- ・国際関連問題 外国籍の住民への支援（日本語教育など）

こうした生活に密着した問題意識によって取り組まれた地域社会の社会運動や活動は、生活圏において女性が直面し、危機感を募らせ、改革・改善にむけた具体的動きをとったものであったが、「キャリア」という概念が職業を意味する狭義のとらえ方であったために「キャリア」とは認識されず評価されることも少なかった。活動内容自体の意義と活動における個人としての女性の経験の蓄積を、社会活動キャリアという視点で見直すことができるだろう。

④ 地域をどう考えるか

「地域」という概念はその専門分野によってさまざまなとらえ方がされている。

地理学：人口集中地域、空間の規模や特定事象の有無などで分ける「地域」

社会学：社会の集团的類型のひとつとして把握される

男女共同参画会議基本問題専門調査会「地域における男女共同参画推進の今後のあり方につ

いて」：「ここでいう地域とは、基本的には身近な生活圏ではあるが、課題に応じて学区、市町村、都道府県など様々な範囲が考えられている。

つまり「地域」概念は、目的や問題意識によってその範囲や内容に大きな差があると考えられる。本実験プログラムにおいては参加者を女性関連施設の職員、行政担当者、団体・グループのリーダーとしたので、県と市を地域として想定している。

地域の重要性は男女共同参画政策の中でも取り上げられており、男女共同参画会議基本問題専門調査会「地域における男女共同参画推進の今後のあり方について」の中で「…地域活力の低下や地域内のつながりの希薄化は、豊かで持続的に発展する社会の実現のために克服すべき課題であり、この観点から地域において新たな視点にたった地域おこしまちづくり等を進めることが重要な課題となっている。……男女共同参画の視点を様々な分野に取り入れ、課題を解決していくためには、これまでのように講習・研修等による知識の習得や意識啓発を中心に男女共同参画を推進する取り組みだけでは十分でなくなっている。むしろ現実には生じている様々な課題に対し、地域の実情に応じた実践的な活動を行っていくことが必要となってきた」と述べている。

5. 成果と課題

(1) 成果

① 「社会活動キャリア」概念の有効性

「キャリアの概念がわかった」「社会活動キャリアについて理解できた」「広義のキャリアの意味がわかった」「社会活動キャリアという言葉を知った。今後意識していきたい重要な概念だと思う」「社会活動キャリア」という言葉を聞くことによって自分のこれまでの歩みと現在の状況を振り返ることができた。地域の人材発掘にはこの視点で推進することが重要だと思う」「キャリアのための具体的な方法（スキルアップとマインドアップ）がわかった」「地域の人材発掘のためには社会活動キャリアの視点が重要であることを痛感した」「社会活動キャリアという言葉が新鮮でした。これまでの人材育成の中で不足部分がこの点ではなかったかと思います」などの意見に見られるように「社会活動キャリア」概念が地域の人材育成をする上で、生活圏における諸問題と女性たちの取り組みを振り返り再評価するという意味で有効なものであると考えられる。

「社会活動キャリア」という概念は、収入を伴う仕事だけではなく、これまでの活動の経験を評価するものであり、自分に自信を持ちチャレンジすることにつながるという側面から有効である。また個人的な側面だけではなく、地域活動を推進する地域人材を考えるとこのいわば社会的な側面からも有効な概念だと言えるだろう。

② 効果的なプログラム構成

静岡県、千葉県ともに30分の講義と質疑応答、その後30分で3つの事例を読み、グループごとに分析する1事例を選ぶという作業を行った。

プログラムは①「社会活動キャリア」の講義、②「社会活動キャリア」分析シートの説明、

③分析対象の3つの事例を読む、④グループの中で3つの中から分析したい事例を選ぶ、⑤分析シートに記入する（自宅での作業）の流れで実施したが、それぞれ充実した分析シートが作成できたことからプログラムの流れとして効果的であったと考えられる。

また、講義時間30分は「社会活動キャリア」を完全に理解するための時間としては不足しているが（「講義をもっと聞きたかった」という意見もあった）、この時間だけで理解するのではなく、その後の作業（事例を読んで分析シートに記入する）や分析シートを持ち寄ってグループ・ワークを実施することによって理解が深まるものであることを考えれば、妥当な時間配分であり、作業時間のバランスも適正であったと考えられる。

（2）課題

① 「社会活動キャリア」概念の精緻化

「社会活動キャリア」が地域人材、特に女性の地域人材を育成する上で重要な概念であることは明らかになったが「社会活動キャリア」をどのように捉えるかについては今回の実験プログラムの成果を基にして深めていく必要がある。キャリア形成という個人的とらえ方と社会的な人材という社会的とらえ方を結びつけること、地域づくりの活動やNPO活動などの社会づくりの活動をしてきた道程、軌跡として「社会活動キャリア」は発想した概念である。

これまで社会活動というと収入を得る職業活動と対峙するもの、つまり無償に行われる社会活動と収入を得る仕事とは金銭に係るかどうかという単純な二分法で捉えられることも多かった。だから社会活動＝ただ働きと理解されることもある。しかし、NPO活動やコミュニティービジネスなどさまざまな形態が出現しており、社会活動と職業活動の垣根が低くなっている。地域の基盤を作る社会活動を有償か無償かという二分法での捉え型を見直すことが必要だろう。そして「社会活動キャリア」と「職業キャリア」がどのような関係にあるのかを丁寧に分析していくことが求められる。

また後述するように（(3)-4）、今回の事例分析を通して「社会活動キャリア」はこれまでの職業や、家族の状況、学習と関係があることがわかってきた。そこで「社会活動キャリア」と「職業キャリア」の関係だけではなく、家族のありようが「社会活動キャリア」にどのような影響を及ぼしたのか、どのような学習経験が「社会活動キャリア」に影響を及ぼしたのかなど「社会活動キャリア」に影響を及ぼすファクターを明らかにしていくことが「社会活動キャリア」概念の精緻化につながると考えられよう。さらにどのような支援があれば「社会活動キャリア」形成ができたのかをも明らかにする必要があるだろう。

これまでも女性のキャリア形成は女性のエンパワーメントを進める上で重要な柱であり、国立女性教育会館においても調査研究のテーマとして継続して調査研究を進めてきたが、今後、進める上で上記の「社会活動キャリア」概念の精緻化を視野に入れた研究が必要である。また、これまでのキャリア研究では個人に焦点が当てられており、女性たちの活動が社会にどのような影響を与えたかという点については十分に把握されていなかったもので、個人の社会活動キャリアが地域にどのような変化をもたらしたのかについても検討する必要があるだろう。

② プログラムの運営上の留意点

「社会活動キャリア」は新しい概念なのでどのように理解するかというプロセスを説明する必要がある。①「社会活動キャリア」の講義、②「社会活動キャリア」分析シートの説明、③分析対象の3つの事例の選定、④分析シートの記入（自宅での作業）⑤分析シートを基にしたグループ・ワークの流れを説明し、「社会活動キャリア」理解の到達目標を明らかにすることが効果的だと考えられる。

事例を選ぶ際に「どうしてグループで一人にしなければならないのか」「自分の気に入った事例の分析がしなかった」という意見もあったが、全体の進め方を説明することによって理解が得られると考える。



(3)ー 4 地域づくりに参画する女性のロールモデルの分析（目標 5）

1. 研修目標

女性の社会活動キャリア形成事例の分析を通じて、支援方策と課題を明確化する

2. ねらい

分析シート（巻末資料）を使った事例分析をグループで行い、社会活動キャリアの考え方を理解し、有効な支援方策について考える。

3. 進め方

(1) 概要

社会活動キャリアを形成した事例を取り上げ、ワークシートに基づいてグループで分析し、発表し、コメントをもらう。

(2) 時間配分

◆静岡県（10：00-11：20 計1時間20分）

内容	時間	手法等
事例分析	50分	付箋と模造紙を使ったグループ・ワーク
発表	20分	各グループの代表発表
コメント、まとめ	10分	ファシリテーターによるコメントとまとめ

◆千葉県（10：10-11：50 計1時間40分）

内容	時間	手法等
事例分析	60分	付箋と模造紙を使ったグループ・ワーク
発表	20分	各グループの代表発表
コメント、まとめ	20分	ファシリテーターによるコメントとまとめ

4. 実施内容

事前学習で仕上げてきたワークシートをもとに話し合い、「有効だった支援」についてピンク色の付箋に、社会活動キャリアを形成する中で「ついた力」を黄色の付箋に書き込み、模造紙にはりつけながら整理するというグループ・ワークを行った。その後、グループ・ワークの成果を、各グループ5分ずつ発表し共有化した。全部の発表が終わった後、コメンテーターからコメントによって、グループ・ワークの成果を振り返った。各県で取り上げた事例と選んだグループは以下の通りである。（グループ・ワークの成果については巻末資料参照）

<静岡県>

ヌエック・ブックレット『キャリア形成に生涯学習をいかした女性たち』の中から以下の3事例

- ① 表現ボランティア 「金持ち人生」ならぬ「人持ち人生」を 星川叔子さんー藤枝市・

磐田市・掛川市グループ2

② 女性相談と子育て支援に係って 3つの役割を有機的に結びつける 川瀬千穂子さん—
富士市・富士宮市グループ

③ 市議員からNPO活動まで 出会いを通して、自分らしく生きる 木村由里子さん—
県・静岡市・浜松市グループ1、県・静岡市・浜松市グループ2、藤枝市・磐田市・掛川
市グループ1

<千葉県>

ヌエック・ブックレット『キャリア形成に生涯学習をいかした女性たち』(①②) および『キャ
リア形成にNPO活動をいかした女性たち』(③) から以下の3事例

① 市議員 北京の世界女性会議で受けた衝撃をエネルギー源として 鈴木めぐみさん—
習志野市グループ

② 保育ボランティア 保育サポート事業を展開 宮城和代さん—八千代市グループ

③ “頭脳派” 集団が地域を変える～生涯学習からNPO活動へ～ 工藤緑さん—佐倉市グ
ループ、県・木更津市グループ、香取市グループ

■国広氏コメント（要約）

社会活動キャリアとは、活動を通じていろいろな資源を横に広げ、積み上げ豊かにしていく
ことと言えるかもしれない。しかし、そうならない場合もあり、その時にはどういう資源が
足りなかったのか、これからどういう資源を利用する力を蓄える必要があるのかという視点で
考えることも必要である。女性センターの講座に来る人たちの中には、何をやりたいのかがわ
からないという人も多くみられるが、自分で見つけていくためにどのような支援をしていくの
か、事例が参考になるのではないか。

5. 成果と課題

使用した事例は、会館のこれまでの調査研究の中で産み出されたものであり、主催事業でも
活用してきたが、本実験プログラムでは、「社会活動キャリア」という女性のキャリアについ
ての新たな考え方を事例を通じて理解すること、社会活動キャリア形成に有効な支援方策につ
いて考えることをねらいとしてグループ・ワークを行った。その際に、新しい考え方に適合す
るようワークシートの開発も行い、社会活動キャリアの分析に必要な視点を提示した。

参加者の意見では、

「大事な分析で、多くのことを学びました。私たちの市の中でもこういったロールモデルの
分析の積み重ねが人材発掘につながると思います」（静岡）

「モデルを分析することにより、自分の次の活動や団体のスキルアップのため、または振り
返りの重要性を学ばせていただきました」（静岡）

「企画・内容は初体験の方法（学習方法）、受け身ではなく自らが、聞く、まとめる、話すを
行う中で、眠っていた脳細胞が目覚めたような」（千葉）

というように、この事例分析の方法は参加者に関心をもって受け入れられている。

また、「同じ題材を3グループで分析したが、それぞれに違う観点からまとめていたのが興味深かった」（静岡）のように、グループによって見方の違いが異なっているという点を比較できたことは有用だった。その反面、「3つの事例を選んだ意図が不明」（静岡）、「全部同じモデルで分析し、気づき、問題点を協議すると良かった」（静岡）という意見もみられ、事例の選定をもう少し考える必要があった。このブックレットは「社会活動キャリア」の観点から事例収集したものではないので、「より知りたいところが読み取れず、難しかった」（静岡）という意見もあり、書かれた事例から読み取ることの困難があったように思われる。

事前学習により、事例をワークシートに整理して来てもらったことで、すでに事例を読み込んでいる状態からグループ・ワークを開始でき効率的にワークを進めていくことにつながったが、それでも「有用な支援」と「ついた力」にしばって議論を深めるには、50～60分では短かったようである。

コメントは、参加者がグループ・ワークを通じて把握できたことの意味づけにつながり、また限られたグループ・ワークでは消化しきれなかった部分についての補足ともなり有用だった。参加者から「講師のコメントで新たな気づきがあった」（静岡）、「国広先生のコメントによって、何が社会活動キャリア形成のための支援として有効か、具体的に見えてくる感じがした」（静岡）といった意見が寄せられている。



(4) 課題解決に向けた実践（目標 6、7）（静岡県）

(4)ー 1 課題解決につながる課題を立てる（目標 6）

1. 研修目標

課題解決に向けた課題を立てる

2. ねらい

地域づくりに参画する女性人材が育つための事業につながる課題を立てる

3. 進め方

(1) 概要

地域づくりと連携・協働について考えるために、まず、大阪のドーンセンター（大阪府立女性総合センター）を事例に「連携・協働」についてのミニレクチャーを行った。その後グループに分かれて地域の課題解決に向けた課題を立てるための討議を行った。

(2) 時間配分（11：40～12：35 計55分）

内容	時間	手法等
I 連携・協働に関するミニレクチャー	25分	講義
II グループ・ワーク		ワーク
①課題出し（個人作業）	15分	
②グループ討議	15分	

4. 実施内容

I 連携・協働に関するミニレクチャー（講義レジュメは巻末資料）

○それぞれの役割

男女共同参画は特定の分野ではない。私たちは、あらゆる分野に男女共同参画の視点を向け、横断的に進めていかなければならない。例えば、行政内でも福祉、教育、商工、まちづくり、保健、警察など多岐にわたっている。そのため、女性関連施設、男女共同参画行政、女性団体の連携・協働が欠かせない。各分野には専門の部署や機関・団体があり地域の実情を知りニーズを把握している。またそれぞれが関係機関とのネットワークをもっている。これを活かせばターゲットとする人に、届けたい情報を届け、効率の良い広報ができるであろう。

○連携・協働しながら男女共同参画の視点を問う

企画・運営の過程で、連携・協働者同士が男女共同参画の視点を共に問い、確認していくプロセスが大切であると考えます。

例えば、以前、ドーンセンターで若い世代のNPOスタッフと男女共同参画についてしたことがあった。「男女共同参画の視点というのは何か？」「いわゆる“男社会”の中での女性の視点」「女性を含めた少数派の視点」「強者でない視点」「“らしさ”にとらわれない視点」…、次々に意見が出てきて、共通理解が生まれた。協働・連携のプロセスの中で相互にやり取りしていくことが、ぶれない企画の軸を作り、男女共同参画意識の醸成や共通の基盤づくりを

していくことにもつながっていくと思われる。

ドーンセンター（大阪府立女性総合センター）の事例（参考資料参照）

＊女性センターと地域の社会資源（施設、機能、人材）との連携を示す図を提示

男女共同参画行政や女性関連施設では担当者が少人数の場合が多い。だからこそ、地域の社会資源と連携・協働すれば事業の展開に可能性がみえる。

＊担当者と日頃の連携・協働のつながりを示したりレートークイベント

「女性センターの可能性を拓く：私と女性センター」（2008.5.21）

＊連携・協働することで大きな効果が生まれたセミナー紹介

「学校教員のためのワークショップ 男女共同参画の視点による教材づくり」（2008.3.26）

II グループ・ワーク

静岡県内を8つの地域に分け、「男女共同参画行政」「女性関連施設」「女性団体」の三者でグループを構成、「1」～「5」をふまえて、地域づくりに参画する女性人材が育つための事業計画を作成した。

グループ・ワークの手順

① 課題出し（個人作業）

地域づくりに参画する女性人材が育つために、「女性関連施設」「行政」「女性団体・グループ」それぞれの立場でできること、また、他の2者に望むことを付箋に書き出す。

② 付箋を出し合う。

③ 地域の課題について三者で討議する。

5. 成果と課題

地域の問題をとり上げて課題化し、「緊急性」「必要性」「実現可能性」の観点から絞り込む作業は、「問題の拾い出し→整理→分析→課題抽出という作業が、事業企画にとっていかに大切かわかった」「課題が明確になった」という声が多く寄せられた。

静岡県は、「女性関連施設」「男女共同参画行政」「女性団体・グループ」が日頃から面識がありコミュニケーションがとれている地域が多く、地域の問題把握は既に共通のものであったので、事業計画案作成につながるような課題が抽出されていった。「3つの観点から絞り込んでいく作業により、実現可能性のある討議ができた」「地域課題や三者それぞれの役割が明確になった」「三者が一堂に会する機会が以外に無かったので、これからは持ちたい」との声があった。

ただ、「“事業につながる課題”を前提にせず、課題が何かという議論をもっと十分にすることが重要だ」という意見もあった。

課題抽出やスムーズな進行には学習支援者の存在が大きい。

ファシリテーターの立場からは、地域づくりに参画する女性の事例分析の作業から、連携・

協働のミニレクチャー、そして地域づくり参画する女性人材が育つための各地域の課題を絞っていく流れが難しかった。この順で進行するのであれば、「目標5」と「目標6」のファシリテーター同士が連携をし、内容を確認しあう必要がある。

またプログラムのデザインとしては、男女共同参画社会を推進していくための連携・協働についての概念的な講義の位置付けであれば、研修の前半部に入れる方が良く、連携・協働の事業例を示す講義であればロールモデルの事例分析の視点を反映させ、事業計画案につながる例を挙げる方が良かったかもしれない。

(4)ー 2 地域づくりに参画する女性人材が育つための事業計画案作成グループ・ワーク（目標7）

1. 研修目標

連携協働を活かし、地域づくりに参画する女性人材が育つための事業計画案を作成する。

2. ねらい

女性関連施設職員、男女共同参画行政職員、女性団体リーダーの三者でグループとなり、地域づくりに参画する女性人材が育つための事業計画案の作成を通じて協働を実践する。その際図表2-5で提示した基礎要件①役割の変更・創造、②機関等での意思決定・方針決定への参画、③国・地方自治体等への政策決定への参画を共通視点として持つ。

3. 進め方

(1) 概要

静岡県内を8つの地域に分け、「女性関連施設」「男女共同参画行政」「女性団体・グループ」の三者でグループを構成、「目標6」の地域課題の抽出に基づき、地域づくりに参画する女性人材が育つための事業計画案、かつ地域に持ち帰って次年度以降に実現可能な事業計画の作成をめざした。

＊作成の視点として「ねらい」「対象」「連携・協働」「内容」「予測される地域社会および個人への影響」を明確すること。

(2) 時間配分（13：20～16：45 計3時間25分）

内容	時間
①課題抽出のポイントと進行説明	5分
②グループワーク／課題の絞り込み	15分
③課題発表（1分×8G）	10分
④グループワーク／事業計画案作成	70分
⑤中間発表（4分×8G）	40分
⑥ミニコメント	5分
⑦グループワーク／事業計画案の再検討	25分
⑧修正点の発表（2分×8G）	20分
⑨コメントとまとめ	15分

4. 実施内容

事業計画案作成グループ・ワーク

(1) グループ分け：同一市内の女性関連施設職員、行政職員、女性リーダーで構成

(2) 内容

① 課題抽出のポイントと進行説明、課題の絞込み

事業計画案作成にあたっては、「目標5」の事例分析をふまえ、社会活動キャリアを持つ地域女性が力を発揮できるよう意識する。また、課題の抽出にあたっては、前述したように「緊急性」「必要性」「実現可能性」の観点から絞り込んでいく。

② 課題を発表する（1分×8G）

全体で各市の課題を共有するため、1グループ1分以内で、選んだ課題を発表した。

③ 事業計画案作成

事業計画書の形式は問わないが、テーマとねらいと対象者を明確にすること、内容から予測される効果、個人と社会への影響、そして三者の連携・協働を意識しながら、作成していくように促した。課題抽出の際に書き出した付箋をもとにした。付箋を活用してアイデアをまとめ、事業の流れ、効果、影響等を予測し整理していく様子が見られた。更に、フローチャート等を用いるなど、それぞれのグループが工夫して模造紙に記入し、発表用にまとめた。

＜各市のテーマ＞

- ・静岡県「あなたの企画が地域を変える」
- ・静岡市「第9期アイセル女性カレッジ ホップ・ステップ・ジャンプ」
- ・掛川市「地域が元気になる女性の再チャレンジ」
- ・富士市「ちょっくら寄って！ーセンターでの新たな出会いをプロデュース（プロデュースでは？）ー」
- ・藤枝市「既存モデル地区の事業の改革」
- ・浜松市「7区で男女共同参画推進」
- ・磐田市「女性人材育成のための基礎講座」
- ・富士宮市「男女共同参画活動家養成とセンター利用団体のネットワーク強化」

④ 中間発表

途中経過の報告として、完成したところまでの事業計画を発表した。1グループあたり3分以内で、地域課題やねらい、対象者、内容、効果、連携・協働イメージ等を要領よくまとめ、発表するように促した。また、研究協力者には2色の付箋各1枚ずつ配付しておき、発表後に「良かった点」「改善点、疑問点、アドバイス」を他市へのコメントとして記入した。

発表は、テンポ良くスピーディに進めるため、タイマーで時間を計測し、タイムアップ時にはアラームを鳴らして進行を管理した。付箋は各班の学習支援者が回収し、模造紙に掲出した。

⑤ ミニコメント

国広委員、中野室長よりコメント

⑥ 作成案の再検討

付箋に記入された他の受講生からの「良かった点」「改善点、疑問点、アドバイス」とコメントーターからのミニコメントをもとに、各グループで事業計画案を再検討し、修正・改善。この事業計画を実施するために地域の各種団体等との連携・協働図を示すなどの追加作業がなされ、より実践的で実現可能な事業計画案になっていった。

⑦ 修正した部分を中心に発表（2分×8G）

⑧ 最終コメントとまとめ

コメントーターから事業計画案について最終コメントが出された。

＜国広委員＞

地域の課題に対し、女性関係施設、男女共同参画行政、女性リーダーの三者が同じ目的を持って取り組むことが重要であった。各研究協力者が付箋に記入した他のグループへのコメントは建設的なものが多く、そのコメントの改善点、疑問点、アドバイスに沿って変更していくプロセスが良かった。

行政から下りてきたことを事業化するだけでは市民には魅力がない。三者で一緒に取り組み、「男女共同参画とは何か」を常に考えながら、連携・協働して事業を進めていくことが大切である。

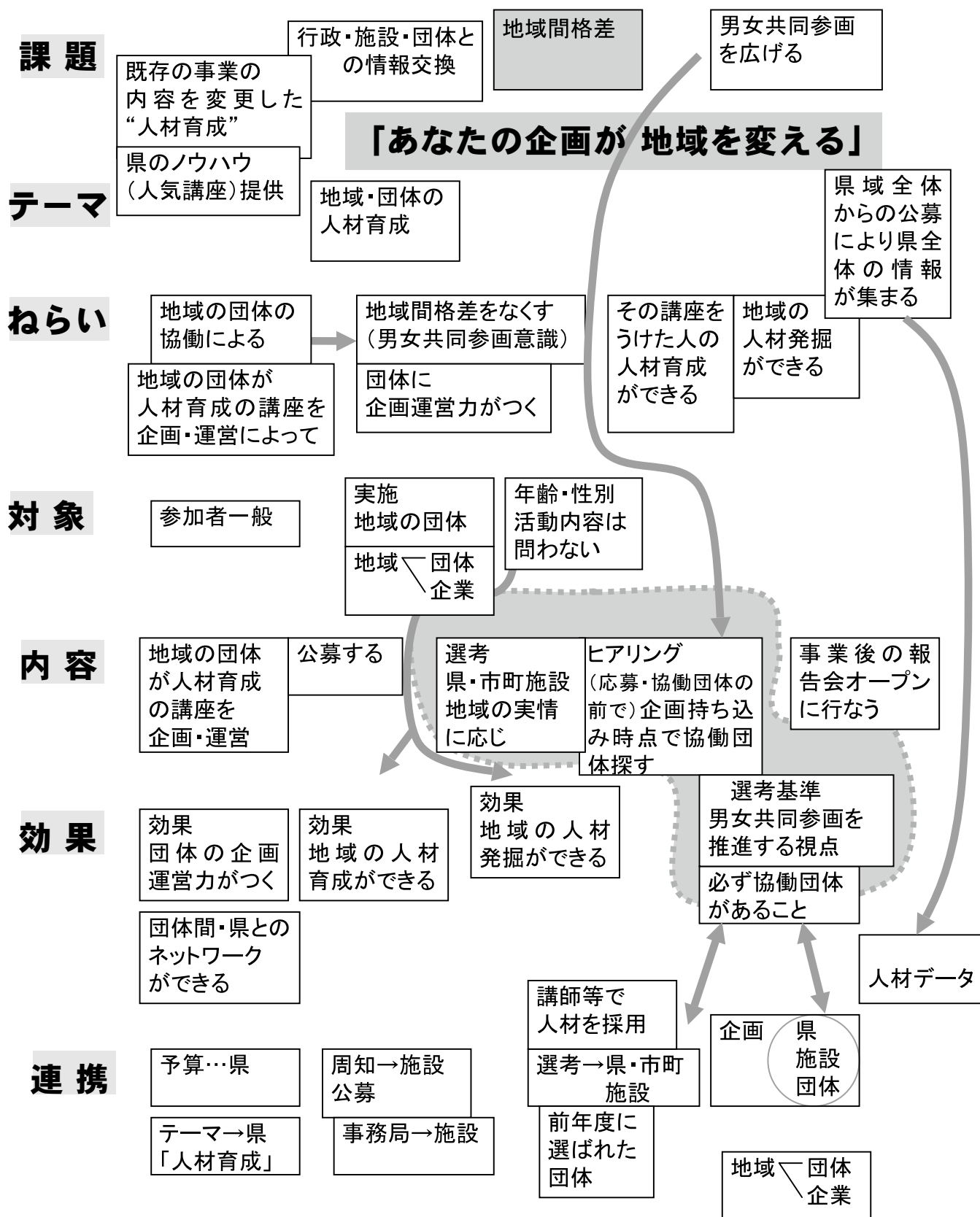
＜中野室長＞

参加者同士がコメントを出し合うことで、具体的なプランができた。

連携は上下でない関係であり、実践を通して進めていく。

女性の社会活動キャリアについて、個人・社会への影響という両面からとらえていることがよかった。

図表2-8 静岡県：事業計画



図表2-9 静岡市：事業計画

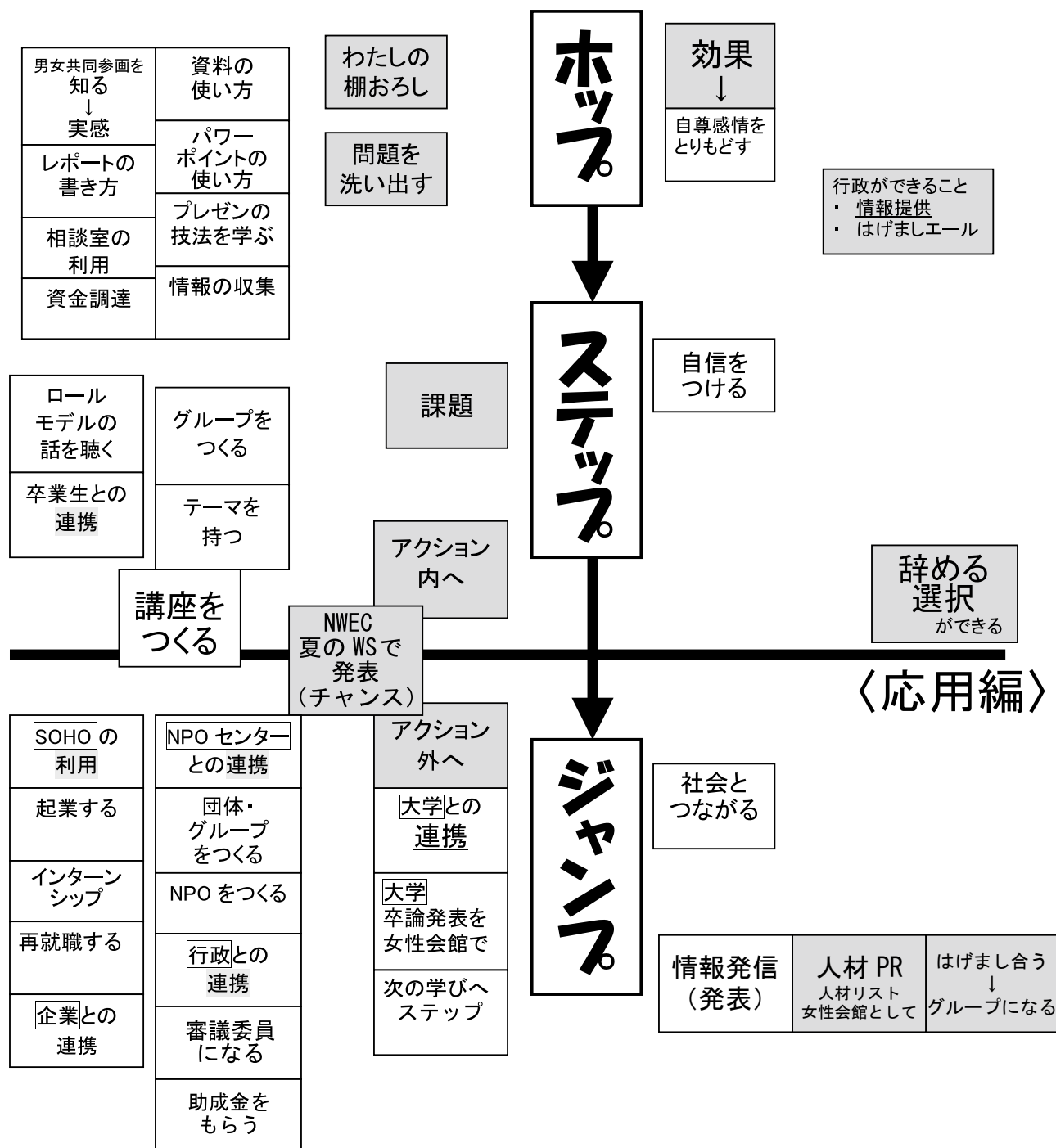
第9期アイセル女性カレッジ

テーマ：**ホッフ・ステップ・ジャンプ**

—はじめの2歩目をふみだす—

ターゲット：もやもやを行動で解決したい女性

ねらい：学びながら行動し、行動しながら解決する



テーマ：地域が元気になる女性の再チャレンジ！

ねらい：ジェンダーの視点をもった女性リーダーの育成

対象：結婚、子育て、介護などの理由で一旦キャリアを中断したが、これから何かを始めたいと考えている女性（おおむね 35 才以上定員 25 名）

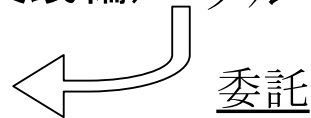
内容：『地域が元気になる女性の再チャレンジセミナー』

① 男女共同参画基礎講座

② キャリアアップ講座（実践編）

グループ化

③ 協働講座



委託

①の内容 1.ジェンダー入門講座

2.データを読み解く

男女共同参画（ジェンダー）統計

3.現代家族論

4.ロールモデル事例発表・講座の振り返り・まとめ

例〔起業家・企業の女性キャリア支援者
自治会の女性役員・まちづくり地域活動者など〕

②の内容 1.キャリアの棚おろし

2.コミュニケーション UP 講座

3.チャレンジプランの作成・発表

できれば（グループ化）

テーマ：ちょっくら寄って！

—センターでの新たな出会いをプロデュース—

☆ **ねらい**：センター・団体・行政の有機的なつながりにより、
新しい人材を発掘する。

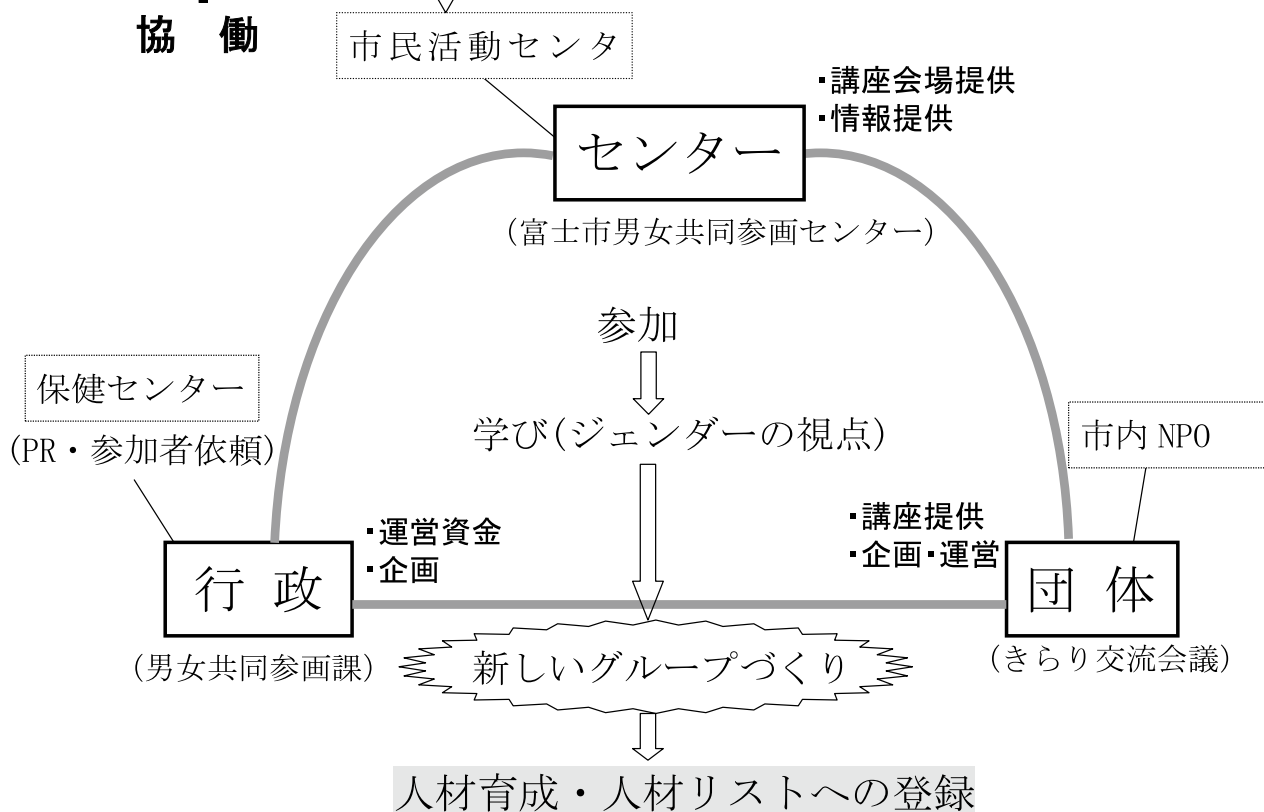
☆ **対 象**：子育て中のパパ・ママ、勤労者

☆ **内 容**：・情報収集の場
・“ほっ”とできる場＝ほっとスペース } の提供

☆ **効 果**：
 ・出会いのきっかけづくり
 ・センター機能・団体の PR
 ↓
 学びのきっかけ ⇒ 行動につながる

☆ **影 響**：〈個人〉学びを深める→講座等への参加

☆ **連 携
協 働**



テーマ：既存のモデル地区の事業の改革

実現!!

★ **ねらい**：地域における男女共同参画の推進
(女性リーダーの育成!)

★ **対 象**：地域住民
(自治会、学校、PTA、保健委員、民政委員等) 公募する

★ **内 容**：地域の課題を男女共同参画の視点でとらえて、自らが地域
でできる啓発活動を計画、立案し、実施(計画、決定)。
※住民が決定(家事・育児、高齢者・介護、安全・安心など)
環境、保全

防犯パトロール

課題

- 単年度で終了し継続性がない。
- 女性リーダーが多く育っていない。
- 連携のありかた(役員が1年で入替えする。)

対応

- 地域で活動している団体の参加。
(スポ少、ガールスカウト、花の会、美化グループ)
- 年度をまたがない事業計画と人選。
- 行政、センター(施設)市民(団体)と協働連携(広報活動)
(情報の共有化)地域人材の発掘

効果

- ✦ 女性防災委員が増えた。
- ✦ 施設に関心を持つ(議会傍聴、広報紙を読む)
- ✦ 現代的課題に関心。→ 良い市民が育ちつつある。

テーマ：7区で男女共同参画推進

課題：人材が活躍できる機会が少ない

（浜松市は〇〇社会）

ねらい：人材が活躍できる場の提供

対象：7区の協議会委員（各20人）

内容：各区の協議会ごとに、男女共同参画の視点に

会議に
あわせて
実施する

たった地域課題解決型のワークショップを実施する

市の現状
把握

女性が参画
できる方策
をさぐる

男女参画型
による

連携：

団 体

- 企画
- 進行
- 評価・報告

センター

- 会場
- 企画
- 資料提供・PR

ステップアップ
講座

行 政

- 区との連携
- 日程・会場
- 予算

テキスト
イラストポスター

所管する各区
議会との調整

効果：☆人材発掘

☆意識の変化

☆まちづくりの新規提案・提言！

テーマ：女性人材育成のための基礎講座

ねらい：地域づくりにおける女性の人材育成

講座終了後も継続してエンパワーメントし、意思決定・方針決定へ参画できるような人材育成

対象：30～40代の子育て世代の女性

団体の若手メンバー

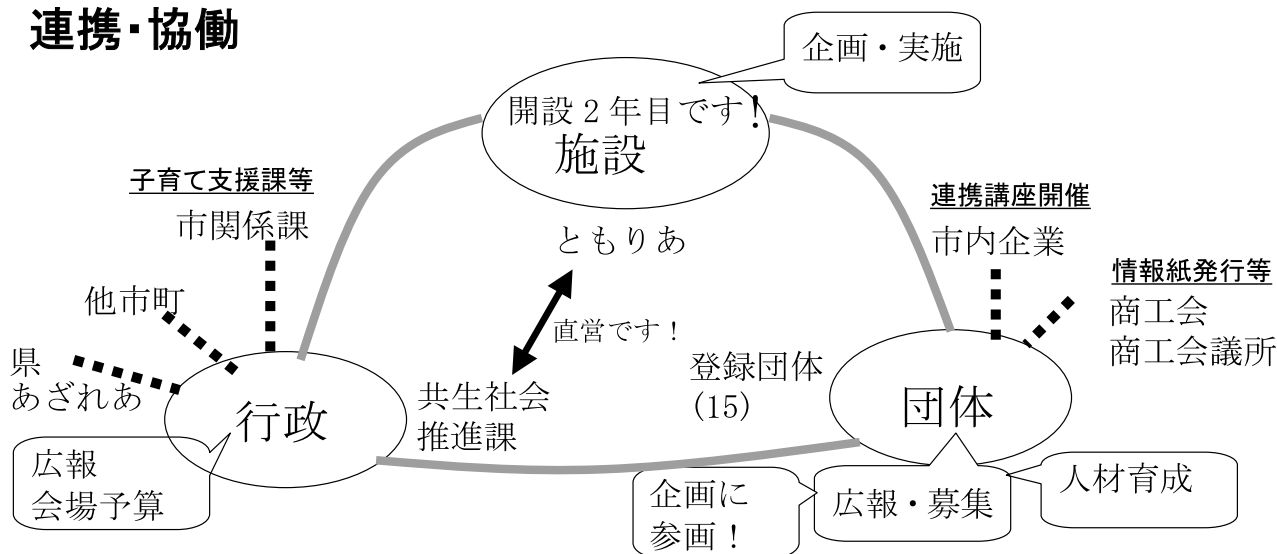
内容：男女共同参画の視点

計5回
(1回3時間)

男女共同参画の具体的課題

- ① はじめの一步＋ワークショップ
- ② メディアリテラシー＋ワークショップ
- ③ 家族の中の自分＋ワークショップ
- ④ 私って誰？＋ワークショップ
- ⑤ 地域づくりの中で私ができることは？＋ワークショップ

連携・協働



影響

連携・協働による効果

個人への影響

地域社会への影響

- ニーズの把握がしやすい
- ネットワークの強化
- 広報の効果が確認できる
- センターの周知・理解
- 男女共同参画への気づき
- 社会活動へのきっかけづくり
- 人材提供
- 人材発掘

男女共同参画社会の推進

【テーマ】

男女共同参画活動家養成と センター利用団体のネットワーク強化

【ねらい】

センター利用団体のネットワークを強化し、
男女共同参画意識の醸成

【対 象】



【内 容】

- ① 3団体位ずつに分け、互いの活動に協力参加
- ② 各団体のかかえている問題解決のための講座開催
- ③ ワークショップによる男女共同参画の話し合い

【連携・協働による効果】

男女共同参画を広く伝えることができる。
女性の活躍できる場が広がる。

5. 成果と課題

同一市内の三者が話し合う機会がほとんど持てていない所もあり、「行政・センター・市民との話し合いの場が大事である」「三者一緒になっての計画づくりが必要」という声が多かった。討議中には、それぞれの立場から日ごろの思いや問題点が挙げられた。さまざまな意見が出て、課題抽出に苦勞するグループも見られたが、「学習支援者が居たことがまとまりにつながった」という声にあるように、実現可能なものにするための、学習支援者の存在は大きかった。

また、中間報告の時間を取り、相互にコメントを出しあったことに対しては、「中間報告時に意見をもらったところを活かしながら作成できた」「再検討する時間が持てた」「それぞれのグループに対してコメントをもらうことがとても良かった」という声があった。1分間に「良かった点」「改善点、疑問点、アドバイス」の2つのコメントを記入することについては、「付箋にコメント書く時間、まとめる時間が短かった」「コメントを書く時間が短いが、かえって集中できてよい」との両方の意見があった。全体としては、グループの発表が進むにつれて、要点を簡潔に記入していく様子が見られたので、短時間に集中して考えをまとめることも本グループ・ワークで獲得できるスキルの1つであると思われる。

完成した事業計画案には、「各主体の連携、役割分担の作成にもう少し時間が欲しかった」「三者連携の重要性がわかったので、さらにそれを取り巻く他団体との連携についても考える時間が欲しかった」という声があり、より、実現可能なものにするためには、三者で計画案を実現するための連携協働図を、具体的に落とし込む作業に時間を配分することができれば、より実践的なものとなったと思われる。本事業は、この実験プログラムの延長として「実践・活動の中で行われる学習（アクティビティ・ラーニング）」（後述）をもねらいとしているので、この三者によって、今後、再度事業計画を確認し、実施していく機会がもてることに期待したい。



(5) 課題解決に向けた実践（目標 6、7）（千葉県）

(5)ー1 課題解決につながる課題を立てる（目標 6）

1. 研修目標、2. ねらいは静岡県（p.66）と同じであるため省略した。

3. 進め方

(1) 概要

女性が社会活動キャリアを積み、地域づくりに参画する人材に育つための支援の課題を、各市町村の重点分野（佐倉市：農業、香取市：観光、八千代市：子育て、木更津市：教育・PTA・行政、習志野市：男女共同参画）に添って立て、その課題解決に向けて関係者が連携・協働して取り組む事業計画案づくりにつなげる。そのためにまず、鍵となる「連携・協働」の考え方と事業実施のポイントについてミニレクチャーで確認し、次に市町村のグループごとで取り組むべき課題について討議し、決定した。最後に参加者全員で各グループの討議内容を共有するためのグループ発表を行った。

(2) 時間配分（12：35-13：45 計1時間10分）

内容	時間	手法等
地域づくりと連携・協働について考える		
I. 連携・協働に関するミニレクチャー	20分	ミニレクチャー
II. グループ討議	40分	ワーク
III. 課題の発表・共有	10分	

4. 実施内容

■地域づくりと連携・協働について考える

I. 連携・協働に関するミニレクチャー（講義レジュメは巻末資料）

まず、これまでとすると行政に任せてきた地域づくりに市民が参画し、行政と協働してくらしやすいまちを創っていく「協働による地域づくり」が求められてきており、その市民の参画を男女共同参画で進めていくために、地域づくりに参画する女性人材の育成が急務であることを話した。次に他市、他部局の事業、および他市のまちづくり女性グループへと連携・協働が広がっているH市女性センターの「まちづくり・観光事業」を事例として、協働を進めていく過程とそのポイントについて説明した。最後に、これから行うグループ・ワークも含め、それぞれの立場で異なる皆の力を合わせて、あるものを持ち寄り一緒に汗を流し、より質の高いものを創り出していくという、連携・協働の事業の形をいつも念頭においておくことの重要性を指摘し、グループ討議につなげた。

II. グループ討議

グループ討議の留意点として、各グループの重点分野での取り組みを前提とすること、女性が地域づくりに参画するための「支援」の課題に焦点づけること、そして最後に緊急性、必要性、実現可能性の3つの観点から課題を立てることとした。

(1) グループ分け：地域（市）ごとに5グループに分かれた

千葉県内の5地域（市）がそれぞれ取り組みの重点分野を決めており、その各分野の課題に焦点づけるために、地域ごとのグループとした。各グループに一人ずつ学習支援者がつき、次の事業計画案作成グループ・ワークまで同じグループ、および支援者とした。

(2) グループ討議の手順

① 課題出し

まず、個人で各地域の重点分野に添って地域づくりに参画する女性を支援する時の課題を思いっただけ付箋に書き出す（5分間の個人ワーク）。次に、グループ全員で付箋に書いた課題を模造紙上に出し合う。その時、課題だと思ふ理由やそれに対する意見などを交換した（20分間のグループ・ワーク）。

② 課題の集約と取組課題の決定

出てきた多くの課題を、まず緊急性、必要性の観点で整理し、さらに実現可能性の観点を踏まえて、各グループで取り組む事業につながる課題を決定した（20分間のグループ・ワーク）。

Ⅲ. 課題の発表・共有

各グループ2分間の持ち時間で、グループ討議の内容と決定した取組課題について発表し、全体で学びを共有した。各グループの取組課題を板書し、確認した。

5. 成果と課題

- ・課題を立てるという研修のねらいについては、ほとんどのグループで次の事業計画案作成につながる具体的な課題が出てきたが、他方で「課題の立て方は難しかった。課題という言葉がピンとこない」という意見もあった。いろんな文脈で「課題」という言葉が使われるので、整理し学習者にわかりやすい表現を工夫する必要がある。
- ・グループ討議の進め方については、「付箋を使い書くことで、疑問点や抽象的な言葉もわかりました」「話すだけでなく助言を得ながら組み立てることができ大変よかった」「実現可能性のあるテーマを考え、企画していくこのプログラムは大変参考になりました」と、効果的であったことがわかる。
- ・地域ごとの重点分野に沿って行ったことについては、「あらためて自分の地域のことを考えることができ大変有効であった」とよかったが、「もう少し地域の実情を知っていたら深い分析ができただろう」という事前学習の必要性の指摘もあり、より効果的な研修とするためには参考にすべきことであろう。

(5)ー 2 地域づくりに参画する女性人材が育つための事業計画案グループ・ワーク (目標 7)

1. 研修目標

連携・協働を活かし、地域づくりに参画する女性人材育成支援の事業計画案を作成する

2. ねらい

女性関連施設職員、行政担当者、女性リーダーでグループとなり、事業計画案の作成を通じて協働を実践する。そのとき、①役割の変更・創造、②機関等での意思決定・方針決定への参画、③国・自治体等の政策決定への参画、を共通視点としてもつ。

3. 進め方

(1) 概要

「(4)ー 1 課題解決につながる課題を立てる」で決定した取組課題に基づき、地域づくりに参画する女性人材が育つための事業計画案を作成し、その計画案を地域に持ち帰って次年度以降実現していくアクティビティ・ラーニングにつなげる。そのために、地域の実情を踏まえた実現可能性の高い事業計画の作成をめざし、地域ごとの立場の異なる三者のグループ内での事業案作成作業も大切にしながら、他のグループからの意見を効率よく聞き、作成した事業案を再検討、修正することを通して、より練られた事業計画案を作成する一連のグループ・ワークを行った。

(2) 時間配分 (13:45-16:40 計 2 時間55分)

内容	時間
I. 事業計画案の作成	95分
II. 発表と意見交換 (7分×5グループ)	35分
III. 作成した案の再検討	20分
IV. 修正点の発表 (2分×5グループ)	15分
V. コメント	10分

4. 実施内容

I. 事業計画案の作成

まず、事業計画案の形式はどんなものでもよいこと、ただし次の項目－「課題」「テーマ」「ねらい」「対象」「連携・協働」「内容」、できれば「効果」－を計画案にもりこむこと、ねらいに記した3つの共通視点を念頭において作成していくことを説明し、グループごとの作業に入った。作業の進捗状況の目安として、「テーマ」「ねらい」「対象」の明確化と「連携・協働」関係の洗い出しまでを「事業案作成パート1」、事業の「内容」をつくりだし、その「効果」までを考慮する「事業案作成パート2」、模造紙の発表用シートを完成する「まとめ・準備作業」と、作業時間を3分割して知らせた。しかしこれはあくまで目安で、作業の進め方は各グループと学習支援者に任せ、事業案がスムーズにつくられることよりも、皆で作業する過程を大切

にした。各グループの事業計画案のテーマは次のとおりである。

【各グループのテーマ】

- ・佐倉市（分野：農業）「職員事業を展開できる若い農業女性の育成事業」
- ・香取市（分野：観光）「おてらで茶会：まずはエプロンはずしてみませんか？」
- ・八千代市（分野：子育て）「子育て支援スキルUP講座」
- ・木更津市（分野：教育・PTA・行政）「企画立案集団のネットワークの形成」
- ・習志野市（分野：男女共同参画）「市民意識の向上」

II. 発表と意見交換

各グループで作成した事業計画案（模造紙を掲示）を5分間の持ち時間で発表した。この研修での発表の時間は、発表する人だけが作業するのではなく、聞いている人たちもよりよい事業計画案づくりを応援する作業として、発表を聞いて「よかったところ、評価できるところ」をピンクの付箋に、「改善点・疑問的、アドバイス」を青の付箋に記入し、発表終了後事業計画案に貼りあった。この付箋を使つての意見交換の作業時間として、各グループ2分間とつた。

III. 作成した案の再検討

発表を通して作成した事業計画案を振り返り、また他のグループからの付箋によるコメントを参考にしながら、事業計画案の再検討を行った。修正、追加箇所は、次の修正点の発表時にわかるように、カラーマジックで記入した。

IV. 修正点の発表

再検討した部分を中心に、各グループ2分間の持ち時間で発表した。他のグループの参加者からの付箋による意見、指摘のコメントが再検討に役立ったようで、どのグループの発表も、寄せられたコメントに答える形で再検討の結果が報告された。

V. コメント

コメンテーター2名から、作成された事業計画案、およびその作成グループ・ワークについての講評と、今後この計画案に基づいて地域でアクティビティ・ラーニングを展開する際の助言があった。

5. 成果と課題

- ・事業計画案の作成を通じて協働を実践するというねらいについては、同じ地域の同じ分野の関係者であっても、この研修で初めて出会い作業する参加者が多かったが、「様々な立場からの意見が聞けて参考になった」「具体的話に発展し、事業が固まったのでよかった」「今回企画した事業計画案が実現できるよう、もう少し具体的に練り直していきたい」といった今後の展開への端緒が見られた。しかし「2日間という期間はあまりにも短い」という意見もあるように、今回の研修でのつながりだけで地域に持ち帰って実際に実践につなげていくことには無理もあると思われ、今後のフォローアップが必要であろう。
- ・グループ・ワークの進め方については、「短期間で、企画・立案作成する作業の中で、どれに重点をおくか訓練になった」「他の地域の考え方などがわかり、とても面白かった」「修正点の発表までしたのはよかった」と初めてこのようなグループ・ワークを経験する人た

ちが多い中で一定の成果をあげることができた。これは、「的確なアドバイスによってよりよりものができたように思う」という感想にみられるように、学習支援者の役割が大きい。このような研修にどれだけ学習支援者を配置できるかが課題であろう。

- ・千葉県は静岡県に比較し女性関連施設が少ないが、全国的にみると地方ではそれが一般的である。女性関連施設のない地域で連携・協働を進めていくには、そのきっかけとして事業計画案作成グループ・ワークのような研修が、お互いに鍵となる人材と知り合い、作業を通してその個人的人間関係を深める貴重な機会となり得る。千葉県の場合は、地域ごとに取り組みの重点分野を決めていたため、分野によっては男女共同参画分野以外の関係者も加わり、部局を超えたつながりの場にもなった。



図表2-16 佐倉市：事業計画

○テーマ

食育事業を展開できる
若い農業女性の育成事業

○ねらい

世帯主中心で
若い農業女性
の出番が少ない

若い農業女性
が参画しにくい

若い農業女性
が率先して行動
しにくい

若い農業女性の
意識を変えていく

食育を通じて女性自身
の意識を変えていく

○内 容

連続講座
(託児付き)

参画の必要性を
感じさせる中身

女性認定農業者
に語ってもらう

男女共同参画の視点で

・太巻寿司
料理教室(資金面)

・米粉パン教室
(資金面)

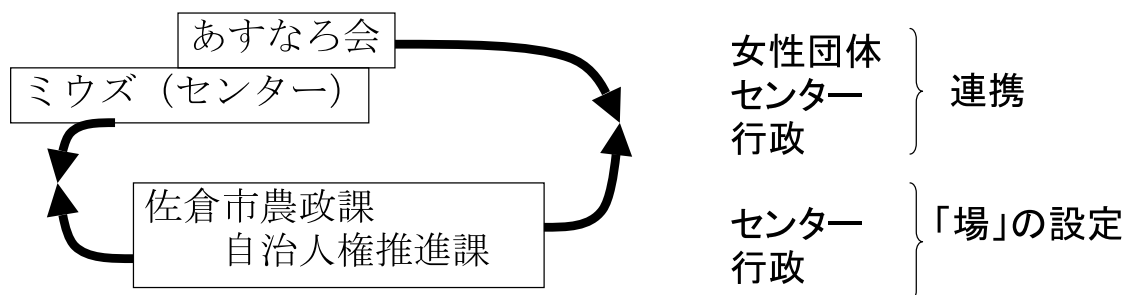
○対 象

若い農業女性
まずは家族経営協
定を結んでいるとこ
ろから(20 軒)

女性認定農業者
(5 人)
農業経営に対して
意思決定のできる女性

育成事業を行った結果

事業の対象
一般市民



○メディアの活用

対 象 20 代～40 代位の次世代をになう男女
(父、母、子、祖父母)対象人数 200 名

ねらい 女性の意識改革
伝統・文化を大切にしながら男女共同で
行事を行う

テーマ おてらで **茶会** → **演奏会**
講演会

※人・文化・歴史
との交流を通じて
仲間作り、意識改
革へ

※まずはエプロンはずしてみませんか？

連携と協働

伽瑠茶倶楽部—行政
主催

来年 10 周年
当初のスローガン
の見直し、確認

役割分担

行政

広報
資金

伽瑠茶倶楽部 3 名
運営支持者 30 名

倶楽部のメンバー
に若い世代を！

メリット

1. 資金面での支援で
2. スタッフ力に支えられて
3. 伽瑠茶倶楽部に支えられたネットワーク
4. 地域の活性化

内容

寺での茶会

若い人の
意見交替の場

若い世代の
人にどんな地
域作りにした
いか

この場で出た
意見は行政
へのメッセー
ジ

講演会

演奏会

テーマ 子育て支援スキル UP 講座

主催 男女共同参画センター

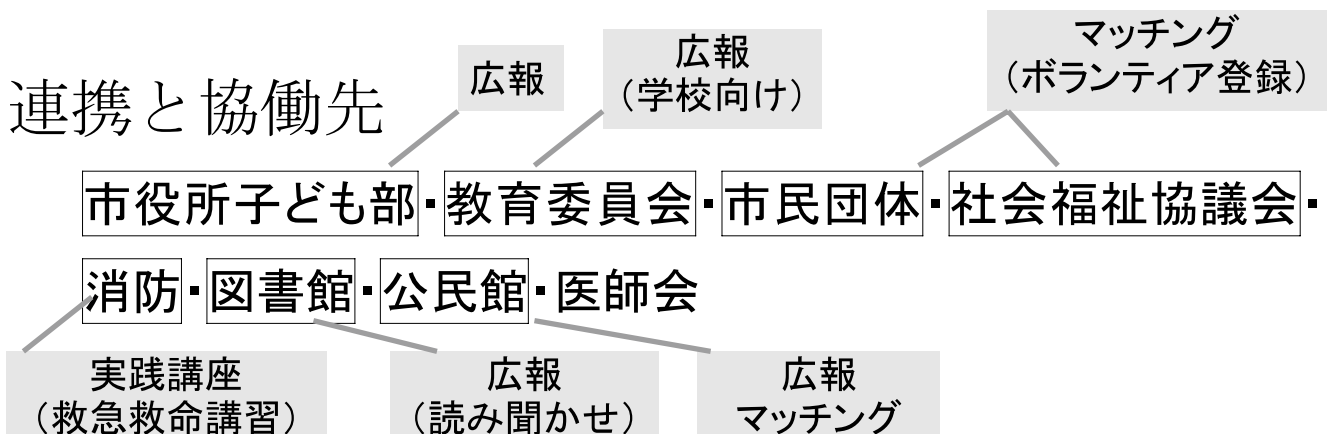
背景 八千代市は、東葉高速鉄道沿線を中心に若い子育て世帯が増えている。人間関係が希薄な中で、母親だけが孤独な子育てをするのではなく、夫や地域の人との理解や力を借りることができるようにする。

ねらい ①八千代市における子育て支援に関わる人材を育成する
②行政、市民団体、その他とのネットワークづくり

対象 子育て支援に興味のある人

内容 全5回(1回2時間程度 10:00～12:00)託児付き

- ①・オリエンテーション、講座
- ②・スキルアップ講座(手遊び、わらべ歌、読み聞かせ、救命救急講座など)
- ③・実践講座
- ④・実践講座
- ⑤・まとめ、マッチング



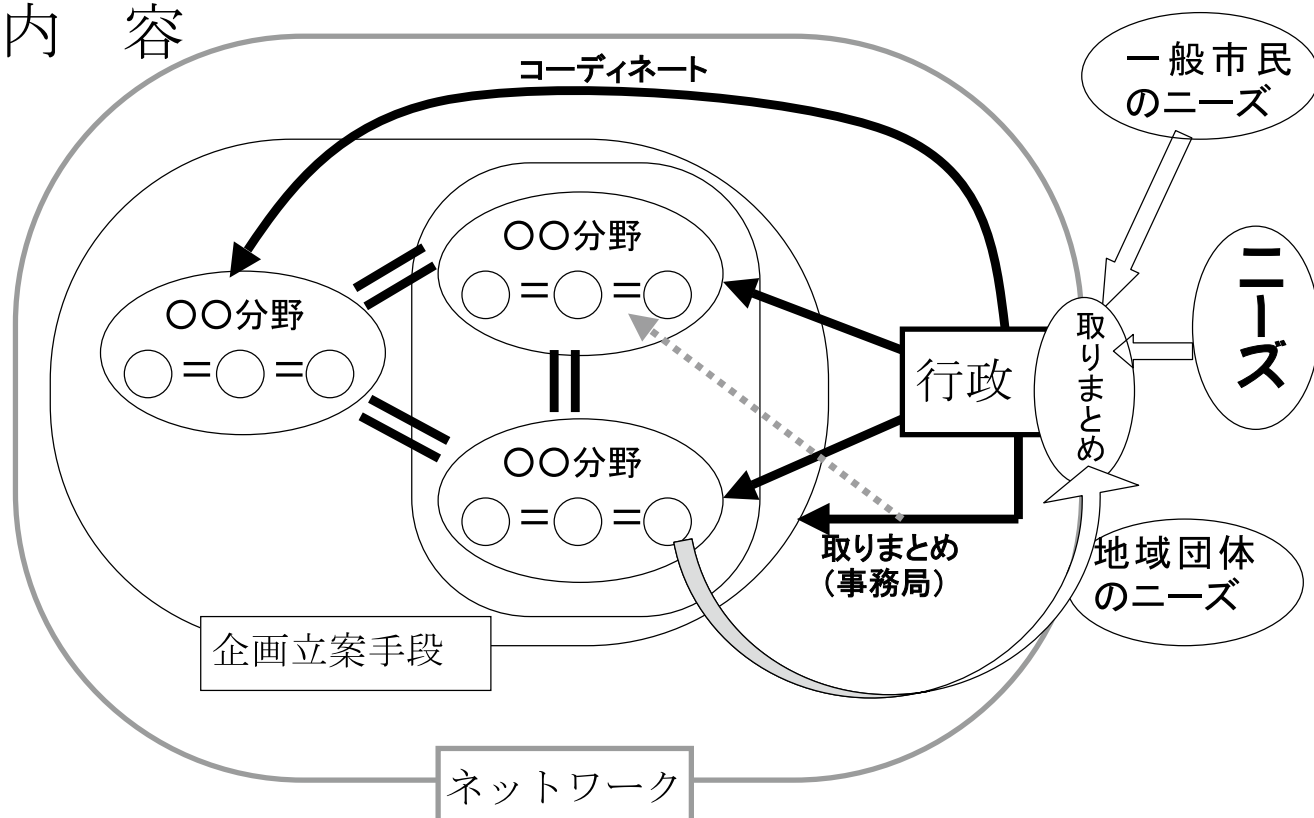
効果 講座修了生が、様々な団体で活動を継続することにより、参画につながっていく。

テーマ 企画立案集団のネットワークの形成

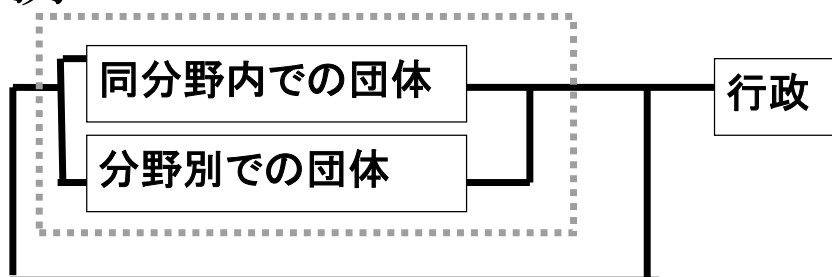
- ねらい ①魅力ある企画と立案し、地域づくりに参画する
女性人材の育成を目指す
- ②現在、地域づくりに参画している女性リーダーの
ネットワークの形成

対 象 現役の女性グループ

内 容



連 携



テーマ 市民意識の向上

ねらい

自分を高めたい

地域社会の一員として何かがしたい(貢献したい)

男女共同参画の視点

自分が「今」生きている時代への責任

方法

発展性を持たせる

シリーズ形成の講座

ワークショップ

対象

子育て世代のお母さん

- ・潜在的要求
- ・子ども以外の人(話題)と話がしたい

内容

お母さんのための社会学

地域経済学

めざせ起業家

心理学

コミュニケーション術

楽しみの見つけ方

スモールステップを積み重ねることが大切

- ① 子どもセンター
- ② 男女共同参画センター
- ③ 公民館

①

子育て前のなりたかった自分を再発見するためのワークショップ

②

地域住民として今自分にできることを考える

③

小さなステップをふみだそう！まず身近で出来ること

グループ活動へつなげる

リーダーが育つ

向上！

時間は必要！

個人および地域社会への影響

地域社会を活性化

生活が楽しくなる

子どもが豊かに育まれる

コミュニティ社会の実現！

連携・協働

市民活動団体

子ども部との連携

公民館のあり方を再検討

教育委員会との連携

地元大学との連携

第3章 実験プログラムの成果および課題

本実験プログラムは、「実践・活動に結びつく学習」（アクション・ラーニング）を目指し、方法としては、全体をワークショップ型を基本に行った。ここでいうワークショップとは、多様な人たちがその場で出会い、各人がもてる力を出し合い、学習をつくっていく参加型の形態を意味する。「実践・活動に結びつく学習」を具体化するために、事業計画案の作成を本実験プログラムの最終目標とした。

本章では、本実験プログラムの成果および課題について、企画、方法、運営管理（ロジスティックス logistics）の面から振り返る。企画面では、プログラム全体の構成について、次いで、研修目標間の関連性を振り返り、研修目標が関連し合うことにより、最終的に研修目的がいかに関達されたのかを検討する。

方法については、ワークショップ型の学習方法として本実験プログラムで用いた方法が、「実践・活動に結びつく学習」のために適切な方法となっていたか、学習を構成する人、また講義とグループ・ワークの組み合わせやグループ・ワークの中の流れという点から検討する。

プログラムを効率的に進めるには、関係者の連絡調整、会場設営、当日の役割分担など運営管理（ロジスティックス logistics）が重要であるため、その点からも振り返る。

最後に、実施したことによって明らかになった問題点を改善したプログラム・デザインと、それに基づいた学習プログラム構成案を示す。第1章でプログラム・デザインについて説明した際に述べた通り、本プログラムが目指した到達点はPDCAサイクルのPlanの作成であるが、Do（実践）への展開を含むものとして企画を立てた。そして、すでに実践につなげたという報告も得ている。実践への展開事例を紹介するとともに、本プログラムの今後の展開可能性という点から検討する。

振り返り際には、第2章でも引用した研究協力者（参加者）の「ご意見シート」に書かれた意見（巻末資料1 参照）、実験プログラムが終了した直後に行った自由記述方式のアンケートを参考にして振り返る（巻末資料2 参照）。終了後アンケートは、静岡県では、17名（参加者23名中）、千葉県では9名（参加者16名中）から回答を得た。

1. 企画について

(1) プログラム全体の構成

プログラム全体の構成については、「無駄のないプログラム構成（千葉、団体）」、「構成は非常によく練られたものであり、いい流れが見える（静岡、団体）」という肯定的な意見が多かった。企画の際にプログラム・デザインを何度も練り直し、構成要素間の関連性を明らかにしてプログラムの流れを作り出すように考えた結果と思われる。また、プログラムの冒頭に「プログラムの意味・意義を理解する」という構成要素において、全2回で何をどのような方法で実施するのかを研究協力者に説明したが、そのことによって、今自分たちは全体のどこにいるのか、プログラムがどのような目的に沿って進められているのかを把握でき、「問題意識をもって取り組むことができた（静岡、行政）」ようである。

開始時にプログラムの全体像と到達点を示すこと、また、プログラムの途中でも現在地を示すなど、参加者が到達点と現在地を確認しながら進めることは、研修の効果を高める上で必要であることが確認された。そのためには、プログラム・デザインを作成し、最初に学習者に提示することが重要である。

しかしながら、本プログラムは「無駄がない」反面、時間的な余裕も少なく、「スケジュールがタイトだった」（静岡、施設）、「1つずつの構成要素時間を長めに」（静岡、施設）という意見もみられる。実験プログラムは、静岡県、千葉県ともに2回ずつ実施し、各回とも10時開始、17時終了という時間設定であった。目的に達するのに必要な内容は含まれてはいるが、それを2回で消化するにはやや厳しかったように思われる。また、休憩時間を最小限にとどめ、1回目、2回目ともに終了と同時に散会してしまったことによって、参加者同士の交流を十分に行うことができなかった。研究協力者の意見にも、参加者同士や講師ともしっかりと交流したかったというものが見られた。余裕のないプログラムの場合には、宿泊して夜の時間帯に交流の時間を入れるというやり方も考えられる。宿泊研修を行うためには、早いうちから日時の設定を行う等の準備が必要であるが、交流を深めるためには有効な方法である。

本章の最後で、修正したプログラム・デザインとそれに基づくプログラム構成を提示し、改善案を示したい。

(2) 研修目標間の関連性の観点から

本実験プログラムは、目的として、「多様な機関との連携・協働を推進しつつ、女性の社会活動キャリアの形成を促進し、地域づくりに参画する人材が育ち、力をつける」ということをおいた。「地域づくりに参画する人材」とは、地域における男女共同参画を推進する共通基盤をつくる様々な活動を通じて「社会活動キャリア」を形成している人のことである（第2章参照）。実験プログラムの中でその支援方策を考えるとともに、施設、行政、団体リーダーのそれぞれが、実験プログラムのプロセスを通じて力をつけることを目的として行った。

実験プログラムの実施過程は第2章に示したが、目的に達する筋道を7つの目標に分け、それぞれの目標が達成されていくことで目的に近づくように企画した。目標を再掲する。

- 目標 1 男女共同参画についての視点をもつ
- 目標 2 地域における男女共同参画の状況と課題を把握する
- 目標 3 女性関連施設、男女共同参画行政、女性団体の現状を把握し、課題を把握する
- 目標 4 女性のキャリア形成支援における現状と課題を把握する
- 目標 5 女性の社会活動キャリア形成事例の分析を通じて支援方策と課題を明確化する
- 目標 6 課題解決に向けた課題を立てる
- 目標 7 連携・協働を活かし、地域づくりに参画する女性人材が育つための事業計画案を作成する

このような目標を順次達成していく中で、研究協力者が地域における人材育成の課題を明確化し、課題解決につながる事業計画案を作成し（Plan）、地域に持ち帰って実践（Do）にかなげるというように、本実験プログラムをPDCAサイクルの中に位置づけるというのが全体の流れであった。

それでは、目標間の関連性に着目しながら、目標を達成していくことで目的が達成できたのかどうかを検討してみたい。

「目標 1 男女共同参画についての視点を持つ」は、研究協力者は男女共同参画についての知識や考え方をすでにもっていると思われるが、改めて男女共同参画の視点とは何かについて確認し合い、共通認識をもってこの後のプログラムに参加してほしいとの考えから、男女共同参画をテーマとした講義を行った。講義時間は40分間、質疑応答が20分間であったが、第2章3-(2)で見た通り、研究協力者の満足度は高いものであった。男女共同参画推進意識を高めてからその後のプログラムを実施したことで、研究協力者の本プログラムへのモチベーションが高まったという成果がみられた。

「目標 2 情報を活用した実態把握」は、会館が国際的な女性政策（男女共同参画政策）の動向の中で、収集・蓄積してきた情報について講義（必要な知識の提示）を行い、さらにその中でも男女共同参画の実態を把握するために有効な「男女共同参画統計」に焦点をあてて、講義とグループ・ワークを行った。グループ・ワークでは、静岡、千葉それぞれの地域における男女共同参画の状況について、統計データに基づいて概観的に把握することを意図した。目標 1 との関連では、「社会的性別の視点」をもって数字を読み、男女間格差を把握することで、男女共同参画の現状を理解することがねらいであった。最初に静岡県で行った際には、目標 1 と目標 2 の関連づけが必ずしも明確ではなかったが、その点を千葉県では改善した。目標 1 で提示した男女共同参画の視点が、プログラム全体を通じた横糸を成しているため、プログラムの進行にともなって引き継がれ、繰り返されることが、研修全体を通じて「男女共同参画推進意識を涵養」するためには必要であった。

目標 3 から目標 5 までは地域における人材育成に焦点を当て、問題と課題を区別していく過程であった。目標 2 から目標 3 への移行の際に、数字によって概観した地域の男女共同参画の現状や問題点への気づきを深めることなく、目標 3 の地域の人材育成の課題把握に移行してしまった感がある。プログラム企画の最初の段階では、地域の男女共同参画の課題全般について

幅広く参加者が議論することを考えていたのだが、事業計画案の作成をより効率的に行うためには、この段階で人材育成の課題にしぼる方が適していると考え軌道修正したという経緯がある。しかし、静岡県では、女性人材・女性の社会活動キャリアについての説明のないままに問題把握のグループ・ワークを行ったため、女性人材という定義があいまいでよくわからなかったという研究協力者の意見も見られた。千葉県では、この点の反省もあり、女性のキャリアについての講義を行った後に人材育成の課題に関するグループ・ワークを行ったが、そのことによってねらい通りの効果を上げることができたように思われる。目標3で人材育成に絞って議論するならば、その前にそれに関連した知識の提示が必要であった。「必要な知識の提示」とグループ・ワークとの関連については、次節で検討する。

グループ・ワークの方法として、目標3の「各地域での女性の『人材育成』について、現状からみえる課題を明確にする」というグループ・ワークは、「問題」と「課題」を区別するワークと位置づけた。本実験プログラムにおける「問題」と「課題」の使い分けは、第2章4-(3)-2に示したが、問題とは実態の中のマイナス面を指す。それぞれの参加者が整理されていない問題を持って集まっていると想定されるので、できる限り具体的に問題を出し合い（付箋に書き出す）、それを整理しつつ、今後課題として取り上げる可能性のある問題、参加者同士に共通する問題を見出していくためのグループ・ワークである。「問題」は、解決に向かって選択されることによって「課題」となると考えた。

目標3で整理された問題を、目標4で分析に必要な知識を得て、さらに目標5で「社会活動キャリア」について「分析シート」を使って分析し、「解決すべき問題としての課題」として明確化していくことをねらいとした。しかし「社会活動キャリア」が研究協力者にとって新しい考え方であったこと、また事例分析にかけた時間が必ずしも十分ではなかったために、事例分析方法としては研究協力者に好評だったものの、目標3で整理した問題を、事例分析と結びつけにくかったのではないかとと思われる。

「目標6 課題解決に向けた課題を立てる」では、「解決すべき課題」と研究協力者が考えたものをさらに「緊急性、必要性、実現可能性」の3点から絞り込むこととした。このことを「課題を立てる」と表現し、事業計画を作成するための課題とした。この3点を提示したことで、研究協力者は本実験プログラムの随所で使われている「課題」という言葉にやや混乱しながらも、最終的には事業計画に結びつけるための課題を導き出すことができた。

また、「学習支援者がいたことが全体をスムーズに進めることや、考え方の整理のため良かった」（静岡）、「ファシリテーターの意見が役立ちました」（千葉）、「話をするだけでなく、ファシリテーターの助言を得ながら組み立てることができて大変良かった」（千葉）というように、ファシリテーターあるいは学習支援者が、課題を立てる際の促進役になっていたことがわかる。グループ・ワークにおけるファシリテーター・学習支援者の役割や関わり方については、次節で再度検討する。

「目標7」では、本実験プログラムの仕上げとして「連携・協働を活かし、地域づくりに参画する女性人材が育つための事業計画案」を作成することを目標に、静岡県、千葉県とも地域ごとに時間内に事業計画案が作成できた。ここでのグループ・ワークは、作成→発表→コメン

トをもらう→修正→発表という流れで行った。作成して終わるのではなく、途中で発表し、付箋に書いたコメントを聞き手からもらい、反映できるものはすぐに取り入れるという方法を取り入れたことが効果的であった。研究協力者からは、「作成した案を発表し、各参加者から良い点、改善した方がいいところを出してもらい、それをもとに再検討する方法はとても良かった。今日立てた事業案は来年度より改善して必ず実施したいと思った。」（静岡）、「修正点の発表までしたのは良かった」（千葉）と評価されている。事業計画案作成のグループ・ワークのこの流れは、他の研修事業でも応用可能なものと思われる。課題としては、「『事業につながる課題』という『事業ありき』から入ってしまう。『課題』が何かを十分つきつめてから行うのが『事業（方策）』であり、ここでの議論がとても重要だと思います」という指摘があった。

全体を振り返ると、事業計画案作成のグループ・ワークの流れそのものはねらい通りに進進したが、課題を明らかにしていく過程である目標3から目標6まで（問題→解決すべき問題としての課題→事業につながる課題）が、一連の流れとなるようファシリテーター・学習支援者が意識的につなげていくことが必要だったように思われる。

内容としては、目標1で行った講義の中で、男女共同参画の視点にとどまらず、男女共同参画を進めていく方向性・ビジョンについて含める必要があった。また、女性関連施設・男女共同参画行政・団体の役割、社会活動キャリア、連携・協働等、本プログラムのテーマに関連する知識・情報については、最初の講義の中で提示しておく必要があった。

(3) 研修目的の観点から

「多様な機関との連携・協働を推進しつつ、女性の社会活動キャリアの形成を促進し、地域づくりに参画する人材が育ち、力をつける」という本実験プログラムの目的の達成に関して、キー概念とした「連携・協働」、「女性の社会活動キャリア形成と結びついた社会的人材育成」の2つの点から検討し、その成果と課題について述べる。

(3)－1 連携・協働について

本実験プログラムの中で、地域において、様々な機関と連携・協働しながら仕事や活動を進めていくための知識や方策を学ぶと同時に、そのプロセスが連携・協働の実践となるように、静岡県、千葉県ともに女性関連施設職員、行政担当者、団体リーダーの三者に参加してもらった。研究協力者の意見によれば、

「市民・センター・行政職員の三者で作業することにより、実際に体験すること自体は、連携・協働に繋がったと思います」（静岡、行政）

「2日目に行った同じまちの三者が課題解決に向けて課題を立て、連携・協働を活かした事業計画案を立てるのも、3者の話し合いのなかで、連携・協力しなくては出来ないワークで、とてもよかった」（静岡、施設）

「グループワークにより、たくさんの人と情報交換できてこれからの事業の参考になった」（千葉、施設）

というように、実験プログラムに参加し、協働作業を行うことが参加者間の連携・協働につな

がったことが確認できる。特に、行政担当者と施設職員が一緒に仕事をすること、施設職員と団体リーダーとで事業を行うことはあるが、この三者が一堂に会する機会は多くはないということで、男女共同参画を進めていく上で、三者の連携・協働が効果的であるということが、本実験プログラムを通じて確認された。

課題は、同じグループとなった人とは話し合ったり作業ができたが、全体的に時間的な余裕のないプログラムであったため参加者同士で話し合ったり、主催者と参加者で意見交換する時間が持てなかった点である。また、一般的にワークショップ型学習において自己紹介は重要であるが、同じ地域からの参加者であること、女性関連施設あるいは行政からの呼びかけで集まるということだったので、自己紹介は所属と名前だけの簡単なものしか行なわなかった。同一地域外の人たちとの交流という点も考えるなら、もう少し自己紹介について工夫が必要だったと思われる。

連携・協働を進めていくための知識や方策については、前述の通り、事業計画案作成グループ・ワークの前に知識を提示する短い講義をおいた。20～30分程度の短い講義であっても新たな知識や情報となり得るのではないかと意図で入れたものであるが、事業計画案作成のものと前においてもよかったのかもしれない。また、講義を聞くだけでなく、静岡で提示したような連携図をモデルに、それぞれの地域ごとに連携図を作ってみるなど、時間をもう少し多く取り、グループ・ワークを伴った討議を行えば、連携・協働の知識・方法の効果的な習得につながったのではなかと思われる。

(3)ー 2 女性の「社会活動キャリア」形成と結びついた社会的人材育成について

本実験プログラムの特徴のひとつは、前節でも述べたように「地域づくりに参画する人材」を「社会活動キャリア」として捉えた点にある。また、その形成の過程を明らかにするために、「分析シート」を開発し、それに基づいて個人の活動を社会に結びつけるための視点や支援のあり方を考えるという新たな事例分析方法を考え出した。「分析シート」には、社会活動キャリアを形成するきっかけ、困難の乗り越え方、受けた支援、学習・情報など、研究協力者にとって事例を分析する際の視点となるような項目を入れ、事例を読み込みながら、「分析シート」に書き入れていくようになっている。参加者が「社会活動キャリア」への理解を深め、個々の女性たちが行っている活動を社会に橋渡しする際の方策を考えることにつなげるという意図から、このような「分析シート」を作成、利用した（資料編11～14参照）。

終了後アンケートでは、ほとんどの回答者が、新しい概念であった「社会活動キャリア」の意味と重要性について理解できたと答えている。また、「社会活動は個人的キャリア形成と考えていたことが、社会的人材育成に結びつくことを知った（静岡、団体）」というように、個人のキャリア形成を社会に結びつける視点を得た人もみられた。「自分自身が社会活動キャリアのロールモデルと実感した（静岡、団体）」、「ロールモデル分析により、社会活動キャリアを具体的にとらえることができた（静岡、施設・団体）」というように、身近に社会活動キャリア形成の事例が少なからず存在することやその価値への気づきもみられた。

この事例分析方法は、「社会活動キャリア」を理解するには適切であったが、事例の数をど

のくらい提示するのか、またどの分野の活動事例を選定するかといった、事例の選定に課題が残された。今回は、静岡県、千葉県ともに異なった3事例を提示し、グループごとに1事例を選択した（第2章4-(3)-4）。事例分析の方法を学ぶためならば、必ずしも多様な活動事例に触れる必要はなく、全グループで1つの事例を読み込み、見方の違いを比べ合うという方法もある。また、本実験プログラムでは、会館で刊行している女性のキャリア形成事例集を利用したが、社会活動キャリア形成について事例報告してもらう、インタビュー方式で社会活動キャリア形成のプロセスを聞かせてもらうといった方法もあるだろう。

今回の実験プログラムの中では、「ロールモデル分析」という言葉を使ったが、扱った事例はモデルというよりは、自分でもできそう、すでにやっているというような身近に感じられる事例であった。社会活動キャリアとは、すでに女性たちが地域で実践している活動の中で積み上げられるものであり、研究メンバー間では今後は「ローモデル分析」ではなく「事例分析」と表現することが合意された。

2. 「実践・活動に結びつく学習」のための方法

男女共同参画についての学び、成人の学びには、参加者を主体とする参加型の学習方法が適しているといわれている。国立女性教育会館の主催研修では、これまでも参加型の学習方法を重視してプログラムづくりを行ってきた。

特に、本実験プログラムが目指す「実践・活動に結びつく学習」では、学ぶ人たちの学習への能動的な関わり（attitude, motivation）、参加者同士で関係性（relationship）をつくりながら行う学習を重視している。参加者の主体性を強調し、学習プロセスの中で関係力や実践力が培われるよう、社会活動キャリア事例分析、事業計画案作成のグループ・ワーク等、いくつものワークショップ型学習方法を組み合わせている。また、講義（必要な知識の提示）とグループ・ワークを組み合わせることが重要と考えている。研究協力者の意見としては、

「小人数グループで参加型だった」（千葉、行政）

「聞く、話す、書く、まとめるなど、五感のすべてを働かせて、参加できた。講演会等の受け身の研修、学習に慣れていたので、とても刺激的で、是非、実践につなげたいと思った」（千葉、団体）

「話し合いと発表の繰り返しが、小気味よいスピードだった」（静岡、団体）

「参加型プログラムになっていた。…2日目は1日中ワークだったが、あっという間に1日が過ぎ、時間の長さを感じなかった（静岡、施設）」

というように、小人数のグループ・ワークで、講義を聞くだけでなく、討議し、意見を書き、それをまとめ、発表するなどの流れがあったこと、作業や考えたことの発表等の成果を明示し共有できたことで、次のステップにつなげたくなったと、研究協力者にも肯定的に受けとめられている。グループ・ワークを学習の過程に取り入れることだけでワークショップ型の学習となるのではなく、講義とグループ・ワークをどのように組み合わせるのか、グループ・ワークの中の流れをどのように作り出すのか、また学習に関わる人たちの役割や関係性等を考慮することが必要である。「実践・活動に結びつく学習」のためのワークショップ型学習方法について、学習を構成する人という点から、またプログラムの流れという点から以下に検討する。

(1) 「実践・活動に結びつく学習」を構成する人について

「実践・活動に結びつく学習」を構成するのは、大別すると、①学習者、②必要な知識を提示する人（講師）、③グループ・ワークを支援・促進するファシリテーター・学習支援者、④コメンテーター（学習のプロセスを把握してコメントする）の四者である。

(1)－1 学習者

学習の主体は、学習する人である。本実験プログラムの場合には、研究協力者として、静岡県、千葉県のいくつかの地域から集まった人である。すでに何度か述べたように、両県とも、女性関連施設、行政、団体の三者であり、いずれも地域において男女共同参画を推進するリーダーとしての役割を担う人たちである。各地域とも、三者連携の形態で実施したことにより、成果・効果がみられた。

参加型学習とするためには、グループの規模が大きすぎないことが重要であると考え、本実験プログラムでは10人以下の規模とし、グループ分けは行うワークの目的に合わせて変更した(図表3-1)。「男女共同参画統計」および人材育成の「問題から課題へワーク」のグループ分けは、地域の枠を超えて、女性関連施設、行政、団体という立場ごとに行うことに意味があると考えた。「事例分析」「課題を立てる」「事業計画案作成」では、この3つのグループ・ワークが関連していくことが重要であると考え、グループの分け方を変えないことにした。ただし、静岡県での「事例分析」の際には、8地域に分けると1地域から2名しか参加しない場合のグループ・ワークが難しいと考え、8地域を組み合わせで5つのグループに分けた。「事業計画案作成」は、地域ごとに施設、行政、団体の三者で行うことが重要と考えた。三者が参加できずに二者となった地域もあるが、その場合には学習支援者がより積極的にグループ・ワークに関わるようにし、どの地域でも事業計画案を時間内に作成することができた。

図表3-1 実験プログラムにおけるグループ分けと人数

グループ・ワーク	静岡県	千葉県
男女共同参画統計	女性関連施設(7人)、行政(8人)、団体(8人)	女性関連施設(4人)、行政(6人)、団体(6人)
人材育成の課題の明確化	同上	同上
社会活動キャリア事例分析	地域ごとに5グループ(各グループ4-5人)	地域ごと5グループ(各グループ3-4人)
課題を立てる、事業計画案作成	地域ごとに8グループ(各グループ2-3人)	地域ごと5グループ(各グループ3人)

(1)ー2 必要な知識を提示する人(講師)

「社会活動キャリア」のように、学習者にとって新しい概念を含む場合や、グループ・ワークをより活性化させるためには、必要と考えられる知識を提示し、その上でグループ・ワークを進めていくことが必要と思われる。

本実験プログラムの場合には、目標2「地域における男女共同参画の状況と課題を把握する」、目標6「課題解決に向けた課題を立てる」、目標7「連携・協働を活かし、地域づくりに参画する女性人材が育つための事業計画を作成する」では、知識の提示者とファシリテーターは同一であった。他方、目標4「女性のキャリア形成支援における現状と課題を把握する」、目標5「女性の社会活動キャリア形成事例の分析を通じて、支援方策と課題を明確化する」では異なっていた。そのため、目標4と目標5をつなぐことを意識的に行った。必要な知識を提示する人と、グループ・ワークのファシリテーターは同一である必要はないが、異なる場合には、提示された知識とグループ・ワークがつながるよう意識的に橋渡しをしていく必要がある。

(1)ー3 ファシリテーター・学習支援者

「実践・活動に結びつく学習」にとっては、学習のプロセスを把握し、学習を促進する役として、また学習と実践・活動をつなぐ役としてファシリテーター・学習支援者の役割は重要で

ある。

第2章2で述べたように、本実験プログラムでは、学習のプロセスを細かく把握するために、グループ・ワークごとに、その全体を把握する役のファシリテーターと、各グループに入りグループ・ワークを支援する学習支援者の二通りの役をおいた。しかし、ファシリテーターと学習支援者の役割・機能は、基本的には同じであり、グループ・ワークの促進役である。

第2章4-(3)-2に述べたように、学習者主体であることを前提として、ファシリテーター・学習支援者は、グループ・ワークの雰囲気づくり、討議のプロセスに留意し、学習者を励ますこと、必要な場合に応じて情報提供や議論への助言などを行うことを役割とすることを関係者間の合意事項としてグループ・ワークを行った。

研究協力者の意見によれば、

「迷い、言葉が見つからない時に適切なアドバイスがあった」（静岡、施設）

「解決の方向へ促してくれたところ」（静岡、団体）

「討議を進行する中で、各ポイントで必要な最小限の助言等をいただくことにより、限られた時間の中で効率よく進めることができた」（千葉、行政）

「以前、ワークショップでの学習を行いました、今回のように小グループでそこにファシリテーターがつきワーク方式で行ったことは始めてでしたが、要領よくクエスションを出してくれるので意見が出しやすかったです」（千葉、団体）

上記のように、ファシリテーター・学習支援者がいたことによってグループ・ワークが円滑に進んだことを評価している。

本実験プログラムでは図表3-1に示したように、①統計を使った実態把握のワーク、②問題の課題化のワーク、③社会活動キャリア事例分析、④課題を立てるワーク、⑤事業計画案作成ワークの5つのグループ・ワークを行ったが、④と⑤が同一のファシリテーターであった他は、ワークごとに別のファシリテーターが担当した。ファシリテーターが複数いる場合には、特に事前打ち合わせ、事後の反省を十分行い、情報を共有し、意見を共通にしておく必要がある。本実験プログラムでは、各グループ・ワークのプロセスを見るために特に学習支援者をおいたが、ファシリテーターと学習支援者の役割は基本的には同一のものであり、必ずしも両者をおく必要はない。

ファシリテーター・学習支援者の役割について明確化することは、今後の課題であるが、多様な意見の共通部分を引き出し、道筋をつける支援をする役割であるということは確認された。

本実験プログラムの結果として、ファシリテーター・学習支援者の役割として重要な点、留意すべき点について、以下にまとめておきたい。

<ファシリテーターの役割、留意点>

- ・講座全体が開放的になるような雰囲気づくり、学習者が主体となれるような雰囲気づくりを行うこと
- ・グループ・ワークの全体を見渡す視点を持つこと（本実験プログラムの場合には、ファシリ

テーターの役割とした)

- ・個々のグループの学習プロセスを、できるだけ細やかにフォローすること（本実験プログラムでは学習支援者の役割とした）
- ・グループ・ワークが円滑に進行しない場合には、必要に応じて助言等を行うこと

「実践・活動に結びつく学習」にとってのファシリテーター・学習支援者の役割については、今後実践的研究を進めていく予定である。

(1)ー 4 コメンテーター

本実験プログラムでは、事例分析、事業計画案の作成の後に、その成果についてコメンテーターが講評を行った。コメント内容については、第2章3に掲載しているが、ここでは、コメンテーターの果たす役割を、グループ・ワークあるいはプログラム全体に対するコメントをする人であるとする。研究協力者から、

「同じ人の（事例）分析であっても、グループによりとらえ方が違う部分があった。講師のコメントで新たな気づきがあった。」（静岡）

「ロールモデル分析の手法は初めてで面白かった。国広先生のコメントによって、何が社会活動キャリア形成のための支援として有効か、具体的に見えてくる感じがした」（静岡）という意見が寄せられているが、学習のプロセスを客観的に見て、学習者に見えにくい部分、到達した学習の成果について評価してくれる分析者がいることで、学習者は経験したプロセスの意味や意義を再発見することができる。

学習プロセスを振り返り、次のステップへと結びつけていくためには、学習の全過程に分析的な視点をもつ人が関わる必要があると思われる。分析者の位置づけについては、今後さらに検討を重ねていきたい。

(2) プログラムの流れについて

プロセスを重視する学習にとって、プログラムの流れは重要である。その流れを、講義とグループ・ワークの関連およびグループ・ワークの中の流れから検討する。

(2)ー 1 講義とグループ・ワークの組み合わせ

プログラムの流れを、必要な知識の提示（講義）とグループ・ワークの組み合わせから見直したものが図表3-2である。

目標1はプログラム全体に関わる必要な知識の提示である。ここで提示された知識は、最後の目標7にまで有機的に関連していくことで、全体を通じて「男女共同参画を推進するためのプログラム」となる。目標3にも知識とグループ・ワークの組み合わせが必要であったが、静岡で行った際には、必要な知識の提示を行わなかった。目標4と目標5で1組であるが、日程上、静岡県でも千葉県でも1回目と2回目に分割することとなった。目標6では、連携・協働に関する必要な知識の提示を受けて、事業計画作成のための「課題を立てる」グループ・ワー

クを行ったが、すでに言及したように講義時間が20～25分であり、そこで得た知識をグループ・ワークにつなげるにはやや無理があったように思われる。

必要な知識の提示とグループ・ワークの組み合わせについては、今後さらに検討し、「実践・活動に結びつく学習」のための方法として明確にしていきたい。

図表3-2 必要な知識の提示とグループ・ワークの組み合わせからみたプログラムの流れと時間配分

1 回目		
目標 1	男女共同参画についての視点をもつ	プログラム全体に関わる 必要な知識提示 60分
目標 2	地域における男女共同参画の状況と課題を把握する（男女共同参画統計による実態把握ワーク）	必要な知識の提示 40分 グループ・ワーク50分
目標 3	女性関連施設、男女共同参画行政、女性団体の現状を把握し、課題を把握する（問題から課題へワーク）	必要な知識の提示 15分 グループ・ワーク85分
目標 4	女性のキャリア形成支援における現状と課題を把握する	必要な知識の提示 静岡60分、千葉80分
2 回目		
目標 5	女性の社会活動キャリア形成事例の分析を通じて、支援方策と課題を明確化する（事例分析）	グループ・ワーク 静岡80分、千葉100分
目標 6	課題解決に向けた課題を立てる（課題を立てるワーク）	必要な知識の提示 静岡25分、千葉20分 グループ・ワーク 静岡30分、千葉50分
目標 7	連携・協働を活かし、地域づくりに参画する女性人材が育つための事業計画案を作成する	グループ・ワーク 静岡205分、千葉225分

(2)ー 2 グループ・ワークの流れ

グループ・ワークの時間配分とその流れを示したのが、図表3-3である。

グループ・ワークの中には、グループで行う作業（協働）、発表（共有）、コメント（分析）の3つの流れが含まれる。このつなぎ方や時間の配分がグループ・ワークの流れをつくり出す。男女共同参画統計のグループ作業は30分であり、地域のデータを様々な角度から読むには十分とはいえなかった。発表は、グループ数が3つだったので、各グループ5～6分は行うことが

できた。コメントは行わなかったが、統計をグループで読むということに慣れていない人が多かったので、必要だったと思われる。

「問題から課題へ」のグループ・ワークでは、作業は静岡県で60分、千葉県で80分、発表時間が各県20分（グループ数は3つ）ということで、こちらは時間的には比較的ゆとりがあった。しかし、第2章4-(3)-2で振り返ったように、問題を整理することはできたが、課題へと展開していくためにはもう少し時間が必要であった。問題を把握だけでなく要因を分析する段階が必要であったと考える。このグループ・ワークでは、「問題」「課題」は学習者が発見するものと考え、ファシリテーター等からコメントは行わなかったが、問題から課題へとつなぐためのファシリテーションについて、今後さらに検討する必要がある。

社会活動キャリアの事例分析は、静岡県ではグループ作業50分、発表20分、コメント10分、千葉県ではグループ作業60分、発表20分、コメント20分と、静岡県よりも10分ずつ長く作業とコメントに時間をかけた。静岡県で実施した際に、作業時間が十分でないと考え、千葉県ではできる限り作業に時間を当てるようにと変更したためである。社会活動キャリアの事例を読み、「分析シート」に記入する作業は、研究協力者に自宅で行ってもらい、グループ・ワークでは討議に多くの時間を使うことができたが、それでも新しい概念である「社会活動キャリア」を理解した上で、その支援方策を検討するには、予定していた時間枠では難しかった。このグループ・ワークでは、発表の後にコメントの時間を設け、コメンテーターによる評価を聞きグループ・ワークを振り返った。

「課題を立てる」ワークと「事業計画案作成」ワークは、「課題を立てる」ことを重視したために分けておいてあるが、一連の作業である。両県とも「課題を立てる」は50分、うち作業40分、発表10分という配分であった。「事業計画案作成」ワークも、両県ともに175分ずつであるが、配分がやや異なる。静岡県では、最初の作成ワークに70分、千葉県では95分と、千葉県では長目に設定した。これも事例分析の際と同様に、静岡県で行った結果もう少し時間が必要ということがわかり、後から行った千葉県ではできるだけグループ作業に時間を使うよう配分したことによる。

このグループ・ワークでは、事業計画案を作成した後に発表し、参加者全員から付箋で「よかった点」と「改善点」についてコメントをもらい、案を修正してからまた発表するというように作成と発表を繰り返したが、この流れは研究協力者にも好評であった。案を作って終わりにするのではなく、発表して共有し、さらに意見を交換し（この場合には付箋で行った（「付箋ワーク」））、その上で案を修正するという、参加者相互のやりとりが含まれていた点が好評だった理由であろう。

発表時間は、グループ数が多いと時間を取るが、考えたこと、作業したことを共有するために重要である。短時間で要領よく発表するためには何らかの工夫が必要であるが、本実験プログラムではタイマーを使ってファシリテーターがタイム・キープした。これによって、決められた時間を効率的に使い発表を行うことができた。時間管理の工夫をしつつ、作業→発表→コメントの流れをグループ・ワークの中で作っていくことが必要であろう。

図表3-3 グループ・ワークの時間配分とその流れ

GW (Group Work)グループ 作業		PR(Presentation) 発表		CO (Comment) コメント	
目標 2 男女共同参画 統計ワーク	→	目標 3 問題から課題 へワーク	→	目標 5 社会活動キャ リア事例分析	→
目標 6 課題を立てる ワーク	→	目標 7 事業計画案作成ワーク			
合計50分		静岡合計90分		静岡合計80分	
GW 30		GW 60		GW 50	
PR 20		PR 20		PR 20	
				CO 10	
		千葉合計100分		千葉合計100分	
		GW 80		GW 60	
		PR 20		PR 20	
				CO 20	
				合計50分	
				GW 40	
				PR 10	
		静岡合計175分		千葉合計175分	
		GW 70		GW 95	
		PR 40		PR 35	
		CO 5		CO 0	
		GW 25		GW 20	
		PR 20		PR 15	
		CO 15		CO 10	



3. 運営管理（ロジスティックス）について

プログラムを実施する際には、関係者間の連絡調整、会場設営、当日の役割分担等の運営管理（ロジスティックス）からも、学習が円滑に進むような配慮が必要である。

本実験プログラムは、国立女性教育会館職員、本調査研究の研究協力委員、静岡県および千葉県の連携先の関係者など、様々な人たちが関わって運営した。事前準備、当日の動きを関係者が把握し共有できるよう、プログラムの流れにそって各人の役割を記入した運営管理（ロジスティックス）表を作成し、いつ、どこで、誰が、何を行うのかを明らかにした（図表3-4）。

会場に関しては、グループ・ワークの際に模造紙を広げて作業し、それを張り出すスペースが十分にある部屋が必要だった。連携先に確保していただいたが、静岡県の初回の部屋は8グループで作業するにはやや手狭だったため、2回目は会場を変更して、十分な広さの会場で実施することができた。

当日の設営は、連携先と協力して行った。最初の「男女共同参画の視点をもつ」の講義はスクール形式で行い、グループ・ワークの際は机数本を合わせて、グループ・メンバーで向き合って作業できるよう配置した。

連携先には、事前準備として会場の予約、参加者の依頼とその後の連絡調整、当日の会場設営、受付、パソコンなどの機材の準備、録音などにご協力いただき、プログラムを円滑に進めることができた。

連携・協働を実践する際に、詳しい運営管理（ロジスティックス）表を作成しておくことにより、役割分担や当日の各人の動きが具体的に理解でき、学習を円滑に進めることができる。

資料編22に国立女性教育会館で作成した運営管理表を掲載した。

図表3-4 千葉の運営管理（ロジスティックス）表

【関係者の動向】

／	名前	所 属	到着時刻	出発時刻
1	国 広 陽 子	武蔵大学社会学部	9：00	12：00
2	葛 原 生 子	広島市女性教育センター	9：00	事後打ち合わせ終了後
3	西山恵美子	国立女性教育会館客員研究員	9：00	事後打ち合わせ終了後
4	神 田 道 子	国立女性教育会館	9：00	事後打ち合わせ終了後
5	中 野 洋 恵	同 上	8：30	事後打ち合わせ終了後
6	小林千枝子	同 上	9：00	事後打ち合わせ終了後
7	高 橋 由 紀	同 上	8：30	事後打ち合わせ終了後
8	森 未 知	同 上	8：30	事後打ち合わせ終了後
9	玉 浦 洋 子	千葉県総合企画部男女共同参画課	9：00	
10	奥 山 恵 子	同 上	8：30	事後打ち合わせ終了後
11	山 崎 静 江	同 上	8：30	事後打ち合わせ終了後
12	木 村 恵 美	同 上	8：30	事後打ち合わせ終了後
13	加 藤 峰 子	ちば県民共生センター	8：30	
14	鈴 木 賢 司	同 上	8：30	事後打ち合わせ終了後
15	岡 崎 友 子	同 上	8：30	事後打ち合わせ終了後

【担当者の役割・内容】

1 受付

- 受付名簿で名前の確認をする。
- 名刺をもらう（もらえる方のみ）。
- 名札記入を参加者に願う。

2 会場

- 〈マイク回し〉①マイクが使えるかどうかをチェックする。
- ②質疑応答の時に、会場でマイクをまわす。
- 〈設営・整備〉①次のプログラムの講師名の張り替えなどの準備をする。
- ②ワークショップで使う模造紙や文房具の配布をする。
- ③視聴覚機器（パワーポイント）の準備（照明に配慮）。
- ④暖房等会場の環境を整える。

3 録音

- ①カセット・テープ、ICレコーダーの動作確認をしておく。
- ②講義・ワークショップごとに録音をする。
- ③録音したテープは、国立女性教育会館へ渡す。

4 写真

- ①たれ幕，講師名をいれる。
- ②進行の状況がわかるように、各講義・ワークショップを数枚ずつ撮影する。

【第1回】 11月26日（水）

研修参加者：17名（女性15名、男性2名）

会場：ちば県民共生センター

Tel. 043-252-8036 Fax. 043-252-8037 〒263-0016

千葉県千葉市稲毛区天台6-5-2 千葉県青少年女性会館内

No.	時間	内 容	場 所	役 割	備考
0-1	8:30-8:40	主催者、共催者集合8:30 会場確認、パソコンセッティング	ちば県民 共生セン ター	会場確認：会館 パソコン：森	机はスクール形式 弁当注文は千葉に依頼 控室：
0-2	9:00-9:15	事前打ち合わせ（役割分担の確認）		関係者	
0-4	9:00-9:30	受付		受付：千葉（岡崎）	参加者からパンフレット 等配布の要望があつ たら預かり、交流コー ナーに配置する。
1	9:30-9:38	開会		進行：千葉（奥山） あいさつ： 神田道子（主催） 玉浦洋子（共催先）	
	9:38-9:43	自己紹介（参加者、関係者） 配布資料の確認 参加者から撮影、録音の許可を得る		進行：会館（高橋）	名前、所属のみ 配布資料はあらか じめ机上に置く
2	9:43-10:00	本プログラムの意味・意義を理解 する 説明：中野洋恵（会館）		進行：会館（高橋） 録音：千葉（ ） 写真、会場：会館（森）	
3	10:00-11:00 休憩10分	男女共同参画推進の視点、女性関 連施設・女性団体の役割、女性の 社会活動キャリアとは 講師：神田道子（会館）		進行：会館（高橋） 録音：千葉（ ） 写真、会場：会館（森）	机スクール形式 のまま
4	11:10-12:30	地域づくりに参画する女性のキャ リア形成とは 講師：国広陽子 ファシリテーター：中野洋恵		進行：会館（高橋） 録音：千葉（ ） 写真、会場：会館（森）	机の並べ替え、 グループ5つ （分野ごと）
	12:30-13:30	昼 食			
5	13:30-15:00	情報を活用した実態把握：データ で読む男女共同参画 講師、ファシリテーター：高橋 由紀、森未知（会館）		進行：会館（高橋） 録音：千葉（ ） 写真：会館（小林） 会場：会館（森、高橋）	グループ3つ（女性 関連施設、行政、女 性リーダー）。机並べ 替え（参加者）。 付箋200枚、水性サイ ンペン人数配布。 前に模造紙を張る。
6	15:10-16:50 休憩10分	各地域での女性の「人材育成」につい て、現状からみえる課題を明確にする ファシリテーター：小林千枝子（会館）		進行：会館（高橋） 録音：千葉（ ） 写真、会場：会館（森）	グループ3つ。 各机に模造紙2枚、 水性マーカー1組、
7	16:50-17:00	参加者・実験プログラムへのご意 見シート記入		進行：会館（高橋） ご意見シートの回収：会 館	次回の場所（千葉県 教育会館）、開始時間 （10時）、宿題の確認
8	17:00-18:00	事後打ち合わせ		関係者	

4. 改善した学習プログラム・デザインと学習プログラム構成案

これまでに振り返った点を反映させ、改善した学習プログラム・デザインを提示する（図表3-5）。主な改善点は、以下の通りである。

- ・男女共同参画の視点に「プロセスの視点」を含めた
- ・ロールモデル分析という表現を事例分析に改めた
- ・連携・協働に関する講義をミニ・レクチャーではなく、講義と討議として位置づけた
- ・研修目標間の関連性を示すようにした（目標1、2、3は関連し、一つの流れとなって課題の明確化につながる等）
- ・自己紹介を入れた（アイスブレイキングの意味でも、互いが知り合うスタートラインに立つという意味でも必要である）

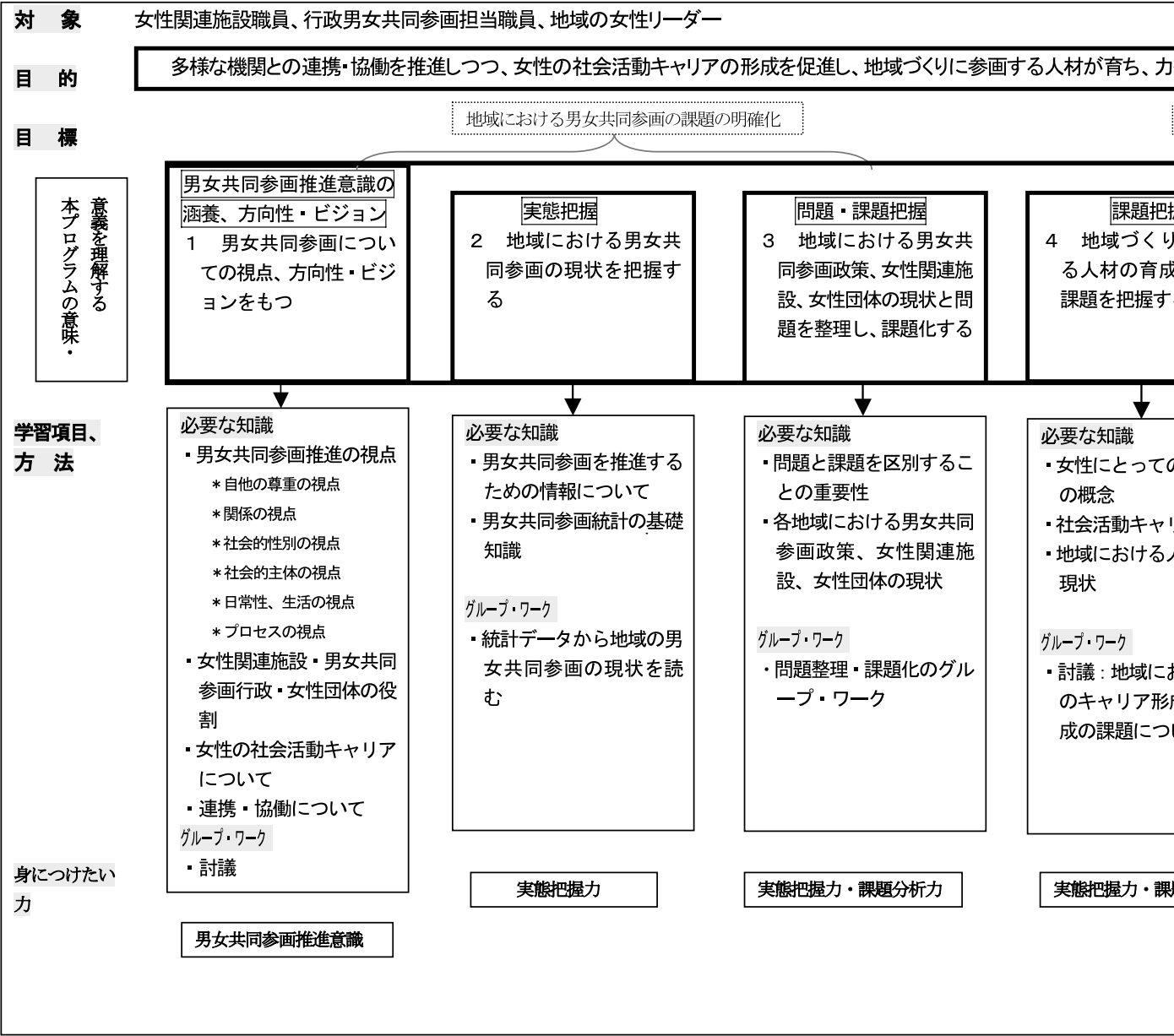
改善版の学習プログラム・デザインに学習方法、時間を入れた学習プログラム構成案は、図表3-6の通りである。プログラム開発については、学習プログラム・デザインの作成、学習プログラム構成案の作成、運営については日程（＝運営管理（ロジスティック）表）の作成が必要である。なおここで示した構成案は時間と方法のみを入れたものであるが、それぞれの目標にそって講師情報、教材、場所等を入れて考えていく必要がある。プログラム構成案にそって、日程が作成される。この構成案を、地域で「実践・活動に結びつく学習」を企画する際に、ぜひ活用していただきたい。

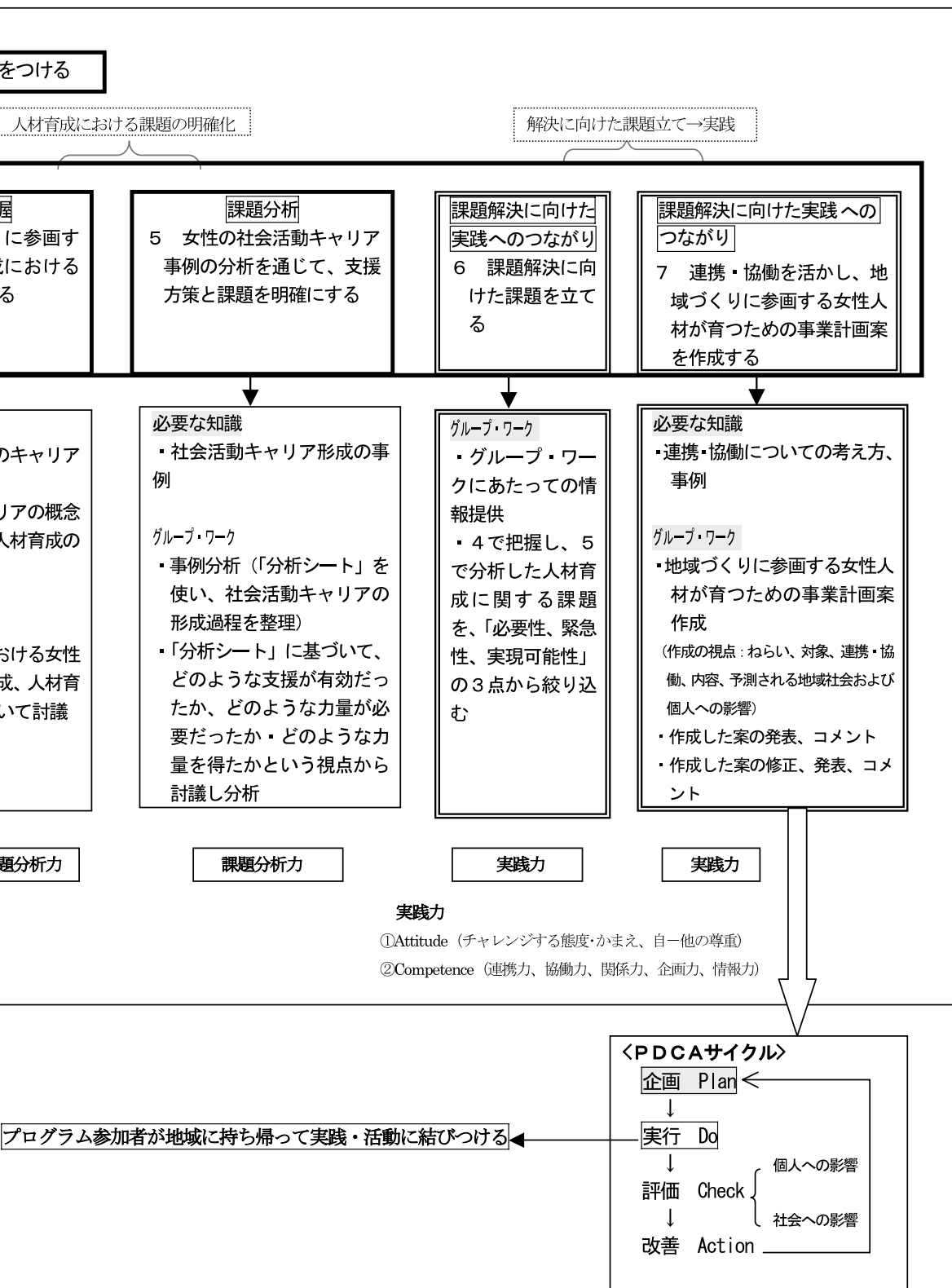


図表3-5 改善した学習プログラム・デザイン（改善版）

【本プログラムの特徴】

- ①「実践・活動に結びつく」学習（アクション・ラーニング）である
- ②プログラムの実施過程そのものが、参加者の連携・協働の実践につながり、プログラムの実施後に地域での実践の可能性を台
- ③ワークショップ型学習方法で行う
- ④個人の活動を社会に結びつける視点の導入（「社会活動キャリア」）





図表3-6 学習プログラム構成案

目的：多様な機関との連携・協働を推進しつつ、女性の社会活動キャリアの形成を促進し、地域づくりに参画する人材が育ち、力をつける

目 標	学習内容（ねらい）	学習方法	必要と考えられる時間
プログラムの全体構成の理解	プログラムの意味・意義を理解する (プログラムの全体構造、方法等を理解する)	説明、質疑応答	30分
アイスブレイキング	自己紹介	自己紹介シートの利用、ゲーム方式等目的に沿って選ぶ	適宜 (人数、やり方による)
目標 1 男女共同参画推進意識の涵養	男女共同参画についての視点、方向性・ビジョンをもつ (男女共同参画推進に必要な視点、方向性・ビジョンをもつ。女性関連施設・男女共同参画行政・女性団体の役割、女性の社会活動キャリア、連携・協働について必要な知識や概念を学び、討議を通じて参加者間での共通理解を深める)	・講義 ・グループ・ワーク（討議）	60分～90分 20分～30分
目標 2 実態把握	地域における男女共同参画の現状を把握する (男女共同参画を推進するためには情報が重要なこと、男女共同参画統計の特徴とその方法について学び、統計データを読んで地域の男女共同参画の現状を把握する。)	・講義 ・グループ・ワーク（統計データを読む） ・コメント	60分 60分～90分 適宜
目標 3 問題・課題把握	地域における男女共同参画行政、女性関連施設、女性団体の現状と問題を整理し、課題化する (問題と課題を区別することの重要性を理解する。グループ・ワークを行い、問題を整理し、課題化を行う。)	・グループ・ワークにあたって必要な情報の提供 ・グループ・ワーク（問題整理・課題化） ・コメント	20～30分 90～120分 適宜
目標 4 課題把握	地域づくりに参画する人材の育成における課題を把握する (必要な知識として、女性にとってのキャリアの概念、特に社会活動キャリアの概念について学び、討議を通じて人材育成についての課題を把握する)	・講義 ・グループ・ワーク（討議）	40～60分 20～30分
目標 5 課題分析	女性の社会活動キャリア事例の分析を通じて、支援方策と課題を明確にする (社会活動キャリア形成の事例報告を聞く、あるいは読み、分析シートを使って整理した上で、参加者で討議して必要な支援等について分析する)	・事例報告を聞く、あるいは事例を読む（事前学習可能） ・グループ・ワーク（事例分析） ・コメント	40～60分 60～90分 適宜
目標 6 解決に向けた実践へのつながり	解決に向けた課題を立てる (目標 4 で把握し、5 で分析した人材育成に関する課題を、討議を通じて、必要性、緊急性、実現可能性の3点から絞り込む)	・グループ・ワークにあたって必要な情報の提供 ・グループ・ワーク（課題を立てる討議）	20～30分 40～60分
目標 7 解決に向けた実践へのつながり	連携・協働を活かし、地域づくりに参画する人材が育つための事業計画案を作成する (地域づくりに参画する人材が育つための事業計画案を作成する。連携・協働の視点を入れること、地域の現状を認識した上で、実践に結びつく事業として計画する)	・グループ・ワークにあたって必要な情報の提供 ・グループ・ワーク（事業計画案作成） 作成→発表→コメント→修正→発表→コメント	20～30分 180～210分

5. 実践への展開事例

本プログラムは、施設職員、行政担当者、団体リーダーの三者が作成した事業計画案（Plan）を地域に持ち帰って実践（Do）するという展開を含めて企画されており、研究協力者も来年度の事業や活動に結びつくようにと考えて作成したものと思われる。

静岡県では、県下の女性関連施設のつながりを強めるというねらいもあって本実験プログラムに参加したため、女性関連施設ですでに行っている事業をグレードアップする機会にするなど、来年度に実現可能性の高い計画が作成された。

千葉県では、地域の多様性を考慮し、また各地域で重視される課題に従ってテーマを立てて参加者を募ったので、男女共同参画以外の分野の行政関係者が加わり、連携・協働という点での広がりがみられ、新たな連携が生まれる契機になった。

■実験プログラムの実践活動への発展（浜松市における事例）

実験プログラムに参加した団体から、事業計画案（Plan）を実践（Do）に結びつけた例が早速に報告されてきたので紹介したい。

本実験プログラムに参加した浜松市「ともづなの会」（参加者は波多野会長）は、北区女性団体連絡協議会と連携して、実験プログラムで作った計画案に基づいて「浜松市北区地域協議会合同研修会」を「男女共同参画の視点にたった地域課題解決型ワークショップ」として企画し、実施した。実験プログラム終了から、わずか2か月後のことである。

「ともづなの会」は、市の男女共同参画課の事業を受託し、啓発活動資料の作成を中心に活動を行っているグループである。北区女性団体連絡協議会は、北区協議会の女性委員が中心となって作った43団体のネットワークであるが（「ともづなの会」も加入）、かねてより男性とともに地域課題解決に向けて実践したいと考えていた。波多野会長は北区協議会の構成員であると同時に、北区女性団体連絡協議会のメンバーであり、また男女共同参画センター「あいホール」の運営にも関わっており、団体、行政、施設の三者をつなぐことのできる立場にあった。本実験プログラムに参加した波多野会長は、北区でワークショップを実施することを念頭に、事業計画案を作成した。

実施されたワークショップについては、参考資料18に掲載しているので参照されたい。本実験プログラムによって産み出された成果が、さらに別の成果を産み出すことになった。まとめると、以下のような3点になる。

① 新たな連携の創出

「ともづなの会」（団体）と北区女性団体連絡協議会（団体）が浜松市北区協議会（行政）に働きかけ、浜松市男女共同参画センター〈あいホール〉（施設）の三者連携の体制で実施された。従来は、団体と行政、行政と施設の二者間のつながりはあったが、今回の実験プログラムの中で新たに三者連携の体制が作られ、本事例の活動が生まれた。

② 実験プログラムによる学習支援者としての力量形成

実験プログラムで学んだ、データに基づいた実態把握の方法、課題を明らかにするためのグループ・ワークの方法、事業案を発表し全員からのコメントをもらう方法など、本実験プログラムで学んだ方法を随所で活用し、ワークショップの方法に関わる力をつけることができた。

北区協議会は男性7：女性3という性別割合で構成されており、少数派である女性たちがこのワークショップの企画・運営を主導的に行うことで、女性たちの自信につながり、また男性協議会員の女性に対する見方にも変化が生まれたという。このワークショップは、女性にとってのエンパワーメントの機会となった。

③ 女性のエンパワーメントが地域活性化につながる

ワークショップの結果、農林水産業の振興、観光資源の活用、少子高齢社会への対応、環境問題、暮らしやすいまちづくりの5つのテーマに関する課題が明らかになり、解決の方向性が見えてきたという。女性たちのエンパワーメントは、地域活性化につながるということが明らかになった。

以上、浜松市の実践を紹介したが、実験プログラムで得た成果を地域に持ち帰って実践することが、十分に可能だということが示された。他の地域での展開についても、できる限りフォローアップしていきたいと考えている。

6. 今後の展開に向けて

以上、本実験プログラムの成果と課題について振り返り、検討を行ってきた。プログラムを企画し（Plan）、実施し（Do）、振り返り（Check）を行うことで、以下のように今後の展開に向けて重要と考えられる点が明らかになった。

(1) 連携・協働

ワークショップ型学習の基本は、人と人との関係によって成り立つ。また連携の基本は、関係にある。この点を、プログラムの中に取り入れていくことが重要である。

本実験プログラムでは、冒頭に「男女共同参画の視点」についての講義を行い、男女共同参画を推進するということは「社会的基盤づくり」に男女がともに関わることであり、その根底にあるのは「自他の尊重」の視点であるということを示し、学習者の共通理解とした。実験プログラムに参加した人たちは、対等な関係を前提として行われるグループ・ワークを通して、横のつながりや自他の尊重を体験することができた。このことは、男女共同参画を進めるという意識の涵養（マインド・アップ）につながっていくと思われる。

本プログラムは、女性関連施設・行政・団体の三者連携の形で実施したが、この三者は男女共同参画推進の拠点を担う人たちであり、本プログラムに参加することが三者連携のきっかけとなって、その関係が地域に波及していくことを意図していた。前述した浜松市「ともづなの会」の実践は、地域への波及効果を示す事例である。

本プログラムは、「地域づくりに参画する人材」の育成をテーマとしながら、育成を支援する人自身が力をつけることをもねらいとしていたが、人材育成のためのプログラムには、関係性という視点が特に重要であることが実験プログラムを実施することで明らかになった。プログラムの中に関係性を取り入れるということについては、今後とも考えていきたい。

(2) 「社会活動キャリア」という点からの社会的人材の育成

社会に参画する人材の育成という考え方およびその支援方策について考えるために、「社会活動キャリア」という概念を新たに導入した。「社会活動キャリア」とは、個人のキャリア形成過程を、社会的な視点から捉えた考え方である。「社会活動キャリア」を理念的に捉えるのではなく、個別、具体的に理解するために、「分析シート」を作成し、キャリア形成事例を整理し、それに基づいて支援方策を考える学習方法を開発した。

「社会活動キャリア」によって個人的側面と社会的側面を結びつける視点を獲得することにより、女性が日常生活の中で行っている社会活動の意味・意義が理解され、女性も「社会的主体」であることが認識される。男女で社会的共通基盤をつくっていくことが、男女共同参画を推進することであると考えるとき、社会活動キャリアは有効な考え方であることが確認された。今後広めていくために、社会活動キャリアと社会的人材を結びつけた事例を蓄積し、キャリア研究をさらに深めていくことが必要である。

(3) 「実践・活動に結びつく学習」

本実験プログラムの大きな特徴は、この学習を「実践・活動に結びつく学習（アクション・ラーニング）」として企画、実施したことにある。プログラムの展開過程で実践力をつけることにつながるよう企画し、構成されている。すなわち、2日間の学習のプロセスの中に、5種類のグループ・ワークが組み込まれており、それぞれのワークを通じて、参加者が主体となって学べるようになっている。

また、最終的に必要性、緊急性、実現可能性の視点から課題を絞り込んで事業計画案を作成するようにしたことで、参加者全員が地域に持ち帰って実施する可能性を含む案を産み出すことができた。このように、学習として完結するのではなく、その次の展開を含む学習、行動のための学習という意味で、本プログラムを「実践・活動に結びつく学習（アクション・ラーニング）」と呼んでいきたいと考えている。

「実践・活動に結びつく学習（アクション・ラーニング）」にとっては、ワークショップ型学習方法が有効である。グループ・ワークを行うに当たっては、必要な知識・情報の提示と組み合わせること及び学習のプロセスとその到達点を把握し、学習を促進するファシリテーター・学習支援者の役割が重要である。ファシリテーター・学習支援者についての参考文献は多数刊行されているが、ここで考えているファシリテーター・学習支援者は、男女共同参画推進意識の涵養というミッションを持った学習プログラムの支援者である。その役割を担う人材の育成が必要である。本プログラムの実施によって、それに必要な技能、知識等が浮かび上がってきた。今後さらに検討し、専門的研修を行っていくことを考えている。この実験プログラムで有効性が実証された「付箋ワーク」「分析シート」についても、今後さらに改善していきたい。

「実践・活動に結びつく学習（アクション・ラーニング）」は、PDCAサイクルでは、PからDへつなげる学習である。その先DからC、Aへと活動の中で行われる学習を「実践・活動の中で行われる学習（アクティビティ・ラーニング）」と名付け、実践・活動の事例分析を通して、活動の推進に学習がどう関連するかというプロセスを明らかにし、地域で男女共同参画を推進する活動のためにどのような学習が有効なのかを示し、実践・活動と学習をつなげていきたい。

(4) 女性関連施設の拠点としての重要性

女性関連施設は、地域で男女共同参画を推進するという重要な拠点役割を担っている。具体的な役割については、第1章図1-1に示した。地域での拠点として、このプログラムでは、女性関連施設、男女共同参画行政、団体を挙げたが、そうした拠点の中で中心になるのが女性関連施設である。

女性関連施設は、場、人、情報などの社会資源をもっている。それらを活用し、男女共同参画社会を推進していくことが施設の使命（ミッション）であるが、それを実際に行うのは施設職員である。そこで、職員のエンパワーメントが重要となる。エンパワーメントの根底にあるのは、自他の尊重をふまえた人間関係であり、その関係をもとに、多様な機関と連携・協働しながら事業を進め、男女共同参画を推進する地域のハブ（hub：車輪の中軸）となっていくこ

とがこれからの女性関連施設の中心的課題である。

国立女性教育会館等、他機関と連携して女性関連施設としての拠点役割を果たしていくために、本プログラムを活用していただければ幸いである。

資 料 編

資料編 目次

1. ご意見シート	1
2. 実験プログラム 終了後アンケートまとめ	9
3. 神田参考資料「女性関連施設におけるリーダー像」 pp.55-57 （パネルディスカッション抄録「男女共同参画を推進するリーダー像」国立女性教育会館 編『国立女性教育会館、韓国両性平等教育振興院交流・協定締結記念シンポジウム報告書 男女共同参画を推進するリーダー像』所収、平成19年3月）	11
4. 「情報を活用した実態把握：データで読む男女共同参画」 森資料（パワーポイント）	14
5. 「情報を活用した実態把握：データで読む男女共同参画」 高橋資料	18
6. ワークショップ「地域における女性関連施設・女性団体の現状と課題」のすすめ方 小林 資料	24
7. 人材育成の課題：女性関連施設グループ、団体グループ	25
8. 「地域づくりに参画する女性のキャリア形成支援とは」 中野資料	27
9. 「地域社会と女性の社会活動キャリア」 国広資料	28
10. ワークショップ「地域づくりに参画する女性のロールモデル分析」 西山資料	30
11. 女性の社会活動キャリア分析シート	31
12. 女性の社会活動キャリア分析シート、記入例	32
13. 事例分析ワークショップの記録：川瀬千穂子さん、木村由里子さん、星川叔子さん	33
14. 事例分析ワークショップの記録：工藤緑さん、宮城和代さん、鈴木めぐみさん	36
15. 「地域づくりに参画する女性人材が育つための事業につながる課題をたてる」「地域づくり と連携・協働について」 仁科資料	39
16. 「地域づくりに参画する女性人材が育つための事業につながる課題をたてる」 ミニレク チャー「地域づくりと連携・協働について考える」 葛原資料	42
17. 「地域づくりに参画する女性人材が育つための事業計画案作成ワークショップ」 仁科資料	43
18. 「連携・協働による実験プログラム」 実施事例：浜松市	44
19. 平成20年度交流学习会議 佐藤氏レジュメ「国立女性教育会館との連携・協働による実験 プログラムin静岡『地域づくりに参画する女性人材が育つために』 実施上の課題及び成果」 静岡県男女共同参画センター指定管理者・特定非営利活動法人静岡県男女共同参画セン ター交流会議代表 佐藤和子	48
20. 平成20年度交流学习会議 佐藤氏資料「国立女性教育会館との連携・協働による実験プロ グラムin静岡『地域づくりに参画する女性人材が育つために』 報告書」 静岡県男女共同参画センター指定管理者・特定非営利活動法人静岡県男女共同参画セン ター交流会議代表 佐藤和子	51
21. 「国立女性教育会館との連携・協働による実験プログラムin千葉『地域づくりに参画する 女性人材が育つために』 千葉県からの報告～実施上の課題及び成果～」 千葉県ちば県民共生センター所長 加藤峰子	64
22. 〈参考〉国立女性教育会館運営分担表例	69

資料編 1 静岡 第一回 ご意見シート（2008 年 11 月 20 日）

1. 本プログラムの意味・意義を理解する

- ・非常にわかりやすい今まであまり縁のないことでもあったので、これからのいい勉強の課題となった。
- ・よく理解できた。
- ・大わく理解できた。デザイン図の図解をもう少し見やすく(わかりやすく)工夫があるといい。時間はOK。
- ・最初にプログラムの全体像をあきらかにしてくださったので、心構えをしっかりとて挑むことができました。
- ・資料を眼で追うことで精いっぱいという感じだった。自分の中で一つ一つ理解できたとは言い難い。必要性はわかるが、導入部分は大事なので、もう少し時間をとっていただいてもよかったと思う。
- ・社会活動キャリアを目指した人材育成という課題が、日々の小さな仕事から見出すことができるのだと実感した。
- ・行政の男女共同参画プランの策定に参考になるなあと感じた。
- ・趣旨説明および研修プログラム、方向性を理解することができた。
- ・中野さんのお話で、実験プログラムのデザインが理解できた。2 日間の研修が楽しみになった。
- ・時間がみじかくなった(15 分)にも関わらず、とても解りやすく、適切な説明でした。
- ・文字が多く、ちょっと理解するのが難しかったです。「社会活動キャリア」が重要だということが後からわかりました。
- ・もう少し十分な時間があればもっと良いと思いました。キャリアの意味、定義についてなどをもう少し詳しくお話しいただけたら…。プログラムについては目的に沿っていると感じました。
- ・プログラム内容説明が把握しきれない。もう少し。じっくり具体的に説明してほしい。マイクの声も後席では小さく聞こえた。
- ・広いプログラムをやるのかと少々戸惑いました。
- ・説明内容はよくわかりますが、早口で流れてしまう感がある。時間的に余裕がほしい。

2. 男女共同参画推進の視点、女性関連施設・女性団体の役割、女性の社会活動キャリアとは

- ・自分も相手も大切に自他の尊重は、これから一番大切な要素だと思います。
- ・男女共同参画の必要性、行政、団体、施設の役割、図でご説明してくださり、わかりやすかったです。
- ・「バラバラの実践を整理して、継続（系統？）立てて個人に返す、実践を進めるための作業」と聞いて、目からウロコ。女性に(特に私に)欠けていたのは、今までの活動を系統立てて、理論的に整理する能力に欠けていたと痛感しました。
- ・女性の参画の少なさは常々思っていたが、男性の意識改革が先か、子供の意識教育か…
- ・改めて認識することが多く、大変参考になった。もう少し時間をとった方が良いと思う。
- ・「男女共同参画」というものが、縦(時間)のつながり、横(それぞれの団体)のつながりのなかで、関係性が重視されて語られていて、自分がしている仕事がどのような意義をもつのか、理解できた。こういった語り、まとめ方は、初めてで、なぜ、男女共同参画が必要なのか、これからの仕事にとっても、他者に説明する上でも力になったと思う。
- ・データを見ての読み方ができてよかった。
- ・充実した内容で、活動や講義の企画に活用できると思った。質疑応答が良かった。やや時間不足。
- ・図を使用してのお話はとてもわかりやすい。
- ・短い時間の中でもわかりやすく事例を挙げていただき、理解できた。いくつかキーポイントとなる言葉も教えていただいた。生活の視点を論理的な話し方で、相手に説得していただくことを女性に身につけてもらいたい。
- ・問題点が山積みで、日々その解決に追われる自分にとって、問題点が結びついたことで課題がうまれ、解決の糸口が見い出せた。

- ・男女共同参画推進が社会の抱えている問題に対応するために必要ということをどのように伝えていったらよいのか。その糸口が少し見えてきた感じがします。「自他の尊重」「基本要件」など。
- ・男女共同参画はジェンダーに敏感な視点に重きをおいてきたが、自他の尊重というところが、中核にあり、男女の人権というよりは、自他の尊重に重きをおくことが重要であるとわかり、目からうろこでした。
- ・キャリアの意味が理解できました。現在、社会教育の分野で、人材育成のシステム作りに取り組んでいこうとしているので、考え方をどこにもっていったらよいのか、糸口が見つかりました。ワークショップをしながら作っていこうと思います。
- ・地域には安全・安心(防犯・防災、コミュニティづくり、環境保全、介護等様々な課題があるが、どれも個人・一家族では対応できないものであり、これまでの生活の仕方や価値観を変えないと解決できないものであり、本日の男女共同参画の視点である自他の尊重の考え方は、大いにヒントになった。
- ・これまで分散的な知識や自分の研修、体験の中で疑問に思っていたこと、また、自分の考え方が経験に基づいていたものが、理論的にまた系統立てて考えられる。大変参考になる内容で、すっかりしました。
- ・集中して聞ける内容の濃い講義でした。女性の視点＝日常性の視点⇒よくわかりました。
- ・活動しながら力をつける。(よく理解できました。)
- ・時間的余裕がほしかった。
- ・許容範囲が広く、あっという間に過ぎてしまったという感じがしました。

3. 情報を活用した実態把握：データで読む男女共同参画

- ・時間があまりない中で、とても丁寧な資料でわかりやすかったです。グループワークにより、データのよみとき、どこに視点を置いているかが整理できた。
- ・女性の活用が実に少ない。女性の活用を促進するには男性の意識改革が先ではないか。
- ・ちょっと時間がたりなくてもったいないような感じもしました。「男女共同参画統計」の意義が「男女別統計」の素材との比較によってとてもわかりやすかったです。
- ・データを見ることで、必要性問題が見えるようになることが分かった。
- ・データを読み解く力をつけるのに良い提案であったと思う。やや時間不足。
- ・統計を通しての説明で内容把握ができ、参考になった。
- ・統計は男女共同参画統計の視点が興味深かった。
- ・データ作成をしていた時には、全く見えなかった実態の把握が今日のグループワークではっきりした。
- ・ワークショップは、統計数値をよみとるだけなのか、要因まで話し合うのか、最初に明確に指示した方が良い。認識がグループによって違う。
- ・データを組み替えてみえてくることがよくわかった。
- ・人に分かってもらうのに有効であると感じた。
- ・男女共同参画統計の説明が面白かった。既存統計の組み替えの事例が興味深かった。左側が主軸と聞き、なるほどと思った。
- ・男女間の格差を数値で表す男女共同参画統計が重要(よく理解できました。)
- ・男女共同参画統計の活用の必要性がわかりました。
- ・統計情報の活用をこれから参考にしていきます。
- ・時間は短く、作業は大変でしたが、皆集中して取り組んでいた。データの読み取りも、話を聞くだけではなく、自分でやってみると理解が深まり、参考になった。
- ・現状の基にある要因と、その現状から見える課題を次のアクションに繋げていくところに大変興味を持ちました。
- ・「しずおか女と男のデータブック」は県内のデータが豊富で、改めてよくできているとわかった。もっと活用したい。

4. 情報を活用した実態把握：情報資源の活用

- ・あざれあの図書室の利用、蔵書リストについて分かりやすく説明いただき、参考になりました。

- ・いつもあざれあの図書室を活用させていただいている。
- ・あっという間に終わってしまった。図書室を先に見たかった。
- ・あざれあの図書館を見学させてもらったことは何回かありましたが、ここまで詳しく、丁寧に説明していただいたことがなかったので、具体的な活用方法がわかり、充実した時間でした。
- ・ネットワーク強化の問題点。ネットワーク化の具体的問題点の把握が見えて来た。
- ・グループワークが良かった。
- ・少し時間が短い。逆に時間があつた範囲にした方がいいかも。
- ・わからないことが出た場合、めんどうがらずに、データを調べることの大切さを学びました。
- ・「実態把握の重要性と分析＋さらなる情報収集」が活用につながることの大切さがわかる。

5. 各地域での女性の「人材育成」について、現状からみえる課題を明確にする

- ・問題と課題の違いを理解することが難しかったです。役割分担により、スムーズに進行できました。
- ・「女性人材」の定義が曖昧だった。(リーダー的な人材をさすのか、女性全般をさすのか)
- ・各ファシリテータのかかわりかたが難しいですね。あまり導いてもいけないと思いますし…
- ・学習支援員がいてくださったことは、とても良いことだった。
- ・問題提起と課題への取り組み、わかりました。皆、同じような問題で悩んでいたことがわかりました。
- ・各々、問題を抱えていて人材育成には共通の悩みがあることがわかった。問題から課題へのワークショップをもう少し明確、端的に指示してくれた方がよかったのではないかな。
- ・問題と課題の整理。ファシリテーターの話が参考になった。
- ・行政・施設・女性リーダーで、問題としてしていることが(もちろん共通点も多いが)その立場ならではの視点のちがいがあるのが興味深いと思いました。
- ・地域活動にかかわっている人たちなので、問題把握は的確であった。問題を課題としてとらえる方法を考える過程が大切であると思った。
- ・問題と課題の違いが理解できた。女性団体グループに所属のワークショップはいろいろな問題があり、それぞれ共通していた。問題から実践はかなり難しいと思っている。
- ・課題の定義は理解しているつもりであったが、いざ書こうとすると少し戸惑ってしまった。時間配分は妥当であった。
- ・グループワークのセオリーどおりの進行で、うまく時間配分ができた。課題の話し合いの中で、解決法も明確にされたものもあった。
- ・個人の資質をあげること、グループの問題としてとらえること、両方が大切であることに気づかされて良かった。
- ・「問題」と「課題」の違いが明確になりました。問題を課題解決の方向に向けていくむずかしさを日ごろから痛感しています。本日のワークで“問題の共有化”の大切さを学びました。すべての根底は意識付けへの仕掛けの工夫だと思います。
- ・問題と課題について考えられた。思った以上に問題を課題課することは難しかった。各センターで抱えている問題の違いもよくわかった。
- ・課題を見出すという目的を達せられたと思います。
- ・職種別にわかれたので話しやすかった。ワークの形は良いと思います。
- ・グループワークは、同じ立場の人たちであり、大変やりやすかった(グループ分けが良かった)。
- ・時間配分が良かった。
- ・ポストイットを使ったワークは効果的。

6. 地域づくりに参画する女性キャリア形成とは

- ・キャリアの概念について理解できました。
- ・「広義のキャリア」をわかりやすくお話いただきました。キャリアアップのための具体的な方法を教えていただきました。(マインドアップ＋スキルアップ)
- ・「スキルアップ」と「マインドアップ」の2つをしてきた女性が出口をみつけているところが興味深い。事例を選ぶのなら、それ別に、グループ別をしたらどうか。希望する事例ではなかった場

合、宿題に気持ちが入りにくい。

- ・「社会活動キャリア」という概念を今回初めて知った。今後、意識していきたい重要な考え方をしることができたと思う。事例をもとにワークシートに書き込むという手法は初めてなので楽しみです。
- ・社会活動キャリアという言葉をはじめて聴き、納得できる部分も多かった。
- ・今日の講義を受けて、次回のキャリア・シートづくり、分析が楽しみです。
- ・社会活動キャリアの支援、まわり地域にどのようにあたえるのか重要と思う。
- ・「社会活動キャリア」の意味がわかりました。自分のこれまでの歩みと現在の状況もふりかえりながら聞くことができ、やはり地域の人材発掘にはこの視点を推進し敷くことが大変重要であることを痛感しました。
- ・「社会活動キャリア」についてさらに理解が深まった。レジュメの2、3の平成13年度からのヌエックでの研究の取り組みがよくわかった。

静岡県 第2回 (2008年12月1日)

1. 地域づくりに参画する女性のロールモデル分析

- ・選択した方が、明確な活動内容がなく、分析の答えが重複する部分が多かった。自分の分析力のなさに打ちひしがれています。
- ・あまり深く考えず分析するロールモデルを選んだが、宿題をやる過程で、議員をあきらめたのはなぜかなど、より知りたいところを読み取れず、難しかった。国広先生の明快なコメントで、このロールモデルの弱みもきちんと分析していいのだとわかり、スッキリした。
- ・大事な分析で、多くのことを学びました。私たちの詩の中でもこういったロールモデルの分析の積み重ねが人材発掘につながると思います。「社会活動キャリア」として認められる工夫、見せ方が大事ではないでしょうか？
- ・モデルを分析することにより、自分の次の活動や団体のスキルアップのため、または振り返りの重要性を学ばせていただきました。
- ・同じ人の分析であって、グループによりとらえ方が違う部分があった。講師のコメントで新たな気づきがあった。全部同じモデルで分析し、気づき、問題点を協議すると良かった。
- ・ロールモデル分析をすることによって、支援する内容、必要なことなどが明確になった。
- ・ポストイットでのそれぞれの事例のとらえ方が楽しくできた。
- ・分析に対する国広先生のアドバイスが大変役に立ちました。
- ・グループごとの事例をもとに、必要な支援、社会的キャリアとしての力量を読みとくことができた。
- ・ロールモデル分析の手法は初めてで面白かった。国広先生のコメントによって、何が社会活動キャリア形成のための支援として有効か、具体的に見えてくる感じがした。
- ・目的に沿った内容だった。
- ・時間にも余裕があり、グループでよく話し合いができた。
- ・ワークの題材になった、ロールモデルに実際会ってみたくなった。本人に発表を聞いてほしい。
- ・力量を考える時間が少なかったのが、宿題に出ていると良かった。
- ・初めての経験であり、分類の区別がつかなかったりと、戸惑いながらも勉強できたことに感謝しています。
- ・同じ題材を3グループで分析したが、それぞれに違う観点からまとめていたのが興味深かった。
- ・ロールモデルの分析は手法としてよいと思う。

2. 地域づくりに参画する女性人材が育つための事業につながる課題を立てる

- ・自分が今まさに直面している問題がそのまま答えとなってしまいました。ネットワークづくりのむずかしさ、この回答は案外身近な課題に隠されていたことに気がきました。
- ・前回の問題と課題の違いを意識しながら、取り組むことができた。行政担当者が欠席だったので、行政側だったらという視点も入れながら考えた。緊急性、必要性、実現可能性は日頃、自分たちも意識していることなので、納得して取り組むことができた。

- ・問題の拾い出し→整理→分析 課題抽出が事業企画にいかにか明確になりました。
- ・「事業につながる課題」というと「事業ありき」から入ってしまう。「課題」が何かを十分つきつめてから発生するのが「事業(方策)」であり、ここでの議論がとても重要だと思います。
- ・問題点を明確にすることにより、課題がみえてきた。良いワークショップでした。
- ・地域課題を明確にできた。三者で話し合う場は良かったと思う。
- ・問題点が課題となり、どうしたらよいかが見えてきた気がします。
- ・課題がしぼれてよかった。
- ・男女共同参画に関する知識は本当に低いと思う(何十年も啓発しているのに知ろうとしない女性が多い)。今回のワークショップで役立っていったらと思う。
- ・地域の(市の)行政、団体の課題が明確になった。
- ・市ごとのグループというのは、あまりない機会でした。他市とグループになるのも情報交換の意味では良いのですが、同じ市だと実現可能性のあるリアルな話ができるのが良い。しかも、市・センター・団体が一同にかいする機会というのもこれまで意外となかったもので、これからこういう時間を持ちたいと思った。
- ・1に比べて作業時間が短かったことも有、もう少し時間をかけて考えたかったと思います。
- ・地域ごとに分けた方が良かったが、3者で違う内容だったので、すり合わせが難しい。
- ・学習支援者がいたことが全体をスムーズに進めることや、考え方の整理のため良かった。

3. 地域づくりに参画する女性人材が育つための事業計画案作成ワークショップ

- ・各主体の連携・役割分担の作成にもう少し時間をかけられるとよい。
- ・施設の状況が違うことを念頭に置いてください(直営、一部委託、指定管理)
- ・事業計画が具体的でないグループが多すぎる。
- ・グループの中に行政がいなかったのが残念。
- ・時間が短い。
- ・時間が少ないこと、参加者との交流がほしかったこと…要望です。
- ・1泊2日で1回はやってもよかったのでは？
- ・3つの違う立場の方同士で、話す機会は全くなかったもので、良かったと思う。
- ・行政の方と積極的に意見交換ができたことがとても大きな収穫です。ありがとうございました。
- ・行政、センター、団体とこういった話し合い場が大事であり、特に行政側は市民参加、参画、協働が苦手だろうと思います。市民側にいかに歩みより対等な立場を模索していくのか大きな課題ではないでしょうか？市民側から学びことに尊敬の意をもって対応することがこれからは今まで以上に大切になってくる時代を迎えています。
- ・課題の立て方の学びはとても有意義でした。
- ・実践できる計画案が作成できました。
- ・施設、行政、団体が一緒になっての計画作りは大変必要と思う。
- ・作成した案を発表し、各参加者から良い点、改善した方がいいところを出してもらい、それをもとに再検討する方法はとても良かった。今日立てた事業案は来年度より改善して必ず実施したいと思った。
- ・中間報告で意見を受けたところを生かしながら、作成できた。意見を書く時間、まとめる時間が短かった。
- ・それぞれのグループに対してコメントをまく、もらうことはとてもいいと思いました。プランの練り直しにつながる
- ・コメント集めて修正するという手法が良い。外からの視点で気づきがある。コメントを書く時間が短い、かえって集中できてよいと思った。三者の連携の重要性がわかった。さらにそれを取りまく他団体との連携についても考える時間がもう少しあると良かった。
- ・企画の途中発表があるところがいい。(再検討する時間があっていい。)
- ・国広先生が加わってくださったので、発想の枠が広がった！ありがとうございました。
- ・参画造りの楽しさ、知らなかったことを知ったうれしさ、次のステップへとつなげられるような意識を持てたことが非常に良かったと思います。
- ・地域ごとの具体的計画でよかった。

- ・自分たちのことを題材にしたので、現実的な見方、発案ができた。
- ・ワークショップは団体の方との交流ができてよかったと思う。
- ・ファシリテータがすばらしく、スムーズに進みました。
- ・学習支援者がいたことがまとまりにつながった。

千葉県 第一回（2008年11月26日）

1. 本プログラムの意味・意義を理解する

- ・とても難しいと思うが、理解できるように学びたいと思った。
- ・今回プログラムの大切なところなので、ゆっくりと理解したかったです。
- ・プログラム開始のころはなかなか理解しづらかった。特に私自身が、共同参画への認識が充分ではなかったが、プロセスの中のスタートラインに立ったという意識で、大変有意義な1日であった。男女共同参画への意識を持つことができたこと、大変うれしく思います。
- ・情報力や分析力など、人材育成に必要な力が何かを理解できました。
- ・研修目的に沿っていたと思われる。
- ・よくわかりました。
- ・理解しやすかったと思います。

2. 男女共同参画推進の視点、女性関連施設・女性団体の役割、女性の社会活動キャリアとは

- ・今までみのがされていた視点なのだと知った。評価されるようになるといい。
- ・次の世代へ大きく伝えていくことの大切さ、意識の醸成が明確となった。もっと時間をかけてほしい内容でした。
- ・“関係の重視”は、男女共同参画を進めるだけでなく、地域づくりそのものにかかわる非常に重要な視点だということを勉強しました。
- ・目的に沿っていた
- ・たいへんわかりやすく、私のこれまでの活動が整理されました。
- ・視点のとらえかたについて改めて気付かされましたし、自分の中の整理もできました。

3. 地域づくりに参画する女性のキャリア形成とは

- ・課題山積み。やる気だけではだめだし、多くの人のフォローがきっと必要だ。
- ・分析事例が3つしかないのは、選択肢が少ないように感じた。せめてグループ分(今日は5つ)は選択の自由があってもよいのではないか。
- ・グループ分けの話し合いは、時間もなく、もっと突っ込んで話し合いたかった。
- ・もう少しお話を聞きたかったです。その後グループに分かれて、ロールモデルの選出(事例分析)をしたのですが、宿題としてここが書いてくるのであれば、特にグループで決める必要はなかったのではないのでしょうか？それぞれが自宅で書きたい(分析したい)人を書いてくる方が良かった様に思います。グループで話し合う意味がわかりませんでした。
- ・宿題にするのであれば、時間を取らなくてもよかったのではないかな。
- ・活動をすることで地域が広がる。経験が広がれば、地域も広がる。私自身の考えも広がりました。
- ・“言葉から行動へ”という言葉が印象に残りました。自分にとっての「地域」についても考えてみようと思いました。
- ・目的に沿っていた。

4. 情報を活用した実態把握：データで読む男女共同参画

- ・データを読む力が私にはまだ足りないと感じた
- ・データの拡大をお願いします。検討資料が多い。
- ・もう少しデータを読む時間があれば良かったと思いました。
- ・ヌエックのデータベースは知らなかったので、今後活用したいと思います。
- ・作業内容がわかりにくかった。

- ・数字に慣れていないため、読み取るという作業は大変だったが、ケースを1つ、2つ見ているうちに何かに気づき、感じていくことができた。その実態を把握し、では、なぜなのか？を意味付け、分析していくことで、より全体が見えた。
- ・昨年度、市の男女共同参画白書を作成する際に、2006版の男女共同参画統計データブックを大変参考にさせていただいた。その時に痛感したのは、本当に難しいのはデータの分析ではなく、データの収集そのものであるということである。市町村においては、分析する能力を身につけても、肝心の分析するためのデータがないこともあり得る。
- ・情報としていろいろなデータが社会に出っていますが、私自身の把握する力、データを読む力不足を実感しました。
- ・目的に沿っていた。データを把握していることは強みになると感じた。
- ・データを読むというのは、大変な作業だと思いました。数時から見える事実のとらえ方に慣れていないので、もう少し時間があればよかったと思いました。

5. 各地域での女性の「人材育成」について、現状からみえる課題を明確にする

- ・まず、人材育成の機会に出会い、一歩家から出ることかと思う。
- ・小さな一歩から、仲間作り→意識の共有、問題点の(古い村意識や偏見等)、明確にし、自己決定できる自信を持てるよう支援していく。
- ・各地域で抱えている問題が、これほど共通しているとは思わなかった。問題点を明確にするのに有効な方法であるので、今後も是非活用したい。
- ・具体的に言葉にすること、表現することのむずかしさを感じましたが、コツをつかむといろいろ出てきました。地域活用しやすい内容だと思います。
- ・ワークショップは非常に有効な学習方法だということを実感しました。
- ・目的に沿っていた
- ・あまりに地域差がありびっくりしました。多くの意見が出て、課題が明確になったと思います。
- ・他地域の方の生の声が聞けて大変参考になりました。
- ・議論を深め、課題に到達できてよかったです。
- ・ワークショップの中で、いろいろと話ができてよかった。

千葉県 第2回 (2008年12月6日)

1. 地域づくりに参画する女性のロールモデル分析

- ・分析することの難しさを感じた。
- ・時間が短すぎたと思います。
- ・企画・内容は初体験の方法(学習方法)、受け身ではなく自らが、聞く、まとめる、話すを行う中で、眠っていた脳細胞が目覚めたような…
- ・同じロールモデルに対して、個人でのそれぞれの視点で分析にも違いが出る。また、グループでのまとめ方にも違いがあった。午後のワークショップに参考となる宿題でした。
- ・支援と力量の2つの面から考えるのは、わかりやすかった。ワークシートは分類が細かいように思う。
- ・次の時間の話し合いの中で、その人の活動の進め方がかなり参考となった。
- ・時間配分が適切。(発表の時間が短いからこそまでの経過が大事なんでしょうからいいのかな。)
- ・求められる女性は地域で様々なのだろうと思うが、自分らしく生きていることの大切さを学ばせていただきました。
- ・社会活動キャリアをもち、地域づくりに参画するロールモデルを分析することによって、グループワークが活発に議論進められたことは良かったと思います。第一回目出席できなかったのも、最初戸惑いましたが、ブックレットをみながら発言できました。

2. 地域づくりに参画する女性人材が育つための事業につながる課題を立てる

- ・課題の立て方は難しかった。課題という言葉がピンとこない。
- ・地域性を考えながら、今までの伝統・文化をふまえつつ、この意識改革を促していくことが大切。

また、男女共同で、社会に貢献できる、学習の場(イベント。講座、井戸端会議、お子安講など地域の行事)で繰り返しあきらめず伝えていく。(3と重なります。)

- ・実現可能性のあるテーマを考え、企画していくこのプログラムは大変参考になりました。できれば時間をたっぷりとして討議できれば良かったです。女性グループの方の生の声を聞けて良かったです。(3も同じ)
- ・話し合うことでどんな課題があるか考えることができました。
- ・あらためて自分の地域を考えることができて大変有効でした。発表5分でしたが、4分30秒くらいでリンをならしてくださったら、発表者は時間が読みやすかったです。
- ・ファシリテータの意見が役立ちました。
- ・とても参考になった。企画したいものが多くあり、1つでも実現したい。
- ・話をするだけでなく、ファシリテータの助言を得ながら組み立てることができて大変良かった。ポストイットを使い、書くことで疑問点や抽象的な言葉もわかりました。

3. 地域づくりに参画する女性人材が育つための事業計画案作成ワークショップ

- ・具体的なプランを作成できてよかったと思う。
- ・具体的な話に発展し、事業が固まったのでよかったと思う。もっと時間があれば尚よかったと思う。
- ・ほかの地域の考え方などがわかり、とても面白かったです。
- ・修正点の発表までしたのは良かった。作成時間が充分あり良かった。
- ・自分たちで一から企画立案する機会はなかなかないので、良い経験になりました。
- ・他の人の意見は非常に参考になります。各段階で消化不良のため、取り組むのに時間がかかってしまいました。参加できて良かったです。これは日常の仕事に生かしていきます。全体として時間をもっとかけて取り組みたいテーマです。ありがとうございました。
- ・これもとても参考になった。今回企画した事業系計画案が実現することを祈っている。また、もう少し具体的に練り直していきたい。
- ・協働事例「まちづくり…」を提示していただいたが、計画案の整理につながり良かったです。
- ・ターゲットをしばった女性人材が育った事業が考えられたと思う。
- ・ファシリテータの方の的確なアドバイスによってよりよいものができたように思います。

資料編 2

実験プログラム 終了後アンケートまとめ

1. 企画に関する主な意見

	静岡県	千葉県
	(行政：行政担当者、施設：女性関連施設職員、団体：女性団体・グループのリーダー、不明：所属不明) ◎よかった点 ■改善が必要な点、満足できなかった点	
プログラムの全体構成	◎構成は非常によく練られたものであり、いい流れが見える (行政・施設・団体) ◎プログラム・デザインが示され、プログラムの進め方が説明されたこと (団体) ◎最初にプログラムの全体像が明らかにされている点。今、何をしているのかそのつど把握しながら、問題意識をもって取り組むことができた (行政・団体) ■プログラムの関連性を明確にしていくことが必要 (行政) ■一つずつのコマ時間を長めに (施設) ■資格取得講座のように詰め込みすぎ (団体) ■スケジュールがタイトだった (施設)	◎構成がよい (行政・団体) ◎無駄のないプログラム構成 (団体) ■1日目は何をしているかわからなかった (団体)
連携・協働	◎市民・施設、行政職員の三者で作業することが連携・協働につながった (行政) ◎三者で作業することで、即実行したい事業計画ができた (団体) ◎2日目に行った同じまちの3者が課題解決に向けて課題を立て、連携・協働を生かした事業計画を立てるのも、3者の話し合いのなかで、連携・協力しなくては出来ないワークでとてもよかった (施設) ■全体でお互いの情報交換する時間をもっとあったほうがよかった (施設) ■連携・協働について議論する時間を望む (不明、団体)	◎連携・協働のためのしかりが効果的 (団体) ◎連携・協働のポイントが前より理解できた (行政) ◎他市、他団体の様子を知ることができた (行政) ◎グループワークにより、たくさんの人と情報交換できてこれからの事業の参考になった (施設)
社会活動キャリア	◎・社会活動キャリアの意味、重要性が理解できた (行政) ◎社会活動は個人的キャリア形成と考えていたことが、社会的人材育成に結びつくことを知った (団体) ◎自分自身が社会活動キャリアのロールモデルと実感 (団体) ◎一人の人生の経過をチャートに落とす仕組みはおもしろいと思った (行政) ◎ロールモデル分析により、社会活動キャリアを具体的にとらえることができた (不明、行政) ■同じモデルの分析をして発表しあえば、読み方の違いが協議できた (施設・団体) ■もう少し時間があつたら、示されたロールモデルを分析し、キャリアの流れ、共通した支援が存在したか、個人の力量のみでキャリアを積み重ねられたのか分析したらおもしろかった (団体)。	◎社会活動キャリアの意味、重要性が理解できた (不明、団体) ◎子育てをしながら地域の中で、ネットワークをつくりながら、何かの活動をしている女性は、たくさんいるのだから、それをキャリアとして認める考え方が、もっと広まれば趣味の活動だけでなく、社会に働きかけていくような活動をあとおしする力になると思う (不明、団体)。 ◎個の認識はあるが社会認識がない。小さいうちから社会的存在であることを教えるべき (団体) ■部分的にしかり理解できなかったが、全プログラムが終了してから全体が理解できた (行政)
今後の実践につながるかどうか	◎実践につながる (施設・団体・行政) ■事業計画への導き方が不足 (団体) ■連携図を作る時間がほしかった (行政)	◎連携・協働のための体験ができた (団体) ◎行政、施設の人と一緒にとてもよかった (団体)
今後の実践につなげる上で困難な点	・予算獲得 (施設) ・行政とどのように連携・協働 (団体) ・忙しくて時間が足りない (団体) ・情報交換の場 (施設) ・地域には協働しうるNPO,団体は少ない (不明)	・足りないのは予算や人材。女性団体等は同じ目的を持っている方々でキャリアや知識も豊富だが、行政は必ずしもそうではないので、新しい事業を企画、実施していくことの職場内での理解や、事業に対する市民の理解を得るということが、今回の研修でわかった (行政)

2. 運営に関する主な意見

	静岡県	千葉県
	(行政：行政担当者、施設：女性関連施設職員、団体：女性団体・グループのリーダー、不明：所属不明) ◎よかった点 ■改善が必要な点、満足できなかった点	
参加型プログラムか	◎話し合いと発表の繰り返し、小気味よいスピードだった(団体) ◎参加型プログラムになっていた。…2日目は1日中ワークだったが、あっという間に1日が過ぎ、時間の長さを感じなかった(施設) ◎作成案について、全員からよかった点、改善点を出してもらう手法はとてもよいと感じた(不明)。 ◎ふせんに意見を書いて渡す方法がよかった(不明・行政) ◎一人一役がつくのがよかった(団体) ◎3人1組だと意見が言いやすい。行政、施設、団体の組み合わせだったのもよかった(施設) ◎参加者全員が発表できてよい経験になった(不明・団体) ■教材が多すぎて、参加者のやらされ感があった(行政) ■短時間で物事を判断するのは訓練を必要とする(団体) ■プレゼンテーションの技を磨く必要がある(不明・施設)	◎小人数グループで参加型だった(行政) ◎参加型だった(不明・団体) ◎事業計画作りに全員が意見を言えたのはよかった(団体) ◎聞く、話す、書く、まとめるなど、五感のすべてを働かせて、参加できた。講演会等の受け身の研修、学習に慣れていたので、とても刺激的で、是非、実践につなげたいと思った(団体)
ファシリテーター、学習支援者の関わり方	◎横道にそれるのが防がれた(行政・不明) ◎迷い、言葉がみつからない時に適切なアドバイスがあった(施設) ◎ファシリテーター、学習支援者それぞれの個性やグループの雰囲気によって、関わり方は変わって当然。コマごとに違った方々と関わって、面白かった(施設)。 ◎解決の方向へ促してくれたところ(団体) ◎上からの目線ではなく、一緒に考え助言してくれた(不明・施設) ■学習支援者の育成が必要(団体) ■一般的な意見ですが、全体の進行者とファシリテーター全員が、個々のワークショップで求める到達点や用語(地域・問題・課題等)の定義等、なるべく共有を深めておく必要があると思います(行政)。 ■ファシリテーターと学習支援者の意思統一、また毎回、同じ学習支援者が参加できないため、学習支援者どうしの意思統一も必要かと思いました(行政)。 ■時間の制約があったせいか、やや強引さが感じられた(不明)。	◎適切な助言がよかった(団体) ◎軌道修正、横道にそれるのが防がれた(施設・団体) ◎討議を進行する中で、各ポイントに必要な最小限の助言等をいただくことにより、限られた時間の中で効率よく進めることができた(行政) ◎以前、ワークショップでの学習を行いました、今回のように小グループでそこにファシリテーターがつきワーク方式で行ったことは始めてでしたが、要領よくクエスションを出してくれるので意見が出しやすかったです。講演を聞いたり、分科会に分かれての議論より、ワーク方式グループ展開は自分ですぐ跳ね返ってきます。話す、それを書き、整理することで次に繋げられる、矛盾点を言っていることも確認でき大変良い学習の場でした。良い緊張感がありました。それはきっとファシリテーターの的確なアドバイスがあったからだと思います(団体)。
運営上とまどった点など	■もう1回増やしてほしい(施設) ■参加者と主催者の意見交換の時間がほしい(行政) ■もう少し余裕がほしい(不明・行政・団体)。 ■宿題はないほうがよい(施設) ■終わりの時間を早めてほしい(不明・団体・行政)	■全体的に余裕がない(行政) ■各地域のリーダーの活動を聞く時間が少なかった(施設) ■終わりの時間を早めてほしい(行政)

パネルディスカッション
抄録男女共同参画を推進する
リーダー像

パネリスト

キム・ジェイン 韓国両性平等教育振興院長
香川 恭子 広島市女性教育センター WE プラザ館長
神田 道子 国立女性教育会館理事長
原 麻里子 ジャーナリスト、コラムニスト

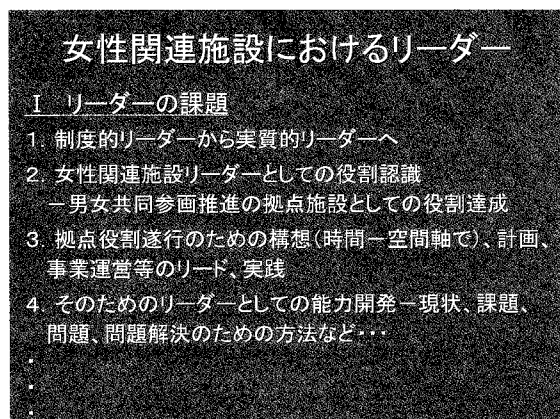
コーディネーター

女性関連施設におけるリーダー像

神田道子：

神田でございます。女性関連施設におけるリーダーについてお話をさせていただきます。女性会館や男女共同参画センターなど、いわゆる女性関連施設は「会館」のデータベースによると全国で約350館ありますが、今、指定管理者制度が導入されるなど、変動期にあります。こうした時期においては、とりわけリーダーの役割は大きく、その力量が問われます。

そこで、まずリーダーの課題を整理してみました。それが図1です。



<図1>

第一に挙げた制度的リーダーというのは、地位に就くことでリーダーとみなされてしまうことを指します。民間団体などの場合にはリーダーになる時はそれだけの力があって選ばれるのだと思いますけれども、女性関連施設などでは、多くの場合、そのポストについたことでリーダーとしての役割を果たすことが必要になります。つまり、ポストそのものがリーダーの地位と役割で構成されており、そこに人がはめこまれるという性格を

もっているわけです。そこで地位についた場合には実質的にもリーダーとしての力をつけていくことが第1の課題です。

その場合にまず女性関連施設のリーダーとして役割認識をしっかりと持たないといけないだろうというのが第2の課題です。女性関連施設は地域の拠点であり、男女共同参画推進が役割です。そういう認識をしっかりと持つ必要があります。そして拠点としての役割を実際に果たしていくことが課題で、リーダーのポストについたからには、それを進めていかなければなりません。それを具体化していくに際しては、ビジョン、つまり事業を進める方向性や構想をもつ必要があります。それが第3にあげていることです。

ビジョンを持つ時には現時点だけの状況を見るのではなくて、歴史的にこの施設はどういう過程を経てここまで来たのかという時間軸と、さまざまな場所でどういうことをやっているかという空間軸とを合わせてみる必要があります。それに基づいて計画をたて、具体的な事業を運営していくのですが、施設リーダーの場合には、それらをリードして実際にそれを実践していくことが役割ですので、そのためには第4としてあげた、それができるような能力開発をしていかなければならないということです。そのためにはまず、現状の把握が必要です。現状の把握、課題の把握、さらに問題解決について見通しを持って、具体的に動いていける能力開発は必須のことだろうと考えております。さらに個々の課題解決をしていく上で基礎になる男女共同参画のとらえ方について共通認識をもつ必要があると考えております。基礎を持たないとばらばらになってしまう。ひどい場合は構想と計画がばらばらということにもなりかねません。それは、男女共同参画理念の枠組みというべ

きものです。男女共同参画社会基本法に基本理念は述べられていますが、それを踏まえて私なりにしめたのが図2、図3です。

Ⅱ 課題解決の基礎としての男女共同参画社会の基本理念として重視すること(目標)

1. 男女共同参画は「自他の尊重」が基本であり特徴
—関係性の重視
2. 自立、能力開発・発揮、社会参画は個別でなく3つを相互に関係をもってとらえる
—個人の生き方に関して
3. 自立、能力開発・発揮、社会参画を自他の関係ととらえ、それらを進めあい、支えあう関係を重視
—自他の関係性

<図2>

4. 自立、能力開発・発揮、社会参画はプロセスとしてとらえる
5. 個人の生き方(自立、能力開発・発揮、社会参画)の基盤として安心、安全な生活の重視
—生活に関して
6. 生き方、生活を実現するためにはそれを可能にする社会システムづくりの必要性
—社会に関して
7. 社会参画はこれらをつらぬく活動

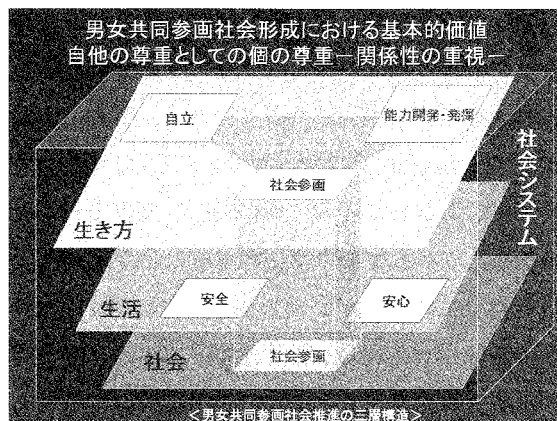
<図3>

男女共同参画社会基本法のまさに基本にある価値・理念は個の尊重ですが、私はこれは自他の尊重、自分と他の尊重なんだととらえています。あえて男女というのは女にとっては男、男にとっては女、つまり自分と他の関係がこの男女共同参画の考え方の基本にある。それは、自他の尊重であり、言い方を変え、関係性の重視です。男女共同参画が価値とされることで、自他の関係性の重視がより強く、はっきりと出てきたととらえて

おります。それを基礎にある価値・理念とした上で、個人の生き方として自立、能力開発・発揮、社会参画という方向が重要だととらえています。自立、能力発揮はこれまでもいわれてきて、社会的に共通の価値として定着してきていますが、社会参画が加わったことは新たな段階にきたことを意味しています。自立、能力発揮がともすると自分だけになりがちで、社会をつくることと自分の生き方が分離しがちであったのに対して、社会参画が価値として入ってきたことによって、社会と自分の生き方とを関連づける枠ができたのととらえております。従って、この三つを相互に関連してとらえる観点が必要です。これは自他の尊重を現実に行っていこうとするときに不可欠なのです。

自分だけの尊重である限りは、他は視野に入ってきませんから自分の能力を発揮することを考えていけば良いことになります。他の尊重という観点を入れると、そう簡単ではないのですね。広げれば広げるほど難しい問題がでてくるのです。例えば、介護の問題を考えても、自分のことだけなら家族の中で済むかもしれないけれど、他の人のこととなるとそれでは済まないのです。本当は自分の尊重でも必要なのですけれど、実際に他をも尊重しようとする社会づくりが不可欠です。そこでこの三つを一つずつとらえるのではなく、関連してとらえるべきだと考えています。自立とか、能力発揮とか社会参画とかを自他の関係で捉えるとすると、自立に向って進んでいき、それを支えあって進めあう関係が重要だと思います。自立にしても能力発揮にしても、これで終わり、完全にできたということはないと私は思っています。それを価値とし目標として、方向として進んでいくのであって、プロセスなのではないでしょうか。この生き方を支える基盤にあるのが、安心し安全

に暮らせる生活であり、それがないと生き方もゆらぎます。自他の尊重を基本にすると、安心、安全に生活できるような社会的システムが必要です。これを図4にしました。



＜図4＞

一番上がいわば生き方の次元で、自立と能力開発・発揮と社会参画の3つを相互に関連してとらえていくということ、そしてその下の部分に、安定した生活があり、これらを実現していこうとする時にどうしても社会システムを作っていかなければならない。社会システムはこれを包み込むものであり、結びつけるものでもあります。「社会参画」によって生き方が社会的に広がり、個人と社会を結びつけることができるようになったととらえています。こういう図を描きますと、現在自分がやっていること、そして他の人がやっていることの位置がわかります。それぞれがやっていることは、関係ありませんということにはならない。自分は今どういうところにいるかということを考えたり、位置づけたりすることが必要なのではないのでしょうか。それから構想を立てたり、計画を立てたりするときにも、こういう考え方をとることによって、いまどこで計画を立てているか、

どこで動いているかということがわかるのではないかと考えています。社会参画ということは、戦後の中で発達したひとつの段階だと思っております。能力の発揮などいろいろなことがいわれてきたけれども、社会参画はそれらを全部総合し、さらに進めるという意味を持ち、それから個の尊重が関係性の尊重として自他の関係の重視を明確に打ち出したと思っています。それは連携することでも、考え方の基礎ができたにとらえています。リーダーは、現状の位置を確かめ、それに基づいて行動していく必要があります、そのためにはこうした枠組みが役に立つのではないかと考えています。ありがとうございました。

資料編 4

資料編4 「情報を活用した実態把握： データで読む男女共同参画」

連携・協働による実験プログラム in 千葉
2008年11月26日(水)

13:30～15:00

独立行政法人国立女性教育会館
研究国際室研究員 高橋由紀
情報課専門職員 森 未知

進め方

- I. 男女共同参画を推進するための情報
- II. 男女共同参画統計について
- III. 千葉のデータを読むグループ・ワーク
『千葉県男女共同参画白書』に掲載されている
データを使い、数字から読み取れることについて
グループ討議、発表
- IV. 実態把握から課題分析への展開

I. 男女共同参画を推進するための情報

「情報」とは？

- (1)事物・出来事などの内容・様子。また、その知らせ。
- (2)[information]ある特定の目的について、適切な判断を下したり、行動の意志決定をするために役立つ資料や知識。

出典 三省堂「大辞林 第二版」

男女共同参画を推進するためにはどのような情報が必要でしょうか？

始まりは女性に関する情報

国立女性教育会館初代館長 縫田曄子氏
元ジャーナリスト(NHK解説委員1962年～)

女性に対する情報提供への関心

↓

女性情報の不足への不満

↓

女性情報の収集と蓄積、さらに国の内外における
女性情報の共有への願い

『情報との出会い：語り下ろし』ドメス出版,1999

国立女性教育会館(1977年開館)に女性のための
情報センターを

会館の機能の一つ

婦人問題の情報資料の収集と提供

1975年 国際婦人年

「世界行動計画」でも言及

婦人の地位を測定するための資料及び
指標の不足乃至不備

1979年 情報図書室開室

◆収集する資料・情報

一般的な図書・雑誌のみでなく、

・女性団体・グループの記念誌、ミニコミ、
チラシなど

女性の活動の記録

・行政資料

→原資料はアーカイブへ

- ・全国紙・地方紙の女性関係記事のクリッピング
(1977年から現在24万件以上→全てデータベース化) 人物・活動情報。速報性



- ・女性の状況把握、問題解決のために必要なデータ、調査

例) 高等教育機関における女性学講座の調査
開講大学数、科目数、内容
昭和58年度(1983)～



現在「女性学・ジェンダー論関連科目データベース」
として提供



女性情報とは

1985年、国立婦人教育会館(当時)「情報に関する婦人教育国際セミナー」における定義

- (1) 女性の地位向上、女性問題解決のために必要な情報を女性の視点で作り、提供する情報
- (2) 女性運動の基礎となるのは情報であり、それは行動を起こす意識、実行力、他への働きかけの「力」であること
- (3) 情報は単なる資料ではなく人間のネットワークをつなぐ「のり」の役割を果たすものであり、それ故に女性たちの連帯に欠くことができないもの

提供

情報を的確に提供するには、整理、組織化、
提供方法の工夫が必要

1987年

データベースの開発開始(文献情報から)

婦人教育研究会を組織し、『統計にみる女性の現状』刊行

1991年 オンライン情報検索システム開始

当時はパソコン通信。

全国とのネットワーク化。

1992～1996年度

「女性及び家族に関する統計データベース懇談会」を組織し、「女性及び家族に関する統計データベース」を構築

1995年 第4回世界女性会議(北京会議)
「行動綱領」
戦略目標H. 3.
立案及び評価のための男女別のデータ及び
情報を作成・普及すること

1999年 男女共同参画社会基本法
インターネット上でデータベースの
提供開始
2001年 独立行政法人化。会館設置法に「男女
共同参画社会の形成の促進に資する」が入る。

2001年度～現在

男女共同参画に関する調査研究により、『男
女共同参画統計データブック』2003、2006刊
行(2009年版準備中)。
データベース改善指針により、名称を「女性と
男性に関する統計データベース」に変更。

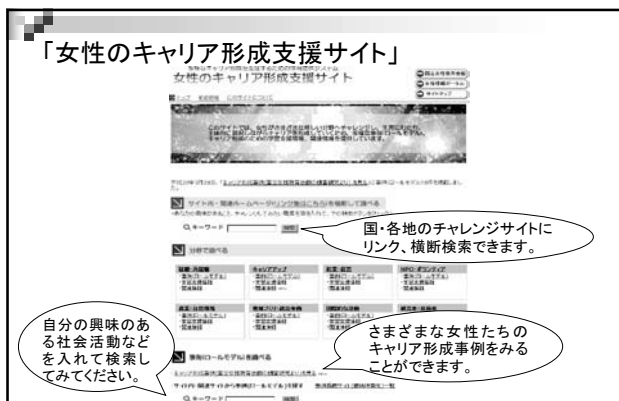
女性と男性に関する統計データベース



- ・日本の主に政府統計から551表を提供。
- ・表はエクセルでダウンロード可能。
- ・フリーワード、分野、省庁から検索できる。
- ・関連リンク集も提供。

2006年 女性情報ポータル“Winet”提供開始 女性情報ナビゲーション: インターネット上の資源の組織化





男女共同参画基本計画(第2次)平成17年
第2部 施策の基本的方向と具体的施策
1. 政策・方針決定過程への女性の参画の拡大
(4) 調査の実施及び情報・資料の収集、提供
(前略)また、女性の人材に関する情報の収集・整備・提供に努める。更に、国民の行政情報へのアクセスを進め、政策・方針決定過程の透明性を確保する。

第2部 施策の基本的方向と具体的施策
2. 男女共同参画の視点に立った社会制度・慣行の見直し、意識の改革
(4) 男女共同参画にかかわる調査研究、情報の収集・整備・提供
男女共同参画社会の形成のためには、基礎的条件の整備として、男女共同参画にかかわる調査研究、情報の収集・整備・提供が必要である。

このため、男女共同参画社会の形成に関する総合的・基本的な課題について、調査研究を進める。
また、あらゆる施策に男女共同参画の視点を盛り込む際の基礎資料として重要な、男女の置かれている状況を客観的に把握することのできる統計情報等の収集・整備・提供を行うことが必要である。(中略)統計情報等は可能な限り性別データを表示して公開していく必要がある。

同じく『男女共同参画基本計画(第2次)』
具体的な施策における「情報」

- 権利が侵害された場合の相談窓口、救済機関等の情報提供
- 女子学生の就職問題に関する情報提供
- 職域拡大、職業能力の向上のために必要な情報提供
- 再就職準備のための情報提供
- 起業に関する情報提供
- 農山漁村の女性リーダーのネットワーク化の推進、先進的な取組や知識・技術に関する情報交換・提供等
- 仕事と育児・介護の両立のための情報提供
- セクシュアル・ハラスメント防止のための情報提供
- 妊婦の服薬情報とその後の出生児への薬の影響の有無に関する情報の収集・蓄積
- 情報を主体的に活用能力を育成するための情報教育の推進

「情報を活用した実態把握：データで読む男女共同参画」

担当：森未知（国立女性教育会館情報課専門職員）、高橋由紀（同 研究国際室研究員）、

ねらい：

- ・男女共同参画を推進するための情報について知る
- ・男女共同参画の現状を、統計データに基づいて把握する
- ・男女共同参画統計について知識を得る

本日の進め方：

I. 男女共同参画を推進するための情報

II. 男女共同参画統計について

III. 静岡のデータを読むグループ・ワーク

『しずおか女と男のデータブック 2008』あざれあ編に掲載されているデータを使い、数字から読み取れることについてグループ討議を行い、発表する

IV. 実態把握から課題分析への展開

I. 男女共同参画を推進するための情報

別資料参照

II. 男女共同参画統計について

1. 男女共同参画の実態を把握する必要性

(1) 男女共同参画社会とは

男女共同参画社会基本法（1999 年）前文

「・・・少子高齢化の進展、国内経済活動の成熟化等我が国の社会経済情勢の急速な変化に対応していく上で、男女が、互いにその人権を尊重しつつ責任も分かち合い、性別にかかわらず、その個性と能力を十分に発揮することができる男女共同参画社会の実現は、緊要な課題となっている。」

(2) 男女共同参画のわかりにくさ

生活実感から出てくる言葉として、以下のようなことが言われている

- ・法的な権利は、女性も男性とすでに対等になっているのではないか
- ・女性は家庭内や地域社会で実権を持っているのに、これ以上どんな権利を欲するのか
- ・女性に関わる問題であって、男性には関係ないのではないか
- ・女性と男性はことなるのだから、社会的扱いが違って当然ではないか
- ・男女共同参画社会は、ほんとうにあるべき社会の姿なのか

- (3) 男女間格差の認識の必要性
- ・国際的に見ると、格差がみえやすい

成人識字率

世界の平均寿命(2005年)

	女	男
日本	86	79
アフガニスタン	42	42
ネパール	61	61
パキスタン	62	61
バングラデシュ	63	62
ノルウェー	82	77
ザンビア	40	40
シエラレオネ	40	37
ニジェール	41	42
ボツワナ	41	42
マラウイ	46	47

出所：世界保健機構

		2000-2004	
		成人非識字者数(百万人)	成人識字率(%)
世界全体	男性	280	87.2
	女性	501	77.2
	合計	781	82.2
東アジア・太平洋地域	男性	37	95.2
	女性	89	88.2
	合計	125	91.7
西・南アジア	男性	146	70.5
	女性	253	46.3
	合計	399	58.7

出所:UNESCO

- ・日本における男女間格差(ジェンダー・ギャップ指数から)

世界経済フォーラムによるジェンダー・ギャップ指数。経済参加、教育、健康、政治的エンパワーメントの4分野の男女間格差を指数化。1位はスウェーデン。日本は、経済と政治分野の男女間格差が大きい。

	総合	経済	教育	健康	政治
2006年	79位	83位	59位	1位	83位
	(115か国中)				
2007年	91位	97位	69位	37位	94位
	(126か国中)				

2. 「男女共同参画統計」—実態把握のためのひとつの方法

(1) 男女共同参画統計とは

- ・英語で gender statistics
- ・単なる男女別統計ではない
- ・性差別撤廃という目的の下に、国際的に進められている研究および活動
- ・女性と男性の関係性を示す統計
- ・男女間格差を測るための統計→実態把握のツール

(2) 男女共同参画統計はどうやって産み出されるのか

- ・男女共同参画の視点をもった統計調査を行う(生産する)ことによって得られる→男女別統計は必須
- ・既存の統計の収集、組み替えが必要(例1)→統計を見る目に男女共同参画の視点が必要

(3) 「男女共同参画統計」の特徴

- ・ これまでは認識されにくかった男女の格差を明らかにすることができる (例2)
- ・ これまでは認識されにくかった女性および男性の状況を明らかにする (例3)
→男女共同参画の必要性、男女共同参画の課題を明らかにする
- ・ 既存の統計の不足や問題点が見えようになる (例4)
→統計の改善を要求することそのものが、男女共同参画を進める行動となりうる

例1 既存統計の組み替え 男女差はみえるか？

静岡県男女別人口(2007)

人

年 齢	計	男	女
総 数	3,796,808	1,872,757	1,924,051
0 - 4	169,234	86,921	82,313
5 - 9	179,845	92,486	87,359
10 - 14	181,804	93,173	88,631
15 - 19	190,438	97,978	92,460
20 - 24	177,153	91,254	85,899
25 - 29	219,228	114,487	104,741
30 - 34	272,110	140,982	131,128
35 - 39	275,643	141,800	133,843
40 - 44	241,951	124,040	117,911
45 - 49	233,343	118,359	114,984
50 - 54	244,656	123,576	121,080
55 - 59	318,081	159,218	158,863
60 - 64	256,648	126,788	129,860
65 - 69	237,929	115,471	122,458
70 - 74	205,527	95,467	110,060
75 - 79	168,781	74,221	94,560
80 - 84	119,548	46,275	73,273
85 - 89	62,735	18,577	44,158
90 - 94	28,429	7,221	21,208
95 - 99	7,691	1,474	6,217
100歳以上	984	124	860
不 詳	5,050	2,865	2,185
15歳未満	530,883	272,580	258,303
15 - 64歳	2,429,251	1,238,482	1,190,769
65歳以上	831,624	358,830	472,794
平均年齢	44.3	42.8	45.7

出所: 静岡県HP「統計センターしずおか」
(2008.11.18アクセス)

男女差はみえたか？

静岡県男女年齢別人口(2007) 人/％

年 齢	計	女	女性人口割合
総 数	3,796,808	1,924,051	50.7
0 - 4	169,234	82,313	48.6
5 - 9	179,845	87,359	48.6
10 - 14	181,804	88,631	48.8
15 - 19	190,438	92,460	48.6
20 - 24	177,153	85,899	48.5
25 - 29	219,228	104,741	47.8
30 - 34	272,110	131,128	48.2
35 - 39	275,643	133,843	48.6
40 - 44	241,951	117,911	48.7
45 - 49	233,343	114,984	49.2
50 - 54	244,656	121,080	49.5
55 - 59	318,081	158,863	49.4
60 - 64	256,648	129,860	50.6
65 - 69	237,929	122,458	51.5
70 - 74	205,527	110,060	53.6
75 - 79	168,781	94,560	56.0
80 - 84	119,548	73,273	61.3
85 - 89	62,735	44,158	70.3
90 - 94	28,429	21,208	74.6
95 - 99	7,691	6,217	80.8
100歳以上	984	860	87.4
不 詳	5,050	2,185	43.3
15歳未満	530,883	258,303	48.7
15 - 64歳	2,429,251	1,190,769	49.0
65歳以上	831,624	472,794	56.9
平均年齢	44.3	45.7	-

静岡県男女年齢別人口(2007) 人/％

年 齢	計	女	男	性比(女=100)
総 数	3,796,808	1,924,051	1,872,757	97.3
0 - 4	169,234	82,313	86,921	105.6
5 - 9	179,845	87,359	92,486	105.9
10 - 14	181,804	88,631	93,173	105.1
15 - 19	190,438	92,460	97,978	106.0
20 - 24	177,153	85,899	91,254	106.2
25 - 29	219,228	104,741	114,487	109.3
30 - 34	272,110	131,128	140,982	107.5
35 - 39	275,643	133,843	141,800	105.9
40 - 44	241,951	117,911	124,040	105.2
45 - 49	233,343	114,984	118,359	102.9
50 - 54	244,656	121,080	123,576	102.1
55 - 59	318,081	158,863	159,218	100.2
60 - 64	256,648	129,860	126,788	97.6
65 - 69	237,929	122,458	115,471	94.3
70 - 74	205,527	110,060	95,467	86.7
75 - 79	168,781	94,560	74,221	78.5
80 - 84	119,548	73,273	46,275	63.1
85 - 89	62,735	44,158	18,577	42.1
90 - 94	28,429	21,208	7,221	34.1
95 - 99	7,691	6,217	1,474	23.8
100歳以上	984	860	124	14.4
不 詳	5,050	2,185	2,865	-
15歳未満	530,883	258,303	272,580	105.5
15 - 64歳	2,429,251	1,190,769	1,238,482	104.0
65歳以上	831,624	472,794	358,830	75.9
平均年齢	44.3	45.7	42.8	-

例 2 これまでは認識されなかった女性の状況を明らかにする

生活時間の調査により、無償労働（家事、育児、介護等、賃金に換算されない労働）への女性の貢献度が把握できる

		家 事	収 入	無償労働時間％
静 岡	女性雇用者	2.08	6.12	24.3
	男性雇用者	0.25	7.08	6.5
全 国	女性雇用者	2.07	6.08	23.9
	男性雇用者	0.27	7.16	5.7

（国立女性教育会館編『男女共同参画統計データブック 2006』p. 81 より）

例3 これまでは認識されなかった男性の状況を明らかにする

○近年の中高年男性の自殺率の上昇

年齢階級別自殺率(1992、2005、2007)

人口 10 万対

	1992	2005	2007	
総 数	男 性	男 性	男 性	女 性
20～24	15.3	25.0	26.8	12.5
25～29	18.2	31.0	28.8	14.1
30～34	19.5	32.6	32.0	12.4
35～39	21.2	36.5	37.0	13.6
40～44	26.1	44.9	42.0	13.9
45～49	32.1	54.6	52.0	13.7
50～54	37.4	59.2	54.4	15.3
55～59	38.9	61.3	58.5	15.7
60～64	37.1	51.9	51.2	18.4
65～69	32.1	42.3	45.6	18.6

出所：厚生労働省『人口動態統計 2007』

○男性にとってのワークライフバランス

- ・ 週労働時間 男 46.8 h 女 35.4 h （総務省統計局「労働時間調査」）
- ・ 所定外労働時間 男 15.7 h 女 6.2 h （厚生労働省「毎月勤労統計調査」）
- ・ 週休制普及率 30 人以上の事業所規模、完全週休二日制適用率
6 割弱 （厚生労働省「就労条件総合調査」）

例4 既存統計の不足や問題点を指摘

①生産レベル（調査票に性別表示があるかなど）

②表示・加工レベル（男女別に表示されているか、男女差がみえやすいか/みえにくいかなど）

③利用者の視点（統計の利用者がアクセスしやすいか、データを入手しやすいか、表示がみやすいかなど）

3. 国立女性教育会館「女性と男性に関する統計データベース」の活用

別資料参照

Ⅲ. 静岡のデータを読むグループ・ワーク

1. 使用するデータ

『しずおか女と男のデータブック～男女共同参画の視点から見た静岡県の状況～』（平成 20 年 3 月、あざれあ交流会議グループ編集・発行）所収のデータを使う

2. グループ・ワーク

(1) 3つのグループに分かれる（8人×3グループ）

- ・女性関連施設職員
- ・行政職員
- ・女性団体リーダー

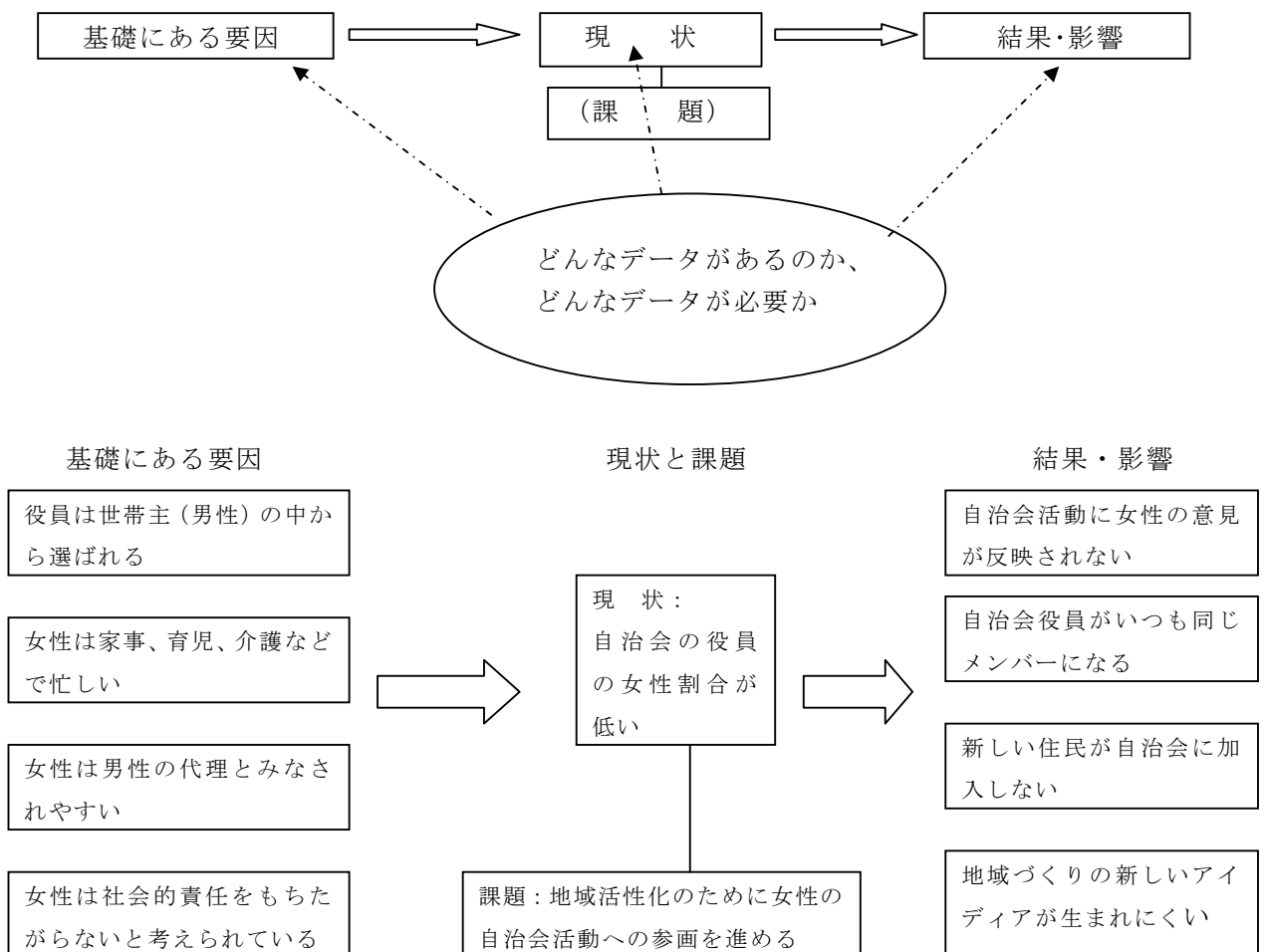
(2) 「Ⅲ 政策・方針決定過程への参画」 p.18-23、p.68-69（図 105、図 106、図 107）の図表をグループで読む。

(3) 図表から読み取れたことを、ふせんに書く。

(4) 全グループでふせんを出し合う。

(5) 発見したことについて話し合う。

Ⅳ. 実態把握から課題分析への展開



資料編 6

平成20年11月26日 15:10～16:50

「連携・協働による実験プログラム in 千葉」

ワークショップ「地域における女性関連施設・女性団体の現状と課題」のすすめ方

ファシリテーター：国立女性教育会館 小林千枝子

I ワークショップのねらい

各地域での女性の「人材育成」について、現状からみえる課題を明確にする。

II すすめ方

※ 使用する物品（ポストイット、サインペン、模造紙、色マジック等）の準備

- 1 ワークショップの趣旨説明・講義「女性人材についての問題分析と課題分析について」（15分）
- 2 ワークショップ実施方法の説明、グループ内の役割の決定（司会、発表者、記録者等）（5分）

【問題の把握】

- 3 各自、ポストイット1枚に、「人材育成」についての現状からみえる問題点を1つずつ記入する（いくつでも）。（15分）
- 4 グループで、作成したカードを模造紙に貼り付けながら類似した問題ごとにグルーピングする。（20分）

【課題の把握・まとめ】

- 4 グルーピングした問題を課題化し、見出し（キーワード）をつける。（20分）
 - 5 全体会でグループごとに発表し、課題をまとめる。（30分）
- ※発表は、1グループ 5分程度

III グループ分け

男女共同参画行政担当者、女性関連施設職員、女性団体リーダーの3グループに分ける（Iグループ 4人～8人）。

固定化

センター利用者の高年齢化

男性は定年退職した方が多い

既存の団体が高齢化して、自主的活動がむずかしい

現在活動している人達の高年齢化

人的ネットワークの構築の仕方についての研究、共有していくことの必要性

活動団体のフックをこえて、共通課題について協議する必要がある

参加者

若い世代の人材を育てるのがむずかしい

人材育成のプログラムの構想ができない
資金、県の考え方

講座ジブシイのような女性があり、学習から一歩踏み出せない

育成する側、育成される側のニーズが合わない

うけたまわり支援を求めめる人も多い

若い人材育成

場と機会の不足

発掘した人材が活躍できる場所の提供ができない

団体同士の情報交換の場が少ない

相互の満足

人材の発掘
幅広く人材を集めるための手段が効率よくできない

まわりに人材となる人が少ない

参加者へのアプローチ

意識

成果の計測がむずかしい

男女共同参加の視点で参加する団体が少ない

男女共同参加が広がらない

「男女共同参加」が実践されているかどうか確認できない。
アタマデツカチになっていないか

市民の意識が把握できていない

「男女共同参加」ということを全面に出すと人が集まらない

一部の団体の活動しかみえていない

「男女共同参加」が近寄りがたいものとしてはじめから参加しない

市民意識の把握

自分には関係ないと思っている

スタッフ育成

人材育成に関わる人材（スタッフ）不足
・知識がない
・資金がない

センター職員の短期の人事移動により人間関係の構築の継続が難

研修の充実

「人材」に対する行政の姿勢がはつきりしていない

活動家養成の予算がない

予算不足

登録団体、活動運営費、予算等が少ない
講師 etc

人材育成の課題：団体グループ

行政

行政側の男女共同参画に対する理解が少ない。
必要性を感じていないように思う。

企画

企画者が現場へ足を運ぶまでの情報収集不足

リーダー養成ではなくファシリ、コーディネーター養成の重要性の認識不足(企画側が企画力不足)

資金の問題

活動を継続していくための資金確保

事業をするための資金が足りない

「人材育成」していくための資金がない

実践に
つながらない

「アザレア」で学んだ人が地域で生かされていない

男女共同参画という視点でのとらえ方の格差における仕掛け方の工夫不足

人材育成の場に「何かやりたい」思いのある人は集まるが、その“何か”の答えを出せない人が多い

育った人が地域から出ていく(引越、転職、別の分野の仕事へ)

男女共同参画
への理解

女性の「人材育成」が必要であることの理解が少ない。特に若い世代に

先ず第一に家庭内での男女共同参画の実現のむずかしさ(子どもより老年の考え方、女性自身の考え方)

地域活動と男女共同参画をどう結びつけるか(特に男性を巻き込むでの活動)

男女共同参画は、暇がありお金にこまらない人がやるものだという概念をもっている人がいる(どこへいっても年寄りとお暇人という考え方)

女性の人材育成の場にいろんな立場の人がこない。(若年層、漁業、シングル、商店、シングルマザー、障害児の母…)きているのは、カネと時間に余裕のある女性

ネットワーク

グループ間のネットワーク化のむずかしさ(刺激、学習、新たなネットワーク)

グループ内
の問題

活動団体の問題意識が共有されていない

男女共同参画に対して敏感な視点を持っているメンバーが少なくなっている

ボランティア

ボランティア活動だけでは、継続がむずかしい

アンペイドワークに対して拒否する役員のなり手がいない

地域活動＝ボランティア(無償)
これではこれからの若い人はついてこない

若い世代

若い人(20～30代)が育成の場
にいない

子育て中の方は、自分の子育てが終わるとグループから離れてしまい会員が減少してしまう

資料編 8

中野講義レジュメ

地域づくりに参画する女性のキャリア形成支援とは

1 キャリアをどう考えるか

狭義の定義：個人が職業上たどっていく経歴

広義の定義：生涯を通じた役割に関する経験の連続

→職業だけではなく社会的活動を含めて個人の活動の連鎖として考える

D.Hall (1976) キャリアの意味

①階層の中で昇進を主とした「より偉くなっていく姿」

②定型化された地位の経路の存在する専門職

③職務の生涯にわたる連続

④役割に関連した諸経験の生涯にわたる連続としてのキャリア

「キャリアとは、ある人の生涯にわたる期間における、仕事関連の諸経験や諸活動と結びついた態度や行動における個人的に知覚された連続である」

2 生涯学習をどのようにキャリア形成に結びつけるか

学習の出口をどう考えるか

平成 13～16 年度 「女性の学習関心と学習行動に関する国際比較調査」

平成 15～17 年度 「女性のキャリア形成支援に関する調査研究」

平成 19～20 年度 「女性のキャリア形成支援のプログラムに関する調査研究」

「スキル・アップ」と「マインド・アップ」講座の役割と重要性

NPO 活動それ自体が女性のキャリア形成の場となっている

3 求められる「地域における女性の活躍」(『平成 20 年度版男女共同参画白書』)

地域の様々な活動に対する女性の意識の高まり

地域活動の担い手として女性に大きな期待が寄せられている

地域を活性化する女性の活動が顕在化

リーダーとして活躍する女性は少ない

固定的な性別役割分担意識

4 これまでの女性たちの取組み

- ・教育・文化関連問題 PTA 活動、図書館、子どもをめぐる文化活動など
- ・環境関連問題 水質汚染、ゴミ焼却やリサイクル、緑地保護など
- ・福祉関連問題 保育所設置、高齢者介護、障害者問題など
- ・安全・安心関連問題 食品の安全性、安心の町づくり、防災など

5 社会活動キャリア

地域社会の問題解決に向けて「女性の社会活動キャリア」が求められる

個人への影響

社会への影響

資料編 9

国広講義レジュメ

地域社会と女性の社会活動キャリア

1. 地域社会と方針決定過程への女性の参画（現状把握）

地域での活動を実質的に担っている女性が多いにも係らず、地域社会の方針決定の場にはいまだに女性が少ない。

地域活動への不参加確率が高くなる要素

- ・ 有業者
- ・ 居住形態（集合住宅・借家・一戸建・給与住宅に住む）

地域活動への不参加確率が低くなる要素

- ・ 年齢、子ども、既婚・有配偶
- ・ 居住歴、農山漁村
- ・ 社会のために役立ちたいという意識

*引用：国民生活白書平成 19 年版 p. 70

住民会議、町会、自治会代表者における女性の割合

- ・ 例 目黒区 住民会議代表 3/22 13.6%
- ・ 町会・自治会長 9/82 11.0%
- ・ 千葉県では？
- ・ あなたの市町村では？

市民活動団体における事務局スタッフのジェンダー

- ・ 女性の事務局スタッフが多い団体 5 割以上
- ・ 主婦などの家事従事者 48.5%
- ・ ボランティア活動者の職業は「仕事も持っていない主婦」が最多（38.1%）

*引用：男女共同参画白書 2004p. 18

- ・ あなたの団体・あなたの地域にある団体では？

活動を担っているのに、方針決定の位置やリーダーではなく、補助的な立場にある女性が多いのではないか。

参加と参画

リーダーシップとマネジメント（組織運営）

2. 地域社会の歴史を振り返る＝高度経済成長と都市化

伝統的な地域社会 代表は男性、女性は補助的役割

都市的生活スタイルと女性の主婦化（性別分業型ライフスタイルの主流化）

会社社会化＝地域社会の弱体化 職業人・企業人中心

⇒シティズンシップの重要性

3. 生活圏における諸問題と女性たちの取り組みを振り返る（再評価）

- ・ 物価高やモノ不足への抗議
- ・ 平和運動
- ・ 労働運動との連携

- ・ 教育・文化関連問題 PTA 活動、図書館、子どもをめぐる文化活動
- ・ 環境関連問題 水質汚染、ゴミ焼却やリサイクル、緑地保護など
- ・ 福祉関連問題 保育所設置、高齢者介護、障がい者問題など
- ・ 食品の安全性をめぐる問題 食品添加物、共同購入活動
- ・ ドメスティック・バイオレンスへの取り組み
- ・ 外国籍の住民への支援（日本語教育など）
- ・ 子育て支援

こうした生活に密着した問題意識によって取り組まれた地域社会の社会運動や活動は性中立的に把握されてきた。しかしそれらは、家族・子どもや地域での事柄とされてきたことが中心。性別役割（母、主婦など）ゆえに、生活圏において女性が直面し、危機感を募らせ、改革・改善にむけた具体的動きをとったもの。こうした活動内容自体の意義と活動における個人としての女性の経験の蓄積を、社会活動キャリアという視点で見直す必要がある。

4. キャリア・シティズンシップ・生涯学習の統合にむけて

地域社会の問題解決に向けて、（←自分の問題、地域の問題を知り、課題化）

女性の社会活動キャリアをゆたかなものに（←社会参画の重要性、批判だけにとどまらない代替案の作成、会議運営や組織運営、など）

社会活動における性役割規範の見直し、組み替えの土台としては、家族・家庭など個人としての女性の人生全体を規定している性役割規範や性分業を知り、見直し、その変革に向けて働きかけ行動する、「自立・自律」が重要。

資料編 10

ワークショップ「地域づくりに参画する女性のロールモデル分析」

ファシリテーター 西山恵美子

<ねらい>

女性の社会活動キャリア形成事例の分析を通じて、支援の方策と課題を明確化する

<グループ分け>

地域毎にグループ分け 静岡：4グループ 千葉：5グループ

<進行案> 10：00～11：20（全80分）

事前学習で仕上げてきたワークシートを元にグループワーク

趣旨・進め方説明（5分）

グループ討議（30分） * 討議内容ポストイット記録整理

討議振り返り及び模造紙シート作成ワーク（15分）

報告発表（20分）各5分×4グループ（静岡） 各4分×5グループ（千葉）

コメント（10分）

<グループワーク>

討議の柱・討議の視点

1. ロールモデルのキャリア形成過程から見て、どんなことがキャリア形成のために有効であったか
 - ・ 受けた支援（個人的な支援・社会的な支援）
 - ・ 困難を乗り越えるために有効だったことや支えになった関係
 - ・ 役に立った学習や情報
2. 男女共同参画意識との関わりはどうか
3. 個人から社会への意識や行動の広がりはどうか
4. キャリアを形成していく時にどのような力量がついたのか。そして、どのような力量が必要か

社会活動キャリアを発展させるために必要な支援や必要な力量など課題を明らかにする

<用意するもの>

- ・ 模造紙（各グループ2枚）
- ・ ポストイット大判3色 各グループ1冊ずつ
- ・ サインペン
- ・ 色マジック

選んだ事例

あなたのお名前

社会活動キャリア形成のきっかけ・転機		受けた支援	
社会活動キャリアを形成する上での困難	<div>社会活動キャリア</div> <div>活動歴・現在の活動</div>		個人への影響
困難の乗り越え方			社会への影響
仲間・ネットワーク・連携づくり	学習・情報	職業キャリア	

選んだ事例 松崎美穂子さん 「子育てを“Enjoy”できる環境づくり」(エッセック・ブックレット4 p.86-92)

あなたのお名前

社会活動キャリア形成のきっかけ・転機

- * 25歳で結婚、退職し徳島へ。
- * 夫の帰りを待ち、赤ちゃんに向き合う生活の中で、子育てに感動できなくなった。
- * 知らぬ土地でも細く子育てしながら、ネットワークの必要性を感じる。
- * 子育てでサークルも情報誌もなかった。
- * 企業主催のサークルに参加するが、月2回で物足りなさを感じ、他の母親と知り合い、自主サークル活動を始める。

社会活動キャリアを形成する上での困難

- * 「すきっぷ」オープン当時は、商店街の理解が得られなかった。
- * 本の売り上げが伸び、徳島新聞社主の賞を受賞するなど社会的評価が高まることも、メンバー間の意見の違いが顕明になる。

困難の乗り越え方

- * 子育てでサークルがないから作る、情報誌があると便利だから作るというように、こういう支援があれば助かると思うことを事業化していった。
- * マスコミの支援で商店街も協力的に。
- * グループの解散という意見も出たが、活動を残したくてNPO法人を立ち上げたことにした。

社会活動キャリア

活動歴・現在の活動

- * 現在：子育て支援ネットワークとくしま代表、徳島市の子育て支援総合コーディネーター等行政のアドバイザー。
- * 活動内容：子育てほっとスペース「すきっぷ」運営（場の提供、情報の提供、イベント）。子育て情報誌編集、親子が生き生きと触れ合える場、タイムリーな情報を提供したいと活動中。
- * 活動歴：1993年 任意団体「徳島子育てネットワークくすのき」設立（子育て情報誌の作成、県内60余の子育てサークルの事務局）2002年 NPO法人「子育て支援ネットワークとくしま」として再出発。
- * 短大時代にYWCAの活動リーダー、青年団活動で話しサークルの経験あり。

受けた支援

- * NPO 法人化する際に、申請手続きがわからなかったり、メンバーが引越してしまって会計に苦しみ、いろいろな人から協力を得ている。特に、徳島市市民活動開発センターの島さんというアドバイザーから助言をもらっている。
- * 2003年、徳島市の委託を受け、商店街の空き店舗を利用した「すきっぷ」開設。商工会から10万円の助成、島さんのアドベイスで1ヶ月の無償的オープン。
- * 徳島市「子育て支援都市宣言」。前市長が力を入れる。子育て支援課の課長による支援もあり。
- * 国、市からの「すきっぷ」運営資金助成。
- * 建築士の夫は家事分担、NPOの理事。子どもたちも小さい頃から母の活動支援。

個人への影響

- * この活動は、子どもがいたからこそできた。夏休みなどの長期の休みは活動を休止し、子どもとの関わりを中心に多くの情報を得ることで自分の子育てでも活動に生かしている。
- * 「すきっぷ」は活動の到達点ではなくその一部。子育て支援活動を中心に様々な活動を行っている。
- * NPO 法人にすることで忙しかったが、活動は広がった。

社会への影響

- * NPO 法人として活動展開中。
- * 法人化によって、運営委員など、任意団体の時までできなかったこともでき、社会的責任を感じながら活動している。
- * 行政からの相談、行政への提案も多い。
- * 有償ボランティアという形で「すきっぷ」の運営を行うことで、メンバーに責任をもってやってもらえる。

仲間・ネットワーク・連携づくり

- * 企業主催のサークルで子育てをする母親と知り合い、自主サークル活動を始める。
- * 活動を通じて、子育てに悩む多くの母親に知ることが一番大きな勉強。
- * 仲良い友達の間ではできないことも、NPOという組織力によって進められる。
- * 法人になってメンバーが増え、徹底した議論ができなくなった。
- * 児童相談所、保育所などと連携してすきっぷを運営。

学習・情報

- * 様々な生涯学習の場に参加

職業キャリア

- 幼稚園の臨時職員、小学校教員、結婚退職。
現在自宅で塾経営。

講座参加

シンポジウムに参加
(学びの提供)
(横浜婦人会館での)

区が開催したジェンダーに関する講座を学ぶ

ジェンダーに関する講座

横浜の婦人会館で開かれた「町は私たちの手で変えられる」というシンポに参加

区の生涯学習支援センターで「ダメなママでもいいじゃない」という講座

支援

助成

((財)横浜女性協会など…)

(財)横浜女性協会の助成をうけ、シンポジウムを企画、開催できた

(財)横浜女性協会の助成をうけ、シンポジウム「子育てだけ！はイヤ!!」開催

(財)横浜女性協会の支援をうけて、「子育てだけ！はイヤ!!」というシンポジウムを開催

シンポジウムの企画参加(横浜女性協会の助成)

区の生涯学習センターに企画を持ち込み、講座開催「ダメなママでもいいじゃない」

自分たちの企画した講座を区の生涯学習支援センターで取り上げてくれた

助言・協力

市民グループとの出会い
行動、助言

母親同士で考える機会が持てた

子育てグループ母親の協力

ミニコミ誌の発行での仲間

ミニコミ誌発行者からの助言後押し
応募事業への助言

子育てに関するグループ参加

講師による助言

別の女性センターで働く友人が相談員を募集していることを教えてくれる

生涯学習講座を受けた受講生仲間からの後押し

(財)横浜女性協会の助成講座で出会った講師からの助言

指導者、勉強会講師からの助言

ロールモデルとなっているミニコミ発行者からの助言、後押し

学びで出会った人達をロールモデルとして自分に取り入れている

子育て環境支援

すばらしい環境の保育園による子育て支援(第二子、三子が通園)

子どもを預けることができた

家族の理解・協力

夫の理解

仲間づくり

同区でボランティアの会をつくったこと

子育て関連施設の不足分に同じ思いの母親たちと会を結成

人との出会いを大切にして仲間、講師を助言者とする

人とのつながりをつくる力量がついた

講座企画

生涯学習の講座を(企画し)開催する力量(人集めも)

ミニコミ誌発行
生涯学習講座企画開催

シンポジウム開催の成功による自信

企画力

自分の意識改革

シンポジウムやジェンダーに関する講座参加による生涯学習との出会い、気づき

ジェンダーのこと
自分の生き方考え方

家族との関わりを自分の意識改革することで解決するということ

自分が変わることで相手を変えた

『力量』『職業・社会へのはたらきかけ』

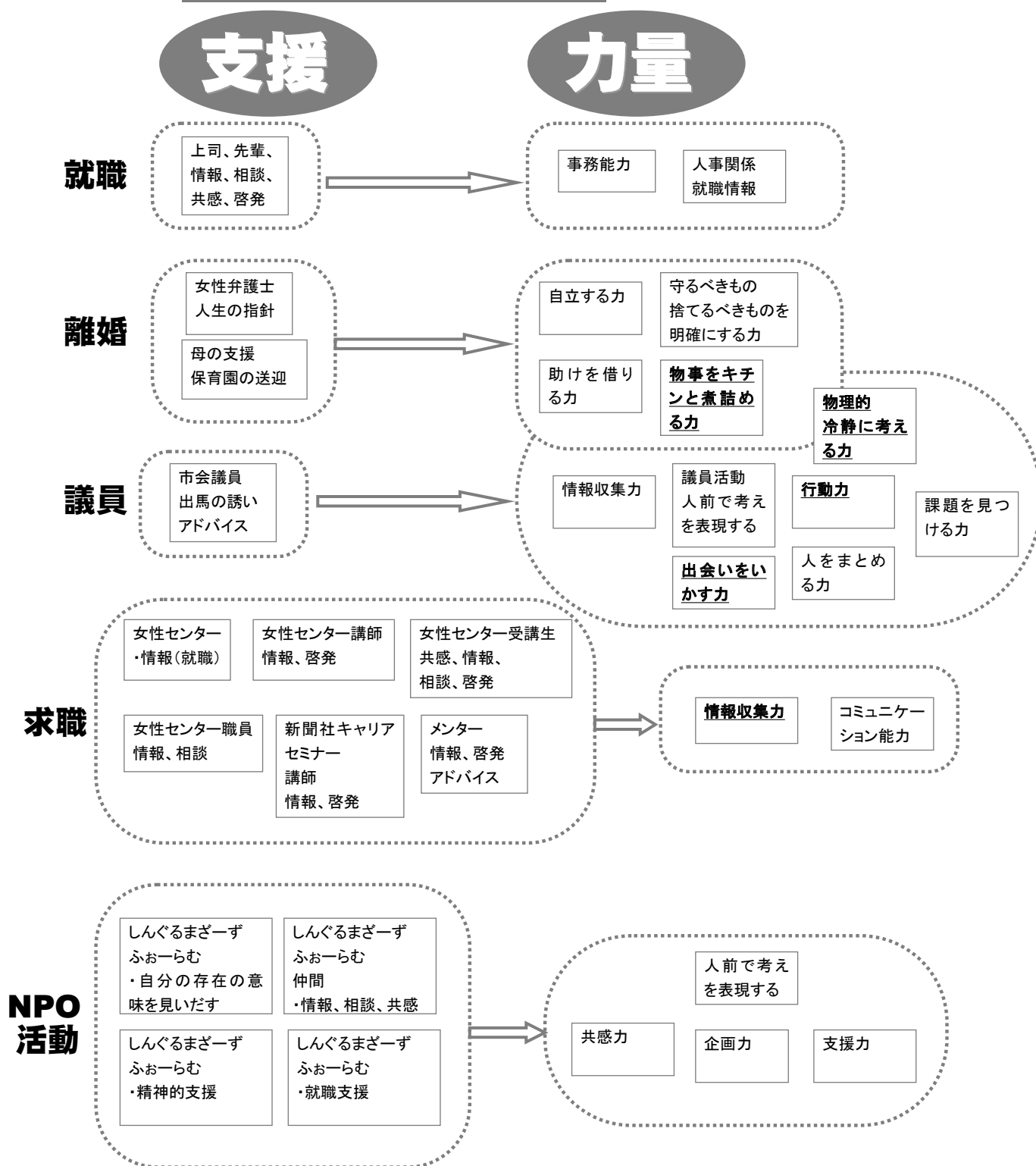
情報誌を刊行する力量

ミニコミ誌を発行しライターとしての力量

ミニコミ誌の編集、発行に関わることができたこと

行政への子育て支援策に関する提議書を作り提出する力量

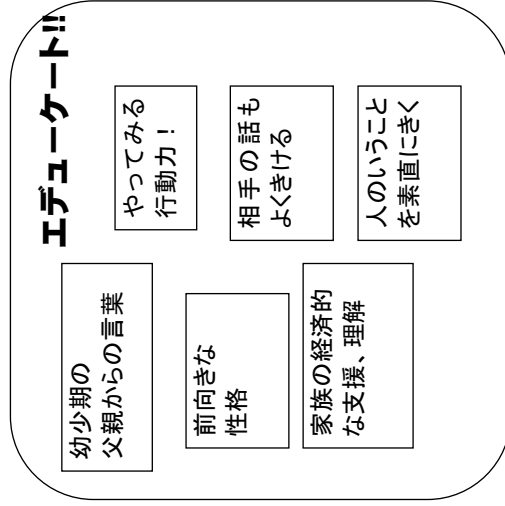
女性相談員としての力量



幼少期

きっかけ期

成熟期

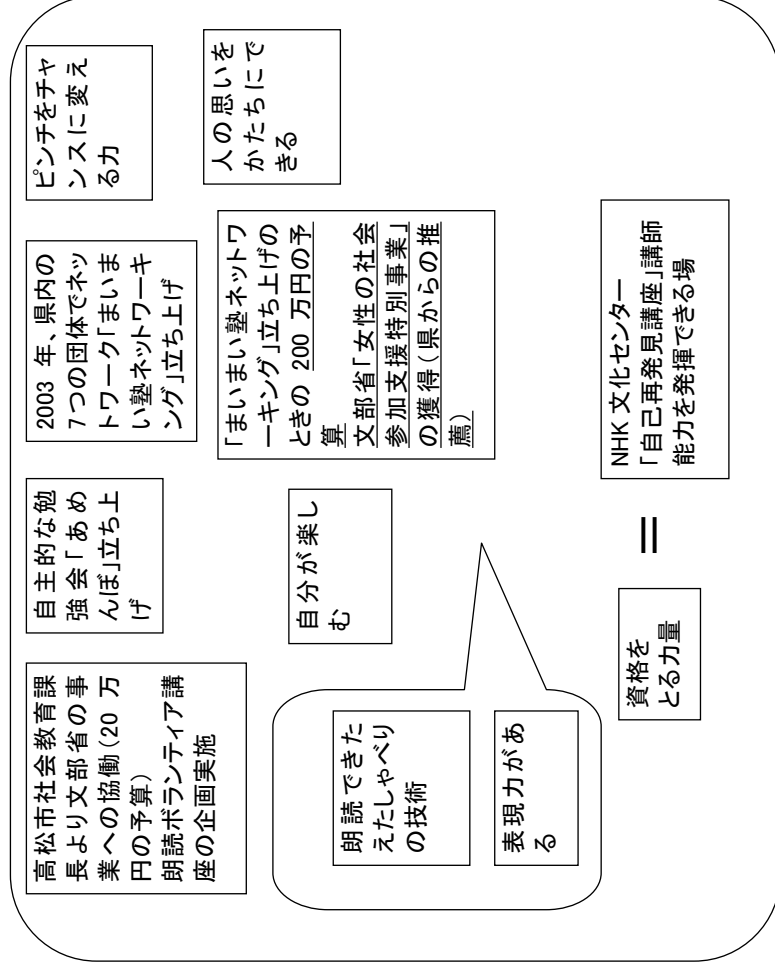


※自分のよいところは? …



・
・
・
自信

※気づき
※蓄積



★みんなの思いを
形にするために!!

受けた支援

共同の目的
を持った仲間
がいたこと

夫から「つまらなそうにしている、あなたらしくない」「だめになるのを僕のせいにしてほしくない、表にでて何かやれば」と言ってくれたこと

父親のことば、
夫のことばが大
きなささえとなっ
た

東奥日報による調
査などジェンダーを
意識した新聞記事な
どの協力があつた

青森県男女共同参
画センターから委託
を受けて青森県のマ
スメディアの現状調
査を行った

有効な支援

乗り越えるため 有効だったこと

「山を越えればまたや
ろうという気持ちにな
る」と言うように「気持ち
で乗り越えている

いい仲間が
いること

調査研究などを企画と
いう地道な方法で研究
の対象に影響力のある
メディアを選ぶ

目的、ミッションを 常に確認、 仲間と共有 わすれずに実行!

父親、夫の支援（きもち、メッセージ）
仲間（つながり）
行政、企業の支援（お金、PR）

支えになった関係

行政や新聞社
との連携によ
る活動

各地域に潜在
的にいる仲間
の掘り起こしネ
ットワークを維
持するために
活動を始めた

いろいろなタイプの
人間がいますが、
それぞれにあった
仕事をしている

あおもり女性大学
で調査研究に目覚
めた。受講生による
研究グループを結
成

いろいろなタイプの人間

いろいろな仕事ができた

学習情報

「社会に出て役立つも
のをやりなさい」との父
の言葉で人格形成に
大きな影響を与える

あおもり女性大学を卒業
1年目 女性学関係の講座
2年目 卒業論文

ついた力量

運営は工藤さんが
全面的に無償で
受け持っている

20代、海外雑貨バイヤー
や店舗経営コンサルティ
ングをひとりでやってきた

資金の支援では
補助金、助成金に
頼らず自己資金に
よる活動を目指し
ている

研究対象に影響力の
あるメディアを選ぶ

青森県内の新聞社、テレ
ビジ局、ラジオ局、計6社に
ついて調査分析を行う調
査の力がある

実践力のある力
を持っている

ネットワークを維持する
ための活動を始めた

運営力（自己資金を作る力）

連携づくり

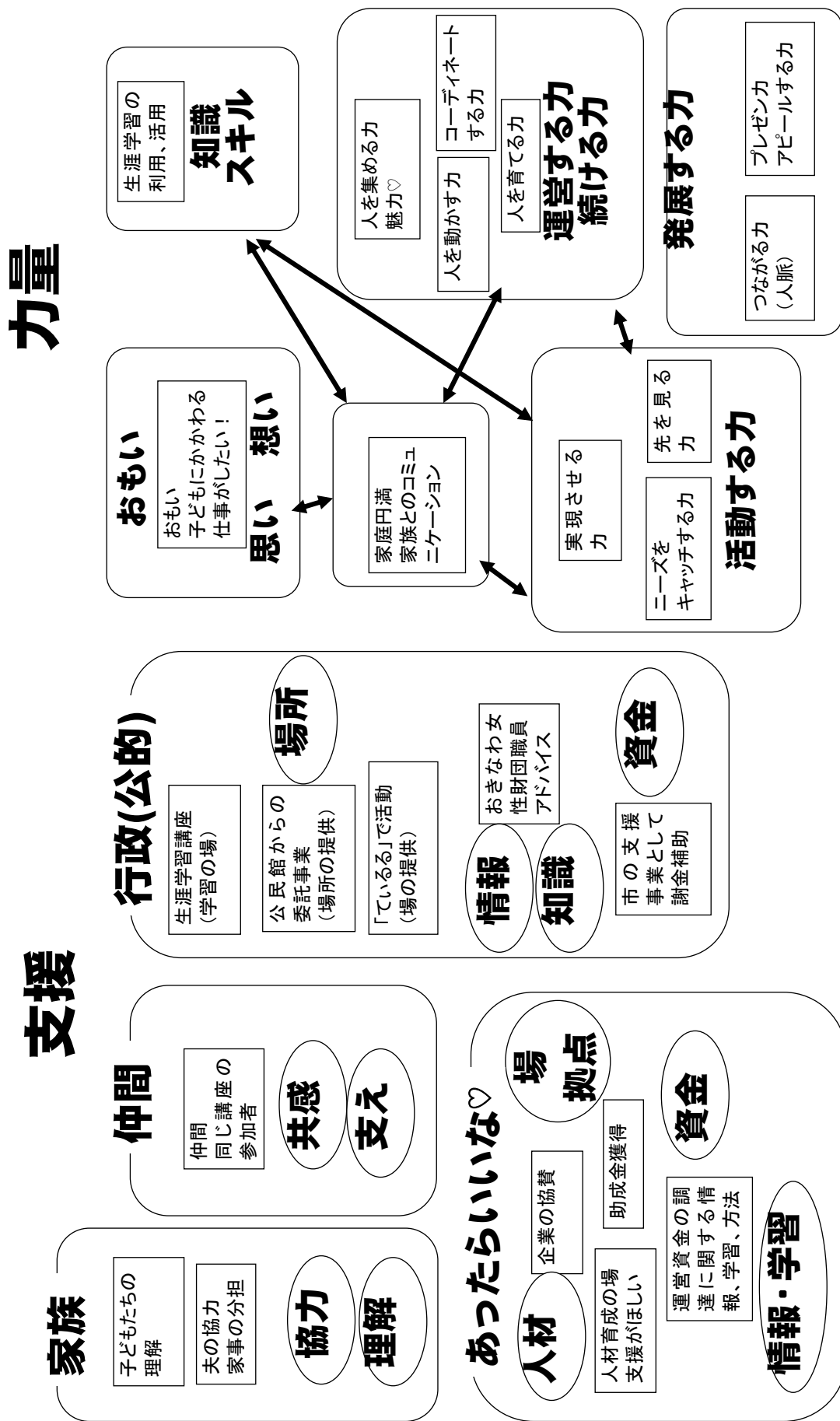
実践力

調査力

企画運営

研修→エンパワーメント
(学びの力)

あおもり女性大学
を卒業





資料編 15

地域づくりに参画する女性人材が育つための事業につながる課題をたてる
「地域づくりと連携・協働について」

ドーンセンター（大阪府立女性総合センター）

財団法人大阪府男女共同参画推進財団

企画推進グループ 仁科あゆ美

1. 私たちの位置

ドーンセンターの実例から

2. 男女共同参画を推進するための連携・協働の意義と可能性

- *横断的なテーマ
- *それぞれの役割 ニーズの汲み上げ、企画、広報
- *運営のプロセス 男女共同参画の視点を共に問う
- *ぶれない「軸」を共有
- *その他

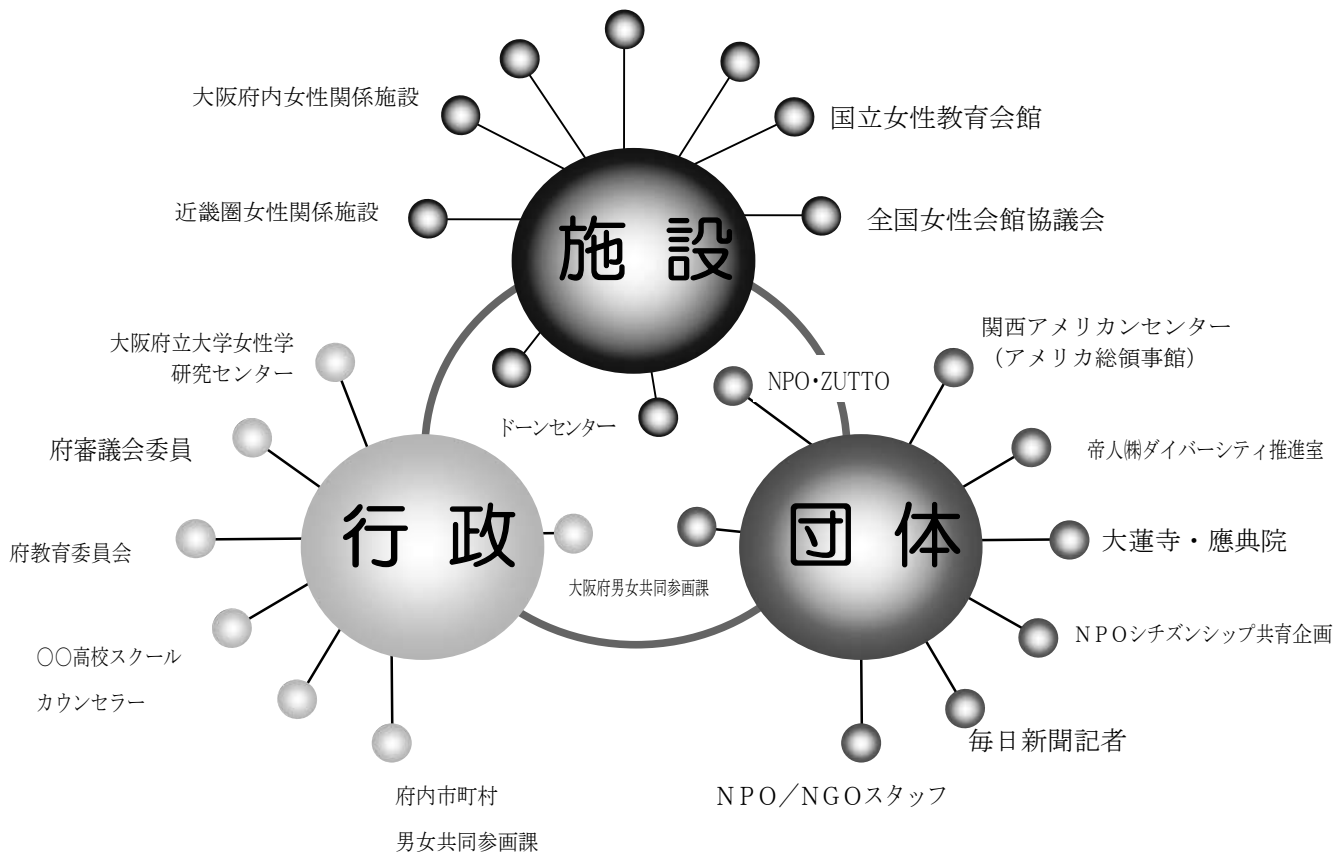
3. さまざまな連携のかたち

例① 連携

「女性センターの可能性を拓く：私と女性センター」（2008.5.21）参照:別添チラシ

- *リレートークを通してドーンセンターと社会資源（施設、機能、人材）の連携を提示
- *各担当者とのつながり

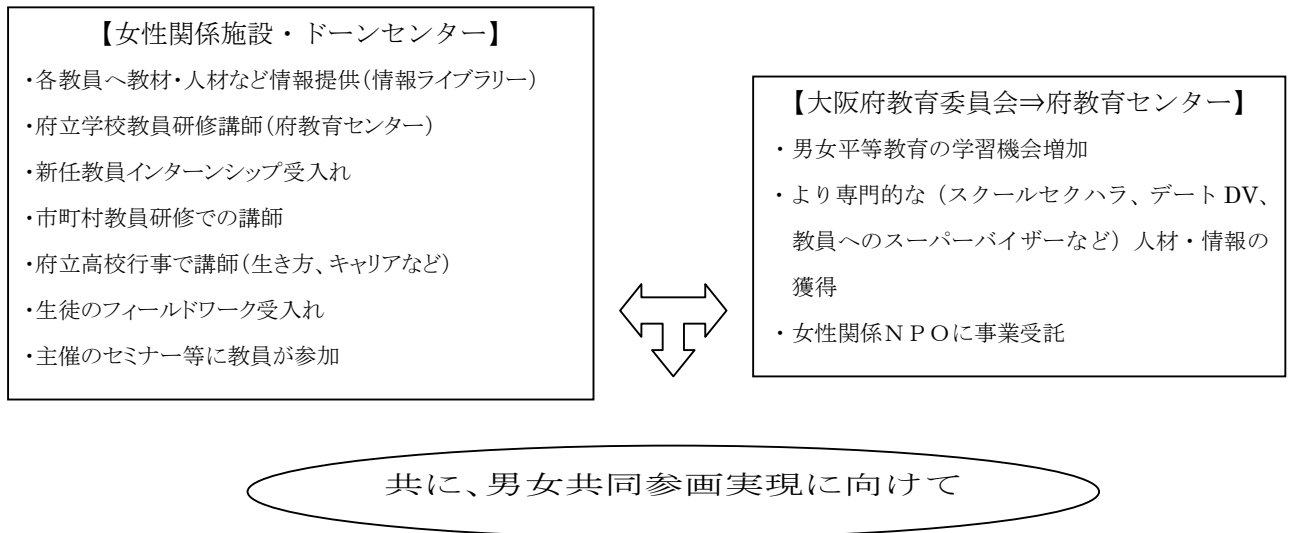
<連携図>



例② 連携による波及効果

「学校教員のための教材づくりワークショップ」(2006～、2008.9.27)参照：別添チラシ

- * 次世代にアプローチするために
- * 「教育」と連携→企画に教員を巻き込む
- * 3年間実施してみた相互のメリット



4. グループ討議ポイント「地域づくりと連携・協働」

<個人・10分>

* 地域づくりに参画する女性人材が育つための事業につながる課題出し

- ・地域づくりに参画する女性人材を育てたい。
- ・地域づくりに参画する女性人材を発掘したい。

それぞれの立場から見えること

- ・私の立場できること、できそうなこと
- ・相手に望むこと、求めること

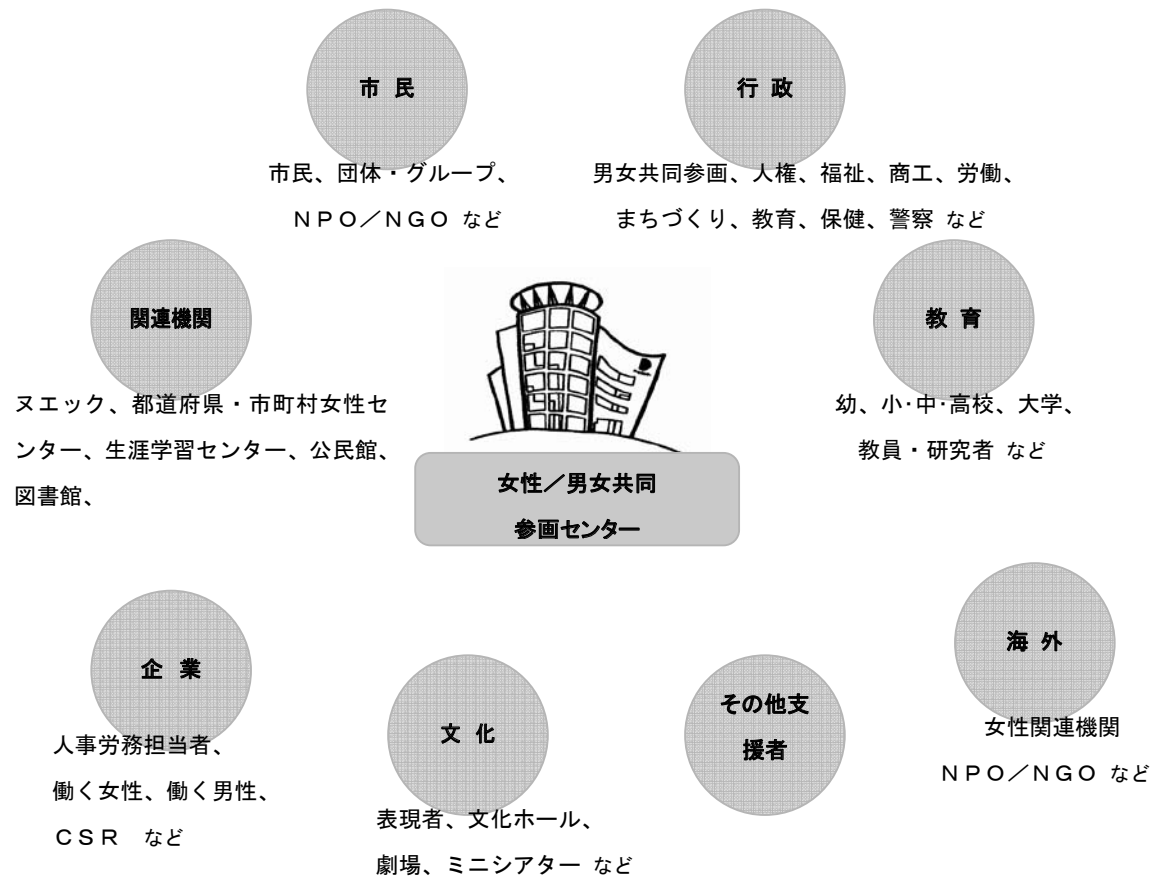
<共有・10分>

<まとめ・10分>

- * 課題の「緊急性」「必要性」「実現可能性」
- * 有効な支援(ロールモデル分析より)
- * 連携・協働

資料編 15 ドーン・センター 連携について（仁科）

4 女性／男女共同参画センターの位置 ～さまざまな社会資源（施設・人財）と連携～



地域づくりに参画する女性人材が育つための事業につながる課題をたてる

ミニ・レクチャー「地域づくりと連携・協働について考える」

- ・「協働(コラボレーション)」という新しい考え方が出現し、求められる背景
社会の様々な分野の行き詰ったシステムを変える方策として 1990 年代に出現し、急速に一般化。

特に行政の問題：財政難で予算の削減、行政サービスの非連続・非継続性。
家庭、職場、地域などの複雑な問題やニーズを満たすことができなくなった。
従来の調整とか連携以上の、より集中的で長期的な努力が必要になった。

- ・「地域づくり」のいま：協働のまちづくり
自分たちのことは自分たちで－住民(市民)「参画」⇔男女共同「参画」

- ・「協働」時代の事業のすすめ方

地域の資源を総動員(総活用)して事業を展開していく。

関係者が対等なパートナーシップのもとに、共にメリットのある Win-Win の関係を築く。

多様な人々が「企画」、「実施」、「評価」の全過程に関わりながら、新たな事業(学びの場)を共につくっていく－「協創」する－、事業開発の「相互作用モデル」に転換。

事業開発の相互作用モデルの特徴は、絶えず変化するダイナミックなものである。
関心・関連のあるいろいろな人たちが、それぞれの関わり方をしながら、練られ、創り上げられていく。その過程で重要なことは、交渉であり、「協議」である。

鍵となるのは、関係機関や地域の人々の間の、個人的で専門的な「関係性(かかわり方)の質」である。

- ・ WE プラザ(広島市女性教育センター)での事例紹介

「他機関・団体との連携・協働」を事業評価の指標として設定

今年度のキャッチフレーズ「つながろう、つなげよう、WE プラザ」

今年度の連携・協働(共催、協力事業)

NPO 法人キャリアネットひろしま、NPO 法人ひろしま女性 NPO センター未来、エソール広島(県女性総合センター)、広島市立大学、(財)広島市ひと・まちネットワーク(公民館)、庄原市、鷹野橋商店街連合会 等

進 行

事業計画案作成の前提として

* 男女共同参画推進のために、地域づくりに参画する女性人材が育つための事業計画案作成にあたっては、「行政」「女性関連施設」「女性団体」の連携が不可欠である！

* 地域社会の問題解決に向けて「女性の社会活動キャリア」を活用、社会の共通基盤づくり

* 課題抽出のポイント

優先順位 緊急性、必要性、実現可能性から絞り込む

* 「ロールモデル分析」を活かす→有効な支援は何であったか

<事業計画案作成ワークショップ進行>

13:20～13:25 ワークショップにあたって、ポイントの確認（仁科）

・「地域づくりに参画する女性のための事業計画フォーマット案」を元に、各グループが計画案を作成する

・模造紙に計画案を記入（形式は自由 文章、フローチャート型など各グループが工夫する）

13:25～13:35 6課題の発表・共有（1分×8G）

13:35～14:45 作成（70分）

* テーマ、ねらい→対象（明確に）

* 内容→予測される効果、影響（個人、社会）

* 連携・協働

（14:25～14:45）発表準備シート作成

14:45～15:25 中間発表（（4分+コメント書き1分）×8G）

良かった点
評価点

改善点、疑問点
アドバイス

15:25～15:35 ミニコメント（各5分ずつ／国広先生、中野室長）

15:50～16:05 コメントを掲出、作成した案の再検討

16:05～16:30 修正点の発表（3分×8G）

16:30～16:45 コメント（全15分／国広先生、中野室長）

資料編 18

「連携・協働による実験プログラム」実施事例：浜松市

内容：男女共同参画の視点にたった地域課題解決型ワークショップの実施

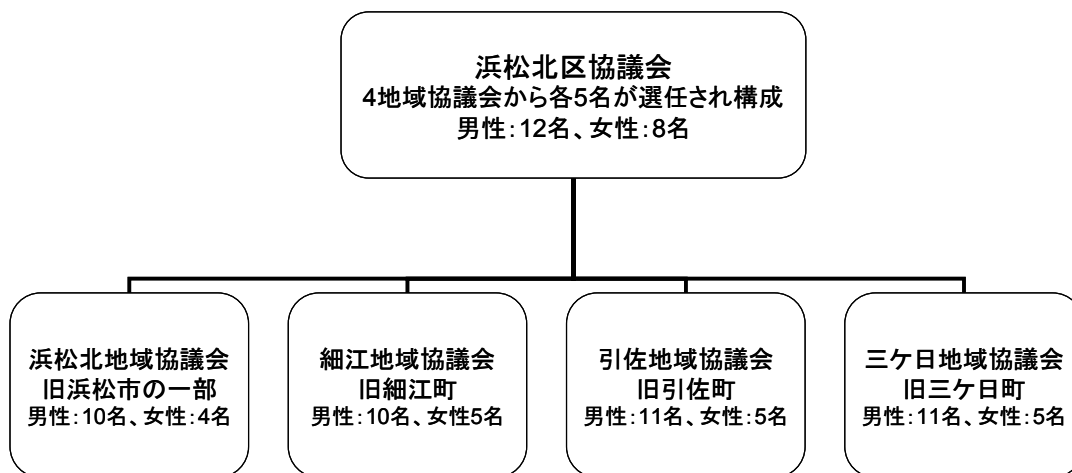
「北区地域協議会合同研修会」として実施

日時：平成 21 年 2 月 4 日（水）13：30～16：30

会場：引佐健康文化センター大会議室

対象：浜松市北区地域協議会委員（61 名のうち 50 名が参加）組織図下参照

任期 平成 19 年 4 月 1 日～平成 22 年 3 月 31 日



経過

- 12月26日（金）北区協議会で地域課題解決型ワークショップの実施を提案
開催日・会場決定 準備委員会の開催日決定
準備委員会（4地域協議会から男女各1名、北区協議会正副会長計10名）
- 1月16日（金）準備委員会で内容の検討
基調講演とワークショップの議題、ファシリテーター決定
- 1月30日（金）北区協議会で最終確認 ファシリテーターと全体進行の打ち合わせ

連携・協働

地域協議会	センター（あいホール）	行政
◇ 企画・運営	◇ 資料・データ提供	◇ 日程・会場の調整
◇ ワークショップのテーマを決める	◇ 人口減少時代 40年後の人口構成	◇ 委員に案内の送付
◇ 進行	◇ 出前講座のグループワークの方法を活用して進行	◇ レジュメ・ワークショップの備品用意
◇ まとめ・評価・報告		◇ 区長に基調講演依頼

北区地域協議会合同研修会次第

1. 開会（13：30～13：40）
2. 基調講演 区長「地域課題について」（13：30～14：10）
3. ワークショップ（14：20～16：25）
4. 閉会

ワークショップ——アイランド型、KJ法で進行

5のテーマは互いに関連し合う事柄なので、1グループの発表時、他グループは発表を聞いて意見をポストイットに記入して、貼りにいく方法をとった。

各グループへの所属は委員の希望に沿って決めた（1月末までに決定済み）

ワークショップ全体進行 波多野千津子

「農林水産業の振興」	ファシリ石田忠	10名（男性：9名 女性：1名）
「観光資源の活用」	ファシリ内山洋子	9名（男性：8名 女性：1名）
「少子高齢社会の対応」	ファシリ山本培代	11名（男性：3名 女性：8名）
「環境問題」	ファシリ長田育子	11名（男性：7名 女性：4名）
「暮らしやすいまちづくり」	ファシリ黒柳千穂子	8名（男性：6名 女性：2名）

テーマ：農林水産業の振興

《ワークショップから見えてきた北区の課題》

◎ 食の安全

・安全な農作物生産する ・消費者と連携を図り意向を農業に生かす ・後継者育成

◎ 環境にやさしい農業への志向

・エコ農業の取り組みを図る ・冬の水田に水を張る（害虫を食べるカエル、トンボ増）

◎ 地産地消の促進

・農家の自主販売促進 ・地域ブランドの創出 ・計画的に農産物を作り自給率を上げる

◎ 遊休農地の利活用

・農業に意欲のある人に農地を取得させる ・観光とタイアップして観光農園、貸し菜園

感想：浜松市内で農業生産が盛んな北区の農業の今後を話し合えたことは有意義だった。
農業経営者としての女性の意見が聞けなくて残念、参加者が男女同数であればよかった。

テーマ：観光資源の活用

《ワークショップから見えてきた北区の課題》

◎ 浜名湖の保全と新たな創出

・観光は環浜名湖として他区と連携 ・年間30万人の宿泊客を北区の観光に誘導する方法

◎ 農業の発展的な継続

・農業と観光の連携で人口増、雇用対策を図る ・優良農家なのに規模が小JAと連携強化

◎ 自然と歴史の保全・伝承・創出

- ・ 伝統文化、芸能の PR 不足 ・ 南北朝の歴史、三方原の戦いのテーマパーク構想
- ・ 北区全体の観光コーディネーター、観光ボランティアの育成必要

感想：農業・観光・歴史のバランスのよい北区の特徴を最大限生かす工夫と知恵が必要。
女性の積極性も必要（商工会の委員、JA の理事など）

テーマ：少子高齢社会への対応

《ワークショップから見えてきた北区の課題》

◎ 子育て支援対策

- ・ 子育て中の親の労働条件、育児休業取得への支援 ・ 放課後児童会の利用時間弾力化

◎ 社会環境

- ・ 女性の声が行政に届くしくみづくり ・ 出産、育児に安心な地域づくり（区民の協力）

◎ 教育をとおした啓発

- ・ 家族の大切さ、生まれた土地のすばらしさがわかるように育てる（郷里に自身が持てる）

◎ 高齢者力（パワー）対策

- ・ 元気な高齢者の社会参加を期待する ・ 高齢者と子どもの交流を多くする

感想：非婚化、晩婚化の影響が大きい。行政・企業・地域が協働して今できることから始めよう。頑張って子育てしながら働く両親がたくさんいるのだから。

テーマ：環境問題

《ワークショップから見えてきた北区の課題》

◎ ごみ対策

- ・ 粗大ゴミの交換会を開く ・ 分別の徹底 ・ 外国人市民のマナー ・ ポイ捨て対策

◎ 上下水道施策

- ・ 下水道事業の促進は浄化に最大限の効果（コストが問題）

◎ 不耕作地対策

- ・ 住環境が犯されている ・ 不耕作地は貸し出すか、耕作を依頼する

◎ 自然再生と環境モラルの向上

- ・ 地域で良い環境を持続させる努力と意識を育てる ・ 幼稚園児から環境教育を始めよう

感想：4 地域の地域性が出た。不耕作地は離農、高齢化など社会的要因が影響する問題で解決が難しい。地域住民で解決できる部分がかなり多いから即実施して改善したい。

テーマ：暮らしやすいまちづくり

《ワークショップから見えてきた北区の課題》

◎ 安心・安全なまちづくり

- ・ 地域の人の見守りが犯罪のない街をつくる。 ・ 心配事のない家庭づくりをする

◎ 職住接近のまちづくり

- ・短い通勤時間は生活に余裕を生む
- ・雇用の不安がないことと保育園の充実

◎ 交通の便のよいまちづくり

- ・通勤、通学、買い物の利便性
- ・交通事故のないまちづくり

◎ 自立意識の向上を目指すまちづくり

- ・個人の人格が尊重された文化度の高いまち
- ・自分たちの地域は自分たちで作り出す意識を持つ（自立社会）
- ・自治会活動へ女性の参画を進める

感想：「充実感のある暮らしができる」ということが「暮らしやすい北区のまち」につながると思う。市民生活と直結する自治会の組織力もまちづくりに欠かせない要素であるから男女共同で参画できるまちづくりを模索したい。

男性 7：女性 3 の比率の地域協議会ですが、確実に女性が力をつけてきました。少数の女性たちが主導してワークショップをすすめたことも自信につながりました。「ワークショップは女性に任せるよ」の男性たちの発言に逃げずに責任を果たしたことも今後につながると思いました。男性たちも女性の実力をある程度認識したと思います。

ワークショップの整理をして今後につなげる方法を考えていきます。

- ・自分たちでできること
- ・行政や企業との連携が必要なこと
- ・自治会等が主導すること
- ・4 地域協議会が対応すること等、課題解決の道筋をつけていこうと考えています。

実験プログラムが実施できた背景

平成 19 年 8 月、北区協議会の女性委員が中心となって北区で活動する女性団体（43 団体）のネットワークづくりをして、会報の発行や研修会、交流会をとおして情報交換をすすめてきた。女性団体に男性の参加を促しても参加者は現れない現状があった。11 月 9 日、女性のみで北区の課題抽出のワークショップを済ませている。（74 人参加）

男性も含めた活動を模索していた所、連携・協働の実験プログラムに参加して、私たちの活動をヒントに 3 者で浜松市の事業計画を作った。区協議会の女性委員が協力し合ながら 12/26 の区協議会にワークショップの開催を提案し、「地域協議会合同研修会」として実施に至った。地域社会は男性中心で動くことが多いので、女性委員が連携し、フォローしあいながらすすめた。

女性主導で進めることに抵抗していた男性たちも、決定すれば協力を惜しまず、当日も協力的で潔さを感じた。（農林水産業の振興のファシリは女性となっていたのに、急用で途中退席したために、男性が代理を務めてくれた。）

国立女性教育会館との連携・協働による実験プログラム in 静岡

「地域づくりに参画する女性人材が育つために」実施上の課題及び成果

特定非営利活動法人静岡県男女共同参画センター交流会議
(静岡県男女共同参画センター指定管理者) 代表理事 佐藤和子

1 社会活動キャリアと女性のキャリア形成支援について

成果

女性の社会活動を、職業上のそれと等値する形でキャリアとして捉える社会活動キャリアという考え方は、女性のキャリア形成の新しい可能性をもたらす画期的な視点である。まさに『眼からウロコ』の思いである。これまでは、例えば男女共同参画の推進に関わる女性たちの学習や活動は、個人的な趣味、志向のレベルで捉えられる場合が多く、家族をはじめ身のまわりの人たち、そして社会的一般からも「一部の物好きな女性たちのやっていること」と片付けられてしまいがちだった。このような低い評価が自他共に影響し、活動の広がりやの阻害要因となっていたことも見逃せない。しかし、社会活動キャリアという視点を導入すれば、見えてくるものがまるで違ってくる。持続的な活動を通じて得た情報やネットワークの蓄積、多様な学習と活動の経験、合意形成型の活動スタイルのなかで培われた人間関係調整能力などなど、まさに社会活動を積み重ねてきたことで獲得されたキャリアである。このような社会活動キャリアの顕在化とその評価は、これまでの職業的キャリアの枠を超えて女性のキャリア形成の可能性を大幅に広げ、女性の社会活動をさらに活性化することができる。

・課題

とはいえ、キャリアと言えは職業上のそれという社会通念が強いなかで、それにはあてはまらない社会活動が、キャリアとして社会的に認知され、かつ高い評価を得ることはそれほど簡単ではない。この実験プログラムでも、まず始まりのところの「女性の社会活動をキャリアとして捉える」という視点への理解が十分だったとはいえ、さらに「女性が個人的に形成してきている社会活動キャリア」と、「地域づくりに参画する女性人材を育てる」ことを結びつけるというレベルになると、どのようにしたらよいのか、さしあたり見当がつかない、というのが率直な感想だった。しかしこの点は、女性の社会活動キャリア形成についての事前学習、第2回学習でのその分析や支援方策、課題の明確化を通じてかなり理解が進んだと思う。

これまで女性人材活用といえば、行政主催の人材育成講座などから育った人を対象とする場合が多く、個人的にいわば“自前”で「人材」になった（それこそが社会活動キャリアなのだが）女性にも目配りし積極的にスカウトしていくことは、それほど多くなかったように思われる。しかし、状況は変化してきていて、現在では市や町も、地域の各分野の女性人材を積極的にリサーチ、登用に努めている。そこに女性のキャリア形成とその評価

の新しい視点として、社会活動キャリアの認識、評価基準が導入されれば、各地の男女共同参画センターの女性人材育成事業の企画にも新鮮な弾みが生まれることが、この実験プログラムの実施を通じて実感された。

これからの課題は、社会活動キャリアという考え方を活用し、人材育成とその受け皿づくりの新しい仕組みをつくっていくような具体的な事業展開をどのように進めていくかということであるが、とりわけ、最近の前向きな生き方を志向する若い世代の女性たちにみられる職業的キャリアをキープした上で、さらに社会貢献を目指すという意欲にアプローチする切り口にもなり、男女共同参画に関わる女性たちの新しい広がりも期待できそうだ。

2 男女共同参画行政、女性関連施設、女性団体の連携・協働の強化について

成果

この実験プログラムでは、地域で参画を進める際の連携のコアとなる男女共同参画行政担当者、女性関連施設職員、女性団体リーダーの3者が同じテーブルについて、2日間、みっちり共同で学習し、かつ作業をし、それぞれに事業企画案作成というアウトカムを生み出した。

男女共同参画行政、女性関連施設、女性団体の3つが日常的に連携していることが、地域における男女共同参画推進の要であるが、実はこの連携がいつもスムーズにいつているとは限らない。お互いに男女共同参画推進を共通の目標に掲げてはいるものの、3者それぞれに立ち位置が違い、アプローチの仕方も異なる。十分な意志疎通が必要なのだが、一つのテーブルについて話し合うという機会をつくるのが意外と難しい。そういう現状のなかで、この実験プログラムのグループ構成はことさら大きな意味があった。

参加したそれぞれの地域での男女共同参画行政、女性関連施設、女性団体の相互理解、協力、協働事業実施への意欲が高まったこと、地域レベルでの情報共有（できたら分析までも含めて＝この点では講義「情報を活用した実態把握」のインパクトが大きかった）の必要性が、あらためて3者間で認識されたこと、そして人材育成事業の新しい方向性がこれまた3者間で把握できたことなど、非常に大きな成果が生まれた。

課題

今回、国立女性教育会館の大きな人的、財政的支援を得てこのような機会を持つことができた。これから、どのようにして自前でこのような事業を継続的に実施していくかが今後の課題である。県内の女性関連施設が連携・協働を進めることは、かねてより関係者の強いニーズでもあったが、この実験プログラムへの参加を通じて、県内の女性関連施設が連携・協働することが、静岡県での男女共同参画を推進に大きな役割を果たすという認識を、さらに強く参加者全員が共有することができた。今後もこのような機会をぜひつくりていきたいと思う。さしあたり平成21年度中に国立女性教育会館のスタッフをお招きしての“同窓会”の開催提案が拍手で合意された。そのときどきのテーマの設定などについても示唆を得ながら、できたら各地持ち回りなど持続的な開催に努力したい。

3 課題分析・課題解決に向けた実践と学習支援者の役割について

今回の実験プログラムには、講義、ワークショップ、ミニレクチャー+討議など多彩な

学習手法が取り入れられていたが、とりわけ、事例分析・課題分析→課題解決に向けた課題を立てる→課題解決に向けた実践・事業計画案作成のプロセスで、学習支援者のサポートが大きかった。「学習支援の新しい手法だった。日常的な学習のなかでもこのような支援があると、学習成果が格段に上がる。このような支援者の養成はできないものだろうか」という意見が多く寄せられた。

国立女性教育会館との連携・協働による実験プログラム in 静岡

「地域づくりに参画する女性人材が育つために」 報告書

1. 日時 平成 20 年 11 月 20 日（木）
平成 20 年 12 月 1 日（月）
2. 場所 静岡県男女共同参画センターあざれあ
11/20 502 会議室
12/1 501 会議室
3. 目的
多様な機関との連携・協働を推進しつつ、女性の社会活動キャリア形成を促進し、地域づくりに参画する女性人材が育ち、力をつける。
4. 連携先
静岡県男女共同参画センター指定管理者（特定非営利活動法人静岡県男女共同参画センター交流会議）
5. 協力
静岡県県民部県民生活局男女共同参画室
6. 参加者

自治体	女性関連施設	行政	地域女性リーダー
静岡県	静岡県男女共同参画センター 七宮利妃子	静岡県男女共同参画室 松田雅美	NPO 法人あざれあ交流会議 大川須津子
静岡市	静岡市女性会館 松下光恵	静岡市男女共同参画課 大川寿之	しずおかおはなし会ネット おはなしききたい山田友美
浜松市	浜松市男女共同参画センター 鈴木ようこ	浜松市男女共同参画課 齊田一朗	ともづなの会 波多野千津子
富士市	富士市男女共同参画センター 鈴木慶子	富士市市民部男女共同参画課 海野彩	きらり交流会議 松本玲子
富士宮市	富士宮市男女共同参画センター 佐野孝明		富士宮男女共同参画フォーラム 実行委員会 佐野宏子
藤枝市	藤枝市男女共同参画センター 池谷照代	藤枝市市民部男女共同参画課 曾根良明	藤枝市男女共同参画推進センタ ー 山梨美津子
磐田市	磐田市男女共同参画センター 丹羽純子	磐田市共生社会推進課 大杉佑子	磐田 NPO 活動推進協議会 三輪邦子
掛川市		掛川市地域振興課男女共同参画 西塚良光、鈴木直子	フリネットおおすか 鈴木副江

講師・関係者

国立女性教育会館

研究協力委員 国広陽子(武蔵大学)、仁科あゆ美(大阪府女性総合センター)

会館職員 神田道子(理事長)、中野洋恵(研究国際室長)、小林千枝子(調査役)、高橋由紀(研究国際室)、森未知(情報課専門職員)、西山恵美子(客員研究員)
NPO 法人静岡県男女共同参画センター交流会議 佐藤和子(代表理事) 戸塚宏一(事務局長)

6. 内容

第1日(平成20年11月20日)

1 オリエンテーション 「本プログラムの意味・意義を理解する」 中野洋恵研究国際室長

このプログラムは地域づくりに参画する女性人材を育てるための研修事業、交流事業であり、今回参加の女性関連施設・機関、行政、団体の方々の力をつけるための事業であること。

地域で活躍する女性リーダー育成学習プログラムを作成することを目的としていること。
今年度このプログラムに参加する都道府県は静岡県、千葉県の2県であること。

個人のキャリアと地域のキャリアの関連を社会活動キャリアとして位置づけ、施設、行政、団体の出席者がグループワークを通じて、この実験プログラムの中で共通性を見出し、アクティビティ・ラーニングとして実際にプログラムしたことを地域で実行していくことを目的としている。

2 講義「男女共同参画の視点、女性関連施設・女性団体の役割、女性の社会活動キャリアとは」

講師：神田道子(国立女性教育会館理事長)

「男女共同参画意識の涵養」は、参加者が自分の課題として男女共同参画が必要だという意識を持つこと。基本法前文の「男女が、互いにその人権を尊重しつつ責任も分かち合い、性別にかかわらず、その個性と能力を十分に発揮することができる男女共同参画社会の実現」男女が計画、方針まで含めて関わるのが目標。画期的なことで新たな段階であるということ。

女性の社会的活動は、これまで社会参加と言ってきたが今まで女性はどういう目標を持ってやってきたのか。社会参画(社会の新しい共通基盤づくりととらえる)というのはまだなく、自立という形で経済的自立、社会的自立、能力発揮だといわれてきた。社会の共通基盤の中で能力はなかなか発揮できず、家庭に入って、主婦になり、子育てを早く終わって余暇時間で能力発揮をしてきた。

では、現代社会の中で能力発揮をどうするのか。社会参画というのが新たに入ってきた。
市民的自立、社会的自立、精神的自立

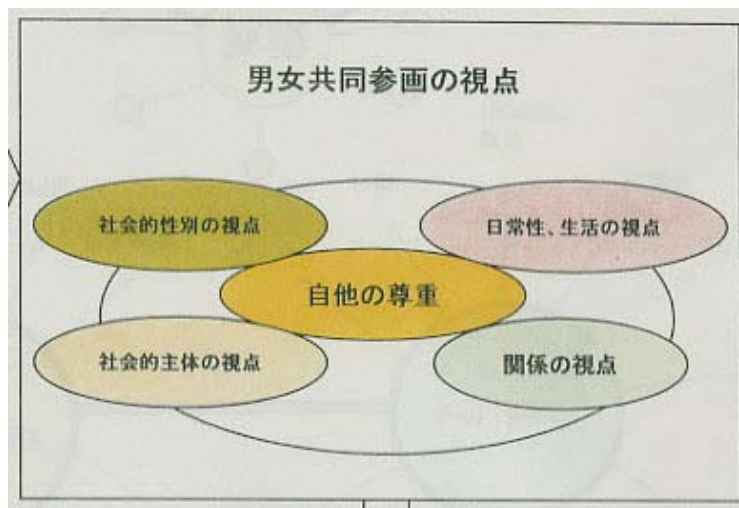
生活基盤は、余暇で能力発揮するときは経済基盤を夫に求めた人が多かった。
消費者運動、地域的活動は社会基盤を作らなければならないが、制度を作る、政治参加とかの次元の中に個人活動、社会的活動が入ってはいったが、全体の柱がなくなればらだった。社会参画を共通基盤として考えるときに、男女共同参画の視点が非常に重要になる。個の尊重、自他の尊重関係、自分も個として尊重し、他も尊重する。社会的性別の視点、男、女、社会的に区別して来た。男の経験と女の経験、積み上げてきたことは違う。重要視すべき視点。
日常生活の視点、女性の生活経験は具体的な日常生活に基づいている。女性団体の方は行

政にない視点を持っている。日常性の関係では自分も尊重、他も尊重、絶対に必要なこと。日常生活の視点が社会的生活の視点に入っていると男女共同参画社会となる。自分も相手も尊重するときに個人でやることは限界がある。社会的共通基盤を作る。それが社会参画となる。

「男女共同参画の視点にたった社会づくり」とは

男女共同参画の視点とは、社会的性別の視点、日常性、生活の視点、社会的主体の視点、関係の視点これらの視pointsの核に自他の尊重がある。男女共同参画の関係の基本。社会的性別の視点は、男が積み上げてきた経験、女が積み上げてきた経験のそれぞれの視点のこと。日常性、生活の視点は、女性の生活に基づいた視点。この視点を押し出すことが男女共同参画の社会にとって非常に重要。行政にはない視点。

社会的主体の視点は、今までは誰かが作ってきた社会の中で、女は活動してきた。多くの人が主体になりえない中で生活して来た。自他の尊重を核に置いたら、社会的参画なくして活動できない。社会的共通基盤がなくては社会が成り立たない。



そこで基礎要件を考えてみた。

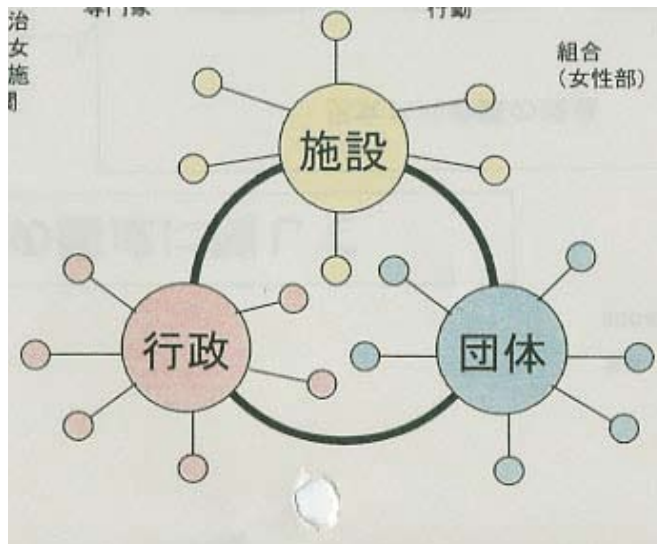
●役割の変更、創造。たとえば自他の尊重の観点にたった役割の変更、男性の家事や育児など

●機関での意思決定、方針決定への参画。町内会ではいまだ男が意思決定をする、これは問題。

●国、自治体への政策決定への参画。議員の数、管理職の数など
この3つを基礎要件とする。

統計の話はこの3要件を伝える時に論理性を持って話せる。

男女共同参画の拠点、参画行政、女性関連施設、女性団体の3つが地域で参画を進める連携拠点となる。3つが連携しないとなかなか進まない。



- 行政では、他の部署でどのように男女共同参画が理解されるか。
- 施設では生涯学習機関との連携をどうするか。今まで連携していなかったところとの連携をどうするか。
- 団体は他団体、たとえば同じ男女共同参画をやっている団体、環境団体、消費者団体とどう連携するか。

他との連携を図りながら、3つが連携を図っていく。

女性関連施設はどのような役割か。

公的女性関連施設・機関の役割として、中核にあるのは地域の人材育成の拠点、不可分に結びついているのが学習教育の場。人材育成、力量形成支援を核とする。

入口役割、

相談役割→個別的、緊急的、問題対応的役割

広報、啓発、普及、意識醸成役割→講演会など

情報提供、研究調査役割

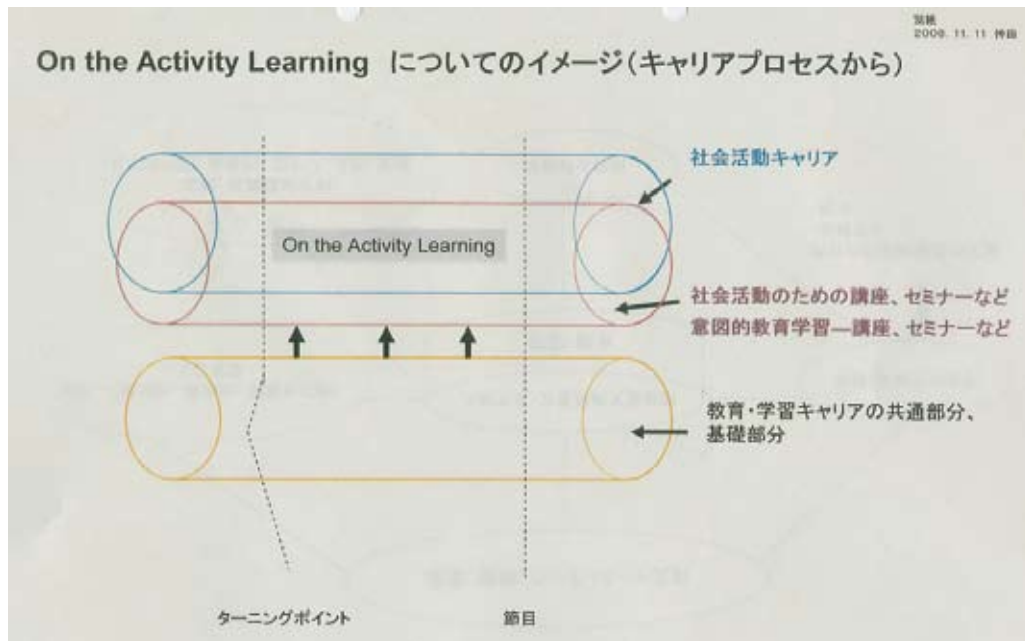
連携、関係、コーディネート役割

この延長線上に実践、活動支援役割→男女共同参画意識を持った支援をする。

男女共同参画推進の基礎要件、視点が活動の中に入っているか。これが枠づけとなる。

社会の抱えている問題を何とか解決していこうと地域活動、地域づくりの中で人材として発掘できたらそれは大変なこと。具体的に育成活動はしていない。

「On the Activity Learning」



活動の中で力をつけていく。

力をつけるためには社会活動を現実に行わなくてはいけない。

社会活動をしてその中で力をつけていく。

活動と人材育成は重なっていく。

社会活動キャリアは個人のキャリア。個人としてどうか。

自分をより育てていくことに結びついていく。

今までの学習は名人芸、この実験プログラムでは、実践のばらばらなプログラムを整理して皆様にお返りする。

3 講義「情報を活用した実態把握：データで読む男女共同参画」

講師：森 未知情報課専門職員、高橋 由紀研究国際室研究員

①男女共同参画を推進するための情報について

情報とは

▼[News] 事物・出来事などの内容・様子。また、その知らせ

▼[information] ある特定の目的について、適切な判断をし、行動の意思決定をするために役立つ資料や知識 …三省堂「大辞林第2版」

男女共同参画を推進するためにはどのような情報が必要か。

国立女性教育会館初代館長の縫田曄子氏が女性情報の不足への不満から女性情報の収集と蓄積、国の内外における女性情報の共有への願いから国立女性教育会館に情報センターを設立。女性情報とはどういうものか(1985年「情報に関する婦人教育国際セミナーにおける定義」)

- 女性の地位向上、女性問題解決のために必要な情報を女性の視点で作り、提供する情報
- 女性運動の基礎となるのは情報であり、それは行動を起こす意識、実行力、他への働きかけの「力」であること
- 情報は単なる資料ではなく人間のネットワークをつなぐ「のり」の役割を果たすものであり、それゆえに女性たちの連帯に欠くことができないもの

1999年男女共同参画社会基本法が制定された年にインターネット上でデータベースの提供を開始した。

データベースの内容は 11 の分野に分類され、現在 551 表を提供している。

②男女共同参画の実態を把握する必要性

男女共同参画は分かりにくい。

生活実感から出てくる言葉の背景には、日本の格差の認識が弱いのではないかな。

国際的に格差を見てみると

(3) 男女間格差の認識の必要性			
・国際的に見ると、格差がみえやすい			
世界の平均寿命 (2005年)			
	女	男	
日本	86	79	
アフガニスタン	42	42	
ネパール	61	61	
パキスタン	62	61	
バングラデシュ	63	62	
ノルウェー	82	77	
ザンビア	40	40	
シエラレオネ	40	37	
ニジェール	41	42	
ボツワナ	41	42	
マラウイ	46	47	
出所：世界保健機構			

成人識字率			
		2000-2004	
		成人非識字者数(百万人)	成人識字率(%)
世界全体	男性	280	87.2
	女性	501	77.2
	合計	781	82.2
東アジア・太平洋地域	男性	37	95.2
	女性	89	88.2
	合計	125	91.7
西・南アジア	男性	146	70.5
	女性	253	46.3
	合計	399	58.7
出所：UNESCO			

日本とノルウェーでは女性のほうが平均寿命が長い。

アフリカでは女性も男性も平均寿命が短い。

また、識字率においては女性が低いことがわかる。

	総 合	経 済	教 育	健 康	政 治
2006 年	79 位	83 位	59 位	1 位	83 位
	(115 か国中)				
2007 年	91 位	97 位	69 位	37 位	94 位
	(126 か国中)				

静岡県男女別人口 (2007)			
年 齢	計	男	女
総 数	3,795,808	1,872,757	1,923,051
0 - 4	199,234	85,321	82,312
5 - 9	179,545	92,486	87,359
10 - 14	181,894	93,172	88,631
15 - 19	190,438	97,978	92,460
20 - 24	177,153	91,254	85,899
25 - 29	219,528	114,487	104,741
30 - 34	272,110	140,982	131,128
35 - 39	273,642	141,800	132,842
40 - 44	241,951	124,040	117,911
45 - 49	233,343	118,359	114,984
50 - 54	244,556	123,576	121,080
55 - 59	318,081	159,218	158,863
60 - 64	286,648	126,798	129,860
65 - 69	237,929	115,471	122,458
70 - 74	295,327	95,487	110,060
75 - 79	168,781	74,221	94,560
80 - 84	119,548	46,273	73,273
85 - 89	62,735	18,577	44,158
90 - 94	28,429	7,221	21,208
95 - 99	7,691	1,474	6,217
100歳以上	984	124	860
不 詳	5,050	2,863	2,185
15歳未満	530,883	272,580	258,303
15 - 64歳	2,429,251	1,238,482	1,190,769
65歳以上	831,624	358,530	472,794
平均年齢	44.3	42.6	45.7
出所：静岡県統計「統計センター」(2008.11.18アクセス)			

日本における男女間格差(ジェンダー・ギャップ指数から)

日本は、経済と政治分野の男女間格差が大きい。

●男女共同参画統計は単なる男女別統計ではない。性差別撤廃の目的として、国際的に進められている研究及び活動である。

●男女間格差を測るための統計→実態把握のツールとして作成されている。

男女共同参画統計は、既存の統計を収集したら、組み換えが必要。統計を見るのは男女共同参画の視点が必要。

静岡県の人口割合の統計を組み換え

統計の左側は主軸となる。

男女共同参画統計は、女性が左側の主軸となる。

年 齢	計	女	女性人口割合
総 数	3,796,808	1,924,051	50.7
0-4	169,234	82,313	48.6
5-9	179,845	87,359	48.6
10-14	181,804	88,631	48.8
15-19	190,438	92,460	48.6
20-24	177,153	85,899	48.5
25-29	219,228	104,741	47.8
30-34	272,110	131,128	48.2
35-39	275,643	133,843	48.6
40-44	241,951	117,911	48.7
45-49	233,343	114,984	49.2
50-54	244,656	121,080	49.5
55-59	318,081	158,883	49.4
60-64	256,648	129,880	50.6
65-69	237,929	122,458	51.5
70-74	205,527	110,060	53.6
75-79	168,781	94,560	56.0
80-84	119,548	73,273	61.3
85-89	62,735	44,158	70.3
90-94	28,429	21,208	74.6
95-99	7,691	6,217	80.8
100歳以上	984	880	87.4
不 詳	5,050	2,185	43.3
15歳未満	530,883	258,303	48.7
15-64歳	2,429,251	1,190,769	49.0
65歳以上	831,624	472,794	56.9
平均年齢	44.3	45.7	-

年 齢	計	女	男	性比(女=100)
総 数	3,796,808	1,924,051	1,872,757	97.3
0-4	169,234	82,313	86,921	105.6
5-9	179,845	87,359	92,485	105.9
10-14	181,804	88,631	93,173	105.1
15-19	190,438	92,460	97,978	106.0
20-24	177,153	85,899	91,254	106.2
25-29	219,228	104,741	114,487	109.3
30-34	272,110	131,128	140,982	107.5
35-39	275,643	133,843	141,800	105.9
40-44	241,951	117,911	124,040	105.2
45-49	233,343	114,984	118,359	102.9
50-54	244,656	121,080	123,576	102.1
55-59	318,081	158,883	159,198	100.2
60-64	256,648	129,880	126,768	97.6
65-69	237,929	122,458	115,471	94.3
70-74	205,527	110,060	95,467	86.7
75-79	168,781	94,560	74,221	78.5
80-84	119,548	73,273	46,275	63.1
85-89	62,735	44,158	18,577	42.1
90-94	28,429	21,208	7,221	34.1
95-99	7,691	6,217	1,474	23.8
100歳以上	984	880	104	14.4
不 詳	5,050	2,185	2,865	-
15歳未満	530,883	258,303	272,580	105.5
15-64歳	2,429,251	1,190,769	1,238,482	104.0
65歳以上	831,624	472,794	358,830	75.9
平均年齢	44.3	45.7	42.8	-

●これまで認識されにくかった男女の格差を明らかにすることができる。

●これまでは認識されなかった女性及び男性の状況を明らかにする。

この2点によって、男女共同参画の必要性、男女共同参画の課題を明らかにする。

統計の改善を要求することそのものが、男女共同参画を進める行動となりうる。

		家 事	収 入	無償労働時間%
静 岡	女性雇用者	2.08	6.12	24.3
	男性雇用者	0.25	7.08	6.5
全 国	女性雇用者	2.07	6.08	23.9
	男性雇用者	0.27	7.16	5.7

(国立女性教育会館編『男女共同参画統計データブック 2006』p. 81 より)

男性は働き手である、働くのが当たり前であるという認識があるので、無償労働の数値が低いといえる。

女性はフルタイムで働いていても無償労働に24%も費やしている。

この統計を作ることによって、女性の無償労働の貢献がわかる。

「男女共同参画統計」では、女性の統計だけでなく、男性の統計から浮き彫りにされること

もある。

年齢階級別自殺率(1992、2005、2007)
人口 10 万対

	1992	2005	2007	
総 数	男 性	男 性	男 性	女 性
20～24	15.3	25.0	26.8	12.5
25～29	18.2	31.0	28.8	14.1
30～34	19.5	32.6	32.0	12.4
35～39	21.2	36.5	37.0	13.6
40～44	26.1	44.9	42.0	13.9
45～49	32.1	54.6	52.0	13.7
50～54	37.4	59.2	54.4	15.3
55～59	38.9	61.3	58.5	15.7
60～64	37.1	51.9	51.2	18.4
65～69	32.1	42.3	45.6	18.6

出所：厚生労働省『人口動態統計 2007』

近年中高年男性の自殺率が非常に高いといわれている。

男性の自殺率が非常に高い。特に中高年といわれる世代は 2007 年では 50%台である。

それに比べ、女性はその年代も 10%台である。理由は、男性の 1 位は経済的理由である。

○男性にとってのワークライフバランス

- ・週労働時間 男 46.8h 女 35.4h (総務省統計局「労働時間調査」)
- ・所定外労働時間 男 15.7h 女 6.2h (厚生労働省「毎月勤労統計調査」)
- ・週休制普及率 30 人以上の事業所規模、完全週休二日制適用率 6 割弱 (厚生労働省「就労条件総合調査」)

男性にとってのワークライフバランスにおいては、男性と女性の労働時間をあげたが、男性が非常に労働時間が長い。男性は働き手である、仕事に心身を削っている様子が浮き彫りにされる。無償労働の時間が少ないのもこれらが原因と考えられる。

③グループワークで統計を読み、地域の課題を明らかにする

施設・行政・団体と 3 つにわけ、グループになり、静岡県データブック P18～23、P68～69 から現状から見える問題点をあげた。

グループ：女性関連施設職員、行政職員、女性団体リーダー

女性関連施設グループに参加

行政-町議会のほうが女性議員率は低い

施設-審議会委員がまだまだ女性が少ない 西高東低になった

団体-地方議員における議員が少ないのは町村ほどジェンダー意識が低いから。

合併が大きく作用している。

審議員は、最初から女性が参加できないところもあるのでは。

委員会の構成メンバーからきちんと女性が参加できるようにしないと参加できなくなる。

現状の部分は数値に基づいて発表する。情報が実態把握に非常に有益である。

(講義の後、図書室に移動し、実際に資料等にあたりながら実地研修を行った。)

4 ワークショップ「地域における女性関連施設・女性団体の現状と課題」

ファシリテーター国立女性教育会館 小林千枝子調査役

施設・行政・団体と 3 つにわけ、グループになり、「地域づくりに参画する女性人材育成」に

についての現状から見える問題点を課題化した。

女性関連施設グループ参加

役割を分担して、作業に当たる。

●各自ポストイットに「人材育成」についての現状から見える問題点を記入

●グループで問題点をグルーピングしキーワードをつけた。

●全体会でグループごとに発表

問題点は現実に見えるマイナス要因

課題は取り組むべき問題

参加者が少ないという実態にたいして、どう対策を講じるのか

問題→課題

グループで出た問題点

- ・世代交代→高齢化、固定化、若い世代は忙しい。
- ・人材リスト→登録されても意識がない。活躍できる場がない。
- ・家庭との両立が難しい
- ・講座に人が集まらない→若い世代のアピールが難しい
- ・ネットワーク不足
- ・予算がない
- ・スタッフの不足
- ・参加者の問題
- ・意識の問題→男女共同参画の意識がない、低い
- ・市民意識の問題
- ・機会の不足　ハード面だけの問題ではない。
- ・人材養成の目的がはっきりしない。

課題

- ・参加者へのアプローチ、お得感を感じられるような講座の企画
→参加者のニーズに合わせた講座の企画
- ・相互の満足
- ・スタッフ育成
- ・意識調査(5年に1度しかやっていない調査)
- ・ネットワークの確立

全体会にて

■行政

問題点として

●講座に人が集まらない。

世代交代が必要→高齢化、固定化している。若い世代は忙しい。家庭との両立が困難。

人材リスト→登録されていても意識がない

ネットワーク不足

■施設

問題点

●講座に人が集まらない。

高齢化、固定化　若い世代の人材育成が必要

参加者へのアプローチ、相互の満足が必要

- 職員の不足→職員への研修の充実が必要
- 予算不足→メリハリをつけて、工夫する。

■団体

- 実践につながらない
- 行政の理解が必要
- 企画への資金が少ない
- 地域からの人材流出をどうするか
- 資金確保をどうするか
- 意識の共有化が必要→ネットワーク化

5 講義「地域づくりに参画する女性のキャリア形成支援とは」

講師・ファシリテーター：中野洋恵研究国際室長

社会活動キャリア、社会基盤をどう作っていくか。地域支援をどうするか。社会活動を進めるための構造について。仕事に焦点を当てたキャリアが重視されてきたが、もっと広義の定義が必要なのではないか。生涯を通じた役割における経験の継続として、職業や社会活動を積み重ねていくことをキャリアという。生涯学習をどのようにキャリア形成に結びつけるか。→学習の出口をどう結び付けるか。「スキル・アップ講座」と「マインド・アップ講座」の2種類の講座がある。

「女性のキャリア形成支援に関する調査研究」で分かったことは、スキル・アップ型講座とマインド・アップ型講座の両方を受けている人が出口を見つけた人に多かった。また、共通する人柄があった。非常に柔軟性のある方。折り合いをつける態度と術を持っている、獲得している人。また、常に前向きな行動をする人。自分の体験を客観的に捉えていた人。また、人間関係を重視し、広い人間関係を築いている人が多かった。NPO 活動が女性のキャリア形成の新たな可能性を持っていた。これまでの学習経験、仕事の経験、社会活動経験を生かし、新たなキャリア形成の場となっているのが NPO 活動経験。NPO の調査研究から、女性の新しい社会活動キャリアを築いているのが分かったが、個人だけでなく、社会に向ける目が必要だという課題も見つけた。地域を活性化する女性の活動が目立ってきた。これまでにない新たな活動が見えてきた。固定的性別役割分担意識が強く、阻害原因になっているため、なかなか社会活動が立ちゆかない。女性の社会活動キャリアについて、定義は難しい。社会基盤を作っていく活動、社会参画活動を進めるための個人連鎖と考えたらいいのか。社会の中に共通基盤を作っていく時に、社会活動キャリアをどう連鎖させて社会を変えていくか。個人のキャリアやエンパワーメントの蓄積が地域や周囲にどう影響を与えるかを丁寧にみる必要がある。社会活動キャリアはあまり知られていないが社会活動を考えていく上で、個人のキャリアやエンパワーメントで地域を活性化していくのだと考えていく。社会活動キャリアの形成をフレームワークするときに、仕事上のキャリアも大変重要。社会活動キャリアに役立つキャリアとなっている。地域ビジネス、コミュニティビジネスなどは社会活動キャリアと仕事上のキャリアが関連していく。困難をどう乗り越えていったのか。社会活動キャリアに大きな影響を与えている。「ひとが財産です。」という人がとても多い。ネットワーク作り、活動仲間をどう作ってきたのか。受けた支援については、社会活動キャリアを積んでいく上で、非常にうまく支援を受けている方が多い。社会活動キャリアは個人の影響、社会への影響とあるが、どういう情報や学習機会を与えたらいいのか。フレームワークにおいてそこをおさえる。

- 事例分析の手法→ロールモデルの事例を読んで分析する。

ロールモデルの行動を分析してシートにまとめる。

社会活動キャリアは真ん中に、職業キャリアを記入。この二つの関連を考える必要がある。左上に社会活動キャリアの形成のきっかけ・動機とある。また形成する上での困難もある。どう困難を乗り越えてきたのか、それが重要なキャリア形成になる。事例を分析しすぎず、記入するといひ。

現在の活動はどうしているのか→今までの活動はどうしているのか

社会活動キャリアを形成するにあたっての困難、学んだことなどを記入するスペースがある。

ロールモデル選択では「出会いを通して自分らしく生きる」木村由里子さんの事例を選択。選択理由は、年代が若いこと、市議会議員を経験していて、現在経済的自立をしているシングルマザーであること、NPO 活動をしていること。



第2日（平成21年12月1日）

1 課題分析 地域づくりに参画する女性ロールモデルの分析

ファシリテーター：西山恵美子国立女性教育会館客員研究員

ロールモデル分析で女性の社会活動キャリア形成の分析を行う。地域づくりに参画する女性人材を育成するためのプログラムのあり方を考える上で等身大の事例の分析が必要となる。

どんな支援が、どんな力量が、社会活動キャリアを形成する上で必要なのか。

■グループワーク

2 課題分析 地域づくりに参画する女性人材が育つための事業につながる課題を立てる

ファシリテーター：仁科あゆ美大阪府女性総合センター職員

地域に根を張った活動をしていくことが非常に大事。意識改革は非常に難しい。連携・協働していけば何とかなるという考え。ドーンセンターは予算がないため人員不足。スタッフが渉外にも回っている。男女共同参画は非常に広い分野にわたって考えられる。行政のシステムを使って横断的に行うのもひとつ。専門機関、団体と一緒に同時にやっていくこと、男女共同参画の視点をともに聞きあうこと、男女共同参画をどう考えるのか、事業を連携、協働していく中で常に問いかけあうのが大事。若者をターゲットに事業を行う時、あるいはNPO活動をやっている方々に参加してもらおうという時に、男社会に対しての男女共同参画は、女性を含めたマイノリティの視点、強者でない視点が大事ではないか。演劇、映像を使った男女共同参画を進める企画を行っている。男女共同参画を進めるプロセスでは軸がしっかりしていないとどんどんぶれていく。施設、行政、団体の3輪がきちんと押さえておくといけない。連携・協働を進めると想定しない効果が得られる。少人数でも連携すればやっていけるのでは。ひとつの講座を通して連携を深めることができた。

1. 5月に全国女性会館協議会からお金をもらって、地域の社会資源と連携を通して、女性センターとどう連携しているのかと語り合った。

2. 一つの講座をきっかけに連携・協働の仕組みができた。学校の先生のための教材づくり。行政、施設、団体の担当者が仕組みづくりをしていく。トップダウンではなく、個人で協働していく。

「地域づくりに参画する女性人材の育成」事業を計画するためには、地域の課題が前回出てきたが、行政、団体、施設で話し合ったことを思い出すこと。ロールモデルで女性の社会活動キャリアの形成にどういう支援が必要だったかと考えること。

■グループワーク

地域づくりに参画する女性人材が育つための事業計画

①自分自身ができることを付箋に書き出す

②相手に対してやってほしいことを書き出す

静岡県における問題点・課題

●行政関係機関につながってもらいたいというのが切実→情報が入ってこない。地域であきらめているところがある。行政同士の連携を取ってほしい。情報の発信

●講座のやり方の工夫とかをして地域の方の参加を促す

●情報の共有、交換がスムーズにできるような工夫

●市レベルでは情報交換をしているというが、行政を超えて情報交換をしていない

●男女共同参画が必要なのだというのを行政の立場の人が分かっていない

緊急性

- 資金不足、人材(スタッフ)不足
- 情報発信→行政にも情報受け手にも男女共同参画の重要性を訴える手段とする
情報提供に地域格差がある→WEB 情報が与えられているがなかなか末端地域まで行き届かない

必要性

- 情報を受け止める基盤がほしい→情報を市民が出入りするようないろいろな場所に配布する

■実際に行う事業

- ◆テーマ 「あなたの力を地域で生かす」
- ◆ねらい 連携協働の地域の団体で協働事業を実行し、事業を行う中でその事業に必要な企画力などのスキルアップができ、人材の育成ができる
- ◆対象
 - 募集団体は、年齢、性別、活動内容を問わない
 - 他団体と協働、連携をしてひとつの事業を行うことのできる団体
- ◆内容
 - 募集は公募式。
 - 採択事業審査は公開し、協働団体を探す場とする。
審査は県、市町の男女共同参画担当課、施設の3団体が行う。
(審査会場を同じような内容の事業団体同士が協働して規模の大きな事業にしたり、一人で事業原案があるが実施団体を探したいという人のための団体探しの場とする。→協働への援助)

発表後、各グループから「良いと思う」、「疑問に思う」の意見を付箋でいただいた。

よいと思う点

- ・協働を築くよいきっかけになる。

疑問点

- ・本当に実現できる事業かという意見が大半だった。

↓

- 実際に県から委託を受け施設が実施している「地域の男女共同参画をすすめる事業」の手直し案を提案した。実際に実現できている事業。
- 市町の男女共同参画担当課にも審査をしてもらい、地域の男女共同参画意識を知ってもらうと同時に他の地域の意識度も知ることができる。行政担当課と市町団体どうしの連携も生まれる。



平成 21 年 2 月 14 日（土）9：00～12：00

報告者：千葉県ちば県民共生センター所長

加藤 峰子

国立女性教育会館との連携・協働による 実験プログラム in 千葉 「地域づくりに参画する女性人材が育つために」

千葉県からの報告
～実施上の課題及び成果～

連携・協働による実験プログラム in 千葉

「地域づくりに参画する女性人材が育つために」

1	目的	・・・ 1
2	参加者	・・・ 1
3	開催日及び開催場所	・・・ 1
4	実験プログラムの内容	・・・ 2
5	実験プログラムを振り返っての課題と成果	・・・ 3
6	各グループの事業計画テーマ（案）	・・・ 4
7	最後に	・・・ 4

連携・協働による実験プログラム in 千葉「地域づくりに参画する女性人材が育つために」

1. 実験プログラムの目的：多様な機関との連携・協働を推進しつつ、女性の社会活動キャリアの形成を促進し、地域づくりに参画する女性人材が育ち、力をつける。

2. 参加者：5分野 17名

分野別	センター職員	市町村担当者	団体・女性リーダー	備考
農業	佐倉市男女平等参画推進センター（女性1名）	佐倉市経済環境部農政課（主査補1名） 佐倉市自治人権推進課（主査補1名）	農業 菊間節子（アグリライフちば代表） 農業 中台ヒデ子	11/26 5名 12/8 4名
男女共同参画	習志野市男女共同参画センター（主任主事1名）	—	佐久間聡子（ていんかーべる代表） 前田陽子（ハミングフォーラム習志野代表）	11/26 3名 12/8 3名
教育・PTA・行政	ちば県民共生センター東葛飾センター（副主査1名）	木更津市企画部企画課（主事1名）	北河小百合（男女共同参画地域推進員）	11/26 12/8 各3名
観光	—	香取市市民活動推進課（主査1名、主事1名）	椎名宥心（香取市男女共同参画懇話会委員）	11/26 12/8 各3名
子育て	八千代市男女共同参画センター（推進指導員）	八千代市男女共同参画課（主事1名）	高田悦子（NPO法人子どもネット八千代理事長）	11/26 12/8 各3名

3. 開催日及び開催場所

第1回目 平成20年11月26日（水）9:30～17:00

ちば県民共生センター（千葉県青少年女性会館内）

第2回目 平成20年12月8日（月）10:00～17:00

千葉県教育会館

4. 実験プログラムの内容

(1) 第1回目 平成20年11月26日(水)

一回目のねらい

プログラムの目的、流れについて理解する。参加者同士の顔合わせ。

- ・ 地域における男女共同参画の状況と課題を把握する。
- ・ 女性の社会活動キャリアについて学ぶ。

序 プログラムの意味・意義を理解する

⇒ 研修方法：説明と質疑応答

1) 男女共同参画についての視点をもつ（・男女共同参画についての考え方を確認し、参加者同士で共通認識を持つ）

⇒ 研修方法：講義と質疑応答

2) 地域における男女共同参画の状況と課題を把握する（・男女共同参画の国際的、国内的、地域的な実態をデータに基づいて把握する。 ・グループワークで統計を読み、地域の課題を明らかにする。）

⇒ 研修方法：講義と質疑応答、ワークショップ

3) 女性関連施設、女性団体の現状を把握し、課題を認識する（・各地域での女性の「人材育成」について、現状からみえる課題を明確にする。）

⇒ 研修方法：ワークショップ

4) 女性のキャリア形成支援における現状と課題を把握する（・キャリアの概念、女性の個人的キャリア、地域づくりにおける女性の社会活動キャリアについて学ぶ。 ・ロールモデル集を使い、成功要因、困難の乗り越え方、連携・協働の活かし方について分析する。）

⇒ 研修方法：講義と質疑応答、ワークショップ

(2) 第2回目 平成20年12月8日(月)

2回目のねらい

女性のキャリア形成支援事例分析を通じて、課題と支援方策を明確化する。

- ・ 「課題解決に向けた実践」として、次年度以降に向け、連携・協働による地域づくりに参画する女性人材が育つための事業計画案を作成する。

5) 地域づくりに参画する女性のロールモデルの分析（・社会活動キャリアをもち、地域づくりに参画するロールモデル事例を、グループワークによって分析する。）

⇒ 研修方法：ワークショップ

6) 地域づくりに参画する女性人材が育つための事業につながる課題を立てる。（・地域づくりと連携・協働について考える）

⇒ 研修方法：ミニレクチャー＋グループ討議

7) 地域づくりに参画する女性人材が育つための事業計画案作成ワークショップ

⇒ 研修方法：ワークショップ

5 実験プログラムを振り返っての課題と成果

●課題

- ①「事業につながる課題を立てる」では、課題の立て方が難しかった。「課題」という言葉がピンとこない。また、モデルという言葉は「理想像」と捉えやすく、遠い存在とを感じるので、「事例」の方がよいのではないか。成功した裏には、どんなリスクがあったかを際立たせることも必要。
- ②「ワークショップ」という形式はとても面白かった。自分が抱えている考えや疑問点を発言する場を持てたし、曖昧なものが具現化できた。ただ、2日間という期間はあまりにも短いので、せめて3日間はかけてじっくり話し合いたい。
- ③実現可能性のあるテーマを考え、企画していくこのプログラムは大変参考になりました。できれば時間をたっぷりとして討議できればよかったです。
- ④ロールモデル分析で、「支援」と「力量」の2つの面から考えるのは分かりやすかったが、ワークシートは分類が細かいように思う。
- ⑤1日目 研究協力者の人達は先が見えず不安な様子だったが、2日目は各自が何をするか分かっていた。学習支援者の方は、地域や内容・回数の持ち方等、今後工夫していく必要がある。
- ⑥作業における模造紙の使用は効果的だが、書き方などグループによってまちまちなのである程度統一した方が分かり易いものとなるのでは。

●成果

- ①学習支援者が重要な役割を果たしており（適切なアドバイス、軌道修正等）、団体リーダーのスキルアップにつながる研修であった。また、千葉県は行政も含め、初級の参加者が多かったが、効果は大きかった。
- ②立てた案を発表し、コメントをもらい、再検討・修正案を発表するという流れがよかった。
- ③各プログラムの中で、考える視点の出し方が効果的であった。ポストイットを使い、書くことで疑問点や抽象的な言葉も分かった。
- ④千葉県では人材の発掘という意味も含まれていた。学習支援者の関わり方、介入の仕方等、考えるきっかけになればよい。
- ⑤2日目終了時に参加者の達成感を感じた。千葉県においてはロールモデル分析時間を長くし、テーマ設定と分析事例につながりがあった。
- ⑥「人材育成について」は、具体的に言葉にすること、表現することの難しさを感じましたがコツをつかむと出来ました。本プログラムは地域活用しやすい内容だと思います。
- ⑦「ワークショップ」は非常に有効な学習方法だということを実感しました。

●受講者の感想

①特に共同参画への認識が充分ではなかったが、プロセスの中のスタートラインに立ったという意識で、大変有意義な一日であった。男女共同参画への意識を持つことができ、大変嬉しく思います。

②数字に慣れていないため、読み取るという作業は大変だったがケースの一つひとつの実態を把握し、ではなぜなのか？を意味づけ分析していくことで気づき、全体がみえてきた。

③小さな一歩から、仲間作り⇒意識の共有、問題点（古い村意識や偏見等）を明確にし、⇒自己決定できるよう支援していく事が大切と思う。

④情報としていろいろなデータが社会に出っていますが、私自身の把握する力、データを読む力不足を実感しました。

⑤“関係の重視”は、男女共同参画を進めるだけでなく、地域づくりそのものに関わる非常に重要な視点だと気づきました。

⑥地域性を考えながら、今までの伝統・文化を踏まえつつ個々の意識改革を促していくことが大切。そのためには男女とも、学習の場（イベント、講座、地域の寄り合い）等で繰り返しあきらめず伝えていくことにします。

6. 各グループの事業計画テーマ（案）

農業（佐倉市）	：食育事業を展開できる若い農業女性の育成事業
男女共同参画（習志野市）	：市民意識の向上
教育・PTA・行政（木更津市）	：企画立案集団のネットワークの形成
観光（香取市）	：おてらで茶会⇒演奏会 講演会
子育て（八千代市）	：子育て支援スキルUP講座

7. 最後に

1月15日付け朝日新聞社説欄に「男女共同参画」がテーマとして取り上げられ、「地域でリーダーになる女性は少なく、女性の力が十分に発揮される場面もまだ少ないといった実情がある」としている。当センターとしても、こうした実情を踏まえ、女性リーダー養成講座を毎年実施しており、県内市町村においても浸透することを期待しているところです。

このたび、千葉県において連携・協働による実験プログラムが実施され、「2日間という日程ではあったが、本プログラムを理解し実践するために、学んでいきたい」とあるように、参加者のスキルアップにつながる研修を実施することが出来たと考えます。

今後は、実験プログラム参加者がそれぞれの地域に持ち帰り、実践につながるよう努めるとともに、地域づくりに参画する女性人材が育つことをなお一層支援していきたいと思います。

＜参考＞国立女性教育会館 運営分担表例

【前日までのスケジュール】

参加者：１０３名（女性８８名、男性２２名）

前泊者 １４名（女性１２名、男性 ２名）

共：両コース共通 コ：コース別

番	日 時	内 容	場 所	担 当	備 考
1	6月3日(火)	参加決定通知送付開始	事業課		
2	6月5日(木)	課内会議（日程表の確認）	事業課	事業課全員	
3	6月5日(木)	他課室へ担当者分担の依頼 配付資料の依頼		事業係長 →各課室係長	* 日程表は6日12:00 まで * 資料名は6日まで * 配付資料は6日までに事 業課へ（150部）
4	6月6日(金)	委託業社との打合せ	事業課	担当者	
5	6月8日(日)	当日配布資料印刷終了 （150部）	印刷室		
6	6月9日(月) 14:00～	ファイリング、資料袋詰め 150セット	研修棟中会議室	事業課全員 総務課3 情報課3 研究国際室1:	参加者： 講師：14（館内講師含む） 文科省・内閣府：10（各5） 職員（係長以上、館内講師を 除く）：29、会館資料除く ボランティア：8 情報課保存用：8（開催資料 のみ） 予備：
7	6月10日(火) 13:30～	会場設営 集合場所 研修棟1Fカウンタ ー前	小・中・大会議 室 受付、101、 110、203 204、205	事業課全員 総務課3 情報課3 研究国際室2	情報課ミニ展示資料準備：情 報課
8	6月10日(火) 16:45～	日程等確認	事業課	事業課全員 各課室連絡担当 係長 委託業社	当日の変更事項は、事業係長 を通じて連絡する。

【第1日】 6月11日（水）

研修棟 8:30～18:00（鍵開け：委託業社、施錠：事業課1）
 入浴時間 17:30～23:30（女性：大浴 男性：小浴）
 情報センター 9:00～19:30（情報センター：情報課）
 講師等控え室：研修棟 小会議室 全国女性会館協議会控え室：中会議室
 職員控え室：研修棟 203
 ボランティア控え室：研修棟 205 救護室：204（毛布の用意：事業課1）
 研修棟事務室：（2500）
 研修棟2Fカウンター：事業課1（2552）
 事業課（通常受け入れ）：事業課
 （研修事業連絡調整）：事業係長（2102）
 ※ 夕食後の情報交換会（参加者77名）

参加者：103名（女性81名、男性22名）

共：両コース共通

お茶出しは
片付けまで

	日 時	内 容	場 所	役 割・担当者	備 考
	1 8:30	本日の変更点		事業係長→各課室係長	
	2 8:30	ボランティアとの打ち合わせ	205	打合せと連絡：ボランティア担当専門職員	
	3 8:35	会場確認	101・110・大・中・小会議室、受付	確認：事業課3 湯沸し・茶器準備：事業課1	
	4 8:30～	参加者迎えバス（プレ・ワークショップ参加者） （ピストン運行） ①便 9:00頃	本館 →嵐山駅 ①便→本館→研修棟 ②便→研修棟	打合せと連絡：事業課1 添乗（武蔵嵐山駅東口より）：情報課1 11:00～：情報1	※ 案内板、椅子等は 情報課がバスに 積み込む
	5 9:45～ 10:00～10:30 ※参加者受付は11:30～ 11:25に再度集合	プレ・ワークショップ受付準備 受付 （手順） ①受付名簿で名前のチェック ②宿泊費（1泊1,000円）と情報交換会費（1,000円）を徴収 ③名札の名前を書いてもらう ※「活用プラン」の提出	研修棟2階 各コース 1箇所ずつ	受付責任者：事業課 会場案内責任者：事業課 受付： 管理職コース ①事業課1 ②委託業社1 ③V（ボランティア）1 団体コース ①事業課1 ②委託業社1 ③V1 名札：事業課1 貸出資料：情報課1 会場案内：事業課2	
共	6 10:30～12:00	プレ・ワークショップ 講師 （録音・録画・撮影：会館可 参加者可） 41名	101	進行：事業課専門職員 会場・録音・マイク：事業課1 マイク回し：V1 録画・放映・照明：情報課1 写真：V1 ポイント：情報課1	
	7 11:30	講師等迎え	研修棟玄関→本館2F会議室	事務局長 資料渡し・お茶：総務課	11:30頃来館
	8 11:30～12:30	講師昼食	本館2F会議室→研修棟小会議室	理事長・理事・事務局長	弁当（有料）5 11:15お弁当の配達
	9 12:40	講師案内	研修棟小会議室	事務局長	
	12:50	講師等迎え ※直接、小会議室に来てもらう	小会議室	資料渡し・お茶：事業課	12:30頃来館 （送迎バス）

	10	11:30~13:20	受付 (手順) ①受付名簿で名前のチェック ②宿泊費(1泊1,000円)と情報交換会費(1,000円)を徴収 ③名札の名前を書いてもらう ※「活用プラン」の提出 ※13:00~13:20の間は、管理職コースのみの受付に縮小する	研修棟2階 各コース 1箇所ずつ	受付責任者：事業課 会場案内責任者：事業課 受付： 管理職コース ①事業課1 ②委託業社1 ③研究国際室1 団体コース ①事業課1 ②委託業社1 ③事業課1 名札：情報課1 貸出資料：情報課1 会場案内：総務課2	
	11	13:20~終日	開会後の受付	研修棟2F カウンター	事業課1	
	12	12:55	理事長等案内	小会議室 →大会議室	事業課専門職員	
共	13	13:00~13:20	開 会 ①主催者挨拶 会 館：理事長 全国女性会館協議会 ②オリエンテーション：事業課長	大会議室	進行：事業専門職員 挨拶：理事長 オリエンテーション：事業課長 会場・録音：事業課1 録画：情報課1 写真：V1	
	14	13:20	理事長等案内・休憩	大会議室→ 小会議室	事業課専門職員	お茶：事業課1
	15	13:00~13:15	講義・質疑打ち合わせ	小会議室	事業課専門職員2	お茶：事業課1
	16	13:20~13:25	会場片付け・設営 (白卓の講師名を貼る、ミネラルウォーター、コップ等の準備)	大会議室	事業課3	
	17	13:15	講師案内	小会議室 →大会議室	事業課専門職員	
共	18	13:20~14:05	講義「男女共同参画施策について の最新の動向」 (録音・録画・撮影：会館可 参加者可) 103名	大会議室	進行：事業課専門職員 会場・録音：事業課1 マイク回し：V2 録画・放映：事業課1 写真：V1 タイムキーパー：事業課1	
	19	14:05	講師案内	大会議室→ 小会議室	事業課専門職員	タクシー対応： 事業課1
	20	14:05~14:15	会場設営 (白卓の講師名の貼り替え、ミネラルウォーター、コップ等の片付け、準備)	大会議室	事業課3	
	21	14:10	講師案内	小会議室→ 大会議室	事業課専門職員	
共	22	14:15~15:15	講義・質疑「男女共同参画を推進 する視点とは」 (録音・録画・撮影：会館可 参加者可) 103名	大会議室	進行：事業課専門職員 会場・録音：事業課1 マイク回し：V2 録画・放映：事業課1 写真：V1 タイムキーパー：事業課1	
	23	15:15	講師案内	大会議室→ 小会議室	事業課専門職員	
	24	15:15~15:25	会場設営 (白卓2台、PC、講師名の貼り替え、ミネラルウォーター、コップ等の片付け、準備)	大会議室	事業課3	
	25	15:20	講師送り		事業課長 タクシー対応：事業課1	武蔵嵐山駅発 15:36 池袋駅着 16:40
	26	15:15~15:30	<コーヒーブレイク>			
	27	15:25	館内講師移動	大会議室		※時間までに、会場

						にきてもらう
共	28	15:30~18:00 15:30~17:00	講義・グループ討議「女性関連施設・団体の現状と課題 ー調査から見えてきたこと」 (録音・録画・撮影：会館可参加者可) 90名(管理職コース50名、団体コース40名)	大会議室	進行：事業課専門職員 会場・録音：事業課1 マイク回し：V2 録画・放映・照明：事業課1 写真：V2 パワーポイント：事業課1 タイムキーパー：総務課1	
		17:00~17:05	会場移動 ①女性関連施設管理職コース ②団体リーダーコース	大会議室 →110 →101	学習支援者が誘導 事業課専門職員1 事業課専門職員1	
		17:05~18:00	グループ討議 ①女性関連施設管理職コース 50名 ②団体リーダーコース 40名	110 101	写真：V1 進行：事業課専門職員 学習支援：専門職員・研究員 会場・録音：事業課1 マイク回し：V1 進行：客員研究員 学習支援：専門職員・研究員 会場・録音：事業課1 マイク回し：V1	
	29	16:00	情報交換会の準備 (呼びかけ用紙を食堂前の黒板に貼る)	食堂前黒板	事業課1	
	30	15:30~	会場片付け・準備 会場設営：大会議室 (白卓4台、PC、講師名の貼り替え、ミネラルウォーター、コップ等の片付け、準備)	大・中・小会議室	事業課3	
		18:00~ 18:30	会場片付け・準備 会場設営：110 (講師用机2、椅子4、講師名、ミネラルウォーター、コップ等の片付け、準備)	101、 110	グループ討議会館関係者・V	
		19:00	情報交換会会場準備 (椅子運び、アンプマイク、飲み物・食べ物の準備等)	本館ラウンジ	事業課2(研修棟修了後：事業課専門職員)委託業社	
共	31	19:30~	情報交換会 ・参加者 77名 ・講師 2名	本館ラウンジ	司会：事業課専門職員 挨拶：事務局長 写真：事業課1 会館職員	
	32	20:00頃	講師等入館	フロント	事業課長	6/11 1泊

執筆者

<研究協力委員>

国広 陽子（武蔵大学社会学部教授）

葛原 生子（広島市女性教育センター事業推進マネージャー）

仁科あゆ美（大阪府立女性総合センター・財団法人大阪府男女共同参画推進財団事業チーフ）

<研究協力団体>

特定非営利活動法人 全国女性会館協議会（第Ⅰ部第2章3）

<国立女性教育会館職員>

神田 道子（理事長）

中野 洋恵（研究国際室長、主任研究員）

小林千枝子（調査役）

高橋 由紀（研究国際室研究員）

森 未知（情報課専門職員）

平成20年度女性関連施設に関する調査研究報告書
連携・協働を推進しつつ、地域づくりに参画する人材が育つために

独立行政法人 国立女性教育会館 平成21年 3 月

〒355-0292 埼玉県比企郡嵐山町菅谷728

TEL 0493-62-6711